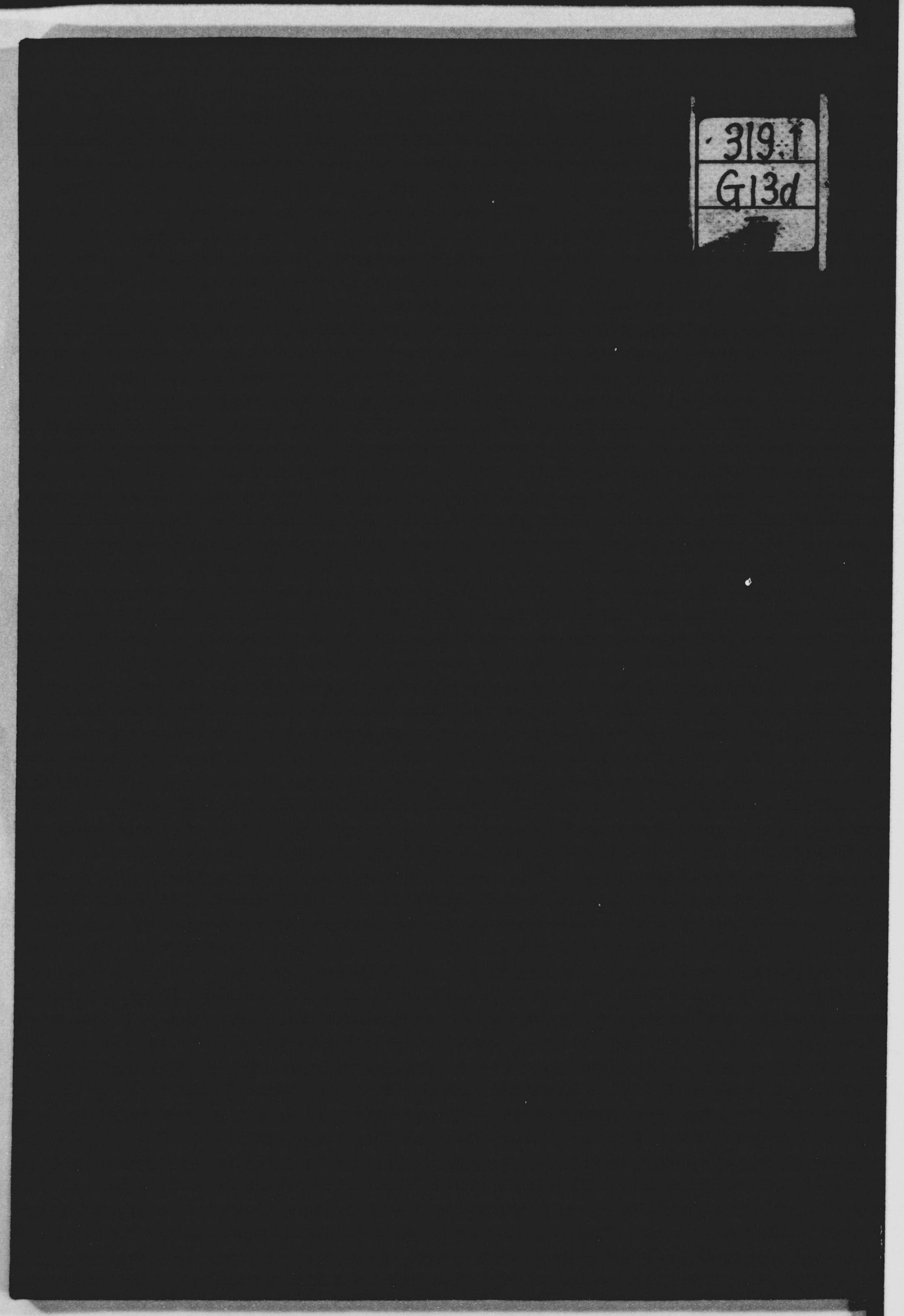

319.1
G13d

0010301008

0010301-008

３１９．１－Ｇ１３ｄ
(319.1-G13dII)(3.5.6)

大日本外交文書

外務省調査部・編

日本国際協会

１－１２

１９３８－１９４０

ABJ

斗 2R-12

昭11
A
529

外務省調査部編纂
外務省藏版

大日本外交文書

第五卷 自明治五年一月 至明治五年十二月

日本國際協會發行

立憲民政黨
圖書之印

319.1
G13d
II

國立國會
43.2.26
圖書館藏書

752132

大日本外交文書　第五卷　自明治五年一月至明治五年十一月

目次

一　特命全權公使等派遣ノ件……一
二　岩倉特命全權大使締盟各國訪問ニ關スル件……一一
三　條約改正ニ關スル件……一三八
四　清國トノ修好條規通商章程締結ニ關スル件……二三九
五　朝鮮國トノ通交ニ關スル件……三〇四
六　樺太問題ニ關スル件……三六二
七　琉球使臣來朝ニ關スル件……三七三

國立國會圖書館藏書
購入
14.4.4

八　下ノ關事件償金支拂ニ關スル件……三九五
九　秘露國風帆船「マリヤ、ルス」號ニ關スル件……四一二
一〇　秘露國トノ修好通商航海條約締結ニ關スル件……五四一
一一　別手組廢止ニ關スル件……五四六
一二　外國人内地旅行ニ關スル件……五四九
一三　箱館賊徒討伐ノ際取押ヘラレタル「ペイホー」號ノ損害賠償請求ニ關スル件……五六四
一四　和蘭人「スネル」ヨリ會、米兩藩ヘノ銃器賣渡代價竝ニ新潟戰爭ノ際蒙レル損害物品代價要償ノ件……五七五
一五　清國人ノ日本小兒買取ニ關スル件……五八二

一六　舊貨幣ノ整理竝ニ新貨幣發行ニ關スル件……五八五
一七　諸縣御預ノ耶蘇教徒赦免ニ關スル件……五八九
一八　維納博覽會參加ニ關スル件……五九四
一九　太平洋海底電線ニ關スル件……六〇三
二〇　丁抹國トノ海底電線ニ關スル約定ニ關スル件……六〇六
二一　國内電信線ニ關スル件……六一五
二二　高島炭坑約定改正ニ關スル件……六一八
二三　東京横濱間鐵道開業式擧行ノ件……六四〇
二四　太陽曆採用報知ニ關スル件……六四九

附錄　大日本外交文書第五卷目附順索引

大日本外交文書　第五卷　目次

自明治五年一月
至明治五年十二月

外務省調査部編纂

事項一　特命全權公使等派遣ノ件（第三卷事項三一、第四卷事項二參照）　一

一　四月二十八日（一八七二年六月三日）　寺島大辨務使等ヘノ辭令　一

寺島大辨務使ニ對シ交際事務等仰付ノ件

外務少記　岡田好樹

大辨務使寺島宗則英國在勤被　仰付候ニ付隨從被　仰付候

一　特命全權公使等派遣ノ件　一

事

外務大錄　近藤眞鋤

大辨務使寺島宗則英國在勤被　仰付候ニ付隨從申付候事

大辨務使　寺島宗則

英國ヘ被差遣候ニ付交際事務及在留國民管轄委任　被仰付候事

（太政官日誌）

註一、右文書ハ「太政官日誌」ニハ四月二十八日分トシテ記載シアリ

二、因ニ寺島宗則ハ「太政官日誌」ニヨレハ四月二十五日大辨務使ヲ拜命シ且「法規分類大全」ニヨレハ同日英國在留ヲ仰付ケラレタリ

三、尙右ノ外「太政官日誌」ニヨレハ四月三十日鈴木外務少記モ寺島大辨務使隨從ヲ仰付ケラレタリ

二

四月二十八日（六月三日）　副島外務卿ヨリ英國臨時代理公使宛

寺島外務大輔駐英大辨務使ニ任セラレタルニ付其ノ旨本國政府ヘ通達方依賴ノ件

申四月廿八日達ス

以手紙致啓上候然ハ外務大輔寺嶋宗則事今般大辨務使ニ轉任貴國龍動府在留被命候此段貴政府ヘ御報知有之様いたし度存候右可得御意如此御坐候以上

年　月　日

卿　御　名

英　公　使　閣　下

（下ケ札）

三

四月二十八日（六月三日）　寺島大辨務使ヨリ英國臨時代理公使宛

英國駐劄拜命ニ付然ルヘク本國政府ヘ通報方依賴ノ件

鮫嶋に英國在留を免せらるゝ旨御下命有之候哉

同人は尙宇佛兩國は兼任その儘に候哉

右奉伺候

卿　公　（花房）

註一、此ノ日英國公使館書記官ヨリ花房外務少丞宛書翰ヲ以テ「大辨務使と相唱候官名は我國の官名にては何の官に當り候哉」云々ト問合セアリタルニ對シ卽日右ハ「エンボーイエキスタラオルヂナリーエンドミニストルプレニポテンチヤリイに相當申候」云々ト花房少丞ヨリ回答セリ

二、尙四月二十八日達ニテ副島外務卿ヨリ各國公使（英國ハ除ク）宛、花房外務少丞ヨリ橫濱在勤瑞西國總領事宛ニ寺島外務大輔駐英大辨務使拜命ノ旨ヲ通知セリ

然は拙者義今般大辨務使に轉任貴國龍動府在留被命候就ては參着の上は萬端貴政府の御厚意に相預り候義を希望致し候に付閣下より可然御申通置有之度相願候此段御吹聽可得御意如此御坐候以上

年　月　日

大辨務使　寺　嶋　宗　則

英國公使閣下

註　右文書ハ他ノ記錄ヨリ推シ四月二十八日達セラレシモノト推測サル

四

四月二十八日（六月三日）　英國臨時代理公使ヨリ副島外務卿宛

寺島外務大輔ノ駐英大辨務使任命ニ關シ本國政府ヘ通達方了承ノ旨回答ノ件

Yedo,
June 3, 1872.

Sir,

I have the honour, in reply to Your Excellency's note of to-day's date, to state to Your Excellency that I shall by to-morrow's post communicate to Her Britannic Majesty's Government the appointment of Terashima Munenori, Vice Minister for Foreign Affairs, to be the Mikado's Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary in London.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

R. G. WATSON,
H. B. M.'s Chargé d'Affaires
in Japan.

His Excellency
Soyéjima Tanéomi,
etc., etc., etc.

（右和譯文）

今日附之貴翰致拜見候然者外務大輔寺島宗則今般大辨務使ニ轉任龍動府在留被命候趣致承知候明日之便ヲ以本國政府エ通達可致候右回答可得御意如此御座候以上

四月廿八日

英國代理公使
アージーワトサン

副島外務卿閣下

註　右ノ外西班牙國代理公使（日附四月三十日、發信地横濱）ヨリ副島外務卿宛同文意ノ回答アリタリ尚前記外ノ國々ヨリノ回答書翰見當ラス

五

七月十日（八月十三日）　英國駐劄寺島大辨務使ヨリ副島外務卿宛

英國到着、女皇謁見ノ次第等報告ノ件

附屬書　七月八日及九日ノ日記

附記一、英國駐劄寺島大辨務使ノ御信任狀

二、英國女皇ニ謁見ノ際ノ言上振

壬申九月七日來着
同八日本書正院ヱ出ス
第五號

聖上益御機嫌克臨御被爲在候條恭頌の至に候閣下御初御滿省無異御奉職珍重令賀候下拙一行無恙去月廿六日ニウヨルク出帆昨八日（ママ）リバプールに着船候處アストン出迎として罷越居種々周旋同處奉行ハーソン下拙旅館へも來訪別紙日記の通極めて懇待致し候間御含置御序の節其御地公使え一應御挨拶可被下候

一龍動着後ハークス早速來訪段々承候處「クウキン」は「ホルスモーレ」の内アイルオフワイト」に遊幸被致明後日再ひ「スコツトランド」え被移蹕候趣にて明日を過し候ては數ケ月の後ならねは歸府不相成に付俄に謁見の儀に決し乃ち日記手續の通り實に簡略の事にて無滯謁見相濟至極都合宜數候間御安心可被下候

一當辨務使館の儀未た住處見當り不申卽今旅館はランガムホテルと申家にて旅客は大抵商人にて繁雜相極候に付近々他の家に轉寓の積りに有之候尤も當館入費等の儀は追々取調可申進と存候

一留學生學費文部省よりの送り方兎角到着遲速不一定英米とも辨務使館にて甚迷惑の趣に付下拙華盛頓出立前大使にも申談置候間大使より屹度一定の規則相立候樣可被申遣筈に有之候へとも猶本省よりも文部省え早々一定の方法相立候樣御掛合有之度候事

右の段御報知旁申進候也

壬申七月十日

寺嶋大辨務使

（欄外註記）

副島外務卿殿

（欄外註記）

文部省へ達ス

註一、寺島大辨務使ハ岡田、鈴木各外務少記、近藤外務大錄等ヲ帶同シ五月十七日再渡米ノ大久保、伊藤兩副使等ト同船ニテ横濱ヲ出帆セリ

（附屬書）

日記

七月八日（八月十一日）　晴午後第二字船リハブールニ着スアストン迎謁ス同所奉行パーソン大辨務使ヲ饗ス當處出張ノハイセリフ官某及ヒ其他貴官數輩同席ス第三字後汽車發朝ハーソン送テ半途ニ至リ頗懇待ヲ盡シテ去ル夜第十字龍動ランガムホテルニ着スハークス來訪明日クウキン謁見ノ事ヲ談ス蓋シクウキン頃府ノ南島アイルオフワイト（府ヲ距ル事七十里餘）ノ行宮ニアリ明後日再ヒ其地ヲ發シテスコツトランドニ遊幸セント欲ス歸府ノ期猶數月ノ後ニ在リ故ニ急ニ謁見ノ禮ヲ行フヘキニ決ス尤モ行宮内謁タルヲ以テ五ニ禮服ヲ用ズ此方ニテハ常體ニテフロツクコートヲ着シ可相見ト云但シ外務卿へ謁見ヲ乞フノ書簡モ當日贈答ノ暇ナキヲ以テ謁見後ノ往復トナスヘキヲ約ス十日之ヲ贈ル

同九日（八月十二日）　晴朝第九字ハークス及アストン來導大辨務使鈴木書記官ヲ率テ同車ホルスモースノ海口岸ニ至リ車ヲ捨テ汽船ニ上リ第（ママ）字アイルオフワイトニ達ス一大園中オスバルント名ル宮榭アリ乃チ行在所ナリ一室ニ就テ休憩ス饗饌ヲ賜フ外務卿ガランウエル宮内卿某老女及ハークス等陪涯少時アリテ外務卿大辨務使ヲ引テ内殿ニ至ルクウキン中央ニ立南嬪側ニ侍ス外務卿一禮シテ入リ右側ニ立ツ大辨務使國書ヲ奉シテ入リ一禮ヲ施ス外務卿姓名ヲ奏ス大辨務使國書ヲクウキンニ呈スクウキン之ヲ外務卿ニ渡ス大辨務使直チニ言上書ヲ和語ニテ讀ム英語ニ譯スル事ナシ外務卿別ニ英語ニテ譯セル一紙ヲクウキンニ呈スクウキン外務卿ヲ顧ミ英語ヲ解スルヤト云ツヽ近ク進ミ來テ曰ク今般大辨務使トシテ我國ニ在留喜悅スル所ナリ唯遺憾ハ使節延着ニ因テ面會ヲ得スト勅語アリテ退ク○女王曾テ煩擾ヲ厭ヒ尤モ人ニ接スル事ヲ嫌フ故ニパークス幷我書記官モ此席ニ至ル事ヲ得ズ○夜第八字大辨務使歸館

註二、英國駐劄寺島大辨務使ノ御信任狀竝ニ女皇ニ謁見ノ際ノ言上振左ニ附記ス

（附記一）

天佑ヲ保有シ万世一系ノ皇祚ヲ承クル大日本國天皇御名敬テ大不列顛國皇帝陛下ニ白ス爰ニ兩國交際ノ親厚ヲ保シ其事務ヲ辨理スル爲メ從四位寺島宗則ノ沈深勤勉能ク事務ニ堪ルヲ以テ特選シテ大辨務使トシテ貴政府ノ下ニ奉職セシム仍テ此書ヲ附シテ委任ノ證トス朕固ヨリ宗則ノ能ク職ヲ奉シ陛下ノ寵眷ヲ蒙リ貴政府ノ信認ヲ受クルヿ亦疑ヲ容レサルナリ此書ヲ呈スル時懇待セラレ其陳述スル所ヲ聽納シ且朕カ名ヲ以テ上言スル所ヲ信用セラレンコヲ望ム爰ニ朕カ恭敬ヲ表シ陛下ノ安寧ヲ祈ル

明治五年壬申四月二十八日東京宮城ニ於テ自ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐ス

御名　國璽

奉勅　外務卿正四位　副島種臣

（法規分類大全）

（附記ニ）

言上振

謹テ

陛下ニ奏ス外臣

日本國至尊天皇ニ代リ始テ

六

八月二十四日（九月二十六日）　英國臨時代理公使ヨリ　副島外務卿宛

寺島宗則ノ駐英大辨務使ニ任セラレタルハ女皇ニ於テモ滿足ナル旨本國政府ヨリ申越シタル旨傳達ノ件

Yedo,
September 26, 1872.

Sir,

I did not fail to report the appointment of Terashima Munénori as Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary to The Queen, my Sovereign, and I have received instructions from Earl Granville to inform Your Excellency that Her Majesty will be happy to receive him in that capacity.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurances of my highest consideration.

R. G. WATSON,
H. B. M.'s Chargé d'Affaires
in Japan.

His Excellency
Soyejima Tanéomi,
etc., etc., etc.

（右和譯文）

以手紙致啓上候然者寺嶋宗則本國在留特例全權公使被命候趣我
主上え及　奏聞候處御滿足の趣外務執政より申越候間此段可得御意如斯御座候以上

八月廿四日

英國代理公使

アージーワトサン

副島外務卿閣下

七

九月二十五日（十月二十七日）　太政官正院ヨリ　副島外務卿宛

外交官領事官ノ等級諮問ノ件

附屬書　右等級表

特命全權大使以下の等級別紙の通被定候て御異存無之哉一應及御諮問候也

壬申九月廿五日

正院

副島外務卿殿

（附屬書）

貼紙

特命全權大使　一等

特命全權公使　大辨務使　二等

アムバツサドル

エンフヲイエキスタラヲルヂネリーミニストルプネニポ（マヽ）テンシアリー

辨理公使　中辨務使　三等
ミニストルレシデント
代理公使　少辨務使　四等
シヤルセダフヘール
一等書記官　五等
フヲルストセクレテリー又ハセクレテリーヲフレゲイション
二等書記官　六等
セコンドセクレテリー
三等書記官　少記　七等
ソルドセクレテリー
總領事　五等
コンシュルゼネラール
領事　六等
コンシュル
副領事　七等
ワイスコンシュル
代領事　八等
アクヂンクコンシュル

（貼紙）
アムバザドル」ヲ大使トスル如何其故ハ時トシテ「アムバサドル
エキスタラオルヂネリー」ヲ派出スル事アリ之ヲ名テ特命全權大
使ト云否ラサレハ歐洲ノ例ニ適セス然レ共乙ハ等級中ニ列スルニ
非ス臨時ノ官タリ（子安）

（下ケ札一）
一書記官ノ官ノ字ヲ除キタシ
一三等書記官ノ下ニ譯官幷ニ書記見習ヲ置キ等級ハ其人々ニ依テ
長官ノ權ヲ以テ定ム可シ尤等級三等書記ニ越ヘザルハ勿論也

（下ケ札二）
代理領事ハ省クヘシ尚領事ノ次ニ代領事アクテインク（コンスル）副領事ノ次
ニ代副領事アルヘシ正副トモニ官階同シ凡副官ノ官錄ハ正官ノ四
部ノ三ナルベシ

下ケ札一　下ケ札二

八

十月三日（十一月三日）　副島外務卿ヨリ　太政官正院宛

辨務使ノ名稱改正ニ關スル諮問ニ對シ回答ノ件

十月三日達ス

正院御中　　外務卿副島種臣

辨務使名號改正之儀御諮問之趣承知左ニ考案申上候

特命全權大使　一等
アムハツサトルエキスタラヲルチネリーミニストルフレニホテンシアリー
特命全權公使　大辨務使　二等
辨理公使　中辨務使　三等
代理公使　少辨務使　四等
總領事　五等
領事　六等
副領事　七等
以上譯語御取調ノ通
代領事　八等
コンシラールエゼント

右之通被定此他ニ書記譯司錄事及書記生譯司生ヲ設ケ公使領事ニ分屬シ其等級ハ臨時ニ人材ニ應シ相定メ可然存候也

壬申十月　日

九

十月十四日（十一月十四日）　太政官ヨリ外務省ヘノ御沙汰書

一　特命全權公使等派遣ノ件　九

大中少辨務使等ヲ廢止シ特命全權公使、辨理公使、代理公使等新置ノ件

外務省

其省中大中少辨務使大少記等ヲ被廢左之通被置候事

特命全權公使	二等
辨理公使	三等
代理公使	四等
一等書記官	五等
二等書記官	六等
三等書記官	七等

壬申十月十四日

太政官

一〇

十月十四日（十一月十四日）　太政官式部寮ヨリ　副島外務卿宛

寺島宗則等ヘノ宣旨轉達方ノ件

寺嶋宗則鮫島尚信森有禮等　宣旨三通御廻シ申入候間早々

御達シ有之拜命ノ上御請書差出候樣御取計有之度此段申入候也

壬申十月十四日

式部寮

副島外務卿殿

註　右文書ニ謂フ「宣旨三通」見當ラサルモ惟フニ右ハ寺島、鮫島、森ニ對スル特命全權公使、辨理公使、代理公使任命ノ宣旨ト認メラル

事項二　岩倉特命全權大使締盟各國訪問ニ關スル件

〔第四卷事項七參照〕（事項三、一七參照）

一　一月十日（一八七三年二月十八日）　大使隨行鹽田一等書記官（米國ニテ）ヨリ外務省宛

岩倉大使一行ニ加ハル爲佛國ヨリ紐育ニ到着セル旨等報告ノ件

鹽田大記

申二月十八日着

以書狀啓上致候然は拙生義去る十二月廿四日佛國巴里斯出立一昨日西曆二月十六日我ニユヨルク當地へ着致候岩倉卿公には未た御着無之正月七日ニ當ルカ（マヽ）「サンフランシスコ」より途中降雪甚敷鐵路往來相絶へ無據「ソールトレーキ」へ御滯留の由新聞紙中に相見へ申候尤も不日鐵路も相開け華盛頓へ御着可相成と存候右に付拙生義も明夕當地出立華盛頓へ相越候積に有之候

一別紙（註「別紙不詳」）御用狀拙生巴里より持越候處今度フヲンブラント義御地へ相越候に付即ち同人へ相托し差出申候御落手有之度候右の段可得御意如斯に御座候已上

外務省御中

尙以別紙拙生書狀早々御屆け可被下候

註　本件事項ニ收錄セル諸文書ノ別紙類ハ岩倉大使各國訪問ノ使命ト直接ニ關係ナキモノ多ク又記錄中ニ之ヲ供スルモノモ少ナカラス仍テ此等ノ別紙類ハ悉ク之ヲ搜査收錄スルコトヲセス又一々右ノ旨ヲ註記スルコトモ差控ヘタリ但シ右等ノ別紙中偶々本書ニ收錄セル他ノ事項ニ關聯セルモノハ特ニ其ノ旨ヲ註記シ置キタリ

二　一月十日（二月十八日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

帝國ノ局外中立義務不履行ニ關シ獨國側ヨリノ申出一件落着ノ旨等報告ノ件

附記一、明治四年十一月二十七日植本外務少丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

大藏會ノ模樣等報告ノ件

二、明治四年十二月五日外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛
　塡洪國トノ條約批准書交換アリタル旨等報告ノ件
三、明治四年十二月十日(假)外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛
　深堀耶蘇教徒處置問題等報告ノ件
四、明治四年十二月二十日外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛
　大使一行ノ桑港安着ヲ祝シ朝鮮問題等報告ノ件
五、明治四年十二月二十六日外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛
　清國トノ條約批准問題等報告ノ件

正月十日達ス　壬申正月八日草

第六號大使への御用狀案佛郵船ヲルガア

新年の御慶萬里同瑞不有可盡期候

聖上益御機健克被爲加御實算恐悦の至奉存候大使御初御一行彌御安泰御迎陽珍重存候本省卿輔初已下無異超歲此段

御休念可被成候

一去る二日在留各國公使賀正の爲參　朝致候其手續別紙にて御承知可被成候

一客歲局外中立一件に付鮫島少辨務使へ相達し宇國政府へ可懸合一條今般同人より別紙(註　第四卷二九二參照)の通り申越先此一件右にて落着致候間御心得の爲寫差進候

一御出立前相揃兼候新貨十圓金此頃鑄造相成候に付大藏省より廻越候間卽貳百圓其數二十枚差進候御査收可有之候

右條々申進候也

壬申正月

大少丞記

田邊殿

渡邊殿

註一、第一號ヨリ第五號迄ノ外務大丞等ヨリ田邊一等書記官等宛書翰ハ何レモ明治四年ニ送附サレタルモノナル處左ニ附記ス

（附記一）

十一月廿七日仕立

一號便

聖上益御機健克臨御被爲在恐悦の至存候大使初御一行御無異無程米國御安着可被成と存候本省卿輔初一同無異事此段御省念可被成候

去る十七日　大營會無御滯被爲相濟候十八日豐明節會群臣は勿論各國公使へも延遼館於て饗宴を賜候尤御當日市中休業十九日市街總神事雜踏夥敷來廿九日迄は衆庶へ齋場拜見被仰出候事

昨(ママ)廿日より横須賀へ　行幸海軍操練等

天覽廿三日御機健克　還幸被爲在候事

歐羅巴廻御荷物の義今般佛郵船ゴタヘリ號へ積込マルセール迄差送り同處より龍動へ相廻り候樣取計置候間左樣御承知可被成候

澳地公使ミニストルレジデントに昇進に付來月三日參朝被仰出候手續如例に付不申入候

外國人訴訟の義彌東京運上所へ司法省官員出張取扱候條決定乃ち昨(ママ)廿一日別紙各國公使へ通達及候事

今般大使御出張中御用議判宮本少丞大原重實辨理近藤中錄加藤少錄二橋少錄へ取扱候樣被命候間是又御承知置可被下候

右條々申進候也

年號十一月廿七日

大原重實
平井少記
子安少記
石橋大記
花房大記
宮本少丞
楠本少丞

田邊少丞殿
渡邊少記殿

尙々英國人え相懸り候諸縣負債公使より連々申立相成居候分六廉の內ケヘルより犬山へオールトより嚴原赤穗兩藩へルツトスより嚴原烏山兩藩へカベルトより盛岡へ相係候四口丈けは今廿五日(ママ)大藏省にて引受の事に決答に及ひ候殘二廉カベルトより岩崎えスコツトより斗南へ相懸り候分は脫走人探索且吟味濟兼返答猶豫約束中に有之候此段も御心得として申進候也

追て日誌其外諸新聞は正院より御送り方相成候筈に有之候へとも爲念横濱内外新聞萬國新聞等の類は毎便當省よりも差送りいたし候事

註二、右文書ト同便ニテ送致サレタルモノノ「銘書」存スルニヨリ左ニ記ス

銘書

一中外通暦　十部
一萬國新聞　自一號七號迄
一シヤツハンガシツト　正月四日五日分
一シヤツハンヘラルト　同斷
一横濱新聞　三百一號
一木戸殿行　一封
一大久保殿行　一封
一山口殿行　一封
一田邊殿行　三封
一東久世殿始二名え　一封
一川路行　一封
一安藤行　一封
一中野殿行　一封
一右大臣殿　一封

（附記二）

十二月五日達ス

第二號

聖上益御清穆被爲在御座候恐悦の至此事に存候大使初御一行御安泰の條珍重存候本省卿輔初いつれも無異事御放慮可被成候扨第一號書翰中進候通り澳地利公使當月三日參朝同日延遼館於て本條約交換無滯相濟候條御承知可被成候右　勅語幷言上振等在別紙（註第四卷五三〇附記一同二參照）

但し條約書御親證の奉勅是迄大臣の處此度外務卿と相成候事

一此度省中於て日記課御取設相成坂田中錄加藤少錄堀口權少錄へ被命以來省中事務大少無遺漏可摘錄被仰付候事

一米輸出の義に付各國公使等への達書別紙にて御承知可被成右規則の義は方今取調中に有之候事

一兵庫地所一件に付英公使よりの返簡及其答簡御心得迄に差進候事

一榎本釜次郎石炭一件に付英公使より甲號書簡（註第四卷三〇七參照）差越候に付乙號（註第四卷三〇九參照）の通御返答相成右一件は公使本國政府へ差送り政府の公裁を可乞旨申立候間此段御含置可被成候

別紙丙號（註第四卷事項三六參照）長崎縣屆出耶蘇一條は事實取調中に候へとも御心得無之ては不叶義と存候に付不取敢右寫差進候猶事實精詳の上後便可申進存候

右條々申進候也

辛未十二月五日

大少丞記

田邊殿
渡邊殿

追て第一號御用信去月廿九日佛郵船を以て可差出筈にて前廿八日夜神奈川縣へ相達候處夜中積込難出來其爲延滯無據今般併て差立候樣相成不都合の段不悪御差含有之度候也

註三、右文書ト同便ニテ送致サレタルモノノ「入記」存スルニヨリ左ニ記ス

入記

一田邊殿え宛大少丞方よりの書狀　壹
渡邊殿
一榎本釜次郎石炭一件に付英公使より十一月廿三日附來書翰　壹綴
一右返簡十二月五日附
一長崎縣屆佐賀縣邪宗一件の寫
一澳太利公使え　勅語寫幷條約御親證の寫　同一
一米穀輸出云々各國公使え往復書翰寫
一條約改訂に係るシヤツハンヘラルト抜萃　壹綴

一横濱毎日新聞三百四號より同八號迄　五枚
一安藤大錄え同人留守宅より　壹
一何禮之助え吉田源四郎より　同
一木戸準一郎殿え小野勝三郎より　同
一中野剛太郎殿へ留守宅より　同

（附記三）

十二月十日草

第三號便

聖上益御機健克御國内御靜謐恐悦の至存候大使初御一行彌御安泰最早米國御安着の義と存候本省卿輔已下無異事此段御休念可被成候

本月七日第一第二號御用信英郵船にて差立候無程御落手可有之と存候

今般花房大記外務少丞へ子安少記外務大記へ昇進候條御吹聽申入候

一中山内海兩人への假口宣別紙貳通式部寮より被相渡候間御廻差進候同人へ御達方御取計追便御請書指越候樣をも御取計可有之

一肥前伊萬里縣下深堀の宗徒探索書（註第四卷事項二六參照）大略寫差進候右は未た事實不確定に候へとも御心得置有之度既に第二號御

用信中にも長崎縣屆書寫書入有之併て御一覽可被成候
尤此事に付ては昨今專省議中にて嚴敷正院へ獻白中に
有之候間御處分の次第は必次便には可申進候
一英國留學中御門寬麿義去る午年海軍修行願出候に付別
紙甲號の通り同國公使へ文通致有之候處此度乙號の通
り同人より申越候間英國へ御着の上可然御取計被成遣
度存候
右條々申進候也
辛未十二月

大少丞記

渡邊殿
田邊殿

註四、右文書日附ヲ缺クヲ以テ假ニ草案作製ノ日ヲ以テ其ノ日附トス
五、「三號便銘書」存スルニヨリ左ニ記ス

三號便

銘書

一特命全權大使書記官ヘ正院より　一封
一鮫島氏ヘ文部省より　一封
一カゼツト新聞　四枚

一ヘラルト新聞　四枚
一萬國新聞八號より十一號迄
一中山內海えの御達書　二通
一本省御用狀

（附記四）

第四號便英國郵船マダラス號ニ付ス
例文略之
一西洋千八百七十二年第一月十六日大使初御一行サンフラ
ンシスコへ御安着の旨同第一月十七日午後第六字長崎縣
ヘ電報有之今（マヽ）十二月十八日同縣より報知有之抃喜の至に
候政府へは無申迄各御留守宅へも至急及報告候事
一先般宮本少丞初如別紙位階昇進被仰出候貴下方御三名の
位記三通式部寮より被相達候間差進候御拜收次便御請書
御指越可被成候事
一舊藩々外國人より負債の廉々大藏省於て公債となし可引
受分先別紙（註第四卷事項二四參照）の通丈取調相付候間御心得迄入御一覽候事尤
右の外訴狀數十口有之候へとも未た取調不相濟候事
一朝鮮一件宗大丞渡韓被免大島正朝渡韓幷に本省七等出仕
被免新に宗氏家扶を以て別紙書翰（註第四卷事項一〇參照）を彼の禮曹被相達候手
段御評決相成來る廿日廣津森山等彼の地へ發向の圖に有
之委曲別紙にて御了解可有之候
一來申年澳地利國都府於て展覽會の義に付同國公使より種
々談示致度義有之趣申立候に付今度大隈參議殿ヘ島大輔
殿右御用掛被仰付候事
一肥前深堀異宗民一件伊萬里縣より（註第四卷事項二六參照）別紙屆書寫差進候右に
付明（マヽ）十九日副島卿殿英公使アタムスへ御應接の筈に有之
右事實別紙にて御了解可有之候
一九等出仕森山茂廣津弘信申錄近藤眞鋤三輪元隆坂田諸遠
芳川（曾禰荒助カ）廣津忠利以上七名權大錄に被仰付小林匡權少錄に被
仰付候事
右條々申進候也
十二月十九日

大少丞記

田邊殿
渡邊殿

昨十九日卿殿伊萬里縣屆書を以て英公使御談判有之候
末右移民所置決答承り度旨申出候に付御伺相成候處（註第四卷事項二六參照）別
紙〇印の通同縣へ御沙汰可相成御評議濟卽ち今朝花房
少丞右寫英館へ持參同公使へ相示し候最早此一件是に
て落着可相成此段御安心可被成候

十二月廿日追加

（附記五）

十二月廿六日達ス
第五號　大使への御用信　フワーズ號船
一例文
一澳地利公使より來歲同國展覽會布告文差出候に付飜譯相
成候間御心得の爲（註第四卷事項三〇參照）寫差進候
一前便にて段々申進候深堀村民伊萬里縣へ呼寄候一件今般
政府より別紙甲號（註第四卷事項二六參照）御沙汰相成候間前々差進候書類と御照
覽御安堵可被成候右一件に付長崎ガゼツト新聞中別紙乙
號の通噂々醜語書載有之に付右虛妄を打消候爲別に新聞
紙爲差出候歟又は出版人の本國公使へ掛合候歟兩樣の內
可取計心得に有之候是又御心得迄に申進置候
一先達て橫須賀　行幸の節澳地利國人潛に
尊影を寫眞致候義有之右始末丁號新聞紙譯に詳細有之候
間右にて御承知可被成候

一（註　第四卷）
別啓

一支那條約の儀大使御出立後種々御評議被相盡候處何分修好條規第二章其外不都合の廉御改正可相成に御決議就ては卿輔兩公より右の趣清國大臣に御文通被成度近々右使可被差立圖に有之右結落に不至間は條約面施行不致儀に有之各國公使へも吹聽可被致候へとも右御書簡案等當時取調中にて未發の義に付委曲は後便に可申進候定て右義に付ては各國にて疑問も有之候義と存候間前條の次第御含被成可然御應答可被成候以上

辛未十二月

大少丞記

田邊少丞

渡邊少記

註六、右文書ト同便ニテ送致サレタルモノノ入記存スルニヨリ左ニ記ス

一展覽會告布文譯　壹綴
一寫眞始末新聞紙譯文　同
一岩倉具綱へ富小路より
一同人え大原より
一五辻え富小路より
一右大臣殿へ堀川富小路より
一御用狀

一深堀人民一件新聞紙譯共
一新聞紙十貳通
一安藤大錄留守宅より

一三　一月十二日（二月二十日）　大使隨行田邊一等書記官等（米國ニテ）ヨリ外務大丞等宛

大使一行「ソルトレーク」到着等報告ノ件

附屬書一、自明治四年十二月二十二日至明治五年一月十日　日記抄要

二、明治四年十二月三十日駐日米國兼布哇國公使（歸國中）ヨリ岩倉大使等宛書翰寫

布哇國政府ニ於テハ大使一行中ヨリ一員ヲ使節トシテ分派アラハ歡迎スル旨通知ノ件

三、一月三日岩倉大使等ヨリ駐日米國兼布哇國公使（歸國中ノ）宛書翰寫

別ニ本國政府ヨリ布哇國へ使節ノ派遣アル樣建議セル旨回答ノ件

附記　明治四年十二月二十一日大使隨行田邊一等書記官等（米國ニテ）ヨリ外務大丞等宛

大使一行桑港安着等報告ノ件

第二號公信啓上仕候

聖上益御機嫌克　臨御被爲在恭頌の至奉存候本省卿輔公御初各位彌御安康御奉職遙祝此事に御座候陳は先便第一號公信中申進候通去冬十二月廿二日大副使初一行のもの一同桑方斯哥港發軔直樣華盛頓府まて被相越候積の處道中阻雪無據宇太州治鹽湖鎭に滯留の內本月七日太平洋郵船シヤツパン號桑港到着の信有之必定政府の公書可有之存候に付早速以電信右公書當所え相廻り候樣申遣候處行違華盛頓府え差出候趣に付領事ブルツクス、オグテンまて出張森少辨務使宛の公信革袋物早卽切開き第三號御用狀落手致披見候第一第二兩次の公信は多分華盛頓府にて落手可致と存候

一中山內海兩人えの假宣旨大使え差出大使より式部助五辻を以當人共え御渡相成候卽兩人よりの御請書差進候間可然御取計有之度候

一深堀一條に付書類落手此等の瑣事却て國家の大計に妨害候事と杞憂不少候兎角中外の御處置矛盾無之樣御配意有之度縷祈罷在候

一中御門寬麿一條に付書類落手御申越の趣拜承仕候

一桑港出立已來道路幷本鎭着以來の儀は別紙略日記と新聞にて御承知被下度別に縷述不致候

一姬路中津舊知事隨從とも今郵船にて到着十一日當所着いたし候何れも當國留學の者願候由に候

右第三號公信御報旁近況申進度如此御座候宜布卿輔公え御申陳可被下候也

壬申正月十二日

渡邊洪基
田邊太一

外務丞記御中

尙以新正賀帖は旅中に付別段差出不申候可然御執成是希候

道中阻雪昨今相開き可申候噂有之候處昨夕又候雪吹にて再閉鎖の說も有之一同困却候事に候也

哈維歷聘の義猶米公使との往復寫差進候委曲は右にて御承知被下度候尤政府えも申立置候間何れ御沙汰御座候事と存候也

（附屬書一）

日記抄要　第二號　　自鹽湖府贈ル

十二月廿二日第一月廿一日　雨第七字出館大使以下一同馬車ニテ出港甲比丹號火輪ニ乘シ直チニヲークランド」ニ渡リ別仕立ノ蒸氣車（會社ヨリ別ニ仕立シモノナリ）ヲ以テ東ニ進ミストツクトン」ニテ癲狂院巡覽同日第六字三十分サクラメント府ニ達ス當市ハ加利福尼ノ都府ニシテ使節饗應ノ爲ノ官員出迎ヒ當處ニテ右饗應ノ爲千五百元ヲ募リシ由同夜劇場ニ招カレ大使以下一同見物曉第一字歸館

廿三日第二月一日　晴第十字出馬車合衆鐵道會社ノ製造所見物第十二字州ノ議政堂ニ至リ上下院其外見物シテ第六字議事堂點燈見物第八字公筵ヲ受ケ使節五名理事官幷書記官五名之ニ列シ州ノ鎭臺以下之ニ對シ演舌アリ同第三字發輪

廿六日第六字ヲクデン」ニ朝餐ス此處ニテ車ヲ換ヘ新約克ヨリ使節ノ爲ニ來ル火車ニ乘ルヘキヲ前途雪深キヲ以テ來ル能ハス本邑旅館ニ乏シキヲ以テ路ヲ曲ケテ鹽湖府（此府ハユタ郡ノ首府ナリ）ニ至ル

此處ニテモ同シク饗應掛リヲ任シ金ヲ募リ馬車等ヲ備フ

廿八日晴第十一字郡ノ議事堂ニ至リ郡司市正以下百餘人ニ接彼我演舌アリ畢テ教堂幷ニ博物館等ヲ見物ス

廿九日晴第十一字出車府ノ東方二里半強トングラス堡ニ至リ酒菓ヲ受ケ其將軍以下演舌アリ

明治第五壬申正月第二月九日　雨雪交降ル各自正ヲ賀ス夜第八字ヲ以テ米公使及當地ノ官員及ヒ應接掛リヲ饗應ス彼我演舌アリ之ニ列セサル我官員ヘハ祝酒トシテ三般ヲ賜フ

二日美晴哈維國公使「デ、ロング」氏ヨリ書翰ヲ大使副使ニ贈ル

公文

三日右送書ヲ遣ス

四日陰晴不定夜當府知事ベード及ヒ其他市中官員陸軍將士等ヨリ先約アリテ此夕第十字旅館ニ於テ大使副使書記理事官ヲ饗セリ此宴ハ公宴（ソンシヤールバンケツト）ニ非ス私ニ屬スル者ナリ

食後踊舞アリ第三字閉堂

十日第二月十八日　晴今朝ヲグラン」ヨリ森辨務使エノ公信ヲ得タリ開封シテ分配ス廿日ニ桑港ヘ着スル者ナリ

（附屬書二）

壬申正月二日

米國鹽湖府に於て千八百七十二年第二月八日

日本政府使節諸君閣下

以手紙啓上仕候陳は日本政府の存慮に於て使節中の一員を分派して哈維王國へ差遣可有之段同國へ申達置候處承知致候旨今日同國政府より回答を得申候

哈維政府より卑職へ申付日本政府へ言上致させ候には同國に於て充分の敬禮を盡して右使節を接受し本人の爵位及國君に適當したる款待を爲し可申候

且又同國宰相より申越候には使節同國に入來相成候はゝ右旅中隨分有利有益の事可有之候且又岩倉公の如き使節を同國政府に於て親接款待不致義遺憾の至に堪へさる旨申來居候

米國聯邦特派全權公使兼哈維國事務

シーイ　デロング

（附屬書三）

貴國千八百七十二年第二月八日附尊書落手致被見候我使節中の一員を分派し哈維國へ可及聘問義に付兼て閣下え申入置候處此度同國政府より回答有之懇示の趣御申越承知いたし候然るに使節中の一員立別れ候儀不都合有之別段我政府え同國限り使節差立候樣建議いたし其段桑方斯哥港に於て我明治四年辛十二月廿一日附を以閣下迄申述候通の儀に付

右不得已の事情可然猶同國政府え御申立可申候樣致度存候

右御回答旁可得貴意如此候以上

大日本明治五年壬申正月三日於鹽湖府

五　名

デロンク宛

註　田邊一等書記官ヨリ外務大丞等宛第一號公信ハ明治四年十二月二十一日附ナル處左ニ附記ス

（附記）

正月廿八日到來

太平洋郵船便を以致啓上候

聖上益御機嫌克御座被爲在恭頌奉存候卿輔公御初各位彌御精勵御奉職遙祝此事に候陳は大使副使自餘一行の者横濱出帆已來海上風浪靜謐本月六日を以無滯米國桑港到着候處本港士民格別の款遇にてデロング氏より申立候趣も有之多日の羈留と相成加之鐵路阻雪旁漸く明廿二日發軔直に華盛頓に被相赴申候航海中幷當港着後の景況は（註「別紙略記」ハ第四卷一〇六附記ト同文）別紙略日記にて御承知有之度且本港日刊紙も差進候間御譯閱相成度尤正院えは日記の方而已差出置候間日刊紙翻譯出來候は、御差出有之候樣御取計被下度候

一哈維國廻聘の儀は最初使節の内一人立別れ當所より同國へ參り候積の處何分不都合に付猶デロンク氏と相談の上別以一使節同國而已え被遣候手續に相成候何にとも正院より御沙汰御さ候事とは被存候得共爲御心得申進置候且富三郎と申もの哈維雇者頭取相勤居即今當港に罷在昨今歸國の積に付此迄功勞を被賞船賃下賜相成候間殊に寄り當郵船にて歸國可仕哉使節方には哈維え御使被差向候運に至り候はゝ同人を隨行に被命候はゝ御都合可然被相考候由各位迄爲御含鄙職より申進置候

一森少辨務使より當國政府え引合雇入候理財家ウリヤムス兄弟當郵船にて御國え相赴候右發程前伊藤氏と談判有之候其他運上所監首役ケロー外壹人是又御雇入相成候事に候右は正院より御沙汰可有之候得共爲御心得申進置候

一難船救助の事に付右船將及士官醫師等被下物謝狀等夫々取扱濟申候右も正院え申上置候間左樣御承知被下度候

スネル召連候日本人の内同人の毒役に堪兼脫走候もの有之候處右輩の旅行切手スネル取押置相渡し不申候よしに付小松靈盛より申談取戻しブルツクを以夫々え附與いたし候スネル儀近々御國え可相越趣右は最前會津に罷在候時分の事に付一論柄を考へ出し政府に向ひ討索筋有之樣子に被相考申候得共未委曲の事情を悉兼候事に候

一進贈品箱物英國廻しの分は出立前御依賴及置候通疾御取計被下候ものと存候猶當地着の上取調候處用紙不足の樣被存候間例の御書柬紙五百枚外務省系紙貳千枚雁皮十行系半紙判綴本百枚綴貳拾冊歐洲え向け御廻し置被下度候右の條可然卿輔公え御申立有之度候也

辛未十二月廿一日

田邊太一

渡邊洪基

外務大少丞御中

尙以發程前御雇に相成居候兩人のものは其後如何御處分相成候哉關心仕候間相伺候也

一四

一月十四日（二月二十三日）　山口副使（米國ニテ）ヨリ副島外務卿等宛

深堀耶蘇教徒處置ニ關シ速ニ報知アリ度旨依賴ノ件

申二月十八日着

從鹽湖府奉呈候日月匆々改曆已ニ五歲千里同風御同慶徽氣ヲ迎

閣下御兩位益御淸恭可被成御超歲奉欣賀候僕等ニモ一同無異消光罷在乍憚御降心可被成下候扨横濱出帆已來之事情先便御用狀幷書記官太邊（ママ）太一ヨリ委曲申上候通ニ付再揭ヲ不要太平鐵道積雪ノ爲メ意外之滯府ニ候處漸今十四日消雪開道之報ヲ得テ鹽湖府發程華盛頓府ニ趣キ候御安心可被下候陳ハ御國元ヨリノ新報去七日ニ相達拜見候處其ケ條中伊萬里管轄深堀表ニテ異宗徒若干ヲ捕縛苛酷之所置ニ及候由ニテ横濱新聞中言語同斷（ママ）之惡言必ス各國日本在留公使ニハ勿論政府ニモ速ニ相響キ可申ハ必然ニ候定テ各一條ニ付テハ各國公使ヨリ苦情申立御談判相成候事ト奉遙察候右一條ニ付テハ兼テ各國政府モ注文スル條件ニテ今般僕等奉命定約改正ノケ條中ニモ最モ苦心スル事件ニ候處前載ノ如キ事件差起リ候テハ各國之嫌疑モ有之今度使節之陳述スル次第モ自ラ了解セサル義可有之ト深ク案痛罷在候就テハ右件ニ付テノ御談判結局之次第ナリトモ委細承知不仕候テハ米政府ヲ始メ僕等談判之都合ニモ大ニ關係仕候義ト相心得候間終始御談判之次第ハ勿論深堀ニテ伊萬里縣ノ所置振リ悉詳急飛ヲ以テ御報知被成下度政府へモ使節一統ヨリ右ニ付テノ御用狀差出置候得共御談判等之義ハ必ス御引受之御當務ト申之政府御繁忙之折柄御報知之義モ自然疎漏有之候テハ遠隔ノ地容易ニ信書之往覆モ難相達幸今朝發車途中ヲクデント申所ニテ休車桑港便有之候付一書ヲ飛シ候返ス〳〵モ急速之御報奉希望候イツレ委細之義ハ四五日中華盛頓府ニ相着候間其上ニテ可申上時下御自愛爲邦家御盡力奉祈候謹言

正月十四日

山口外務少輔

副島卿殿

寺島大輔殿

一五

一月十九日（二月二十七日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官宛

島原耶蘇教徒處置問題等報告ノ件

壬申正月十九日達ス　正月十四日草

第七號大使御用信米國郵船便ケレートヘブリツク號例文略之

一別紙甲號英國公使より島原表にて異宗徒へ苛政相施候趣申立候へとも右は乙號復翰にて辨解申遣候通りの訛傳に候へとも御行先自然右等の風說可有之哉も難測御心得迄に寫差進候（註第四卷事項二六參照）

一澳地利公使近々暹羅邊へ出帆致候尤も暫時滯留再渡致候趣に御座候同國展覽會に付政府御運ひ方別紙來復簡にて御了知可被成候（註事項一八參照）

一京都府下に於て當春博覽會相催度旨願出乃御聞濟に相成別紙摺物入御一覽候右は追て各國公使へも相達し右開場日限中は外國人入京差許し各國人よりも所藏品差出候樣可相成歟御評議中に有之事（註事項一三參照）

一極谷謙太郎去る十二月廿八日歸朝正月　日租稅寮出仕被仰付候事

註一、右文書發受者ノ記載ナキモ「第七號信入記」竝ニ本文書ノ返翰タル二四ヨリ察シ外務大丞等ヨリ田邊一等書記官ニ宛タルモノト認メラル

二、「第七號信入記」存スルニヨリ左ニ記ス

第七號信入記

一大使へ正院より　壹通

一島原表異宗徒に係る往復書簡一綴寫

一澳公使へ展覽會一件の答翰一通寫

一池田大助教へ留守宅より　壹通

一京都府博覽會摺物　五册

一大使へ卿輔より　一通

一田邊渡邊へ御用狀　一通

一米穀入札規則正本寫　一綴

一新聞紙九枚

以上

河路簡堂へ　壹封

安藤大錄留守宅より

書記官宛にて別封差出す　壹封

一六　一月十九日（假）（二月二十七日）　副島外務卿等ヨリ岩倉大使等宛

鮫島少辨務使ノ資格ニ關スル件

第七號大使御用信別啓

一正月十四日延遼館於て英國代任公使アダムスより今般本國政府より申越候趣にては今一應改て御書通有之候はゝ鮫島少辨務使をチヤルジダツフエールとして可引受に付改て御書通有之度旨申出候付右一件は岩倉全權大使より貴國政府へ御掛合可申候間當方より別段その政府え書簡

差出不申旨相答置申候右は定て其表にて御存知可相成候へとも此段御心得英國政府へ御掛合方可然御取計可被成候事

正　月　　外務卿輔

岩倉右大臣殿

山口外務少輔殿

註　右文書日附ハ假ニ「第七號大使御用信」一五ト同日トス

一七　一月二十三日（三月二日）　大使事務掛ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

視察ノ爲各國へ左院議官發遣アル旨等報告ノ件

正月廿三日各國視察の議官に托し差出

第八號

各位彌御安泰珍重存候今般議官より各國視察として發向相成御用狀可差出處未決事件而已に付後便に讓り候間左樣御承知可被下候

一新聞紙　十枚

一田邊殿へ同姓より　一封

一何禮之助へ　一封

一富田冬三へ同姓より　一封

右御落手可被下候

去る廿日穎川重寬大錄齋藤榮權大錄內藤忠順少錄岩田直行遠藤直道十三等中川岩城村瀨等十五等出仕被命今廿三日鄭永寧大錄に被任候事

右而已申進度如是御座候以上

正月廿三日　　大使事務掛

田邊殿

渡邊殿

一八　二月二日（三月十日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

近況報告ノ件

第九號大使御用信

辛未十二月廿一日御認の御書簡壬申正月廿八日到着致披見候先以

聖上益御機健克被爲在御座候恐悦の至存候大使初御一行彌御安泰桑港御着の處同所士民款待の景況等御差越の略日記及新聞紙にて逐一承知同國懇親の盛意不堪想像定て追々御談判筋も御都合可宜義と致遠察候

一哈維國使節の義理財家ウリヤムス其外運上所監首役ケロー等御雇入の義及難船救助一條スネル一件來示の趣委曲領承致候事

一過便米穀輸出の義に付入札規則寫差進候通り去る正月十八日入札公布相成候事

一獨逸領事館及同國商人地租滯一件今以埒明不申候に付過日代任公使へ別紙の通御掛合相成候間御心得置可被成

一今般武朱金壹朱銀は端數の外租稅に收納不相成旨御決議乃ち其旨各國公使領事へ御達相成候間委曲別紙にて御了知被成候事

一御國にて白書糞桶を無蓋に持運ひ候義從來の醜習に有之候處過日東京府にて別紙の通及布告候間是又御心得迄に申進候事

一寺島大輔殿昨年大患後今以强健に被復兼候に付今朔日より二週日の間熱海入湯願出立被致候事

右條々回答旁申進候事

壬申二月二日

大少丞記

田邊殿

渡邊殿

追て過便申進置候來る三月十日より五十日の內京都府下於て博覽會取設候に付右日數の間外國人入京被差許候に付入京規則（註二七二頁參照）爲御心得寫差進候事

端書を以て御申越御出立前御雇兩人の義其頃諸課とも缺員も無之候に付追て御採用にも可相成筈にて拾三等の割を以御手當を賜り暇被差遣候事

今日柳原大丞兼少辨務として淸國出使拜命相成鄭大錄永寧隨行被仰付右携行書簡先別紙（註事項四參照）にて御決定相成候間爲御心得寫差進尤も出立時日等は未相定猶後便委曲可申進候事

一九

二月九日（三月七日）　大使隨行田邊一等書記官等（米國ニテ）ヨリ外務大丞等宛

華盛頓到着竝ニ大統領へ謁見等報告ノ件

附屬書　自一月十四日至二月九日　略日記

附記一、一月二十五日大統領へ謁見ノ際ノ演書寫及大統領答詞

二、一月二十七日米國議事院ニ於ケル應接記

第三號

太平洋郵便を以致啓上候

聖上益御機嫌克臨御被爲在恭頌の至奉存候卿輔公御初御一同彌御淸寧御奉職遙祝此事に御座候陳は第二號公信を以申進候通去月十三日鹽湖府發軔の積の處又候途々雪解水漲の報有之猶一日滯留漸く十四日同府發軔同十九日チカゴ府着同府に一日夜逗留所々見物近日大火にて窮民多分有之よしに付右扶助として米貨にて使節より五千弗の高同府扶助會社のものに寄進有之候同廿一日午後都府到着森少辨務使鹽田大記外山名和其他書生等迎接同都內アルリングトンホウスに止宿相成申候大使初同行のもの一同無異御安意可有之右は其節電報を以御報知候間疾に御承知と存候引繼き同廿五日大統領謁見國書渡方の式も無滯相濟本月二日より談判に相成候處發途前見込とは聊齟齬いたし存外葛藤を生し候に付今郵船を以大久保伊藤兩副使に二等書記小松簫盛三等書記大原令之助相添一と先歸朝委曲の事情陳述候積に決議相成候右は此程電信にて聊御承知にも可相成候且詳細の事情は兩副使より政府へ被申立候事小松簫盛よりも各位へ可申上候間右に讓り概縷述不仕候右は此方にも多方議論を盡し森氏にも種々配慮有之候末の事實不得已情態と被存候間卿輔公にも可然御申立只管御廟議至急相決歐洲歷聘の期日相後れ不申候樣御盡力是祈候

一森少辨務使への箱物類引渡申候同人よりも每度御手數の段拜謝候旨被申出候

一鹽田大記も去年中電機會議の爲羅馬相越居候內電信有之候よしにて歐洲發程は聊か後期候へ共使節阻雪等にて當都到着延行の間恰好時を失不申候都合宜御座候

一鹿兒島縣士族杉浦弘藏大原令之助三等書記官被命令之助は旣に大久保副使隨從今般歸　朝いたし候

一各省理事官は各自當務の事情取調の爲當國は勿論歐洲

えも夫々派遣相成候

一スミス氏より書狀到來致居候間御屆方可然奉願候

一第一第二公信未た落手不致候先月太平郵便も昨今桑港着の運に可有之今便には御報間に合不申候兎角信書往復行違候には困却致候

右可然卿輔公前御申立被下度委曲は小松簫盛より御聞取可被下候也

壬申二月九日

渡邊洪基

田邊太一

外務大少丞記御中

尙以別紙略日記新聞紙差進申候近況は右にて御承知有之度候也紙墨其他缺乏品小松簫盛より申立候分至急御送越頼入候也

註一、右文書ハ二七ニヨレハ三月二十四日到着セルモノナリ

（附屬書）

正月十四日天陰午前九字五十分大使以下タウンセンド旅館ヲ發シテ汽車ニ乘シ十字三十分鹽湖府ヲ發シテ十二字

「ヲグデン」ニ達ス午後二字雨來ル四字十二(マヽ)五分大使以下逢迎ノ爲ニ來レル汽車ニ移乘ス　車中寢食ヲ自由ニスル者　五字雪頻リニ來ル夜二字「カルカタ」ニ至リ前途阻雪ノ報アルヲ以テ禁轉ス汽車ノ發スル明朝ヲ期ス

十五日天晴午前九字三十分昨夜陷ルノ汽車來ルヲ以テ發軔ス此日所過ノ途上則チ前日雪ニ鎖セルノ地四ケ處アリ其距離皆三十里ニ下ラズ

十六日美晴車路漸仰ヒテ「ロッキー」山嶺ニ攀チ午前八字「シヤルマン」ニ達ス此地ヲ最高ノ頂トナス水面ヨリ高八百二十餘丈此ヨリ地漸低シテ亞米利加有名ノ洪野ニ入ル「プレイリー」夜八字五十分「ノルスプラット」ニ入ル此地ハ生齒頗繁密九字廿六分長橋ヲ過ク河ヲ「プラット」河ト稱ス廣サ里許

十七日晴九字四十分「ヲマハ」ニ達ス衆皆他車ニ移乘ス府ヲ踰ヘテ河ヲ渡ル「ミゾリー」河ト名ク此ヨリ以東ハ人烟漸連ナリテ田野頗開ケ又洪野荒涼ノ景ニ非ズ夜三字「ヒユルリングトン」ニ到ル同五十分「ミシヽピ」河ヲ渡ル橋長サ一千八百丈築造ノ廣大途上未見ザル所ナリ

十八日晴八字五十五分「メントダ」ニ入リ十二時三十分「チカゴ」府ニ達ス大使以下馬車ヲ驅ツテ一字十分「ツリモンド」及ヒ「グランドセントラル」旅館ニ入ル市正以下諸官員陸軍大將セルダン氏以下ニ引接アリ

十九日晴風寒第十字ヨリ府人ノ招ニ應シテ使節一行盡ク馬車ニ乘シテ府ノ北西ニ到リ汲水所ヲ觀ル此館內ニ壯大ノ汽機ヲ設ケテ湖水ヲ汲引シテ市中日々ノ用ニ分配スソレヨリ馬車ヲ驅ツテ市街ヲ巡覽ス又府ノ南西ニ在ル小學校ニ到リ生徒習讀ノ風ヲ檢ス此日所過ノ地去歲火災ニ逢フテ破壞セル跡痕ニシテ無雙ノ壯築僅ニ殘礎破柱ヲ餘ス見ルニ堪ザルノ狀アリ「チカゴ」府ノ火二日二夜ヲ連燃セシ事人ノ知ル所ナレバ贅セズ午後四字半歸館使節ヨリ五千元ヲチカゴ遭火ノ究民ニ救賑セリ此夜八字衆出館九字汽車ニ乘シテ發ス

廿日晴八字「クレストン」ニ朝餐十字四十分「ウーステル」ヲ過キ十二字五十分午餐ヲ「アルリヤン」ニ採ル午後四字十分「ビッツビルグ」ニ入ル此府器械製造ノ繁賑ナル費邦近傍ノ樞地ト稱スル位ナリ夜二字半ハルリスボルグヲ過ク

廿一日陰「ヒラテルヒヤ」ノ西南側ヲ過キテ七字廿分「ウイルミングトン」ニ到リ朝餐ス十字四十分「ボルチモール」府ニ入ル府中轍路アレトモ汽車自轉ヲ許サス六馬ヲ以テ一車ヲ牽キ府ヲ出テ又發輪セリ時飛雪紛々十一字五十六分華盛頓府ニ入リ汽車驛場ニ達ス森氏以下逢迎ノ爲ニ來レリ大使以下之ト出車汽車傍某屋ニ入リ市中接待人ニ引接アリテ後直ニ「ウヲルモント　アブニユー」街角ニアル「アルリングトン」旅館ニ投セリ時ニ二字大統領ノ夫人花ヲ大使ニ贈ル

廿二日晴朝九字半過大副使當府金座支局ニ赴キ十一字歸館ス

廿三日昨夜ヨリ飛雪紛々杉浦弘藏大原令之助三等書記官ニ任セラル

廿四日晴國務卿「ヒツセル」氏ヨリ書柬差出タシ兒玉淳一郎ニ法教ヲ學ハシムヘキ事ヲ陳ブ明日謁見ノ式案ヲ政府ヨリ贈ル

廿五日月曜日　晴第十二字大副使ハ衣冠書記官ハ直垂ヲ穿チ皆帶劍シテ書記官五員　大統領公邸白殿ニ抵リ玄關ヨリ登階ス階ノ左右ニ巡捕吏數十名整列シテ立テリ使節以下先ツ靑堂ニ入ル時ニ大統領「グラント」ハ副統頭「コルフアツクス」及國務卿以下諸官員ト東堂ニ入リ堂ノ南中央ニ座ヲ

占ム國務卿「フイシュ」ハ森辨務使ト共ニ靑堂ニ入リ來リ大副使以下ニ面接シ畢テ自ラ大使ノ手ヲ把リテ東堂ニ誘フ副使以下其後ニ隨行シテ進ミ順序ヲ以テ大統領ノ右ニ整列ス此時「フイシュ」ハ使節ヲ大頭領ニ引接ス唯互ニ磬折スルノミ握手ノ禮ナシ次ニ其左右ニ羅列スル文武諸官長ニ對接シ畢テ大頭領ニ半向ツテ演書ヲ披ヒテ之ヲ讀ミ

「我
天皇陛下ノ國書ヲ進呈スル事我等ニ於テ無限ノ光榮ナリ」

ト謂フニ至ツテ書記官進ンテ御國書ヲ大使ニ出ス大使之ヲ大頭領ニ渡ス大頭領受ケテ直ニ「フイシュ」ニ致ス大使又其演書ヲ讀シ畢ル大頭領因テ其答文ヲ讀ム一回然後自ラ其諸官員ヲ大副使以下ニ引接ス大使又副使以下ヲ彼レニ引接シテ互ニ答禮ヲナシ畢テ解列シテ談話頃刻後大頭領大副使以下ヲ導キテ白堂ニ入其夫人及國務官員等ノ細君ニ引接ス然後使節出殿歸館ス是日所會ノ者ハ內外事務局大藏民部ノ長官其外ハ海陸ノ諸將帥ナリ（名ハ新紙ニ在リ）午後四字副頭領議長及各國欽差官員來訪ス大副使書記官盡ク正服シテ之ヲ接待ス談數刻ニシテ散ス

廿七日水曜日　晴第十時過大副使以下一行盡ク馬車ヲ驅テ府ノ議事堂ニ抵ル使節入廳ノ時滿堂ノ議員等起ツテ敬接ス大副使進ンテ議長ノ机前ニ近ク「ゼネラル」官「バンクス」使節ヲ議長「プレイン」ニ引接ス議長因テ起チ大使ニ向ツテ演舌一條ヲ說ク（註三）（後ニ記ス）畢ツテ大使又其演書ヲ披イテ讀ム次ニ「バンクス」其譯書ヲ讀ム滿堂ノ看客拍手歡ヲ唱フ式畢ツテ衆議室ヲ出テ堂ノ內ニアル文庫ニ入リ巡覽シテ又大副頭領ノ公室ニ入リ然後歸館ス午後副使及書記官四人名刺ヲ各國欽差及國務官員等ノ私宅ニ投シ昨ノ尋問ニ答ヘテ歸館ス夜九字招ニ應シテ大副使以下五十餘人「ナショナルスエートル」劇園ニ遊ブ

廿九日金曜日　陰朝八字半大副使國務卿「フイシュ」氏ニ抵リ諸省理事官等ニ引接スベキノ期ヲ次月曜日ニ定メテ歸館ス

二月朔日土曜日　陰使節ヲ舞踊會ニ招ク皆病ヲ以テ辭ス
二日　三日月曜日　天陰午前十字大副使外務省ニ到リ應接アリ（第一次）
森鹽田之ニ陪ス
四日火曜日　陰午後一字半大副使外務省ニ應接ヲ爲ス（第二次）森鹽田之ニ陪ス
五日水曜日　陰午後一字半大副使外務省ニ應接ヲ爲ス（第三次）夜八字招會ヲ施セリ所會ノ男女凡一千餘人文武ノ官員市井ノ豪族等陸續雲集館ノ引接堂ニ於テ大副使以下ニ握手ノ禮ヲ行フ凡三字間後食堂ニ於テ酒食ヲ採レリ堂ノ四壁ハ彼我ノ國旗ヲ張リ其間ニ
皇室ノ記號菊桐ヲ交ヘタリ夜十一字衆散ス

七日金曜日　美晴費拉地費府招待人ノ招ニ應シテ肥田以下數名機關製造所等巡見ノ爲其府ニ趣ク夜八字半招ニ應シテ副使以下數名饗ヲ西班牙公使館ニ受ク

九日雪午前十字半大使及書記官三名寺院ニ抵ル

註二、一月二十五日岩倉大使等大統領へ謁見ノ際ノ演書寫等左ニ附記ス

（附記一）

大使謁見ノ節演書寫

我
天皇陛下大業ヲ中興シ國政ヲ修整セシヨリ文明各國ノ成績ヲ知リ且ツ外國交際ノ友誼ヲ一層親密ナラシメント欲シ今

般我等ヲ特命全權使節トシ結盟ノ各國ニ派出セラル我等乃チ首トシテ貴邦ニ來リ今日大紀領ニ拜謁シ我
天皇陛下ノ國書ヲ進呈スル事我等ニ於テハ實ニ無限ノ光榮ナリ

奉命ノ主旨ハ粗載セテ國書ニ在ルカ如ク兩國ノ間ニ存在スル所ノ交際貿易ヲ益盛ナラシメン事ヲ貴國政府ニ商量シ以テ我國ノ進步ヲ輔翼セン事ヲ謀ルニアリ大紀領幸ニ此言ヲ信聽シ我國ノ公利ヲ垂念シ我等ノ使命ヲ遂ケシメラレン事ヲ希望ス我等又此期ヲ以テ大紀領ノ安寧ヲ祝シ又我國民ニ代リテ貴國億兆ノ幸福ヲ祈ル

謁見ノ節大紀領答詞

一和親貿易ノ交誼ヲ結フ事ニ於テ我カ聯邦ヲ以テ嚆矢トシタル貴國ヨリ使節ヲ派出シ之ヲ接受スルニ於テ復タ其嚆矢ト爲ルノ光榮ハ之ヲ竹帛ニ垂レテ以テ我國我カ在職間ノ美事ト爲スベシ

一聞ク今般使節ヲ派出シタル目的ハ全ク貴國君皇ノ聰明叡智ニ出テ而シテ之ヲ奉行センカ爲メ特ニ閣下ヲ選任シタルハ實ニ感佩スルニ堪ヘタリ夫レ國ノ繁榮幸福ハ彼我ノ進益ヲ比較シ互ニ其長ヲ資リテ以テ其政治ノ法ヲ改正シ

其ノ人權ヲ尊重シ全國ノ富強ヲ謀ルハ學術ヲ採用スルニ在ルモノナレハ其國ヲ鎖シ外交ヲ爲サス坐テ繁榮幸福ヲ受用セント欲セシ時世ハ已ニ過去リテ再ヒ歸ラサルナリト思想スヘシ

一日本ハ其國ヲ爲ス事最モ久遠ニシテ我カ聯邦ハ一個ノ新國タリト雖モ然レトモ我輩ニ於テハ故國舊民ノ制度ヲ改正シテ以テ政治ヲ施行シ頗ル其要ヲ得タリ

一抑モ人民ノ富强幸福ヲ享クル所以ハ外國ト交際シ貿易ヲ鼓舞シ人ノ功勞ヲ尊重シ實學ヲ用ヒテ以テ工作技藝ヲ勵マシ國內ノ運輸ヲ便利ニシテ以テ來往ノ交通ヲ迅速數多ナラシメ人民ノ移住スル者ハ之ヲ愛撫シテ以テ他國ノ改俗才藝ヲ網羅シ印書ノ禁ヲ設ケス人ノ信心良能ヲ束縛セス法教ヲ寬恕シテ我カ國民ハ勿論此邦ニ居住スル處ノ外國人ト雖モ一切之カ制限ヲ立タル事無キニ依レリ是レ從來ノ經驗ニ於テ決シテ疑フヘカラサル處ナリ

一閣下奉命スル處ノ公法ノ案件ヲ商量スル事ハ我輩ノ甚タ欣喜スル處ニシテ而シテ兩國ノ間ニ存在スル處ノ貿易ノ交通ヲ修正スルモ又タ甚タ緊要ニシテ且希望スル所ナレハ今一層其交ヲ厚クスルハ決シテ之ヲ怠ルマシク眞實ニ

此ノ美事ヲ贊成スヘシ

一閣下親シク予カ安寧ヲ祝ス予モ又タ之ニ答祝ス敢テ祈ル此邦ノ駐劄能ク閣下ノ樂趣ニ適シ而シテ兩國人民ノ和親交際ノ愈密ナル事ニ歸セン事ヲ

註三、「略日記」二月二十七日ノ條ニ「後ニ記ス」トアル文書見當ラサルニ付「岩倉公實記」中ノ「具視米國議事院ニ到ル事」ナル記事左ニ附記ス

（附記二）

具視米國議事院ニ到ル事

正月二十七日具視、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尙芳等ト議事院ニ抵ル滿堂ノ議員座ヲ起チ敬禮ス具視以下下院ノ議長「プレイン」ノ案前ニ至ル上院ノ議員「ゼネラルバンクス」具視以下ヲ「プレイン」ニ引接ス「プレイン」座ヲ起チ演說ス其譯語ニ曰ク

日本帝國ノ使節諸君余ハ今マ下院ノ名代トナリテ玆ニ諸君ヲ此議事堂ニ引接ス下院ノ議員等今此ノ如キ協一丁寧ナル待遇ヲ諸君ニ施スハ卽日本ト合衆國トノ交際愈速ニ盛大ニ至ルノ功績ヲ我カ國民ノ歡喜セル確證ナリ惟ミルニ數百年來人種ノ移殖スル常ニ東方ヨリ西方ニ波及シ其

功ヲ奏スル或ハ征伐ニ出テ或ハ掠奪ニ出ツ而テ其移殖スル我カ大陸ノ境界ニ至ルニ却テ貴國ヨリ東方ニ向テ此氣運ヲ反流スルヲ見タリ其狀タルヤ平和ヲ以テ遙ニ武功ニ勝ルノ利ヲ得此兩國人民ノ轉移シテ合衆國海岸ニ於テ互ニ相會シ相交ラシムルニ至ル故ニ我カ國民ノ名代人等ヲ親ク諸君ニ引合スルコト余ニ於テハ實ニ大慶ナリ又諸君此都府ニ逗留ノ間ハ常ニ此議事堂ニ坐スルノ特例丁寧ナル待遇ヲ受クヘキ事ヲ議員一同竝ニ余之ヲ諸君ニ保證ス具視座ヲ起チ答演ス其口狀ニ曰ク

米國聯邦議事院下局ノ長官及議員ノ諸君我レ今マ日本ノ使節一同ニ代リ併セテ我カ皇帝及我カ國民ノ名代ト爲リ諸君ニ對シテ信實ノ謝詞ヲ述ヘ丹誠ノ交誼ヲ結ヒ且威權隆盛ナル大邦ノ大政堂ニ於テ親ク諸君ニ對面スルハ實ニ非常ノ光榮ニシテ極メテ感激スル所ナリ

夫レ億兆ノ心地ニ基キテ築タル文明ノ政府ハ確乎不拔ニシテ動搖ノ憂ナシ我曹ノ來聘スルモ卽チ此文明ヲ求ムルニ在リ而テ此國ニ於テ之ヲ得ルハ豈ニ喜ヘキニ非スヤ惟ミルニ我曹前キニ旭日ノ國ヲ發シテ以來常ニ東方ニ進ミ旭日ノ出ツル所ニ溯テ未タ曾テ見サル所ノ旭日ヲ觀ルコトヲ得事物ヲ知覺スルコト日々ニ新ニシテ其際涯ヲ知ラス我曹使命ヲ全フスルノ日ニ至ラハ地球ノ全面ヲ周行シテ之ヲ觀察シ此無價ノ珍寶ヲ滿載シテ歸リ而テ行々文明ノ源ヲ探リ步ヲ追フニ從テ一層知覺ヲ擴メンコトヲ怠ラサルヘシ我カ日本ノ政府ハ旣ニ內外ノ政治ニ於テ文明ノ善美ヲ貴重スルニヨリ我曹復命ノ日ニ至ラハ此國民ノ我カ一行ニ表スル友誼ノ隆渥ナルト今日諸君ノ顯ハサレタル所ヲ以テ普ク我億兆ノ人民ニ知ラシメンコトヲ我曹共ニ之ヲ諸君ニ保證スルナリ將來我カ全國千萬ノ利益タル貿易ヲ開張スヘキ事ハ譬ヘハ涓々ノ水無數ノ河ヲ出テ此兩國ノ公有タル大洋ニ朝宗スルカ如クナルヘシ然リ而テ兩國ノ友誼其洽和スル事猶彼ノ河流ノ太平洋ニ混合セルカ如ク萬々之ヲ分離スヘカラサルニ在ランコトヲ希望ス

「バンクス」其國語ヲ以テ之ヲ譯述ス滿堂ノ人皆手ヲ拍チ歡ヲ唱フ

（岩倉公實記）

二〇

二月十五日（三月二十三日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

近況報告ノ件

第十號大使御用信　佛郵船フハーズ（マヽ）號　二月十一日出帆

例文略之

一兼て寫差進置候米穀入札規則此度大藏省於て別紙の通改正相加へ候間猶又入御覽候事

一理財家ウキリヤムス過日到着乃ち去る五日延遼館於て太政大臣殿初面接饗應有之候事

一御一行桑港御着後の景況御國開化の一助にも可相成に付御差越し日記中の廉々抄寫播布可致新聞雜誌社へ申付候事

一本日山内中錄權大錄に諸岡權中錄中錄に被仰付其外石野川上等各一階相進候事

一先便御用紙不足の趣承知乃御申越の枚數差進候事

註一、日附ハ二八、三四ニ右文書ヲ指シ壬申二月十五日附トアルニヨル

二、右文書ニ發受者ノ記載ナキモ二八ニヨリ外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等ニ宛タルモノト認メラル

三、「第十號入記」存スルニヨリ左ニ記ス

第十號入記

一岩倉大臣殿行　壹通
一米穀入札規則　一綴
一新聞紙　十二枚
一杉山一成行　壹通
一川路簡堂行　一通

二二

二月二十二日（三月三十日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

悔悟セル耶蘇教徒ハ赦免アリタル旨等報告ノ件

第十一號大使御用信廿二日達佛ゴタヘリ號

例文略之

正月十二日鹽湖鎭御發第二の公信二月十九日收手日記幷に新聞等逐一披見御近況致承知候

一深堀一件は先便第四第五の御用狀にて委曲申進置候間逐々御落手御安心可相成と存候猶又今般異宗民の義に付別紙（事項一七參照）の通り縣々へ御布達相成候間大藏省建言寫相添差進候事

一獨逸公使フオンブラント今般辨理公使に昇進去る十八日來着今廿二日參　朝致候事

一魯西亞人ニコライ過日箱館より出京滯留中府下人へ魯語教授致度尤も自費にて住居場所等見定度候間御許容相成度旨願出乃ち御許容相成候事

一去る十八日朝別紙の通り禁門前へ行者體の者強訴罷出御捕押に相成兵部省にて糺問候へとも言語如夢事實未た判然不相成由に候事

一大東實鑑八部右は此度二橋少錄編輯致候に付差進候事

一京都府博覽會（註　事項一二參照）規則書一冊入御一覽候事

右條々申進候也

申二月廿二日

註一、右文書ハ發受者ノ記載ナキモ「第二の公信」ハ一三ニシテ「先便第四第五の御用狀」ハ一二附記四、同附記五ナルニ付外務大丞等ヨリ田邊一等書記官等宛ト認メラル

二、「第十一號入記」存スルニヨリ左ニ記ス

第十一號入記（註　以下二行答白）

一田邊渡邊兩氏へ宮本少丞より　壹通
一田邊へ鹽坪より　一通

一安藤へ鹽坪より　一通
一田邊へ同姓より　一通
一中野へ石尾より　一通
一鹽田へ村山明元より　貳通
一平田へ室田より　一通
一岩倉殿へ大原より　一通
大東實鑑三部添
一田邊渡邊へ二橋元長より　一封
一大東實鑑　八部
一京都外國人入京規則　二册
一異宗徒赦免の布告大藏省伺とも　二葉
一暴人の布告　一枚

二三

三月五日（四月十三日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

東京横濱間ノ鐵道開通等報告ノ件

第十二號大使御用便　三月八日出帆　佛郵船

例文略之

一禁門へ行者體ノ者強訴捕縛相成候段先便及御通達置候處頃日於兵部省糺問相成り右白狀ノ次第別紙寫ヲ以テ差進申候

一去月廿九日兵部省被廢海陸軍兩省被置山縣有朋陸軍大輔ニ河村純義海軍少輔ニ西郷從道陸軍少輔ニ被任候

一獨逸公使ブラント再渡ノ儀ハ先便申進置候處猶又本月末歸國大使御巡廻ヲ待上候趣ニ有之候可被成御承知候

一東京横濱間ノ鐵道彌近日中出來榮ノ筈ニテ別紙規則書到來ニ付差進申候

一柳原大丞一行彌本月八日郵船ヲ以テ横濱出帆清國エ赴候筈ニ有之候可被成御承知候

一蘭公使兵隊雇入ノ儀中立ニ付右御應接書抄寫差進申候當地ニテハ御應接ノ通斷然御聞屆不相成候間彼國御巡廻ノ節定テ同樣可申出候間同轍ニ御斷可被成候

一去月廿六日書第二字頃和田倉御門内兵部省管轄邸（元會津屋敷也）ヨリ出火此日西北ノ風烈ク處々エ飛火致シ遂イ築地迄燒拔ケ本願寺ホテル等燒失致候同處住居ノ本省官員寺島大輔殿ヲ始メ別紙名面ノ通類燒實ニ近日ノ大火ニ有之候エ共先以テ當官員中ニハ怪我等モ無之候間御安心可被成候

一昨四日伊東祐吉儀少記ニ岡田陵雲儀本省七等出仕ニ被命候可被成御承知候

右條々申進候也

壬申二月（三月カ）五日　　大少丞記

田邊少丞殿

渡邊少記殿

註　右文書ト同便ニテ送致サレタルモノノ「入記」存スルニヨリ左ニ記ス

三月八日出帆御用信

入記

一御用狀　一封
一新聞紙　二十一綴
一岩倉公へ同氏より　一封
一田邊へ同氏より　一封
一中山へ楠本初三名より　同
一東久世へ大村佐野より　同
一何へ平井より　同
一長埜へ宅より　同
一小松へ山内より　同
一安藤へ宅より　貳封
一山本へ蜷川より　一封
一吉雄へ宅より　同

二三

三月八日（四月十五日）　西班牙國代理公使ヨリ副島外務卿等宛

岩倉大使一行ノ訪問ハ滿悅ナル旨ノ本國政府ヨリノ意嚮傳達ノ件

以手翰得貴意候然は日本政府において歐米行の特命全權大使を命せられ我西班牙國えも可被差送旨先般愚翰を以西班牙國王アマデオ第一世の政府え進達いたし置候處右回答の趣に

天皇陛下より大使發遣被成候一事西班牙政府において承之右は賞譽すへき事柄にて實に滿悅の事に存候隨て大使我國に到着あらは懇篤友誼を以接待可致存候旨閣下え申進すへき旨拙者え懇諭申來候付ては閣下より此書翰えの御回答拙者え御さし越被下度本國政府え差贈るために有之候此段得貴意度如斯御座候以上

千八百七十二年第四月十五日

フイブリヨロドリゲズイムノズ

日本天皇陛下の外務卿輔

副島種臣　閣下

寺島宗則　閣下

註　本來翰ニ封シ三月十二日達ニテ副島外務卿等ヨリ西班牙國代理公使宛「貴政府親睦の情義不堪感謝候」云々ト回答セリ

二四

三月十二日（四月十九日）　大使隨行田邊一等書記官（米國ニテ）ヨリ外務大丞等宛

條約改正談判遲延ノ事情等報告ノ件

附屬書　自二月八日　至三月八日　略日記

第七號公信皇二月廿四日當地着落手致披見候

聖上益御機嫌克臨御被爲在頌祝の至存候卿輔公御初各位愈御精勵御在職此亦抃喜の至御座候當地大副使初一同無異御放慮有之度候

一條約談判の義は大久保伊藤兩副使出立後岩公御所勞加之當國務尚書ヒス娘大病抔にて暫時延握漸く兩次の會議有之昨今略草稿を以引合候迄の捗取に相成居候尤條約の大意は兩副使歸朝前申合相成候趣と相違は無之候

一外山名和兩人願に付本官被免跡高木三郎と申もの外山代り被申付候右は森少辨務使より委曲申進候事と存候へ共爲御心得申進置候

一今般使節所用として持越候東京寫眞圖當辨務館御備に致

度旨森少辨務使より被申聞候右も早々御仕立延遼館御備
の裝飾同樣に被成辨務館え御送り相成候樣致度候
一邪蘇宗徒の義に付種々の風說新聞に播傳いたし物議頗る
騷然に御座候旣に當外務卿にも異論御座候事も畢竟は今
里縣一條より相發候儀と被察右は先般爲御差越相成候卿
輔公よりの御書柬にて行違の廉は相分り候へ共再度右樣
の儀有之候ては結句緊要の使命にも差滯り可申と大使初
心配被致候間猶御着意有之度段政府えも被申陳候間本省
にも精々御注意被下度奉存候
一各省理事官隨行の向々當地調物取纏り次第當國各部巡歷
歐洲迄も相越候積に付夫々先發相成候
一吉田大藏少輔桑港着の趣電信有之未た何故歟相分り不申
候
右は七號御報且近狀可申進條如此御座候餘は別紙略日記
及新聞紙にて御承知有之度候也

壬申三月十二日

田邊太一

外務丞記御中

本文新聞紙は餘り嵩高にも相成候間此便後は取捨可仕

とも存候

註　右文書ハ三二ニヨレハ四月十九日到着セルモノナリ

（附屬書）

二月八日美晴無記事
九日雪午前十字半大使及書記官三名寺院ニ抵ル向晩天霽ル
十日美晴大久保副使ニ我辨務使附ランマン附屬「パテント
ヲフイス」及メジカルミシユーム（此博物場ハ往年大頭領リンコルン刺客ノ爲ニ殺セラレシ劇場ノ痕迹今政府容レテ之ヲ「メジユーム」トナス以テ後日ノ記ニ備フ）ヲ巡覽シ「スミソニヤン」博物館ニ抵リテ歸ル
十一日晴十二字伊藤大久保兩副使大頭領公邸ニ別ヲ告ク
十二日晴風寒朝第六字大久保副使小松濟治發府先新約克ヲ經（へ脱カ）ヘテ後桑港ニ抵ル杉浦乂隨行シテ新府ニ趣ク正院及外務省行ノ第三號公書翰ヲ小松ニ附托ス
十三日陰風猛此日「ゼネラルマヨル」使節ヲ老兵救育院ニ誘導ノ約アリシガ烈風寒天ヲ以テ期ヲ延ス夜第八字伊藤副使發府歸朝ス途上新府ヲ過クルヲ以テ福地源一郎新府マデ同行シテ公務ヲ辨ス
十四日晴無記事夜雪
十五日晴午後第四字府知事クツク氏ヨリ使節ノ爲ニ救火隊ヲ發シ旅館前ニ於テ救火ノ操練ヲ演スル二時間ニシテ解隊シテ去ル夜都兒格公使館ニ使節饗ヲ受ク
十六日美晴風穩ナリ無記事
十七日陰午前第十一字ヨリ「ゼネラルマヨル」來リ大副使以下十三人ヲ誘ヒテ府ノ北東里許ニアル老兵救育院ニ抵ル此地ハ市街繁劇ノ地ヲ離レ地高隆全府ノ景ヲ目下ニ占メ築屋モ亦大理石ヲ以テ之ヲ造營セル者閣上ニ國家防禦ノ夫ニ報スル居ト題セリ屋中所養ノ老兵二百三十七名而シテ居室ハ三百餘ヲ容レリニ足レリト巡覽數刻ニシテ出院里許一學舍ニ抵ル乃チ往年戰爭後黑奴ヲ教育スル爲ニ所築ノ校ニシテ政府ノ管轄ニ非ズ有志ノ徒一會社ヲ立テ黑奴カ役ニ由ツテ所作ノ金ヲ集メテ之ヲ營ミシ者校中師數員ヲ置キ書籍ヲ貯ヘ讀書習字算術等ヲ教授セリ今ハ則チ羅甸幾利西語ヲ學者十數名アルニ至ル校ニ對セルノ大舍ハ黑奴練兵所ニシテ服制器械一般常兵ト異ナルナシ操兵ノ術モ亦善ク理會熟達セリ午後二字歸館雨來ル夜八字大副使府ノ集會所ニ招カル
十八日雨無記事
十九日晴大副使書記二人ブルツクス等國務省ニ抵リ應接ア
リ此夜劇場ニ大副使以下ヲ招待セリ
廿日晴無記事
廿一日晴大使ヨリ桑港ヘ電信ヲ以テ各國欽差官等ノ會議所及其期日ハ大伊二使ト龍動ニ會スルノ後ニ確定ス可キ事其二氏ヨリ我在留公使等ニモ布告スヘシト大伊二副使ニ書ヲ發ス
廿二日晴入夜三字雨來ル無記事
廿三日晴大副使我辨務使館ニ夕餐ノ饗ヲ受ク
廿四日晴午後第八字當國諸官省官員等ヲ夕讌ニ招ケリ國務卿ハ其女氏ノ病ヲ以テ辭ス主客合セテ三十人
廿五日晴午後「ゼネラルマヨル」大副使ヲ誘ヒテ「パテントヲフイス」（新奇發明ノ器械物品ヲ此院ニ出シ政府ノ免許ヲ得ル故其等ノ物盡ク藏ス）ヲ巡覽ス築屋ノ廣大新器古物雜駁纍々枚擧ニ暇アラズ入夜同氏乂來リテ大副使以下十一人ヲ曲馬場ニ伴フ
廿六日陰午前十一字大副使以下四人招ニ應シテ府ノ製本局ニ抵ル局中所蓄ノ役夫男女合セテ一千人活字型ノ組立ヨリ摺機ノ運轉板紙ノ裁作其製本一切金ヲ粉シ線ヲ拽キ紙ヲ集メ字ヲ鑄以テ一全冊ヲ成ス等盡ク備ハレリ其築屋ノ大推シテ知ル可シ此日三條公ヨリ電信アリテ曰ク森氏ニ

全權ヲ委スル云々不分明再信ヲ要スト因テ又大使ヨリ二副使歸朝ノ上分明ナルベシト卽答ス

廿七日晴午前十字半議長下院及外二人來ツテ木戸副使ニ謁ス午後使節博物館ニ抵ル

廿八日晴午前十一字使節尼院ヲ訪フ西班牙新公使來ス

廿九日晴此夕大副使及外務大輔ヘールト劇場ヲ觀ル招ニ應スルナリ

卅日晴雨昨夕ヨリ今曉ニ徹ス無記事

三月朔日晴此夕六字各國公使ヲ招キ盛宴ヲ開ク其宴盤饗式ノ整備セルヲ以テ衆皆歡ヲ盡シテ散ス主客合セテ二十三人

二日晴近日デロング氏歸朝ノ告アルヲ以テ其夫婦等ヲ招ヒテ夕讌ヲ開ク大副使ヨリ其婦ニ髮釵ノ具ヲ贈ツテ贐トナス此夜大雷風雨

三日晴肥田阿部等費拉地費府ヨリ歸來ス

四日晴此夜費府ヨリノ招待人「ゼネラル」「ペントル」及其三人ヲ招キテ理事官待遇ノ謝宴ヲ開ク大使疾ヲ以テ不與

五日晴無記事

六日晴無記事

七日晴無記事

八日雨午後十二字半ヨリ大副使書記官二人田邊鹽田ブルツクス國務省ニ抵リ應接アリ二字歸館ス

二五

三月十五日（四月二十二日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

近況報告ノ件

三月十六日出帆のジヤパン號え出す

第十三號大使書翰案

例文

一本月四日卿輔兩公橫濱應接所へ御出張橫濱港長幷に壹朱銀貳朱金納稅の義御談判有之

一港長の義は風波天災を除くの外碇泊船港長の指示に依て生る損失は政府にて御引受可相成に御決定規則の義は縣令各國領事共協議可致筈に候事

一壹朱銀の義は三十日の猶豫不足に付四ケ月又は六十日の猶豫甲立候處御聞屆不相成候へとも是迄各公使右議論に係り人民に布告不致罷在候處已に期限相過甚迷惑の趣段々懇願致候に付再三十日の猶豫可相與に御決議別紙の通御書翰被相達候事

一瓦斯燈一件も過日御引合相成候處ブランド歸國中孛國會社の方相濟へ候に付最早同人於ても議論無之候間日本會社の仕法書一覽の上返答可致申出候事

一京都府博覽會に付楠本少丞伊東少記遠藤權大錄出張被命本日出立致候事

一昨（ママ）十三日文部省え　行幸に付諸官省賜休暇同省展覽會當月中開局の由日々見物蟻聚致候趣に候事

一神祇省被廢（教カ）兵部省被置候旨昨十四日廻にて被仰出候事

一各國公使等より大使御出に付條約改定期限差延の書翰本國政府にて承知の旨其外共返簡（註　事項三參照）寫四通

一柳原大丞鄭少記穎川大錄末次繁雄去る七日淸國え出帆相成候事

一明年澳地利博覽會え御國よりも天造人作の諸物品被差出候に付右產物取調の爲博覽會事務局より國中諸州え役員派出相成候事

右の條々申進候也

壬申三月十五日

註一、右文書ハ發受者ノ記載ナキモ假ニ第十二號公信ノ發受者ヲ見出ニ書セリ

二、右文書ト同便ニテ送致サレタルモノノ「入記」存スルニヨリ左ニ記ス

三月十六日出帆御用信　入記

一御用狀　壹

一壹朱銀二朱金收稅方云々〃　一

一輔より各公使えの書簡寫　一綴

一各國公使より大使御出に付條約改定其外共返書四葉　壹封

一大使え正院より新聞紙入　一

一長與專齋え同姓貫一より　一

一林董え同一等軍醫正より　一

一東久世明公え宮本經吉より　一

一安藤大錄え同留守宅より　一

一富田租稅權大屬え石川政國より　一

一岩倉右大臣殿え同正三位具慶殿より　一

一米國旭小太郎え富小路敬直より　一

一岩倉具綱え大原重實より　一

一何禮之え平井希昌より　一

一福地源一郎え當省庶務課より　一

一渡邊少記　田邊少丞え當省より　一

二六

三月二十日（四月二十七日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

大久保、伊藤兩副使ノ歸朝ノ用向不明ナルヲ以テ其ノ到着ヲ待居ル旨等報告ノ件

第十四號便英國郵船フワダ號ニ附ス

一翰致拜啓候先以

聖上倍御機嫌能被遊　臨御次ニ政府始本省一同トモ無別儀奉職罷在申候間可被成御安慮候

大使閣下貴下御一行中ニモ愈御清榮御巡廻ノ御事ト珍重存候此節ハ何レ迄御巡廻ニ候哉御用信モ二號便迄到來而已ニテ御近況モ承知不致千萬御後信相待居申候過日電報ニテ大久保伊藤兩氏歸　朝ノ御報有之候處何等ノ御用筋ニ候哉副使御歸朝ト申候テハ不容易ノ御事件カト日夜着港ヲ企望罷在申候

一此度宮城縣管下ニ於テ邪教開講ノ企致候者有之未タ結局ノ處分報知無之因テ先ツ同縣ヨリノ先屆書類寫差進申候間右ニテ御承知可被成候

一昨十九日志賀尾崎兩權中錄中錄ニ昇進二橋小林兩少錄權中錄ニ昇進藤川憲是迄十三等出仕ノ處權少錄ニ拜任致候間爲御承知申進候

二七

三月二十八日（五月五日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

大久保、伊藤兩副使等ノ安着等報告ノ件

壬申三月廿八日達ス

右ノ外今便ハ別ニ可申入御用筋無之候得共便船ニ付　御國內ノ御靜謐御報知致度如此候也

壬申三月廿日

外務大少丞記

田邊少丞殿

渡邊少記殿

註「十四號便入記」存スルニヨリ左ニ記ス

十四號便入記

一御用狀幷宮城縣屆書　二
一鹽田行　一
一田邊安藤行　一
一安藤行　一
一小松行　一
一吉雄辰太郎行　一
一津田梅子行　一

例文略之

一本月廿四日大久保伊藤兩氏初小松薰盛小原令之助外一行とも安着第三號御書簡致披見候大使其都府御着後大統領御謁見其外御申越の件々逐一致承知候今便は已に郵船出帆の期に臨差急候に付不能詳答いつれ後便縷々可申進候

一當方より差立候御用狀第三號は御落手相成候へとも其餘は今以て相達不申趣小松氏よりも段々談話有之右第一第二は英郵船にて差出候に付定て最早鮫島方より御屆致候義と存候其外御用狀は米佛英郵船出帆の都度々々必す差立候事にて已に十五號迄に相及候程の義に有之候間追々御收掌可相成候へとも自然途中に躊躇致居候哉も難測猶鮫島へも其段申遣候間貴方よりも同人方へ御掛合相成其筋御探索可被下候

一英國代理公使アダムス此度獨逸在留一等書記官被命近々歸國候に付內謁見の義願出乃ち來る四月八日第一字御治定相成候事

一獨逸公使幷に蘭公使去る廿七日橫濱出帆にて尼州名古屋邊陶器七實製方爲一覽罷越候事

一魯國新公使ヒュツオフ來る彼五月十五日頃には到着致候趣電報有之候事

一過日十四號便にて申入候宮城縣にて邪教開講の企致候壹件書類の內澤邊數馬口書取落有之此度正院より相廻候に付乃ち入御一覽候事

右大久保已下歸　朝の御報知且近況申進候迄如此候也

月　日

教部省被置候義に付ては先般別紙の通御內問有之當省にては實際不可行論に可有之不都合の旨申立置候處其後突然御一定相成候にや御發表以來其章程は未た不被仰出候得共貴境にては教法論も屬可有之候間內々右御下問の節の書類御廻し置候也

註　右文書ニハ發受者ノ記載ナキモ「第三號御書簡」「第三號」「第一第二」「第十四號」ハ夫々一九、一二附記三、同附記一、同附記二、二六ナルニ付外務大丞等ヨリ田邊一等書記官等宛ト認メラル

二八

三月二十九日（五月六日）　大使隨行田邊一等書記官等（米國ニテ）ヨリ外務大丞等宛

五次ノ公信到着及近況報告ノ件

附屬書　自三月九日　至同月二十三日　略日記

第五號皇三月廿九日　米國華盛頓
洋五月六日

第一號辛未十一月廿七日附第二號辛未十二月五日附第四號
辛未十二月廿日附第五號辛未十二月廿六日附第十號壬申二
月十五日附（同月同日附正院公信には第十一號と有之右は外務省發信の第一次相缺け候哉又は兩樣の內何れ歟書損御座候哉）都合五次の公信當三月廿日東西より同時當府到着一々披見致候先以
聖上益御機嫌克臨御被爲在恭悅至極奉存候卿輔公御初御一同彌御精勵御奉職遙祝此事に御座候隨て此方大副使以下一同無異御安意被下度候

第一號中
一大嘗會豐明節御大典幷橫須賀行幸海軍
上覽の義御申越承知いたし候
一歐洲廻し荷物佛郵船ゴツタヘリ號御積込の積
一澳地利公使昇進に付參　朝
一外國人訴訟取扱の爲東京運上所え司法省官員出張の儀
一舊藩債御處置振
一大使御出張中本省御用懸り役々名前
右何も承知大使副使え申上候

第二號中
一澳地利國本條約交換相濟且御親證の奉勅書爾後外務卿名前に相成候旨
一本省中日記課相立懸り人員被命候儀
一米輸出に付各國公使え書柬寫其外云々
一兵庫地所の儀に付英公使との往復寫幷榎本釜二郎石炭一條に付同人と往復寫其外云々
一長崎縣異宗徒一條
右何れも承知大副使え申上候異宗徒一條は第三號中御申越にて爾時御報申進置候石炭の儀は鮫島辨務使方え必然御申遣相成候事とは存候得共別段御申越無之に付此方よりも寫相廻し置可申存候將又第一號公信郵船の間に合兼候よしに付御心配候趣御申越御配慮忝存候尤此方にても一二四五四次の公信漸く此程東方より到着候位の儀に御座候間格別御心配不及候
シヤツパンヘラルト中條約改正に付議論の條御譯書御差越大副使にも入御覽候今般改正の條約も多分右議論の體裁に可相成と存候
右何も承知大使副使え申上候

第四號中
一大使初桑港到着候電信長崎縣相達し去辛未十二月八日（十八日カ）御承知相成夫々御報告の旨
一田邊太一以下三名位階昇進に付式部寮より御達しの位記御差越夫々拜受いたし候
一舊藩債御處置振猶御申越の趣
一朝鮮國御處置振
一森山茂以下數人轉任の事
一深堀一條
右何れも承知大副使え申立候

第五號中
一澳地利博覽會布告文譯
一深堀一條彌以落着右に付長崎刊行のガセット訛傳の廉御糺可相成旨をも承知いたし候邪蘇宗徒御處置振に付ては此方にも種々の風說有之自然條約改正の談判にも差響可申候と使節初心配被致候處彌以右樣の御處置御座候へは聊內煩無之彼方の議論をも說破可致根據出來一安心に御座候
一橫須賀　行幸の砌澳人尊影を奉寫候儀云々
一清國條約に付云々
右何れも承知大副使え申上候

第十號中
一ウリヤム到着候儀
一使節一行桑港着已來新聞抄傳の義
一鄭（ママ）大錄以下轉任（ママ）
一先便申進置候御用紙類御差廻し候趣
右承知大副使申上候

第三號第七號兩次の分は到着候節夫々御報申進置候只今にては未到着無之分は六八九三次の書信と被相考候
一此方條約に付談判の模樣に先便第四號公信中申進候通條約草案差出置候迄にて今以談判も無之
尤アラバマ一條に付當國務尙書にも格別多事の樣子御座候右に付使節には海軍學校其他諸官廳等見物に消光被致候而已に御座候右は別紙略日記及新聞紙にて御承知被下度候也
右前數次の御報且近況申進度如此御座候委曲卿輔公え御申立被下度候以上

壬申三月廿九日

渡邊洪基

田邊太一

外務丞記御中

尙以出立の節持越候東京寫眞岡右は辨務館附屬に是非一部有之可然ものと存候間延遼館御置附同樣の裝潢に御申付兩辨務館え御差遣り被下度存候也

吉田大藏少輔當地相越候儀別段御申越無之右は正院より御達御座候事には候得共本省よりも御申越有之可然哉と被存候如何

註　右文書ハ三四ノ文意ニヨリ五月三日前ニ到着セルモノト認メラル尙三四註參照

（附屬書）

三月九日晴風烈此日黑奴脫役ノ期日ニ當ルヲ以テ黑奴隊各旗旄ヲ竪テ銃劍ヲ擁シ市街ヲ巡行旗皆リンコルン氏ノ肖像ヲ模畫セリ黑女子數百車ヲ馳セ馬ヲ趁テ相共ニ大頭領殿ニ集ル殿前祝砲百發ヲ擊轟ス今年乃チ其十回期ナリト

十日晴風烈無記事

十一日陰此夜「マソニツク」場ニ陸軍踊舞會アリ使節事故アルヲ以テ辭ス

十二日晴此日正院外務省行ノ公信ヲ緘ス他無記事

十三日天陰朝第八字使節一行盡ク（廿九人其餘ハ盡ク歐洲ニ派出ス）招ニ應シテ「マヨル」氏ト共ニ府ノ海軍局ニ抵リ海軍總督ニ接シテ直ニタラプーサ號小汽艦ニ乘ス使節入局ノ時海兵樂隊奏樂シ祝砲十五門ヲ發ス艦發輪シテ行ク十八里ポツマツク河岸「マウント、ヴエルノン」ニ投錨衆小火艇ニ乘シテ上陸數十步華盛頓ノ墓ニ詣ス墓ハ磚瓦ヲ以テ之ヲ築ク鐵柵門アリ戶內ニ二棺アリ土上ニ安ズ棺共ニ白大理石ヲ以テ製作セル者右棺ハ華氏左ハ其夫人二棺上ニ其姓名ヲ銘ス門ノ上ニ額アリテ（華氏遺骸存于此中）ト書セリ墓ヲ去ツテ登ル數十步華氏ノ舊宅ニ抵ル古雅質樸然レトモ瓦磚ヲ以テ造立セル者ニシテ二層樓十數室アリ當時ノ大家室內華氏ノ古衣舊帽ヲ掛ケタリ又其易席室及佛將ラフエツト氏ノ同居房アリ午後四字半歸局向晩入館此日同行スル者兵部卿大藏大丞議院次官大藏卿ハ辭セリ

十四日美晴風穩無記事

十五日晴風劇午後條約集議アリ

十六日美晴風嫩ナリ午後大副使以下第七字「ゼネラルマヨル」氏ト招ニ應シテ府ノ司天臺ニ抵ル臺ハ「ナショナルヲブセルヴエトリー」ト號シテポトマツク河上ニアリ築屋壯大ナラズト雖トモ雅麗可掬臺督サンヅ氏衆ヲ誘フテ測樓ニ登ル三層上層ニ千里鏡ヲ安ズ登降自在樓屋モ亦一手力ヲ鏡ト轉廻スベシ初メニ「ジュピトル」ヲ窺フ大月ノ如ク次ニ「マルジュル」ヲ看ル肉眼一星ヲ做シ鏡裏二分ス此夜月色殊美月ヲ窺フニ及ンテ月體溢レテ鏡ニ入ラズ體中ヲ全覽スルニハ鏡ヲ廻轉セサレバ不能全盡其中淡黑ノ斑點歷々山海ノ形狀ヲ顯出セリ其他測天定時ノ器械盡ク揭ルニ暇アラズ千里鏡ハ普國ヨリ輸入セル者價一萬八千元ナリトゾ夜九字半歸館

十七日快晴午前十一字「ゼネラルマヨル」ト招ニ應シテ府ノ大藏省ニ抵ル卿使節ニ接シ大丞ヲシテ衆ヲ誘引セシム租稅紙幣出納諸局ヲ巡覽ス局中執事者男女相半セリ滿局繁劇ノ際各其分ニ注目シテ寂トシテ聲ナク曾テ雜談或ハ討論等ノ類ヲ見ズ元來府ノ築立廣大ナル事ハ議事院ノ外比肩スル者無シ「グラナイト」石（本邦ノ御影石ト同シ）ヲ組立タル四層樓上層ハ造紙幣局ニシテ幣板鐫刻ヨリ幣紙洗濡次ニ印摺裁割點印整頓ニ至ル迄汽機ヲ以テ動作之ニ與ル男女八百餘一紙幣ノ製數十回ノ勞ヲ取ル唯幣紙ヲ製セサルノミ午後二字歸館

十八日快晴午前十一字副使等招ニ應シテ陸軍附屬傳信局ニ抵ル

十九日晴炎熱寒暑計八十七度今夕使節兵部卿ノ誘ヲ以テ府下ニ同車遊覽ス

廿日晴使節「マヨル」ト海軍局ニ抵リ船槽ヲ見ル通常記スル足ルナシ

廿一日陰無記事

廿二日晴無記事

廿三日晴午前十一字「マヨル」大副使以下ヲ誘フテ府ノ驛遞寮ニ抵ル寮ノ壯大華府公築屋中屈指ノ一ニシテ死（デッドレツトルヲフヒス）信局ニ落ル封信一日凡萬餘ト云フ局中死信ヲ集メテ開緘其記者ノ名ヲ檢シ可得復者ハ之ヲ復シシカラザル者ハ之ヲ裂キテ製紙所ニ委ヌ名字不分明ニシテ信中事件緊要ナル者ハ收メテ他日ノ來者ヲ待ツ等皆課ヲ分チテ男女各地書ヲ按シ國經ヲ探リテ細精盡サヽルナシ其他信書ヲ派出スル等皆局ヲ分チテ之ヲ理ス使節府中ノ規則書ヲ得タリ寮ヲ出テ又勸農寮ニ趣キ寮中一覽百穀鳥獸介蟲ノ種類乾枯セル者集メテ一樓上ニアリ又一奇觀ナリ下樓シテ寮附屬ノ花屋ヲ觀ル玻璃ヲ以テ屋壁ヲ作ル花木芬鬱風雪ノ節ハ

汽管以テ暖氣ヲ貯テ萎菲ヲ防キ狂花ヲ栽スル者ナリ二字歸館ス

二九

四月十二日（五月十八日）　大使隨行田邊一等書記官等（米國ニテ）ヨリ　外務大丞等宛

凶徒亂暴一件等報知アリ度旨依賴ノ件

壬申六月六日來達

第五月（マヽ）一日太平海郵船便を期し一書致啓上候

聖上益御安泰　臨御被爲在恐悦至極奉存候本省卿輔公御始各位愈御精勵御奉職の段重疊の御義と存候當地大副使以下無異奉務此段御安慮可被下候先便御通便申候以來相變候義無之且談判等も一切無之候愚案には本朝よりの御沙汰確然有之候までは依然打過候義と被存候

先達て鞏下大火の旨桑港よりの傳信にて承知仕候

聖上御機嫌にも御障無之段は雀躍の至本省にも御障り無之義と是又安堵仕候其砌大輔閣下御邸宅は御燒失との事右の樣子にて築地邊少輔始大少丞各位の御邸宅にも御障りも無之哉と懸念夫々え宜布御見舞申入候去月中龍動より

の傳信にて凶徒十名

聖上を襲奉らんと謀候の凶聞を得て一同驚歎仕候處午後井上大藏大輔より吉田大藏少輔幷森辨務使え當傳信にて右の無學の僧徒十名防兵を侵し五人死傷其他彼是火事は全く過失の旨報知にて漸く安堵今般桑港よりの報告に僧徒十人

聖上に拜謁を願ひたり云々と右等定て唯今當國に相廻居候御書通にて分明承知可仕と渴望致居候へ共右等の義は公然と傳信にて其節御報知相成度奉存候

邪蘇教寬恕の旨龍動幷桑港傳信にての新聞にて撿閱其事情も當便にて相分候事と存候是又前同斷の義申上置度候右得御意度如此に御座候以上

壬申四月十二日

渡邊洪基（花押）

田邊太一（花押）

外務大少丞御中

註　三八ニ「四月十二日付無號ノ御用信」トアルハ右文書ト推測サレ六月六日ニ到着セルモノト認メラル

三〇

四月十四日（五月二十日）　外務大丞等ヨリ　大使隨行田邊一等書記官等宛

下ノ關事件償金問題其ノ後ノ經過等報告ノ件

十七號四月十四日達ス　四月十三日草

大使への書簡案來る十五日佛郵船（コタヘリ號）

一例文略之

一下關償金の義に付四ケ國公使へ往復書簡寫先便何號御廻申置候處夫々返翰（註　軍艦八參照）到來候付尙又御心得の爲御廻申候事

一本月四日より新潟縣下土民騷擾致し候次第昨夜同縣より屆出候尤も其原因は未た確と相分り不申委曲の義は後便に可申進候へとも先別紙寫入御一覽候事

一皇太后昨（マヽ）十二日赤坂離宮へ元紀州邸御着輿相成候尤十一日品川迄

主上皇后とも御出迎として　行幸被爲在當日より十五日迄奏任以上は離宮幷宮內省へ恐悦申上判任は省にて申上候事に御座候

一御一新の際新潟に於て獨逸伊太利國人官軍の爲掠奪せられ候物品償の義先年よりの疑案に有之候處此頃別紙伺書の通御評決相成損失の物數相分り候は丶御償戻可被下伺濟に候に付是又御心得迄に寫差進候事

一支那條約の義に付第九號便を以て柳原大丞携行書簡寫差進置候處當節猶又御心附の廉有之過日別紙寫（註　一二〇ノ指スカ）の通被申遣候事

一條約改訂の義彌歐羅巴於て協議調印可相成義御決定米國よりも其全權可被差出旨去る九日（註　七七參照）電線を以て森氏迄御通信相成候定て疾に御承知の義と存候同日より正院にて日々會議大輔公には洋行御內意も有之定て不日御協定可相成就ては其地に於て各位方一段御心配の義と存候猶此上とも爲國家御勵精所祈候

右條々申進候也

壬申四月十四日

外務大少丞

田邊

渡邊　兩氏

（欄外註記）此一條削去

平井少記任大記

（欄外註記）

魯新公使到着の事追加

註一、外務大丞等ヨリ田邊一等書記官等宛書翰ノ第十六號詳ナラス

二、本號文書ハ草案ナルヲ以テ實際ニハ欄外註記ノ如ク改メタル上達シタルモノカ

三、「第十七號信目錄」存スルニヨリ左ニ記ス

第十七號信目錄

一御用狀　一通
一下ノ關償金三公使復簡寫
一新潟官軍獨伊兩國品物を掠奪の義正院伺書
一支那條約の義に付柳原へ達簡
一新潟驛擾の屆書
一池田へ石橋より　一封
一大原より　一封

三一　四月十八日（五月二十四日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

大使隨行小松二等書記官ノ再渡米等報告ノ件

大使えの御用狀案米國ハブリツキ號四月十九日出帆
十八號
例文

一明十九日郵船にて小松靱盛出立相成候間當地一切模樣同人より御聞取可有之候
一下關償金一件書去る十七號佛國郵船便之節米公使答簡(註一九二參照)未た不差出候に付差進不申候處此頃差越候に付入貴覽候事
一小松へ御托の書籍其外品々別紙目錄書の通買物代價附差進候間御査收可有之事
一箱館魯國天主堂にて說法聽聞致居候ものを開拓使にて捕縛候風聞有之同使へ問合候處別紙の通りに有之定て其地にて種々醜聞も可有之に付不取敢御心得迄差進候委曲の義は後便に可申進候

壬申四月十八日

外務大少丞記

田邊少丞殿
渡邊少記殿

追て條約改訂調印の義に付別紙(註七八參照)御書簡寫の通り今日御評決各國公使へ御達相成候間此段御領知可有之候事
森少辨務使今般中辨務使へ被推任候右御委任狀等は小松濟治え相托置候間着の上御承知可被成候事
獨逸公使明十九日出帆歸國に付留守中蘭公使事務取扱候別紙往復書簡にて是又御心得可有之事

註「第十八號入記」存スルニヨリ左ニ記ス

第十八號入記

一御用狀　一通
一米國公使下關一件の答簡寫　一枚
一何へ平井より　一封
一安藤へ鹽坪より　一封
一渡邊へ花房より　一封
一品物代價付　一綴
一條約改訂に付各國公使への達書寫
一正院より　一封
一同新聞紙弁に左院より新聞紙壹括つゝ
一木戸參議宿元より金子入　一封
一大久保より杉浦へ　壹封外に貳通添

三二　四月三十五日（假）（五月三十一日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

耶蘇教徒問題等報告ノ件

十九號大使への御書信案四月廿九日出帆佛ハアヒへ號船
第七號信の御答として三月十二日出の御書狀四月十九日到着致披見候先以

聖上益御機健克被爲在臨御の段恭賀の至に候大使御初御一行御安泰御奉職珍重存候本省卿輔初無異御休念可被成候
一外山名和高木等の義一々致承知候
一耶蘇徒一件に付其地物議騷然の趣御心配察入候當方にても每度困却致候過便一寸申進候仙臺表弁に開拓使一件詳細取調書別紙の通に候間御一覽可被成候尤も右一件御所置向當今評議中に付後便可申進候
一東京寫眞圖辨務使館にて被備置度旨承知如御申越裝飾相加へ後便可差送候
一條約改訂調印云々の義（此書簡寫十八號信にあり）に付各公使より差出候答翰寫（註七九參照）御心得の爲差進候事
一橫濱獨逸領事館家租の義往年より相滯已に度々御掛合相成候は各位御承知の義に有之然る處今般公使フオンブランドより右は建造原價八千五百弗にて買受度申立候に付讓渡し相成右にて此一事は相纏候其結局別紙〇印書簡寫にて御承知可被成尤同國商人地租の分は未た相纏り不申候事
一獨逸公使當春より條約の通公簡は獨逸文を可用旨申立候へとも未た御國於て同國語學成熟の者無之に付矢張是迄

の通譯文相添候樣相成候條別紙往復書簡にて御含置可有之就ては右語學引立方等文部省へも打合置候

一英代理公使アダムス去る十九日出帆歸國致候に付後任として同國一等書史ワットソン公使不在中代理公使兼務にて渡來致候事

一先般小松宰盛より

天皇御寫眞數枚大使相戴かれ度旨承り宮内省へも掛合置候へとも過日同人出立の間に合不申尤も御出來次第當省迄御下け可相成筈に付其節は早々差送り可申事

一外國船乘組心得書今般上梓各港へも相達候に付御承知迄に一部差進候事

一先般大久保伊藤兩氏歸朝の上被申立候歐洲於て條約調印の見込種々議論の末去る九日電信を以て御通達相成候義には候へとも本省にては矢張前議の通大使歸朝の上右議に相渉り候方可然旨建言および徹底其見込にて種々議論有之候末御都合不得已義に付過十八號信にて差進候書簡寫の通大使へ談判の都合により調印の權御附與相成候段各國公使へ相達して後卿には辭職の表被差出候へとも不被及御沙汰旨被仰出就ては今日別紙△印（註　八〇ヲ指スカ）書面の廉々御評

決伺書被差出候義に有之尤も條約改訂の義は兼て卿よりスミスにも相謀り取調被置候箇條有之右を以て逐に討論可及圖に候へとも此後如何相運ひ可申哉先此段御心得迄に申進置候事

（貼紙一）
此處分ハ速ナルヲ要スルナレハ明後廿七日朝正院ノ決議ヲ書面ニテ伺フヘシ

（貼紙二）
寺嶋大辨使云加フヘシ

註一、右文書日附竝ニ發受者ノ記載ナキモ日附ハ假ニ「別紙△印」ノ伺書ノ日附ヲ採リ發受者ハ本書翰ニ謂フ「第七號信」ハ**一五**ニシテ「三月十二日出の御書狀」ハ**二四**ト推測サレルニ付外務大丞等ヨリ田邊一等書記官等宛ト認メラル

二、右文書貼紙**一**ニ關シテハ**三七**ヲ又同**二**ニ關シテハ**三三**參照

三三

五月三日（六月八日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

大久保、伊藤兩副使及英國駐劄寺島大辨務使等

ノ出發等報告ノ件

第二十號大使ヘノ書簡案（本月六日出帆ノ英郵船マタラス號ヘ附ス）

例文

一去ル十九號信ニテ申進候通リ寺島大輔殿英國在留大辨務使ニ被任來ル本月十七日出帆ノ米國郵船アメリカ號ニテ發程可相成御治定尤大久保伊藤兩副使大原書記官モ同船ニテ出立ノ都合ニ有之候間此段御承知可有之候事

一大辨務使隨行ハ外務少記岡田好樹外務少記鈴木金藏外務大錄近藤眞鋤三人エ被　仰付候事

一今三日英新任代理公使ワットソン内謁見式之儀ニ付異論有之去四月卅日於英公使館卿對食ノ節別紙對話書寫御心得ノ爲メ差進候尤今三日同人内謁見可被　仰付ノ處同人所勞ノ趣斷申出候事

（欄外註記）

（貼紙）

一魯國公使ヒュツオフ内謁ノ儀已ニ御決定相成居候得共同人禮服未タ到着不致候由ニ付御日限ハ不被　仰出候事

一來ル八日米國軍艦三等水師提督ゼンケンス同國代理公使セハルト同伴ニテ内謁見被　仰付候旨御治定相成候事

一十等出仕兼松直稠右ハ佛語モ可也出來候者ニ付今般中錄

ニ被任佛國在勤中辨務使鮫島ノ隨從被申付來ル十七日ノ郵船ニテ出立爲致候事

一品川ステーションヨリ横濱ノ間汽車運轉來七日ヨリ假リニ開業可相成旨本日御達ニ有之候事

右ノ外御國内形勢本省事務等ハ不日大辨務使其地到着ノ上御聞取ノ事ト今便相略不申入候也

壬申五月三日

大少承

田邊少承殿

渡邊少記殿

（欄外註記）
今三日少辨務使鮫島尚信中辨務使ニ被任正五位ニ被敍佛國交際事務及在留國民管轄委任被　仰付候旨被達候事

（貼紙）
今三日英新任代理公使ワットソン竝貴族フラントフヲルト内謁見被仰出候處右謁見式之義ニ付異論有之去四月卅日於同公使館卿殿會食之節別紙寫之通應答有之候末今日ニ至リ臨期所勞ヲ稱シ斷ニ相成候元來内謁見ノ義ニ付差テ細禮ヲ爭場所ニモ有之間敷處例ノ輸ニモ可有之歟右應答中本國エ可申遣トノ事有之候ニ付爲御心得申入候事

註　右文書ハ草案ナルヲ以テ實際ニハ欄外註記ノ箇條ヲ加

ヘ又謁見一件ハ貼紙ノ如ク改書サレテ達セラレシモノカ

三四

五月十四日
（六月十九日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

大阪、中國及西國筋御巡幸ノ旨等報告ノ件

二十一號大使御用信

本月五日（マヽ）附二十號御用信ヲ以テ申入候通リ寺島大辨務使一行幷大久保伊藤兩副使等彌來ル十七日ヲ以テ米國郵船アメリカ號ヘ乘込出帆ニ付一翰致啓達候先以

聖上倍御機嫌克被遊　臨御候間御休意有之度其御地大使閣下始貴下ニモ愈御淸榮御奉職ノ儀ト珍重存候

一過ル三月廿九日附第五號ノ御信書相達致披見候儀ハ二十號信ニテ申入置候通リ其節御申越ノ件々一々致承知候御書中二月十五日附十號ノ發信正院ノ信書ト番號相違ノ趣御申越有之候得共右ハ順次差贈リ候儀ニ付本省ノ分ニハ相違ノ儀無之候且吉田大藏少輔御地ヱ出帆ノ儀不及御通達ハ全其節御內用向相奉シ候處ヨリ自然不貫轍ニ申進セサル儀ニ付左樣御承知有之度候

一聖上御軍艦ニテ本月廿三日東京御揚帆大阪幷中國西國筋御巡幸被　仰出候右日數者三十日餘多分六月中ニハ還幸トノ趣ニ有之候

一過ル十三日楠本宮本花房三名大丞ニ石橋子安平井三名少丞ニ大原出仕六等出仕昇進被　仰付候

一英國公使ワットソン謁見式ノ儀ニ付異論有之趣ハ既ニ二十號便ニテ申入置候通リノ處其後米公使セハルトヨリモ同樣ノ義申立佛魯代理公使同意ノ由云云申陳候付去八日ノ內謁見ハ御不例ヲ以御斷相成候處同七日尙同公使ト別紙寫ノ通リ應接ノ末同九日米國水師提督公使セハルト同伴ニテ內謁見相濟猶又明十五日ニハ十字魯國公使ヒユツオフ午後二字英公使ワットソン內謁相願御聞屆ニ相成申候　右魯公使ハ立御ノ儀强テ申タルニハナク英公使ハ米公使ノ事ヲ聞是迄ノ事ハ不申立所勞本快ノ旨ヲ以內謁相願候後御許容ニ相成候

一魯國第三王子近日ノ內來着可相成模樣ニ付先年英國王子渡來ノ先規ヲ以テ內調中ニ有之候

一箱館表ニテ宮城縣士族異宗ニ立入候一件ニ付開拓使ヨリ申立書寫幷右ニ付本省見込申立書府縣ヱ正院ヨリ內達書トモ別紙ヲ以テ及御廻候間右ニテ委曲御承知有之度候

一先便御申越辨務使館備ヱ寫眞帖ノ義米國ノ分ハ不遠內出來可相成尙英佛ノ分ハ是ヨリ申付候事ニ候此段御含置迄申進候

右ノ條々申入候書外委曲ハ大辨務使兩副使等ヨリ御聞取有之度候也

壬申五月十四日

外務大少丞

田邊少丞殿

渡邊少記殿

尙以各國在留辨務使御手當等其地ニテ實地詮議ノ上御通達有之樣別紙卿公ヨリ大使ヱ御通達相成申候ニ付御承知可有之候也

一各國公使交代等ノ節其國帝王ノ親書捧呈ノ爲メ參朝ノ禮式各國ノ振合ヶ條書ヲ以テ通達相成候事

註　右文書ニ三月廿九日附第五號ノ御信書受領ノ旨ヲ二十號信ニテ申入タル旨記載シアルモ三三ニハ右記事ナシ或ハ三三ノ「例文」中ニ右ノ旨ヲ認メタルモノカ

三五

五月十七日
（六月二十一日）　岩倉大使等（米國ニテ）ヨリ太政官正院宛

大使一行「ナイヤガラ」瀑布見物等報告ノ件

附記　自四月二十九日　至五月二十九日　略日記

明治五年壬申五月十七日　從話聖東

以書狀致啓上候

聖上倍御機嫌能被爲有　御臨御恭悅至極奉存候然は我使節一行今度米國政府の招待に應し去る四日の夕より當府を發しナイアガラの瀑布を初めとして陸軍學校製銃所其餘近郊の諸名勝を巡覽致し遂に波士敦の大樂會に赴候此際諸所の待遇不一方今朝當府へ歸着仕候日記新聞の抄錄等差進可申候處歸着早々郵便は今夕〆切と申事故其時間無之不得止後便迄遷延致候

一書記官小松濟治儀兩三日前桑港え到着の趣以電信申來候間四五日中には當府へ來着可致是より前條約調印の全權委任狀當國へ御送有之度を建言爲致候爲めに書記官田邊太一安藤太郎の兩人を歸國爲致此程桑港迄相越候處恰是小松濟治來着に付右の兩人は桑港に相止り我曹再應の下

命を相待候心得なりと申越候近日濟治來着の上委細の情實を承り候上にて右の兩人え下令可致詳細の報は公私とも後便に讓候右可得御意早々如此候也

山口尙芳
木戸孝允
岩倉具視

正院御中

今便は時間切迫匆々の際に此公書を裁候間一行の宅狀家信は其間に合不申何れも無事に罷在候

議院を閉候後米國々務尙書は病氣保養の爲めに暫時の間其鄕里に引取留守中故政府より此度遊歷の案內をなし候事に候

註一、右文書到着ノ日附詳ナラス
二、左ノ略日記到着ノ次第明ラカナラサルヲ以テ便宜茲ニ附記ス

（附記）

（朱書）「外務省行」

特命全權大使日記撮要

明治第五壬申四月廿九日（千八百七十二年第六月四日火曜日）當日朝雨午後晴天氣冷濕是ヨリ先キ田邊一等書記官安藤四等書記官特旨ヲ奉シ今夕第九字新約克ヲ廻リテ歸朝ノ爲發軔ス寒暖計午後一字七十九度

盡日（第五日水曜日）昨夜冷甚今朝晴朗有風第一字七十四度今夜ナシヨナルシヱートルニ招カル日本人源次郎ノ輕業ナリ今朝田邊安藤新約克セントラルホテル着ノ傳信ヲ得タリ

五月朔日（第六月六日木曜日）晴爽風ナリ氣溫和ヲ覺フ朝第九字寒暖計七十四度今日第三字ヲ以テ太平海郵船便ニ公簡ヲ出スヘキヲ安藤田邊發足ナルヲ以テ別ニ出タサス當日午後第一字ヨリホトマツク江畔海陸軍及ヒコロン比亞郡ニ備ヘタル癲狂院ニ招カル第六字歸館

五月二日（第六月七日金曜日）無事略

三日（第八日土曜日）微陰炎蒸第一字八十五度第一字岩倉木戸山口三使國務卿幷フヰシユト會議鹽田福地陪之事數分時ニシテ了ル

四日（第九日日曜日）微陰炎熱昨ニ異ナラス合衆國政府ノ招キニ應シ陸軍將マヤ（接待掛ノ官）同娘同行三使及ヒ外數人夕第九字廿五分華聖東立場ヨリ紐約ニ赴キ鹽田福地ハ特旨アリテ暫時此行ニ後ル此夜甚雨

端午（十日月曜日）雨晴微涼ヲ覺フ第六字半ニユーセルシーノ車驛ニ達シ之ヨリ馬車ニ乘リ渡舟ニテホトソン江ヲ渡リ第七字新約克廣街シントニコラス館ニ投ス第十字ヨリ出車一統市中ヲ巡覽ス又第三字出車セントラルパークニ至リ第七字歸館又第八字劇場ニ招カレ第十一字歸館此日不甚炎時々雨降

六日（第十一日火曜）晴微涼第八字チヤンスウヱツヱルラ號火輪ニテ發帆第十二字ウヱストホイントエ着兵學頭コロネル、ロガル兵部尙書ベルナツフ氏使節及大將マヤヲ迎ヘテウヱストホイント館ニ投ス長野杉浦之ニ陪ス其他ハヲツゼル館ニ宿ス第五字半ヨリ第七字半迄兵學校ニテ生徒ノ銃隊繰煉ヲ閲ス凡テ六小隊此校ハ合衆國政府ノ兵學寮ニテ士官三百人ヲ容ルヘシ當時二百二十六人ト云フ此間兵學頭ノ館舍ニテ立食アリ此夜月色玲瓏山水畫ノ如ク涼風人ヲ爽ニス

七日（十二日水曜）晴昨ニ比スレハ稍熱ス朝第七字半生徒ノ教練ヲ見ル第十字ヨリ兵學校ノ檢査ヲ閲シ了リテ兵學寮ノ諸裝置ヲ巡覽アリ第十二字半ニシテ了ル三般酒ヲ饗ス第五字半ヨリ同所輕砲隊ノ教練アリ大砲六門此間北風忽チ起リ天俄カニ陰リ暴風迅雷咫尺不辨生徒依然トシテ術ヲ終ル第八字半破裂彈ノ實演アリ川ヲ隔テ火ヲ焚キ之ヲ的トス其距離千四百尺時々風起リ中スル者甚タ稀ナリ次テ烽火アリ樂隊樂ヲ奏ス第十字ニシテ畢ル

（欄外註記一）

八日（十三日木曜）晴涼第十字各大使ノ旅館ニ集リ大使以下兵學頭ニ暇ヲ告ケ校下ノ渡船場ヨリホドソン江ヲ渡リ第十一字ガリソン立場ニ至リテ半字ヲ過キコロンヒヤ號火輪車來ル之ニ乘テナイヤガラニ向フ此車ハ新約克セントラール鐵道會社ニ屬シ殊ニ此會社ヨリ使節ヲ饗センカ爲ニ配意シ車中別ニ華旗ト日旗ト入接セル者十一對ヲ懸リ此車ニテ鹽田福地ノ昨夜華聖東ヨリ來ルニ會ス森少辨務使大將ハンクス妻及ヒ娘來リ會ス夜第十一字四十分ナイヤカラ瀑布上旅館インテルナシヨナルホテルニ投ス此地涼氣甚タシク外套ヲ掩フヘシ新約克ヨリ四百六十里

九日（十四日金曜日）晴第十一字出車セネラルマヤ案內處々見物ス第四字半歸館第六字故合衆國大統領フイルモール氏使節ノ招ニ應シテ對食ス使節森少辨務使大將マヤ、岡士フルツクス福地鹽田列席ス同行ノ婦人モ列セリ○フヰルモール氏ハコモトール（水師提督ヘルリ）ヲ日本ヘ送リシ人ニテ日本ト初

メテ通信ヲ開ク事ヲ建論セシ人ナリ談唉數時ニシテ了ル
十日十五日土曜日 晴微溫朝第七字半前回ト同車ニテナイヤガラ」ヲ發シ第五字半センネクトデーニ至ル森辨務使ハンクス妻娘ハ直チニ波斯敦ニ至ルヘキヲ以テ暇ヲ告ケ我使節ハ北ニ折レ第七字サラトカニ達シクランドユニヲン館ニ投ス此處ハ有名ノ藥泉アリテ夏時ノ避暑地ナリ
十一日十六日日曜日 晴寒溫適度朝餐前各々旅館ヲ出テコンクレス、オートル（藥泉ノ名）ヲ飲ム直チニ旅館ノ前ニ在リ第十一字出車サラトカ湖ニ至ル湖亭ノ主人馬鈴薯ノ油揚（此處ノ名物）及ヒ三般酒ヲ饗ス此日大將マヤ病アリテ同行セス
十二日十七日月曜日 晴天氣溫ナリ朝第八字半サラトカヲ發シ波斯敦轍路ニ依リ「フートアクション」ニテ（ホストンヨリ十五六里）波斯敦ノ接待掛數名（新聞紙ヲ見ルヘシ）ニ案內ヲ受ケレウテルハウスニ館ス着スル時夕第八字森及ハンクス夫妻ニ會ス
十三日十八日火曜日 晴朝第十字出車接待掛案內市中ヲ巡覽ス第一字歸館第二字二十分出車天下太平樂府ニ至リ第四字奏樂始マリ第七字歸館第八字十分グローブ劇場ニ至リ第十字十五分歸館此日桑港ヨリ傳信來リ小松濟治本朝ヨリ至ル因テ田邊安藤桑港ニ滯在シ尙命ヲ俟ツト此日使節大將ハ

ンクス氏ニ逢フ
十四日十九日水曜日 晴第八字接待掛案內ニテ發車第八字ロンク、ウワルフ」ヨリ牧稅官リユツセル氏ノ招キニ應シハヲニング號徵貢船ニ乘リ港內ヲ巡覽シ船中ニテ酒菓ノ饗應アリ第十二字過歸館午後第二字半ヨリ出車再ヒ太平樂府ニ赴キ第七字歸館
十五日二十日木曜日 晴溫氣甚タシ寒暑針七十六度ヨリ九十五度ニ至ル朝第九時出車接待掛祖送ホストン、ヱント、アルバニー轍路ニ依リ第十二字スプリンクヒールド」ニ達ス市正區長參事及ヒ造兵局ノ官員迎ヘ携ヘテマサリート、ハウス旅館ニ入ル（此館ハ魯西亞公子アレキレスモ投憩セリ）小話ニシテ晝餐シ第一字出車造兵局ノ鍛冶場ヲ巡覽シ了リテ之ヨリ一里強細工場ニ至ル祝砲十五發其局內ヲ巡回ス次テ武庫ニ至リ巡回ス此造兵局ハ軍時ハ一日ニ一千挺ヲ製スヘシ且武庫ニ備フル者一百二十萬挺アリ了リテ士官及市員同道區長ホーワルドノ家ニ招カレ三般及ヒ菓子ヲ饗セラル此家ハ此市第一ノ富家ナリ第五字歸館晩餐ノ饗應アリ市正スプーネル演舌了リテ諸員使節ヲ送リ第七字發輙第十二字六分紐約シントニコラス館ニ着ス此日歐羅巴ヨリ廻ル鄕信アリ

達ス之ヲ分配ス
十六日二十一日金曜日 晴天氣甚タ暖ナリ無事夕第六字二十五分ワシントン立場發輙
十七日二十二日土曜日 晴第七字華聖東ニ達ス此兩三日前田邊安藤ヨリ暗號ノ傳信ヲ送ル蓋小松濟盛カ使命ノ趣旨ヲ約言スルナリ今夜國務卿フキシ避暑ノ爲當地ヲ去リ波斯敦ニ向フ
十八日　無事
十九日　同
二十日　同
廿一日　同
廿二日第廿七日木曜日 天氣適宜夕第四字八十度午後第三字小松濟盛自桑港着同時日本在留字漏士公使フオンブランド同英代理公使アータムス來着訪使節
廿三日二十七日（マヽ）金曜日 天氣甚溫寒暑鍼九十二度午十二字英代理公使アダムス來訪午後木戶副使字使ヲ訪フ
廿四日二十九日土曜日 晴溫氣同昨午前十字使節接英使アタームス午後十二字ヨリ接フオンブランド
廿五日第三十日日曜日 晴溫氣過昨午後第一字寒暑針九十四度夕第六字當館ニ於テ使節英使アータムス及ヒ字公使フオンブランド」ヲ饗ス夜第十字ニテ了ル之ニ列スル者福地源一
鹽田篤信小松濟盛是ナリ

（欄外註記二）
廿六日第七月一日月曜日 晴溫氣午後第一字寒暑針九十六度午後第二字フオンブランド氏訪大使今夜兩公使新約克エ發輙
廿七日第二日火曜日 晴昨新約克市中寒暑針百零四度當地今日九十九度桑港ヨリ傳信アリ云田邊安藤來金曜日ヲ以テ發シ來ル第十二日當地ニ着スベシト本日渡邊洪基願ニ依リ歸國ヲ被許但御用ノ儀アリテ來第八月便ヲ以テ發スヘキヲ命セラル
廿八日第三日水曜日 晴炎熱甚タシ寒暑針午後第一字百零一度昨日新約克ニ於テ暑ニ由テ死スル者五十四人當地ニテ六人アリ牛馬ノ類モ亦多シ病ヲ受クル者モ亦多シ本日午後第十二字肥田造船頭長野桂次郎ヒラテルヒヤニ發足ス
廿九日第四日木曜日 晴溫氣稍和セリ午後第一字九十度本日合衆國獨立ノ日ナルヲ以テ萬民業ヲ止メ歌樂ノ聲處々ニ聞ヘ今夜處々烽火アリ
（朱書）「地名人名等匆々ノ間其詳細ヲ盡ス能ハス新聞ニ參考ヲ伏シテ乞フ」
（欄外註記一朱書）「此日ハ生徒試業及第ノ日ナルヲ以テ其親族等旅館ニ充滿セリ」
三十日第三十日日曜日 晴溫氣過昨午後第一字寒暑針九十四度夕第

（朱書）「田邊安藤ニ桑港ヨリ再ヒ當地ニ歸ルヘキヲ電信ス」

三六

五月二十四日（六月二十九日）　大使隨行田邊一等書記官（桑港ニテ）ヨリ　外務大丞等宛

歸朝ノ途上小松二等書記官ト出會シ歸朝ヲ中止セル次第報告ノ件

壬申六月十九日夕着

以書狀致啓上候陳は小生義安藤大錄一同立歸り歸　朝被命桑港迄出張仕候處小松靏盛立戻り候に出會持參候書類檢閱同人口上をも承り候處立歸り可申立要件も無之奉命のケ條大凡了局の樣子御座候間其日發帆見合猶右次第を以後命相待候處話聖東府に立歸り可申旨再命電信御座候間其節預り來候諸書信類取纏め差進申候可然御配達可被下候

使節方は各府巡覽卽今は又候話聖東府に歸來條約談判に御取懸りの事と察居候

右申上度如此候可然卿輔公え被仰上可被下候也

五月廿四日

田邊太一

外務大少丞記御中

尙以本文見合せ候次第卽時可申上處旣にメール〆切の後に相成候間不能其儀先便御用狀と行違は疑慮可有之と恐入候宜御取成可被下候尤別に電信を以使節より見合候段は御申通可有之筈に御座候也

三七

五月二十五日（六月三十日）　外務大丞等ヨリ　大使隨行田邊一等書記官等宛

御巡幸ノ模樣等報告ノ件

壬申五月廿七日出帆佛郵船ニ托シ同廿五日差立

大使御用信

第二十二號

以書狀致啓上候然は

聖上益御機嫌克被遊　臨御恭悅奉存候大使御始御一行愈御安泰御奉職珍重存候陳者御內地卿始一同無異御放念可被成候

一第廿一號便申進候通

聖上御巡幸として去る廿三日朝第四字御發輦濱殿より端舟に被爲召品川海に於て龍驤艦え御乘移御都合能御出船被遊各國の內碇泊の軍艦より祝砲施行有之各國公使も御見送として濱殿迄罷出度旨申立候處拂曉の御出發にも有之御斷相成候右御巡幸筋は別紙にて申進候

一兼て申進置候箱館表於て召捕候宗徒の義差縺れ可申乎と苦慮いたし候處魯公使より公然たる談判は無之當方懇知の取扱の段貫徹いたし事穩便に相濟候依て正院よりも開拓使え右召捕候者は其使に於て差免し尙篤く敎誨を可加旨御沙汰相成候

一本月十八日午後第二字魯公使ビューツオフ同國水師提督フェートロスキー同伴內謁見被仰付其節公使の妻吹上御庭拜見として罷出候

一大阪造幣寮器械建增にて凡四五十日の間休業相成各公使えも布告いたし則御布告（註二九參照）別紙の通有之候

一楠本大丞義昨廿四日新潟縣令被

仰付平松縣令は免職相成候同所動搖旣に鎭靜相成候

一宍戶司法（マヽ）太輔伊丹司法少輔福羽敎部大輔昨廿四日本官被免黑田東京府參事敎部少輔に被任候

右の外今便は別段申進候義無之此段得御意候也

壬申五月廿五日

大少丞連名

田邊少丞殿

渡邊少記殿

尙以去る十八日瀨脇大錄少記に被任候

三八

六月十五日（七月二十日）　外務大丞等ヨリ　大使隨行田邊一等書記官等宛

大手御門ニ於ケル凶徒亂暴一件等報告ノ件

壬申六月十五日絨發

第廿三號シヤツハン號ニ附

十七日出帆

大使御用信案

一翰致啓達候先以御國內靜謐

聖上倍御機嫌克御巡幸被遊次ニ本省一同相替儀無御座候間御放慮有之度候

一去ル四月十二日付無號ノ御用信本月六日相達披見致候大使閣下始貴下御揃御無事ノ段承知珍重存候其節御通達ノ趣一々領承右ハ先便中委曲申入置候儀ニ付不及御答候扨去ル二月中禁門ヘ行者體ノ者強訴致候儀新聞紙ニテ御見

當リ御心配ノ旨縷々御申越ノ次第承知致候右ハ既ニ十二號便ヲ以テ及御通達置候間最早御承知ノ事ニ可有之然ルニ其節不取敢電機ニテ不及御通達儀ハ其始末全ク風顚ニ類スル小事ニ付御報知ニ不及事ニ有之候且火災トテモ風烈ニヨリ比屋連燒候事ニテ異變有ニハアラス此後迚モ里唱巷談種々新聞紙ニテ訛傳致候儀モ可有之候得共本朝ヨリ殊更ニ電報不致儀ハ深ク御掛念ニ不及事ト御承知外國人ヘ被對候テモ時宜ニ御辨解有之度候

一近日ハ各國御交際上至テ平穩今便ハ御通達ニ及候儀無之候

一伊達從二位魯王子接待掛被命右迎接トシテ近日崎陽迄出張ノ筈ニ有之候就テハ御巡幸供奉艦ノ內壹隻崎陽迄御廻相成右エ乘組皇子ノ乘艦誘導ノ積リニ有之候

一皇后御事御遊船落成ニテ本月五日墨陀邊エ御舟遊有之來ル十七日ニハ陸路宮ノ下溫泉ヘ御行啓小田原驛迄馬車ニテ被爲成候尤三週日間トノ御樣子ニ有之候

一異宗徒改心ノ者長崎縣ニ於テ取扱方別紙(註三〇一參照)ノ通リ屆出候間御心得ノ爲申入候

一伊太利國人養蠶方研究ノ爲メ我養蠶場ヘ相越度旨公使ヨリ(註事項一二參照)㋑印ノ通願立ニ付差許候處㋺印ノ通リ不都合ノ儀新聞紙ニ見シ候ニ付英公使ワトサンヨリ㋩印ノ通リ申來リ旁伊公使ヘ右新聞紙不都合ノ儀掛合ニ及ヒ且消却ノ儀申談候自然右新聞紙御一覽ニモ可相成ト存シ齟齬ノ次第爲念申入置候

一渡邊殿幷野村氏鹽田氏エ過日本宣旨御渡有之候得共海外相送リ候テハ採メ麿シ等ノ儀縣念ニ付御歸朝迄本省ヘ預置申候間同人等ヘ御致聲有之度候

一朝鮮國和館本省管轄ニ被仰出候委細ハ太政官日誌ニテ御承知可有之候尤吉岡森山等依然滯韓右等ノ件々取扱候清國來翰中新聞ニヨリ候得ハ朝鮮ヨリ清國ニ依賴米國ニ和セントスルハ實說ト存ラレ候

右ノ條々申入候以上

壬申六月

大少丞

田邊殿

渡邊殿

尙々岩倉大使公ヨリ御願相成居候

天皇皇后御寫眞及御廻候間大使公ヘ可被指上候事

註　右文書ト同便ニテ送致サレタルモノノ「入記」存スルニヨリ左ニ記ス

入記

一正院御用信
一本省御用信
一御寫眞　岩倉公ヘ
一岩倉公ヘ御宅狀幷大原氏ヨリ都合　三通
一大久保氏ヘ宅狀幷石原ヨリ　二封
一田中理事官ヘ本省ヨリ　一封
一渡邊氏ヘ悌二郎ヨリ　一封
一小松ヘ山內埜村ヨリ　二封
一富田租稅大屬ヘ石川ヨリ　一封
一長野宅狀　壹封

三九

六月十七日（旧五月二十日）　岩倉大使等（米國ニテ）ヨリ三條太政大臣等宛

米國ニ於ケル條約改正談判中止ノ經過竝ニ該問題ハ歸朝ノ上處理スヘキコトニ決定シタル次第詳細報告ノ件

申八月廿三日來

第十號　第八月一日開帆太平郵船便

明治五季壬申六月十七日　　從米京話聖東

二　岩倉特命全權大使締盟各國訪問ニ關スル件　三九

第十四號第十五號ノ公信佛國ヨリ相廻リ本日落手第二十一號ノ公信モ同シク本日落手仕候先以

皇上御機嫌克被爲臨御御國內平穩遙ニ奉恭賀候扨大久保伊藤兩副使寺嶋大辨務使ノ一行ハ本月九日ノ朝桑方濟港ヘ着船今朝無異當府ヘ到着ニ付早速御國內形勢ヨリ此度ノ使命等ノ御決議逐一承知仕卽兩副使ヘ政府ヨリ御附與被爲成候改正ノ御國書幷ニ全權御委任狀謹テ領掌仕候今般ノ儀ニ付テハ正院ノ各位諸省ノ卿輔君不一方御贊成ノ力ニ依リ御採用御座候義御盡力ノ段深ク遙察仕候

一右ノ兩副使當地發輪ノ後ヨリ今日迄談判ノ模樣及ヒ條約取結ノ儀ニ付熟思いたし候利害ノ分境幷ニ將來使節一行ノ進退ニ涉リ目今豫圖仕候次第柄順序ヲ追テ左ニ申上候當二月下旬兩副使發程ノ後兼テ打合置候通リ此方ニテ條約ノ草案ヲ取調ヘ三月十五日談判ノ節之ヲ米國國務尙書ヘ相渡候處折惡シク米國政府ニ於テハアラバマ償金一條ニ付英國政府トノ議論大イ葛藤ヲ生シ候折柄ニ付兎角捗々敷運ひニ至リ不申此方ニテモ其情實ヲ承知仕候義なれは强テ催促もいたし不申其儘ニテ相過候

一四月廿二日我國よりの傳信便（註七ヲ指ス）ヲ得たりこれは四月九日附

にて太政大臣殿よりの公信會同條約の地え全權差出方を米國政府へ可申談との事也一體この會同の地は歐洲中某地をトしこゝに全權を派出する義は米國國務尚書は之を無益の事なるへしとせり（之は大久保伊藤兩副使發軔の前に森辨務使より國務尚書へ内談の折尚書かいへる處なりき）且つ今條約談判に渉りたる最中に之を申談するは談判の腰を折候かにて旁佳策には有之間敷兎も角も後便にて詳細の信報を得候上にて掛合可申と衆議一決いたし其儘にさし置候

一五月三日國務尚書へ面會の節彼方より其見込を取認候條約草案を差出し此箇條中彼此依違の條款も可有之候間猶後回の談判に於て論議可致旨申述相別れ夫よりこの草案を熟讀仕候處往々我請求期望せるものと矛楯する條有之於此かの草案を原稿となし我目的を確守して其稿に削正加除を用候事に取掛候

一五月十二日二等書記官小松靍盛義桑方濟港へ着船同廿二日當府へ着いたし候に付廟議の御治定判然と相分り申候然る處米國國務尚書は病氣保養の爲話聖東府を去り新約克近傍なる別業に住せり六月五日具視義此地まて出張の上尚書へ面會およひ改て米國より全權人を條約會議の地

へ派出呉候樣申談候處其趣一應大統領へ言上いたし御決答可仕候得共此義は米國政府にて承諾難仕旨申聞此面會の節我方にて改正せる草案を尚書に相渡

一當六月十五日話聖東國務省に於て當番へ面會およひ候處歐洲會議の地へ條約全權のものを派出いたし候義大統領へ言上いたし候處不同意に候間聢と御斷申候然るに兩副使も明後日早朝御着の筈に承及候間直樣御相談有之當府にて條約御取結被成候哉否や御決答相伺度旨申聞

一今朝六字兩副使來着に付兼て衆論の決する處を以て相談いたし午後三字具視孝允尚芳國務尚書へ面會愈當府に於ては條約を取結はざる事の決答に及ひ申候即ち別冊（註九三參照）應接筆記に盡せり

從來衆議の歸する處は會同條約を以て良法なりとし各自條約を以て尤不可なりとせり其理を玆に概論せんに試に英國の條約に據りて可申上其第廿三條に他國に免許する殊典は同樣英國に及ほすべしと約せり又其第廿二條には千八百七十二年第七月一日後は此條約を更正する事を同意せりとあり然る時は此條約は此日限後は全く廢止して現存すへからさるものと看做す事を得ず若し雙方にて更

正の箇條に付協議せさる時は其儘に現存すべき勢たる事又當然なりと被存候於此今假令は米國にて十分なる條約を結ひ米國よりも若干の權利を我國に附與し我國よりも又若干の殊典を米國に與へ雙約取極の後英國政府と談判に取掛り候節若し十分の協議に至らさる時は如何可相成歟先つ舊約を其儘に現存いたし可申而して我國にては新に米國に與へたる殊典を同樣に英國へ與へさるを得ず如何となれは第廿三條に之を約すればなり又英國よりは米國同樣に若干の權利を我國に附與いたさすとも不苦候如何となれは條約に其約束なければなり其餘結盟の國々も皆同議の條約なるを以て之を推て知るへし約する處既に如此然らは各自の條約にて一擧一動を誤る時は到底我國よりは殊典を諸外國へ與へ候迄にて其報として此方に請取へき權利は屹度之を得へきか否哉約束にて之を保證せるものなしこれ各自に就て條約を結ふを以て不可とするの理に候

扨會同條約の方は之を皮相する時は各國政府を一度に相手とし談判に及ひ候儀に付餘程の艱難には可有之候得共外國の全權等も互に相矛盾するの姿も有之候へは結局不

正の請求をいたし可申憂有之間敷殊更我國の權利に復し候代として可相與殊典特例の如きも同時一般に許可するを以て區々に可相成候支も無之候が故に會同條約を最良法とは申候儀に候

然る處此會同條約の爲め全權人を其會議の地へ派出の儀既に米國政府にては斷然不承知の決答有之就ては英國政府とても同樣不承知に可有之哉と被存候（此儀は當府在留の英國公使へ相談いたし本國政府へ問合候處米國より全權を出さざる以上は英國よりも全權を出さゝるへしとの決答有之候）

英米の兩國は我國との貿易に於て尤も關係あるの國なるに今此二國より全權を出して此會議の地に臨まさる時は其餘の諸政府も必然これを承諾いたす間敷假令荷蘭白耳義丁抹の如き諸國のみは之を承諾し全權を差出候とも米英佛日の如き政府より出さゝれは矢張會議の詮は無之歟故に先つ會議條約は事實此度は實地に不被行義と被存候

於是熟考仕候處會議條約の擧不被行場合には如何いたし候方可然歟是を要するに今度海外にて各目の條約を取結候よりは我使節一行歸朝の上我國にて會同條約の擧を起候方上策に可有之候到底一國に許す處はこの國にも許す

へしとの一條よりして今日の不都合を釀候義に候得共今更之を尤め候とも致方は無之候間唯將來の爲を謀り不都合無之樣取計候を專一に目的と致し衆議を盡し候處會議の擧不被行以上は斷然歸朝の上我國にての條約と治定致し米國の談判も先つ此儘に致し置候積に議決罷在候折柄兩副使寺島も到着に付不取敢今朝相談致し手切の談判に及候義に候

右に付今度新來の御委任狀は米國國務尙書には更に不相示御國書も勿論差出不申近日大統領へ暇乞の謁見を願ひ早速當國發航の見込に御坐候是は英佛を初とし歐洲の諸政府にも我使節一行數月の間この米國に滯在致し候を怪しみ漸く疑團を懷き居候哉の風聞も有之候加之英國の議院も近々相閉し政府の人にも其後は都府を去り可申候間其以前に倫敦へ到着可致心組故至急當國を發輒の積に候英國着の上は最初の御趣意に基き聘問を修め考案を乞候とを主務と致し御國書も使節發程前に御渡し相成候分を相用可申若し英國政府より條約の義申談し候はゝどこ迄も會議の段を主張致し可申全權委任狀一見の義も申立候はゝ相示し會議の事不承知の上は此方にても各自の條約

は不承知なりと申張り其政府の考案を得候迄にて歸朝の上我國にて彼の全權を引受け再議更正の談判に及ひ可申旨を談し可申候尤兩副使再渡前各國公使へ御渡し相成候外務卿輔名前の御書簡中にも協議の上便宜の地と有之候故決して各自の條約にても是非可取結との口質には無之候且つ全權を共與し或は分與するの文を彼方より論及仕候とも是又使節を各所に分配する爲にはあらす全く此全權は五人に共有する而已にあらすして銘々にも分與するものなれはこの內壹人か或は數人にても病氣其外の故障にて缺席致すとも其節に到り差支無之爲を慮りて斯くは御書載被爲成候段にて相防き可申候

之を概論するに前文申上候殊典を他國に許す處はこの國にも許すへしとの一條よりして今日の差支を生し兩副使帶歸の全權と委任狀までも其實効無之ものと相成候樣の姿にをし移り使節の決議も度々相變り候樣に傍觀の誹謗も可有之候得とも今日の形勢にては僅に使節身上の榮辱は之を顧みず確として會議條約の御趣意を奉遵し御國の御都合を謀候を專一と仕候より右樣の決儀に及ひ兩副使へも相談の上治定仕候義に御坐候

此情實篤と御諒解の上各國公使等より何樣の義申立候とも條約の義は都て使節え相任せ候義に付其地は海外會議歟或は歸朝の上我國にて歟全く使節の見込に歸すへしと御答相成此使節歸朝迄は一向に御取合ひ無之樣仕度奉存候

右の見込にてこれより各國を巡歷し最初の見込通り各政府に就きて我國の期望豫圖を說き考案を乞ひ候はゝ歸朝の上にて條約を我國に於て各國全權を引受談判の擧に至り度存候

前文の次第柄に治定致し歐洲へ相渡り候上の目的と致し候得共兩副使御國御發程前にも會議を承諾する國々とは條約取結ひ之を承諾せさるものとは不取結候とも宜敷趣の御評決に候間渡航の上にて實地を試み事機を謀り我國の御都合に取り可然と見込候節は臨機の處分をも致し必す前議に拘泥仕候には無之樣に候間歐洲の都合は猶英國到着の上詳細に御報知可申上左樣御承知可被下候

向後の御用狀類は都て歐洲へ向け御差遣し御坐候樣仕度候

右の段至急可得御意如此御坐候也

三條太政大臣殿
參議　御中
外務卿輔　御中

大使岩倉具視
副使木戸孝允
副使大久保利通
副使伊藤博文
副使山口尙芳

四〇　六月二十一日（七月二十六日）英國駐劄寺島大辨務使（米國ニテ）ヨリ副島外務卿宛

米國ニ於ケル條約改正ノ中止ニ關シ內報ノ件

內伸

條約改定歐羅巴於て可取行一條當府着の上段々模樣承候處米政府にては右全權を歐洲え派出候義異存付見込全く齟齬甚不都合の義に有之依て種々評議に及候處詰り先般省中於て數議論候と同樣にて終に前議に復し今般御渡の國書は歐洲各國にても不差出矢張昨年御渡の御國書遵奉の事に相決

し使節一同は永々當府に延滯の上右の次第にて甚後悔相致居候此段內々閣下丈の御念迄申進候以上

六月二十一日

寺島大辨務使

副島外務卿殿

四一　六月二十三日（七月二十八日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

柳原少辨務使清國ヨリ長崎へ歸着セル旨等報告ノ件

第廿四號

大使エ御用信案　壬申六月廿四日出帆佛郵船

一翰致啓達候先以御國內靜謐

聖上倍御機嫌克被遊御巡幸次ニ政府本省共一同相變儀無之候間御安慮有之度候

一桑港ヨリノ無號御用信本月十九日着致披見御歸朝御見合ニテ又々話聖東府へ御發向相成候趣御通達ノ次第具ニ致承知候

一柳原少辨務使本月十六日長崎迄歸着御用取調ノ爲メ同所エ暫時滯留ノ趣同所ヨリ申越候清國ニ於テ談判相成候次第ハ同人京着申立ノ上委曲次便ニ御通達可致候

一廿三號便ニテ申入候伊太利人養蠶研究ノ爲メ御國養蠶場エ立越候紛紜ノ儀別紙（註事項二參照）ノ通リ書翰往復ニテ事結局ニ相至候御承知有之度候

一當正月中於樺太魯國徒罪人四人苛酷ノ取扱ニ堪兼破牢脫走ニ及ヒハツコトマリエ出稼ノ我漁人三人ヲ殺害シ衣類諸物等掠奪シ其上放火遁逃候ニ付彼ノ官員エ申合翌日罪人捕縛糺問候處終ニ伏罪依而處置振談判ニ涉リ候處樺太限リニテ事穩便ニ爲濟度旨彼方ヨリ申立ニ付政府ノ決ニ可任旨答置候段開拓使判官長谷部出京談話有之結局ニ至リ次第猶后便可申入候

右ノ件々得貴意候也

壬申六月廿三日

外務大少丞

田邊殿

渡邊殿

尙以先便申入置候通リ伊達從二位本月廿一日郵船ニテ崎陽へ赴キ申候隨員ハ土子諸岡村瀨ノ三名ニ有之候也

註「廿四號入記」存スルニヨリ左ニ記ス

廿四號入記

一大使エ正院御用狀　二封
一同斷新聞紙　一綴
一本省御用狀　一封
一同斷新聞紙　一綴
一田邊へ廣澤山崎ヨリ　二封
一鹽田へ村山ヨリ　一封
一岩倉公へ大原氏ヨリ　一封
一安藤宅狀　一封
一富田租稅權大屬へ石川ヨリ　一封

以上

四二　六月二十九日（八月三日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官等宛

陸奧神奈川縣令ノ轉任等報告ノ件

壬申七月四日差立

第廿五號大使御用信案

以公信致啓上候然は

聖上益御機嫌能御巡幸被爲在候政府官員相變義無之大使御一行彌御安泰珍重存候次に本省卿殿始一同無異奉職御降意可被成候

一柳原少辨務使いまた崎陽より歸京不相成然し不日歸京可相成候間其上にて清國於ての模樣は後信に可申進候

一大阪兵庫兩港共稅關今般租稅寮え受取同權頭中山讓治兩港え相越長官代として諸般任當の事に相成候

一陸奧宗光租稅頭に轉任し神奈川縣令の事務も是迄引合續きの分は當分心得取扱尤東京住居にて橫濱えは折節出張の事に候

一新潟縣近傍又候騷擾候旨同縣より報聞有之則右寫差進候

一魯皇子來朝いまた頃合相分兼候へとも延遼館於る御接待御用意は充分相整申候

一元箱館魯國領事タラヘテンベルグ同國公使の紹介に依り本省洋語所え試撿の爲暫時雇入候積りに有之候

一即今各國御交際上至て平穩其他可申進程の事無之右件々を得御意候也

壬申六月廿九日附

大少丞

田邊殿

渡邊殿

四三　七月一日（八月四日）　岩倉大使等（米國ニテ）ヨリ　三條太政大臣等宛

近日英國へ渡ルヘキ旨等報告ノ件

附屬書一、六月十九日暇乞トシテ大統領へ謁見ノ節ノ演述書及大統領ノ答詞　自六月十五日至同月二十九日　略日記

二、

壬申八月六日到來

第十一號　　從合衆國波士敦

明治五年壬申七月朔日

東西兩洋の郵船便にて御差越相成候第十三號十四十六十八廿一號の諸公信當六月十四日より十九日迄の間に陸續と相達し一々拜見御申越の件々悉皆承知仕候先以

聖上益御機嫌克被爲在　臨御五月廿三日品海より御軍艦に被爲召西南の海岸に沿ひ諸府縣港を御巡幸被遊候趣實に無前の御盛擧にて全國の形勢海野の風土を御親視被爲成候御義は黎庶を愛恤し百工を振興するの　聖意に候得は

中外の歡望を屬する素より一方ならす既に數月前より往々當國の新聞にもこれを書載し擧て奉頌賀候義海外奉職の身にとりては別して肩廣く相覺へ申候謹て遙想するに海濤平穩順風常に龍艦に奉從し頃日は御安泰にて御歸京被遊候御義と奉恭賀候

一當國政府に引合候條約談判筋より前途の目的等は第十號の公信を以話聖東發程の前に詳細申上候間右にて御承知有之度扨六月十九日十二字暇乞として白殿におゐて大統領へ謁見いたし卽ち別紙の通り口上相演大統領の答詞を得申候廿二日一行話聖東を發輯し同夜ヒラデルヒアえ廿五日夜新約克え廿八日朝當波士敦え到着仕七月三日朝郵船にて開帆海上凡十二三日にて英國え到着の積に御坐候是はキューナード郵船と唱へ米英の間を航する飛脚船なり　此際各所市民の待遇饗應等迄盛なるは猶桑港に於けるが如し略日記にて御承知可被下候

一寺島大辨務使は六月廿六日午後二字新約克より郵船にて英國へ先發いたし候

一森少辨務使は條約談判に參與する爲歐洲へ同行被命候處先途申上候通り使節先途の目的も相更候間同人は同行不

致候

一書記官中其當務に關涉せす諸省の理事官に從ひ其通辨幷に取調向等相務候樣申付候もの有之候此輩依然書記官の名義を冒し其御手當を占候は條理に於て不都合に被存候間卽ち書記官を免し更に理事官隨行申付其元身分に應し御手當向相渡候樣取計申候

三等書記官被免　外務省七等出仕　川路寬堂

大藏理事官隨行申付

二等書記官被免　同七等出仕　長野桂二郎

工部理事官隨行申付

一大藏理事官隨行吉雄永昌義御用の都合有之候間理事官隨行差許當分米國へ滯在申付候

一米國官費留學生山口縣士族國司健之助義兵學修行の爲英國へ轉學の義願出候間差許候此段其筋へ御達し有之度候

一同斷留學生山口縣士族山本重輔義當暑中休業の間鐵道築造の事務研究の爲英國迄隨行いたし度旨願出候間是又差許同國迄召連候

一勸農助由良守應義牧蕃其外研究の爲米國へ相越候處猶歐洲牧蕃の模樣幷に各國帝王の車駕の御法をも目擊仕候爲隨行の義願出候間大藏理事官隨行申付候

一鮫島少辨務使昇任の宣旨幷御國書は當國より先發の書記官を以て同人へ相達し申候

右の趣可得御意如是御坐候也

大使　岩倉具視

副使　木戸孝允

副使　大久保利通　花押

副使　伊藤博（文脫カ）　花押

副使　山口尙芳　花押

三條太政大臣殿

參議

外務卿輔　御中

尙以森少辨務使進退の義に付ては當便を以詳細の情實可申進旨前便申上候處話聖東發程も俄の義にて其後諸所の招待多事にて今便書送仕候間含無之候間英國着の上可申上夫迄の所は同人の義は何事も其儘に被差遣候樣仕度候

（附屬書一）

明治五年壬申六月十九日暇乞として米國大統領へ謁見

の節使節より演述いたし候口上振第十二字白殿の青堂に於て謁す

大副使五名　田邊太一　鹽田篤信　小松濬盛　杉浦弘藏

天皇陛下の欽命を奉し我國の事情を親しく陳述し是迄兩國の間に存在せる友睦の情誼を猶も厚からしむる樣貴國政府に商議せんため貴國に來りしに貴國政府および人民の協力ありしを以て容易に此意を達するを得たり殊に羈留の間絶へす朝野士庶の優遇款待を辱し斯く一般に懇親の情誼の厚きを見れは合衆國人民は實に我日本の開化を助くるを願ふの意裏深く知るに足れり加之貴邦政治風俗の美を親睹して裨益を得る事尠からす是皆閣下の賜にして此を我

天皇陛下に奏上せは必す滿足あらん事疑なし今度政府の命を奉し歐洲に渡航するの期の近にあれは辱なく閣下に謁し我

天皇陛下および國民に代り此謝詞を申述るを得るは我輩の光榮何事か是にしかん此序を以て閣下の康寧を祝し幷て貴國民庶の幸福を祈る

大統領クラント氏の答詞

日本天皇陛下の交際使節たる諸君と分袂するは我曹の遺憾にて諸君の等級は是迄合衆國にて引接せし諸使臣に比すれば最も高貴の人々なるを見れは是を派出せられたる貴國の君上は此國に日本との貿易の通交を懇親ならしめん事を重大の處分と看做し玉ふ事判然なり諸君も是迄この通交を萬全にして盛大に進めんと著意ありて既にこれを實踐する爲には信功なる好期に遭際ありし事と思はれ候いま假令此目的を成就せさるともそは決して我方に於て厚誼に缺る所あるより生するとすへからす又將來日本へ對し其信を失ふ事なりともすへからす到底現時貴國の銳意なるに是迄成功の盛運なることにて其目的を達するに妨碍有之間敷と存候且諸君當地の滯在は愉快なりきとの旨を聞き頗る滿足に候我國の政體および人事の交際は遙に貴國に異なるより或は裨益となり難き處もあるへけれとも之を見聞し之を審問するは諸君に取りて其功績ありし事これを疑ふまてもなし諸君是より歐洲に於ても愉快を得且は外國通交に付貴國の幸福を無缺の金甌たらしむるに緊要なりとすへき諸君の目的を前途に於て成業あらん事を信す

（附屬書二）

第十一號附屬

六月十五日土値

晴午後第一字大副使書記鹽田及ブルークス國務省ニ抵リ卿ニ會シテ應接アリ此夕小松福地命ヲ受ケテ「ピツ、ボルグ」ニ發ス

十六日日値

晴無記事

十七日月値

晴午前五字半大久保伊藤二副使書記大原寺島外務大輔書記鈴木岡田近藤其他留學生數名入府六字阿林敦逆旅ニ投ス午後三字大副使國務卿ニ其省ニ會シテ應接アリ

十八日火値

十九日水値

晴大副使書記田邊太一鹽田篤信小松濟治杉浦弘藏及森辨務使之ニ陪シテ大頭領公邸ニ抵リ別ヲ告ケテ演書ヲ開キテ五ニ離別ノ應答辭アリ二書共別紙ニ出　一字半歸館向晩大使國務卿フイシュ氏ヲ訪フテ之レト會談アリ鹽田書記之ニ陪ス

六月廿日洋七月廿五日木値晴

此日大副使當國各省長官及各國ヨリ在留之公使ヲ尋問シ別ヲ告各國公使之內告別之爲メ來ルモノアリ皆刺ヲ投シテ去ノミ

此夕第七字當國各省長官次官ゼネラールマヤ等ヲ招請シ別讌ヲ開ク五使以外陪席之モノ寺島大辨務使森中辨務使及ヒ書記官田邊鹽田福地杉浦安藤鈴木ブルークス等ナリ讌了晤語十二字ニ至リテ止ム

此日第八字何禮之林董兩書記命ヲ奉シテ英國ニ先發ス此レ一ハ彼國到着ノ節ノ用意ヲナシ一ハ此程新定ノ禮服ヲ調センカ爲ナリ

六月廿一日洋七月廿六日金値晴午後微雨

此朝マヤ來ルヒラデルヒヤニテジエークウク使節ヲ自宅ニ招請スヘキ旨ヲ述フ

此夜森辨務使其公館ニ於テ使節一同ニ送別之宴アリ五使外寺島田邊鹽田陪之福地以病不預宴了夜會アリ自他ノ書記理事官ヲ始メ本府ニ在ル我國生徒男女悉ク會セリマヤ、ブルツクランマン亦來レリ

六月廿二日洋七月廿七日土値晴

夕五字華府ヲ發スマヤ及閣龍比亞知州事クウク　此人ジエークウクノ弟及ヒジエークウクノ息案內トシテジエークウクノ家ニ赴カントス森辨務使モ亦陪セリ獨伊藤副使福地小松兩

書記事アルヲ以テ猶本府ニ滯在シ直ニ紐育府ニ赴カント擬セリ

寺島辨務使及ソノ一行ノ者モ直ニ紐育ニ赴キ以テ英國ニ航セントス

第六字ヒラデルビヤ西站ニ至ル是ヨリ車ヲカヘ行八里クウクノ邨莊ニ達スタ饌ノ饗アリ主人未歸ヲ以テ弟クウク假ニ主坐ヲ占ム此主人クウクナルモノハ米國著名ノ豪富殊ニ南北戰爭ノ際頗ル政府ニ功アリ今猶ホルストナシヨナルバンクノ長トシテ政府ノ財政ニ參與シ居レリ且其人トナリ仗義好施尤善國ノ爲ニ利ヲ興スコトヲツトム方今又北方ニ新轍路ヲ築キ太平海ニ達シ亞細亞各國ニ通スル一航路ヲ開カント擬セリ此轍路ハ現今ノモノニ比スレハ地ノ低キコト四百尺ヲ過ク故ニ緯度稍高シトイヘトモ却テ阻雪ノ患ナク殊ニ北方ニ偏シ地球小圈ヲ航過スルヲ以テ航路モ亦若干百里ヲ成シ得ヘシトイフ

此夜ハクウクノ宅ニ止宿宅結構壯麗一大客店ニ齊シ客四十餘人ヲ宿セシムルニ足ルトイフ

六月廿三日洋七月廿八日日値晴朝微雨アリ

主人クウク此曉ヲ以歸來セリ同ク石炭坑ヲ檢査シ山ニ入ルコト十五里汽車發輒ノ期ヲ失シ迎接ヲ錯ルヲ致セリト

朝大使外三五名主人ノ誘ニ從ヒソノ寺ニ賽スヌソノ墓田ヲ一見ス纍々大理石ヲ以テシ壯麗目ヲ驚カセリ此日終日一行ノモノクウクノ家ニ在テ各自庭園ヲ逍遙シ皆歡ヲ盡セリ此夜猶ソノ家ニ宿ス此地氣候大ニ華府ニ異ニシテ淸涼殆我仲秋ノ候ニ比ス花氏寒暑針上ルコト七十八度ニ過ス此夜使節更ニ前議ヲ改メ費府ニ兩日滯在セン事ヲ決ス是紐府波府ト同シク招請アリシヲ同府ノミ無沙汰ニ過ンヲ偏頗ニ類スヘシトノ議ニヨレリ卽時電信ヲ以テコレヲ該府ノ市廳ニ通セリ

六月廿四日洋七月廿九日月値晴

朝餐後第九字クウクノ家ヲ辭シ汽車ニ就ククウク兄弟コヽニ於テ別ヲ告ク暫時ニシテ費府ニ達シコンチネンタルホテルニ投ス

午後市中議院ノ長官某其他數十人來訪セリ卽使節ヲ誘シジラルトノ義學ニ至ル生徒六百人ヲ容ルヘシトイフ遂ニベルモントパークニ至リ市中ニ分派スル爲機ヲ設ケ水ヲ高處ニ貯フル處ヲ見ル薄暮パーク中ノ一亭ニ於テ夕饌ノ享アリ主客各壽詞ヲ述フソノ宴盛美ナラストイヘトモ簡

易禮數ヲ省キ友情却テ厚キヲ覺フ蓋本府ノ招請ヲ受ルコト昨夕ニ決シタルヲ以テ今朝漸ク電報ヲ得草卒ノ用意ニ出ルヲ以テ充分御禮ヲ盡ス不能ヲ遺憾ナルヨシ人々皆ソノ謝詞ヲ述タリ

此夜マヤソノ室ノ病アルヨシノ電報ヲ得タルヲ以テ使節ヲ送リ波府ニ至ル能ハサル旨ヲ述ヘ辭シテ華府ニ歸レリ因テ爲ニ寓舍ニ於テ一別筵ヲ設ケラレタリ

六月廿五日洋七月卅日火値晴

本府民ノ誘ニ從獨立布告ノ古跡ヲ訪ヒ遂ニ牢獄ヲ一見アリ建築ノ壯圍制度ノ具備實ニ善美ヲ盡セリ中央ニ一廳アリテ七長廊蛛網狀ヲナシテコレヲ繞ルソノ廳ニ坐スルモノ一囑シテ其廊ヲ見透スヘク作レリ廊各二階兩側ニ房アリ一房各一罪人ヲ容ル房數千ニ餘ルトイヘトモ今現ニ在牢ノモノ六百人餘ナリトイフ歲報書數部使節ニ分贈セリ

本府製造ノ盛ナル米國ニ冠タリトイフモ可ナリ獨織機等ノミナラス布帛羽呢織造ノ場所具ラサルナシ一府人曰ク人多クイフ米國物本ニ富ルトイヘトモ人工イマタ足ラス故ニ布帛羽呢以テ香鹼香水ノ微ニ至ルマテ皆是ヲ歐洲ニ資ルト然レトモ其實ハ本府ノ製出スル所トイヘトモ頗國民ノ求需ニ應スルニ足レリ況ンヤコレニ陪スル紐波兩府其他ヲ以テスルヲヤ

但如何ニセン國民未タ家鶴野鶩ノ僻見アルヲ免カレス不得止本府製出スルモノトイヘトモ一旦コレヲ蘭墩其他歐洲ノ都會ニ輸シ而シテ後再ヒコレヲ本國ニ輸入シソノ名ヲカリテ國民ノ好ニ投スソノ爲ニ稅ヲ課セラルトイヘトモ本府ヨリ發賣スルモノニ比スレハ價モ貴ク且消售スル事早シ故ニソノ諸毎ニ他國ニ資ルモノヽコトシ可笑可憾ノ至ナリト此言果然リヤ否ソノ徵ヲ得ストイヘトモ新建ノ國或ハ如是ノ弊ナキ能ワサルモ理リナルヘシ

午後三字半發寓五字發輒森辨務使以病猶本府ニ在リ醫スローンソノ病ヲ看ルヲ以テ同シク滯留ス汽車トレントン、ニウブロンスウイキヲ通紐府ニ達ス河ヲ渡リシントニコラスホテルニ投ス夜九字半ナリ

伊藤副使寺島辨務使外書記官等皆來會ス但伊藤副使ハ福地小松書記ト共ニ別ニウエストミンストルホテルニ宿セリ

六月廿六日洋七月卅一日水値微陰午後雨

朝十字大使以下本府紳士ノ誘ニ從ヒアストルノ書庫ニ至ル書庫ノ長歳報書數部ヲ呈セリ且曰ク當ニ魯國皇子ノ來ルモコレヲ呈スルコトナシ獨リソノ社中ノ爲ニスルノミ然ルニ今特ニコレヲ日本使節ニ奉スト夫ヨリ各國語ヲ以テ繙譯刷印セル福音書ヲ發免スル書庫ニ至リ少年游息所及ヒ肢體不遂ノ兒童ヲ治スル病院ニ至レリ現ニ院ニ在モノ男兒女兒各半百三十四人アリ男兒アリ足踵攣急シク跟地ニツカサルモノソノ趾後ヲ割リテソノ筋肉ヲ緩メント計レリ今方ニ治療中ニアリ一女兒アリ十一年ノ間行歩スル能ハサルモノナリシカ入院十五月ニシテ既ニ數武ヲ歩スヘシ試ノ果然リ次ニハ中道鐵軌站ヲ見ル結構ノ壯大行李攬卸ノ便易亦各邦ニ罕ナル所トイフ夫ヨリテレボン新聞紙局電信局ニ至リ試ニクレートブリタニーカムプ（距千里餘）華府トニ通信ス皆瞬息ニシテ答詞來リ使節ノ平安着府ヲ賀スル趣ナリ夫ヨリステワルト吳服店チリニチー寺（ママカ）ニ至ル此事ハ本府最舊ノモノナリ

此日寺島辨務使ソノ書記鈴木金藏岡田凌雲近藤眞鋤等ト當港ヨリ郵船ヲ搭シ英國ニ發ス

六月廿七日洋七月一日（ママカ）木値雨入夜晴

朝大副使已下クラフリン吳服店及ハーボル新聞紙局ヲ一覽アリ

森氏費府ヨリ來着病少間ヲ以テナリ

此日昔年日本ニ在留セル公使ハリスヲ川路書記ヲシテウニオンクラブニ尋問セシメ我使節面會ヲ欲スルノ意ヲ述シムル處同人避暑不在ニ會セリ

爾後四字發寓フオールリウアルデホーヨリ乘船ス船號プロヒデンシー乘船ノ時マヤ復來會ス船中房室ノ設飮食ノ美人ヲシテソノ船ニ在ルコトヲ忘レシムルニ足レリ伊藤氏福地小松兩書記及會計ノ諸吏員猶事ヲ以テ本府ニ滯在セリ

六月廿八日洋八月二日（ママカ）金値晴

曉五字（脫字）ニ達ス上陸汽車ニ就ク八字波府ニ着シレウエリハウスニ投ス府人迎接者皆會ス十一字府廳州廳議院ヨリ博物觀諸學院ニ至ル時盛夏放學ノ會ニ在ルヲ以テ化學博物學トモニ皆ソノ教導ノ狀ヲ見ルコト能ワス然レトモ教官在者聊ソノ伎ヲ試ミ以テ使節ノ覽ニ供セリ夫ヨリ消火具ノアル所ニ至リ馬ヲ消火具ヲ載ル車ニ駕スルヲ見ル馬鐸聲ヲ聞各自馳セテソノ轅輒ニ就ク僅ニ十七八秒時ヲ費

スノミソノ神速驚クヘシ此夜本地紳士ヨリ客寓ニ於テ大饗讌ヲ呈ス獻立目錄ニ日本語ノ譯ヲ施シ盤上ノ飾リ物等尤心ヲ盡セリ主客各壽詞ヲ述フ了リテ客寓ヨリ失火ノ報ヲナス各所消火丁各車ヲ馳セテ使節所寓ノ窻下ニ至リソノ消防ノ體ヲ演ス此日川路寬堂紐育府ヨリ來ル夜ニ入田中光顯以下會計吏員亦來ル

六月廿九日洋（ママカ）七月三日土値朝微雨晴

昨夜十字伊藤氏福地小松兩書記來着ス此日大副使以下ラウレンス及ラウウェル織色局一覽アリ府ヲ距ル事廿五里二等書記官長野桂次郎三等書記官川路寬堂各其職務使ヲ免ラレ改テ工部大藏理事官隨行ノ命アリ吉雄辰太郎大藏理事官隨行被免紐府ニ留リ國債券紙幣監造ノ命ヲ奉セリ由利公正以下此夜桑港ヨリ來着ス

四四　七月二日（八月五日）　大使隨行書記官（米國ニテ）ヨリ外務大丞等宛

條約改正中止ニ關シ論評セル米紙送付ノ件

附屬書　六月二十四日右新聞紙抄

我使節米國ニテ一旦條約ノ談判ニ取掛リ半途ニシテ之ヲ止メ候義ニ付テハ隨分臆斷ノ新聞モ有之詰リ毀譽相半シ中ニハ米國ノ國務尙書ノ過ちなりとこれを譴責するの論も有之候然るにヒラドルヒア新聞中には其實を探りて別紙の通に刊行いたし往々一般にこの說を信用いたし候勢なれは當國民丈に對してはさしたる不都合は無之候樣相見候間爲御心得原文譯文とも差進申候御用狀の參考とも相成可申歟現時日本にてもこの義に付新聞の議論紛々と被存候に付一寸申進候也

明治五年七月二日夜　　書記官

大使事務局
外務大少丞　御中

註　右文書ニ謂フ新聞紙ノ「原文」綴込ミナシ

（附屬書）

千八百七十二年七月廿九日
ヒラドルヒア日刊新聞抄譯

日本使節は今般當國えの使命を達するに付滿足を得たりと聞く蓋しこの使節は合衆國と條約を取結ふへき權を帶有せ

ざるに非す只貿易和親航海の方法を創立する爲而已なり故に兩國の政府は互に彼此の地位を諒解し既に條約擬案の草稿迄も用意し其内には合衆國の爲に許多の利益となるへき箇條もありといふ然れとも此使節歐洲を巡歷し其本國に歸朝する迄は決して條約取結にはならさるへし之を要するに日本人は字内の強國幷に合衆國と條約改正の見込を十分に相談して將來の都合よろしき樣に同時に條約を取結ふへき方略なりと思はる

四五

七月十二日（八月十五日）　外務大丞等ヨリ　大使隨行田邊一等書記官等宛

米國公使ノ到着等報告ノ件

申七月十二日發
大使御用信案
第廿六號

以公信致啓上候然は御國内靜謐
聖上倍御機嫌克政府官員相變義無之大使御一行彌御安康珍重存候次ニ本省卿殿始一同無異奉職候間御安慮可被下候

四六

七月十八日（八月三十一日）　外務大丞等ヨリ　大使隨行田邊一等書記官宛

外務省洋語學所等ニ關シ報告ノ件

七月十八日附　十九日出帆米船ゲレトポブレツキ號ヘ托ス
大使え御用信案

第廿七號

以公信致啓上候然は御國内靜謐
聖上御機嫌克被遊御座政府官員相替義無之大使御一行彌御安康珍重存候次ニ本省卿殿始一同無異奉職候間御放懷可被成候
一本省洋語學所學生英は二名佛は五名其餘は委く除名相成候尤獨魯は是迄の通ジョードン氏は本省へ相詰候事に相成候
一米國人イグレルト、デロングベルリー今般同國公使館書記官相成候
一即今各國御交際上至て平穩他可申進程の義無之候右得御意候也

壬申七月　日

大少丞

田邊殿

四七

七月十八日（八月三十一日）　岩倉大使等（英國ニテ）ヨリ　三條太政大臣等宛

大使一行ノ倫敦安着ノ次第等報告ノ件

（記註外欄）
一當七日米國全權公使デロング横濱へ着港いたし候
一即今各國御交際上至て平穩其他可申進程の義無之右得御意候也

壬申七月　日

大少丞

田邊殿
渡邊殿

（朱書外註記）
一今十二日
聖上御還行相成候（マヽ）
一去る九日清行柳原大丞韓行吉岡少記歸朝いたし候尚委曲は後便可申進候

註　右文書欄外註記ノ箇條ハ**五七**ヨリ察スルニ書加ヘ達セラレタルモノノ如シ

（朱書）「壬申九月十三日着本紙は夜三條殿え廻す」
正院公信第十二號　英郵船便

明治五年壬申七月十八日　　従英京倫敦

第廿號甲乙兩通の公信幷に別紙とも當月十四日英國リウリポールに於て落手御申越の件々逐一承知仕候先以
皇上益御機嫌能被爲在　臨御御國内安寧各位愈御精勵御奉職の段謹て奉遙賀候扨話聖東發輯の後費拉紐（フィラデルヒヤ）育波士敦（ニューヨーク・ボストン）の三府周覽中各府の市民何れも其待遇の懇篤なる既に先便第十一號の公信幷に略日記にて御承知の義と奉存候
　費拉府に於て使節一行同所の造幣寮を見物いたし候條は先便略日記淨書の節に漏し候間爲念申進候
此際に臨み我使節話聖東の條約を半途にて廢止せる事既に世上に傳播せるより必然米國市民の氣配にも相拘り使節を待遇するに當りて自から不快の氣象を顯し可申歟殊に我國との交際に關係いたし候ては左迄の差響は有之間敷候へとも現時大統領グラント及ひ國務尚書を誹謗いたし物議を沸騰せしめて其再擧を妨碍いたし可申歟果して然らはグラン

附屬書　官員生徒拜令表

ト幷に內閣の諸尙書に對し實に氣の毒の義と頗る掛念仕候處爾來の諸新聞及ひ各所の饗應市民の待遇を見るに更に此般の諸景況も無之依舊懇篤の切なるにて大に安心いたし候米國の政論に三黨あり曰くレポブリツキ曰くリベラル曰くデモクラツト』『レプブリツキの黨は今大統領ガラントを再擧せんと謀り餘の二黨は連衡して新にグリーレーといへる人を撰擧し以てグラントを退けんと欲せり於此各黨互に相抗論して其非を訐き我黨の人を撰はんとせり

一七月三日第十一字波士敦の埠頭よりキユーナルド社郵船オリンバンクス號に乘船して解纜す同日は波士敦より大小七隻の汽船を出して市民皆之に搭して使節の啓行を送り各所の砲臺軍艦より夫々祝砲を發す四字に至りて港外に出つ海上風浪平穩にして同十四日第二字英國リウリポールに投錨いたし候處早速迎船來着第四字上陸いたし候尤英國陸軍少將アレキサンドルなる人此度使節の延遼掛りを被命候趣に付鮫島少辨務使吉田大藏少輔其外一同と共に此の迎船に乘込て來接し上陸の節は「リウリプールの市尹より別に馬車を供してホテルに趣き候此リウリプウルは英國にて倫敦に亞き候繁昌の地に候得は同所の市

尹をはしめ商社の豪富等各々米國の例に做ひ使節を饗應せんとの決議に候處倫敦にては外務尙書日々使節の來着を相待候義に付當所えは使節も再歸可有之候間其節迄饗應を相延し候方可然旨アレキサンドルより說諭およひ候趣於此同日第五字半汽車を發輌し同夜十一字半倫敦府着ボツキンガムパルレースホテルに投宿いたし候尤も此ホテルも前着の書記官アレキサンドル相談の上相設け候義に候

一英國に於ても使節の來着を朝野とも佇望致居候處米國にて意外に手間取れ候義に付追々時節押移り遂に避暑の候に及ひ候一體歐洲の風俗として仲夏より仲秋迄は帝王內閣を初めとし富貴の人は皆避暑の爲め或は近郊の別業に赴き或は遠方へ旅行いたし大概は都府に留らさるの慣習にて然る處女王には我使節を引接の爲め態々此避暑巡幸の時を被延候趣に候得共餘りに使節の來着延引に付不得止巡幸を被初候尤寺島大辨務使は一週日前に倫敦に來着致し候間早速女王えの謁見を遂け其節女王の答諭にも使節を親しく引接しかたきは遺憾なりと被申候

寺島大辨務使の謁見は「オスボルン」といへる地の離宮

に於てせり其節は女王の內意にて嚴肅の禮典を省き寺島一名外務尙書の誘引にて平服の儀謁見を遂け簡易の尋問に比しき事なりとぞ

其後女王は此離宮より再ひ蘇格蘭の離宮に巡幸ありて現に同所に行在せられ內閣も多分各所に散在いたし居候但し外務尙書「グランウイル」は使節を待受候爲猶倫敦に留り十六日第四字外務局に於て初めて面會致候

一同夜外務尙書の尋問に應し其私邸に於て饗應有之寺島も同席なり右畢りて尙書誘引に從ひ博覽場を見物いたし候故公使ハルリーパークスも今般の延遼掛りに被命大に周旋盡力致候

一現今の景況にて臆測いたし候處英國滯在も凡兩月位は相掛り可申尤他國にても矢張避暑中故先行致候とも其妙は有之間敷且佛國故公使ウートレーよりの傳言にも巴里えの來着は第十月頃を最良の候と存候趣申來候へは旁々其頃には當地より巴里え相廻り候心組に候尤政府の都合次第女王より拜謁を賜り候樣申立置候

一各國の風俗として其辨務使は互に相當の職位の者派出可致筈然に今英國に而已大辨務使を被差置米國えは依然少辨務使を被差置候ては頗る同國え對し御疎濶の樣相見自然英米の兩國に輕重を下し候樣被存取可申歟　森有禮義中辨務使を拜命不仕候に付今以同政府えは吹聽不致義に候

其餘歐洲の重立候國々えも同樣の義に付相當の辨務使急速任命被差置候樣仕度候

一英國着後間合も無之候間略日記今便は淨書出來不致候間後便差進可申候尤當國新聞の內重立候部切拔き封入いたし候間反譯御申付の上御一覽被下度候

一新定の大小禮服の義御規則に從ひ當國にて新調いたし各國帝王えの拜謁其外の禮典にも着用可仕積に候間甲上候迄も無之候得共御國於ても同樣御施行有之度外國に出候使節のみ歐風の禮服を着用し日本の朝廷にては依然狩衣直垂而已を用ひ候なと外國人の誹謗を受候ては面目を失ひ候義に付御注意可被下候

大久保伊藤兩副使發程の節御渡相成候繪圖面を歐洲の禮服比較いたし候處裁縫には聊か異同の處も有之候間緊要の模樣標線等は繪圖面に從ひ其餘細瑣の處は歐風に做ひて改正致し候

一第廿號にて御申越被成候官員留學生等を命候年月日等級

等別紙の通に候間御承知可被下候
右の趣可得御意如此御坐候以上

大使　岩倉具視　花押
副使　木戸孝允　同
副使　大久保利通　同
副使　伊藤博文　同
副使　山口尚芳　同

三條太政大臣殿

參議　御中
外務卿輔

尚以大原令之助義は三等書記被免随行の心得を以て外政事務取調の爲使節歸朝迄英國え滯在申付候事

註　右第十二號公信ニハ森少辨務使ニ關スル副單アルモ略ス

（附屬書）

官員生徒拜令表

干支	拜令事件	元身分	貫屬	姓名
辛未十二月十六日	英國へ轉學	元民部省ヨリ公費ニテ米國留學生	勸農寮官員	岩山　直樹
				大原令之助
				渡邊　一
				手島　精一
				元菊間藩
				由良勸農助
				伊萬里縣
				松村　文亮
				長野桂次郎
				川路　寬堂
				國司健之助
				同
				同
				同
				新島七五三太
				安中藩
				岩男　俊貞
				高辻　修長
				香川　廣安
				蘇介
				錦小路賴言
				杉浦　弘藏
				富永　冬樹
				福井　順三
				岩下長十郎
				田邊太一厄介
				同
				同
				同

當七月三日米國波士敦開帆同十四日倫屯府到着の義は第十二號の公信（七月十八日附英國郵船便）を以て詳細申進候間御承知の御義と存候扨英國着以來兼て被　仰付候留學生徒取締の義に付寺島大辨務使鮫島少辨務使とも打合せ種々勘考仕將來の爲一定の規則取締向等相設候積に候間御國おゐても同樣に其邊御心掛け有之度是迄の如く諸官員にて各自の定額金中より頻りに生徒或は質問官員等差出候てはその者等各管轄を異にし候より自然辨務使の圍範外に出候姿と相成到底一定の規則も實際に被行間敷と存候に付僕輩一同相談の上將來海外留學生徒取締向の規則は勿論御國より御差出の節檢査の方法をも同樣取調中外相矛盾いたし候患無之樣の手續に順序を立て後便に可申進候右規則十分整頓いたし候迄は公私の留學生諸官省の質問官員等何等の名義たり共一切御差許無之樣仕度左も無之候ては詰り其本を措て其標を治候義にて決して今日の不規則を一掃いたし候義相成不申と存候此段御諒解早々諸官省え御布令御坐候樣仕度候
右の趣可得御意如是御坐候也

大使　岩倉具視印
副使　木戸孝允
副使　大久保利通
副使　伊藤博文
副使　山口尚芳

三條太政大臣殿
參議　御中
外務卿

尚以鮫島少辨務使より差出候留學生の義に付建言寫差進中候
一行一同無異銘々の宅狀等既に十二號便に差遣候間今度はいつれも別に差出不申候

（附屬書）

鮫島中辨務使より使節え宛建白の寫

海外留學の儀は普通學卒業の上文部省の檢査を經留學免狀を請發程可致は勿論の處近來無其儀直に太政官或は諸省より出候者多く有之候に付中には一丁洋字をも不解片言一語も不通者不少依之來航の後一兩年間は全く小細の普通學に苦其所費許多にして其所得甚些少なるは當然候當節普通學の儀は御國に於て十分出來候而已ならず却て御國內にて學候方速成可致筈の處海外に來る後二十六字より學ひ始め留

學致候樣にては五六年の久を經候ても一學科をも極る能す隨て御國より來航の學生は進步不相見樣海外にも相聞可申は必然の事に候へは自然御國の名譽にも關係致候事と存候加之右樣人撰一途に不相出に就ては來學の者自立の風有之其勤怠に因り進退致候譯にも不出來且又進退致候も追々不學の徒檢査も無之猥に來航候樣にては假令懶惰の者有之候とも概して歸朝爲致候事も不出來寧ろ少々にても今日迄學得居候へは一語も不解新來學生よりは成業にも近く自然進退黜陟も難致譯に候間自今留學生人撰は貴賤を不問普通學卒業の者文部省にて檢査し其稟性に隨て學科を命し學資等も總て同省より贈來候樣有之度右に付海外留學規則確定無之候ては不相成儀と存候卽今右規則相立候迄は一時海外留學公私に不關御差留有之度存候

壬申七月廿一日

辨務使

大副使御中

四九

七月二十三日（八月二十六日）　外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官宛

二　岩倉特命全權大使締盟各國訪問ニ關スル件　四九

近況報告ノ件

七月廿三日附明廿四日佛ヲニルカン船にて發

大使への御用信案

第廿八號

以公信致啓上候然は御國內靜謐
聖上倍御機嫌克被遊御坐政府官員相變義無之大使御一行擧御安康珍重存候次に本省卿殿始一同無異奉職御放慮可被成候
一渡邊少記一昨廿一日朝橫濱着港廿二日歸京同人乘組越し候米郵船アメリカ號一昨廿一日橫濱へ入港の上同夜十二字頃荷藏より出火多人數行衞知れざる由
一條約書運上目錄中第四種の下和文には各國何れも元代に從ひ五分の稅を可拂品と有之候處獨乙而已橫文（オルジナリーワリユウ）に元代の字を脫し方今金川運上所におゐて獨領事と議論相生し不都合に有之候間條約改訂の節は御注意有之度爲念申入置候尤和文は獨乙も元代と有之候
一鮫島少辨務使義當五月中中辨務使に被任候節英獨兼任被免候處今般更に獨乙兼任被命且同國へ御國書被差遣候尤

中辨務使に被任候節より獨乙兼任の心得可有之旨同氏へ申送り置候

一卽今各國御交際上至て平穩他可申進程の義無之候右得御意候也

壬申七月廿三日

大少承

田邊殿

五〇

七月三十日（九月二日）　柳原外務大丞等ヨリ岩倉大使一行宛

「マリヤ、ルス」號事件等報告ノ件

八月朔日出帆英ヲトワ船ヱ托ス

大使へ御用信案

（註第二十九號カ）第九號

以公信致啓上候然は御國內靜謐

聖上倍御機嫌克被遊御座政府官員相變義無之大使御一行彌

御安康珍重存候次に卿殿始一同無異奉職御放慮可被成候

一蘭公使フアンドルフーヘン義本國より歸國可致旨下命有

之近々歸國に付御暇乞として昨廿九日第一字內謁見有之候

一去る廿七日柳原大丞御用濟に付兼官少辨務使被免昨廿九日吉岡少記依願被免本官位記返上被仰付候

一南米利堅の內ペリユー國船支那人多人數爲乘組橫濱へ入港支那人より訴訟申出裁判の終始は別紙（註事項九參照）手續書差進候間右にて御承知可有之候

當月廿二日渡邊少記歸朝いたし當春伊藤大久保兩副使出米以來彼國政府と大使應接の概略外務卿より其筋へ申上られ然るに同人持歸候書類は悉く和文而已に付對話書其他要用の分は英文御取揃へ必らず次便より御送可被成外務卿被命候

是迄御用狀御申越の件々唯平常泛々の事に止まり要務肯緊の應接向彼國政府の胸臆使節一行の察知する所等に至つては未嘗一應も申越されす又一體遣外の使臣と在國の廷臣との間往復詳通主意貫徹不致候ては相叶はさる事に付以來其邊厚御注意此後各國政府と應接の事務委詳御申越可有之旨是迄被命候

一御國船フヅ丸近々支那國香港より米國サンフランシスコ

港へ入津の筈の由然るに米國法にて甲國船乙國の產物を積乘せ入津候時は其船積荷物價の一割を自他產物差別稅として定稅の外別段取立候筈の由然るに我國へ入港する米國船同國產に非さる荷物を積來候とも右樣の稅銀取立候儀無之因て兩方平等の處置有之度旨我か公使より國務卿へ申立候時はプレシデントより免稅の告示可有之筈に被存右樣の先例は從來屬有之事に付桑港在住我國領事の申立も有之事に付森有禮より國務卿へ既に申立有之哉にも被存候へとも次便より尙可申遣此儀彼國にて許諾不致候へは於我國も右增稅取立の儀示談可及積り大使一行にも極めて御承知に可有之尙夫々御心添有之度候

一支那へ被遣候柳原少辨務使歸朝同國政府と談論應復の結果凡（註一二六參照）別紙記載三ケ條伺の通たるへき旨當月廿三日正院より差圖有之候

一卽今各國御交際上至て平穩他可申進程の義無之候右得御意候也

壬申七月卅日

大原

子安

大使一行御中

花房

柳原

五一

八月七日（九月九日）　柳原外務大丞等ヨリ岩倉大使一行宛

第十一號公信到着等報告ノ件

壬申八月七日差立　整八日佛郵船コタベル號出帆

第三十號大使公信案

以公信致啓上候然は波士敦より御發七月二日（註四三ヲ指スモノト認メラル）附御用狀八月六日落掌御一行彌御淸康の趣珍重存候皇國寧靜

聖上益御機嫌克被爲在　臨御政府官員相替義無之本省一同無異奉職罷在候

一話聖東於て條約御談判の義に付新聞紙抄譯を以御申越の趣委曲承知いたし候

一第十一號太政大臣殿其外宛御用信日記等本日外務卿正院へ持參被致候間今便の御答には被及間敷候今便は佛郵船出帆差掛り右御報迄如此御座候也

壬申八月七日

花房大丞
宮本大丞
柳原大丞

大使一行御中

註「第三十號入記」存スルニヨリ左ニ記ス

第三十號入記

一大使一行宛　御用信　壹通
一大使副使宛　正院より　壹封
一田中文部大丞宛　文部省より　壹封
一東久世殿宛　淺井晴文より　壹通
一特命全權大使書記官宛　渡邊より　壹通
一川路寛堂宛　留守宅より　壹通
一安藤太郎宛　同二郎より　壹通
外新聞紙一束添

以上

五二

八月十日（九月十二日）岩倉大使等（英國ニテ）ヨリ三條太政大臣等宛

英國女皇謁見手續等ニ關シ報告ノ件

附屬書一、自七月一日　至同月三十日　略日記

二、八月三日岩倉大使等ヨリ英國外相宛書翰寫
英國女皇ヨリ謁見ヲ賜ハリ度旨申入ノ件

申十月十一日到着
（第十四號ノ誤カ）第十三號　法國郵船便

壬申八月十日　從英國龍動

六月十五日記第廿三號公信本月四日米國より廻着披見いたし候先以

聖上益御機嫌克御巡幸被爲在行在各所士庶歡頌の趣一同難有奉敬祝候各位愈御精勵御奉職抃喜の至御座候次に此方一同無異是亦御放懷被下度候

皇后相州宮の下え行啓の儀をはしめ縣治事務逐日整頓海内益無事の趣其他魯國皇子來訪に付接待懸り被命候事及江藤司法卿歐洲え被差遣候義澳國博覽會事務等夫々御申越の條一々致承知英國着後の景況先便以第十二號申進候通に有之爾後ソルパークス幷接待掛セネラルアレキサンドル等誘引にて各所巡覽罷在候右は別紙略日記にて御承知有之度候女皇謁見の義は本月三日附にて英文書簡當外務省え相達し候

未た返答無之候尤右は米國滯在中兼て同國在留英國公使を以案內有之第八月よりは女皇蘭墩を去り離宮に行在ありて來春第二月ならては歸宮無之儀に候間右時限前使節渡航有之度旨申來候處米國發程遷延竟に此時機を失ひ且最前寺嶋辨務使謁見の砌先信申進候通內諭の趣も有之此より催迫も致兼候場合無據義に奉存候間前文書簡中にも右意味含蓄申入且以口上も其筋え申入置候然るに此節傳問候所にては西曆第十一月初旬は女皇歸宮も可有之哉の由に候間右爲相濟各國歷聘可及心得に御座候就ては歸朝頃合は凡見込の處後便を以可申進候卽右書簡寫幷譯文とも相添差進候

先般御布令御座候服章の義文書官員の分は旣に御一定相成候へ共皇族の分未た御定則無之現に歐米とも御留學の宮方も被爲在候事に付早々御議決樣式御申越有之候樣致度存候

陸軍省生徒太田德三郎と申者瑞西國兵營に留學稍成業及ひ歸朝可致積の處山田理事官願に任せ同人に隨行同樣相心得御用可相扱旨鮫島辨務使申談申渡候將亦同省生徒法國留學渡六之助義は山田理事官御國發程の砌陸軍省よりの命令持參候間法國於て同理事官より隨行の義申渡候旨屆出候當國在留官費生徒山口縣貫屬大野直輔は大藏省同足羽縣貫屬狛林之助同靑森縣貫屬野口富藏は工部省理事官隨行申談御用可相調旨申渡候尤直輔義は含も有之當年中歸朝候樣申付置候右何れも寺島辨務使申談取計候事に候也

右の條可得貴意如此御座候也

山口副使尙芳
伊藤副使博文
大久保副使利通
木戸副使孝允
岩倉副使（大使ノ誤カ）具視

三條太政大臣殿

參議
外務卿　御中

（附屬書一）

申十月十一日到着
（第十四號ノ誤カ）第十三號公信附錄略日記

七月朔日晴八月四日日値

午後領事ブルークスの請に應し使節一同その親族の方に歷訪せらる最初ブルークス亡父の家當時その叔父主管せる方に至り夫より外親族を訪はる酒菓の設等あり薄暮歸

館

七月二日晴八月五日月値

此日本府士民被請ニ應し使節の內兩手ニ分れ一は木戸伊藤兩氏本府接待懸りのもの拾餘人同道にてホトソンニ至その里の役所にて午餐の饗あり會食の男女貳百餘人里長及ひ接待掛り各壽詞を述ふ夫より造履工場に至り又出來合の衣服工場に至る裁縫皆汽機を用ゆ所役男女五百人許一は大久保山口兩氏此又數工場を歷覽あり多くは鐵釘鐵器を製するものなり（註 第百）に午餐の饗あり此地は提督ペルリの生里なるを以て日本人を遇すること殊に厚く饗中壽詞亦その意を述たり大使は病を以て在館せりセネラールバンクス及當國在留英國公使來訪大使に見へ別を告く英國公使はその渡英の期に後れ兼て期せし如く充分の接待行屆ましき旨其政府より報告を得しよしを告け遺憾なる趣を述たり此日當國外務尙書フイシ及セネラール、マヤに使節より書を送りて在留中の懇遇を謝せり又當國在留土耳其公使に書を送りて歐洲巡行の序その國にも書記官を差しその國光を觀んことを希ふとの旨を述ふこれ其初華府に在る時同公使より申出し旨あるに基けり且又紐府

にあるトウンセンドハルリスの許に書記官より書を送らしめ面會を得さることの遺憾を述ふ是人は最初日本に來りし當國の公使にして且千八百五十八年結約の全權たり故に挨拶ありしなり又同府アクトルのライブラサーに遺書してその月刊書を送りしをも謝せらる

今夕第十一號公信を郵局に附す

七月三日晴八月六日火値

朝第九字波府埠頭より火艇に駕しキユナルト社中郵船オリンハス英船號に移駕す此日本府下院議長ライスをはしめ接待懸りのもの其他紳庶男女百數人大小七隻の火艇を泛へ使節の乘船を乘廻しなから旗を揭鼓を打ちてその啓行を送れり一官船 此は此地海關附の船なり 及港中砲臺より各祝砲を發せり港口に至りライス以下皆使節の乘船に於て小宴を設けその啓行を壽し祝詞を述ふ使節又これを答謝あり此日海波平穩

七月四日陰八月七日水値

午測北緯四十二度二十八分
西經六十五度四十四分
波府を去る二百三十里

海上平穩只濃霧海面を掩ふて咫尺を辨せす郵船時々汽笛

を吹

七月五日朗晴八月八日木値

午測北緯四拾二度四十三分
西經五十九度三十七分

昨測の所を距貳百七十六里

海波最穩

七月六日陰八月九日金値

午測北緯四十三度〇五分
西經五十三度廿七分

昨測の所を距る二百七十二里

海波最穩

七月七日陰八月十日土値

午測北緯四十四度〇八分
西經四十七度四十二分

昨測の所を距二百五十八里

海波平といへとも風左側より來るを以船頗る蕩す

七月八日晴八月十一日日値

午測北緯四十六度〇三分
西經四十一度四十六分

昨測の所を距二百七十六里

有風波頗る高し寒冷秋初のことくならす

七月九日晴八月十二日月値

午測北緯四十七度三十分
西經卅五度廿四分

昨測の所を距る二百七十六里

此日順風なるを以て三檣共に帆を張れり船頗る蕩す

七月十日晴八月十三日火値

午測北緯四十八度五十三分
西經廿九度十二分

昨測の所を距二百六十二里

風浪昨の如し

七月十一日晴八月十四日水値

午測北緯五十度十四分
西經二十三度一分

昨測の所を距二百五十里

風逆を以て帆を收む船尤蕩す

七月十二日雨八月十五日木値

午測北緯五十度四十九分
西經十六度三十三分

昨測の所を去る二百五十里

七月十三日陰雨八月十六日金値

午前十字陰霧中愛蘭地方を舷左に見る午後三字クインスタウン港口に暫時船を留め一火艇來りて愛蘭に上陸すへき旅客及信書を攬す此時寺島大辨務使よりの電報を得たり曰くリウルポールの士民日本使節を饗せんとの企あり然に政府に引合肝要なれは之を後日に期して直に蘭墩に

赴かれんことを望むと

七月十四日晴八月十七日土値

朝十字過リウルポール港口に達す引水者を待こと久しくして漸く港中に入る英國政府より日本使節の接待を命せられたるゼネラールアレキサントル及同國日本公使パークスの書記官アストン小火艇を以て迎接す鮫島中辨務使吉田大藏少輔林二等書記官其他在英の生徒數輩皆來迎す上陸の節地方官廳より禮車を具して是を客館に送る五字過夕餐を了りて直に汽車に駕し蘭墩に赴く夜十一字半を以て同府中ト吉南門ホツキングハムケートパレースホテルに投す寺島辨務使を汽站迄迎接し客館に送りて歸るパークスも亦來れりリウルポール饗應の事はアレキサントルより既に政府の命を以見合せしめし由なれは此より別に斷りに及はさりし此夜第廿二號公信鮫島より落手す

七月十五日晴八月十八日日値

朝十字アレキサントル、パークス來見す

海陸長途の勞を慰する爲一同休息す

七月十六日晴八月十九日月曜

午後一時本國外務卿クランウヱルの宅を尋問あり彼より使命の旨趣を問ひ且條約の談判に渉るへき哉否哉の問あり大使是に答へ先謁見を乞ふ旨を述らる

此夕七時同人より夕膳の招あり大使副使鹽田篤信赴之膳了り同人同道にてサウスケンシングトンの博覽會を一覽す

七月十七日晴八月廿日火値

パークスの誘に應し本府維里亞站を發しブライトンに赴く此地は暑中遊覽の地にして即今名公鉅卿多く此地に在れは遊覽旁その人と相見ん爲なり同所に午餐し學校博物觀を一覽す學校には恰も地學を講せる時にして方に皇國東京の樣を說けり講師席を避けて更にパークスをして皇國今日の形勢を說かしむ前香港の總督にて有名なりしジヨンホーリンクも來會しパークスに次て講座に登り支那日本の比較を講せり薄暮歸館陪者鹽田杉浦兩書記官なり

七月十八日晴八月廿一日水値

午後三字當府知事パークス同道來訪三字半大使およひ木戸副使當國皇族及公卿幷各國在留の公使を歷訪あり皆刺を投て歸る

アンハサトルは彼より尋問を受る極公法なる由なれとも今はおしなへて新參の者より問訪する如くなれるよしパークス、アレキサントル等もいへる事あるにより華府着の節とはその式殊なり

此日法國公使館記室シヤルジタフヘール名を以て來訪刺を投して去る

七月十九日晴八月廿二日木値

三等書記官大原令之助被免

魯西亞アムバサトル廻禮として來訪す刺を投して去る西班牙公使來見す日耳曼少辨務使及瑞諾公使館書記官少辨務使の名を以て答禮として相越皆刺を投して去る

七月廿日晴八月廿三日金値

荷蘭辨務使來見其國にも御巡聘可相成に付右時期承知致度旨を述ふ

第十二號公信郵局に附す

七月廿一日陰八月廿四日土値

山田理事官巴里より來る

本國司法長官より留守中御答禮として參上致兼候旨アレキサントル迄申越せし條同人より申立る

七月廿二日雨八月廿五日日値

第十三號公信及無號公信共郵局に附す

伊藤副使よりシーホルトえ書を送りその歸朝を被命候事

七月廿三日晴八月廿六日月値

午後三時半五使アレキサントルパークスアストン同道フランドホルトに發程あり林董陪之此夜同所一泊

七月廿四日晴八月廿七日火値

五使フラントホルトに在り操兵を一覽あり了りて薄暮ホルツホウスに着同所メンションホテルに一泊

田邊太一兩親王滿宮御事過日普國より御出御座候事に陪し其他數人と共に午後よりホルツホウスに趣き使節に會す

七月廿五日晴八月廿八日水値

午後第一字本地在留海陸軍將の宅を訪ふ

海軍將にて午餐の饗あり五使兩親王書記二人田邊杉浦肥田理事官外數人預之主人（註 空白）の外甲比丹某々陪之

夫よりヂユクオフウイルリングトン號船に至る是は古風の製造にして今は只海上に繫碇して海軍操演に備るもの也水卒大小砲の演習又擊劍の坐作等を見終に標を海沙中に立裝彈命中するを見る彈裝終りて將に照準する時に中り機を設けて故にその船を蕩提しその風浪中にありては

精細に視準することを習わしむ船を下りて塘石を製する所を見る役夫八百人といふ皆刑徒なり又造船場に至る現に兩池あり今將に工を肇め未た成さるもの四その石木を運輸するか爲假に鐵轍を敷けりその長廿四里その建築の大知るへし池中一新發明の鐵船を泛ふ未た功を畢らさるものなり兩活圓臺あり皆裏に鐵を以てし厚四寸に及英す各大砲六門を裝すへし皆機を設けてその圓臺を運動せしむへし船舟亦鐵甲を裝ひ大凡は水に沒せり喫水甚深からす此敵彈を避け又淺瀨を涉らんか爲なり薄暮歸館

七月廿六日晴八月廿九日木値

午後歷山バークス同道一同コンケロル號船に至る此所此海口繫在し海軍水卒を置所とす且此船は名將ネルソンの戰死せし船たるを以てその故物遺書を藏しありて好古愛國の者は男女士庶を問はす來てこれを見その奮勇死戰の迹を弔ふもの多し今船中に存する書簡はその右腕を失ひし後の手書に係る文字瞭字ならす英勇の氣千載如生といふへし

夫より火艇に駕して（註 原白）號に至る鐵甲大艦なり五檣を立廿六門の大砲を裝千三百五十馬力の汽機を裝ふといふア

トミラルホンベーの乘船なりロンチノ（註 原白）此船に中御門寬麿呂乘組たり同式の船此海口に在るもの三隻夫より（註 原白）號に至るに鐵甲なり稍前のものより小なり砲門屈曲して舷に沿ふて發火すへく造れり伊月一郎此船に乘組今現に士官の一に列せり

船を下りて港口の一砲臺ノーメンと名くるものに至る薄暮歸館

七月廿七日晴八月卅日金値

朝陸軍の操演あり人數僅々二千人許

セネラール方にて午餐の設あり公使兩親王杉浦陪之了て兵卒屯所を一覽あり夕七時同所發車同十時半蘭墩維多里站に着寓館に歸る

七月廿八日晴八月卅一日土値

第二字兩親王同道大使禽獸園へ被相越此日アレキサントル午後巡游場所手續等申立る

七月廿九日晴陰不定九月一日日値

第三字波斯公使來り公刺を投して去る

七月晦日陰九月二日月値

山田理事官今夕巴里へ歸る

（附屬書二）

申十月十一日來ル

於龍動府千八百七十二年第九月五日

貴公閣下

我大辨務使寺島宗則來朝卽時皇帝陛下へ拜謁致候節陛下御事不日御他幸可有之ニ付我使節ヲ速ニ接待被成候儀不任其意遺憾ニ被思召候旨ノ御意有之候段拜承致候隨テ右樣懇篤ノ御意有之候上ハ陛下ノ御都合次第御差圖ノ場所月日ヲ以テ拜謁相願其節我

天皇ヨリ皇帝陛下ニ進呈致候國（ママ）相賚可申候依之爲御心得右國書譯本貴公迄差出申候謹言

大副使五名連署

外務尙書アール、ガランウキル、ケージー閣下

註　右文書歐文綴込ミ見當ラス

五三　（八月十四日　九月十六日）　柳原外務大丞等ヨリ　岩倉大使一行宛

神奈川縣ニ裁判所設置セラレタル旨等報告ノ件

壬申八月十四日差立明十四日出帆ボンバン（ママ）

第三十一號大使一行え御用信案

以公信致啓上候然は

聖上益御機嫌克被爲在　臨御政府官員相變義無之候將其御一行彌御安寧御奉職の義と珍重存候

一今般神奈川縣え吏に裁判所被置去る十一日より同縣訟獄の事務司法省え引受同省權中判事西成慶同權中檢事大塚正男出張相成候

一魯國皇子渡來の義に付崎陽出張伊達從二位より來書中印度咬嚩吨仕出し長崎魯國水師提督への電報有之候意味を考へ候へは同國皇子も咬嚩吨到着は顯然にて定て十四五日間には着崎も可相成哉の旨提督申聞候段申越候

一去る十日朝玉乃司法權大判事人力車にて出省神田橋內通行の砌兇徒壹名短刀を以刺懸け候儀云云右は正院より御用狀中に委曲を盡し候不贅言候

一崎陽より東京への電信線は卽今下ノ關海底懸渡し中に有之候

右可得御意如是御坐候也

壬申八月

花房大丞

宮本大丞
柳原大丞

大使御一行御中

註「第三十一號入記」存スルニヨリ左ニ記ス

第三十一號入記

一大副使え　正院より　弐封
一岩倉公え　同具慶より　壹封
一同公え　大原より　壹封
一大使一行え　柳原外二人より　壹封
一小松え　埜澤より　壹封
一富田租稅權大屬え　石川より　壹封
括七封
外新聞紙添

五四

八月二十日
（九月三十日）　柳原外務大丞等ヨリ岩倉大使一行宛

近日琉球使臣等來朝アルヘキ旨等報告ノ件

申八月廿日神奈川縣迄差立明後廿二日出帆佛ヲールガ船へ托ス
第三十二號大使一行え御用信案
以書狀致啓上候然は以下例文

一近々琉球使臣等來朝ニ付別紙（註一七四參照）の通正院より御達有之宮本大丞渡邊少記右接待掛被命候鹿兒島縣屆書是又御心得迄差進候

一花房大丞森山少記等朝鮮國え派出被命來九月初旬頃出發の筈ニ候其手續書別紙（註事項五參照）の通ニ候

一是迄日本國在留各國公使幷士官の者等え護衞の者被附置候處今般右廢止せられ彼各官へ懸合相成候右は皇國內平穩の一徵を表し候事ニ候

一外務省七等出仕川路簡堂大藏省七等出仕長野之教工部省七等出仕被命候

右の條可得御意如此候也

壬申八月廿日

外務大丞　宮本小一
外務大丞　柳原前光

大使一行御中

註「第三十二號入記」存スルニヨリ左ニ記ス

第三十二號入記

一公信　當省より　壹封
一全權大使へ　正院より　壹封
一鹽田大記え　村山德淳より　壹封

一安藤太郎え同人宅より　壹封
以上
外に新聞紙　壹束

五五

八月二十一日
（九月三十三日）　岩倉大使等（英國ニテ）ヨリ三條太政大臣等宛

近日蘇格蘭見物ノ爲出發スヘキ旨等報告ノ件

附屬書一、八月十四日英國外相ヨリ岩倉大使宛書翰
女皇ハ目下御不在中ナレハ還御ノ上速ニ謁見願奏聞スヘキ旨回答ノ件
二、自八月一日至同月十四日　略日記

壬申十月十一日到來

第十五號　西曆第十月十六日桑港開帆　米郵船便

明治五年壬申八月廿一日　從英京倫敦

壬申六月廿三日付第廿四號の公信當月十七日相達拜見致候先以

聖上益御機嫌克御巡幸被爲在各位愈御精勵御奉職の趣幷賀の至りに候且右公信にて御申越の件々逐一承知いたし候

英國女皇は先便申進候通來る第十一月の上旬には歸宮可被成哉の趣謁見の義に付此方より英國外務尙書え書通いたし候處此書通は和英兩文共寫先便差進申候此程別紙の通返書到來いたし候間卽右原文譯文とも差進申候

英國延遼掛りの案內に隨ひ來る廿三日頃より使節一同蘇格蘭の諸製造所幷有益の市府等爲見物倫敦出立凡廿日許の廻歷にて再ひ倫敦え歸り候積

新製大小禮服の義先便にも疎々申進候通政府より御下けの樣式繪圖を以西洋一般の禮服と照し合せ候處其裁縫に聊か異同有之候間佛國の服制に倣ひ些少の改正いたし卽ち別紙繪圖面の通に相成候間爲御心得申進候尤英國はしめ各國帝王えの謁見より諸禮典にも都てこの新製の禮服を相用候積

副島外務卿より御申越有之候辨務使俸給幷使臣館諸費交際費用の義は當節利通幷兩辨務使とも評議中に候間近々決議次第後便可申進候

略日記一綴差進申候間諸府各所見物の模樣等御讀知可被下候

右の趣可得御意如此御坐候也

大使　岩倉具視　花押
副使　木戸孝允　花押

副使　大久保利通　花押
副使　伊藤博文　花押
副使　山口尚芳　花押

三條太政大臣殿
參議
外務卿　御中

尙以第廿五號の入記に正院よりの御用狀二通と有之候へ共一通而已御封入有之右は入記の誤に候哉或は封緘の節御取落しに相成候哉御取調後便御申越有之候樣致度候

（附屬書一）

譯文寫

千八百七拾二年九月十六日　於外務省

正二位岩倉具視閣下

閣下幷に御同僚御連名（註　五二附屬書二ヲ指スモノト認メラル）當月六日付の尊翰併せて日本天皇より我　女皇へ宛閣下等を全權使節として派遣せらるゝを保證する御璽書譯文辱拜見いたし候扨は閣下等右璽書原文捧呈の爲め　女皇へ謁見御請求の條領承致し候然るに女皇陛下は當分蘇格蘭より御發輦被成さるへく尤其內ウヰンドフル城へ還御の上は閣下幷に御同僚謁見の義速に遂奏聞右時日刻限等は女皇御治定次第謹て御報知可申先は御答辭迄如此御坐候謹白

註　右原文綴込ミナシ　グランウヰル

（附屬書二）

申十月十一日到着
十五號附錄
八月朔日陰九月三日火値

午後パークスアレキサンドルの誘引にて當宮內省よりの招きを以てボクキンハム宮一覽として五使書記官相越す尤謁見の書可相越書記官のみ陪すへしとのことなり宮中女皇の化粧室臥房等は入るを許さす曰く女皇在時取ちらせしまゝなれは外人の見ることを許さすと宮殿の巍峨壯麗もとよりいふを不待しかれとも此を巴里の故チイレリー宮に比すれは一頭地を讓らさるを得すと導者既に自らいへり

八月二日晴九月四日水値

午後議院及議院中に在る法局等一覽ハークスアレキサントル導之書記理事官陪之此日午前佛權公使來見

八月三日晴九月五日木値

瑞西總領事其領事と共に來見す

八月四日晴金値

女皇謁見の義に付本國外務執政えの書柬福地源一郎持參す

第廿三號御國信到來

午後アリンスアルベルトロートに在る博覽會一覽ハークスアレキサンドル導之會長の一人マジョルドウイントン使節を迎へ案內し屬吏他の見物人を制し我使節と混行せしめす接待甚厚し所見奇技機巧一々枚擧にいとまあらず遂にカビタンフランクリンの寡婦を訪ひその園會（カルドンバルチー）の招きに應ずフランクリンは北極磁標の所在を探らんとして未檢の地に赴き終に所向を知らすといひし有名の航海者にして寡婦に財を費して其蹤跡を討求し再ひ船を發して終に其遺物を房中に羅列し又討求せんか爲に彼地に赴きし人物を繪せり其篤志知るへし遺物は時辰儀の空匣小刀鉛筆等なり此寡婦又曾て我國に來りしよしにて一室皆我國の器具を裝し茶を供するも亦我國風を習ひ我茶什を用ひ糖酪を加えす一好事人と見ゆ

八月五日晴九月七日土値

ウインドソルケストル一覽其結構壯偉園囿の設なといかにも人目を娛しむるは筆するに暇あらすハークスアレキサンドル導之書記官數人陪之此日白義公使其書記をして來らしむ曰く本公使以病氣蘭墩にあらす訪問を缺くを致す仍て已をして公使の名刺を通しその意を致さしむと

八月六日陰九月八日日値

無事

八月七日陰雨午後晴九月九日月値

ヂユークアガノールより來書あり先に訪問に預りしを謝す

八月八日晴九月十日火値

午前九字アレキサンドルアストン誘引にて五使書記共書館武庫（ウールウイチ）一覽に赴く途中ウエストミンストル橋畔にてパークスに會し同所より小火艇に乘してテイム河を下りウールウイチに至る蓋本府を距る事東八里にあり衆上陸の際武庫造丸局長迎接し門に入る門內魯西亞及支那に

て分取せし大砲等を列置す魯砲は砲口糜爛多く敵丸を受けたるを見る支那砲は然らす皆新に型を發するものゝことゝし以て其國人の戰に勇むと否とをトするに足るへし夫よりセネラルウード庫長同道造丸局に至る器機汽力を用るは勿論なれとも其機の大馬力二百五十を用ゆるに至る一日所造出彈丸最大なるもの三百斤にして三十五噸を造出すへしといふ其盛大推して知るへし其他造輪造桶藥桶製砲製車諸局を歷覽すその造作のいそがしき殆んと人をして敵四境にあるものゝことく疑しむ一使節其規模の大制置の盛なるを賞賛せしにウード答へて曰く畢竟皆人血を流さしむか爲のみ是豈文明國の宜しくあるへきものならん哉我最これを愧ずと乃ちウードの食堂に午餐の享に就く砲兵樂を戶外に奏す待遇甚懇摯なり此武庫中役夫八千人といふ薄暮歸館

八月九日陰九月十一日水値

午後王廐一覽アレキサントル誘之書記理事官陪之タマヨールの招きを以てメンションハウスにて晩食の享あり五使の外四書記陪之其接客の體大に古風を存し食事喫茶の時に至り大盃に酒を盛りて客主相對しこれを廻喫し又壽詞を述るの間女樂工をして風琴を彈せしめる杯頗る風俗の異るを見る

八月十日快晴九月十二日木値

此日ヘーコンヒルの烽火の義に於て操兵あるを以てハークスアレキサントルの誘に應し朝六字半出館大副使伊藤氏不作數書記一同ワートルロー汽站より乘車九字半クレトレー站に達す二騎兵豫め我曹の來るを待ちおれり乃馬車に先導す此地蘭墩を去る殆んと八十里英里然れとも操兵を見んか爲來る所の士女雜沓操場近傍の小岡皆充滿せり地平坦にして岡陵起伏す最操場に適宜あり我曹は別に一區の地を畫し其內にて見物せしめ其國の華族內眷抔のその內に容るを許す處なり其地の傍に旗杆を立大旗を揭く正午祝砲廿一响を轟す兵隊進行をはしむ之より先太子ウエルス公一小隊騎を率ひ本日の元帥チュークオフカムブリヂ女皇の從弟及各部將幷に各國より來り見る所の武職のものと皆馬を大旗の下に立兵皆列を整へて其前を過く步騎砲を幷せて凡三萬五千其整肅いふを不待最後その騎兵一萬を貳分して戰列をなさしめ凡そ一里を距るの地よりして疾馳蹂陣の勢をなす大凡諸將見物の前數十步地に至り一號令の下

一頓に蹄をとゝめ少參差なし最壯觀たり觀了り來路に從ひ歸館先是此地に數日の演兵あり兵隊を二分し彼我を分ち相戰はしめ戰略に熟せる將校其整列の遲速布陣占地の要否放砲縱騎の機に應するや否を見て雙方の勝敗を判す或は勝て凱を奏するあり或は座して囚虜となるあり此演兵數回に及ひ所費金額五十萬に越ゆ十萬ポンド本日はその雙部を幷せて整列行進せしものなりといふ（第十四號ノ誤カ）

此日第十三號公信を發す

八月十一日晴九月十三日金値

是班牙公使來見使節來國の期を問ふ

タメルセルホウル晩食の招あり五使の外書記陪之是當府の舊商會なるよし

八月十二日陰九月十四日土値

八月十三日陰九月十五日日値

無事

八月十四日陰九月十六日月値

外務執政グランウイルより女皇謁見の儀に付申入し書柬の報來る

五六　九月四日（十月六日）　柳原外務大丞等ヨリ岩倉大使一行宛

「マリヤ、ルス」號事件其後ノ經過等報告ノ件

第三十三號大使一行え御用狀案

以公信致啓上候已下例文

一第廿九號便を以申進置候秘魯國マルヤルズ船え乘組候清人受取回送の爲め今般理事官として陳福勳鄭少記と同船來着八月晦日出省致し爾來度々御待遇有之來る十一二日頃歸帆に赴き可申品川領事同道の筈委細は道臺懸合書委任狀幷今般處分の橫文公告書書簡寫等にて御承知可有之候右公告書は博く相送り候事に付御差送可相成筋御見計らひ御送り可被成猶不足にも候はゝ御申越可有之候

一米公使より同國諸港より我諸開港場え電信線陸揚の義申立候に付評議の上箱館一港丈陸揚差許候仍て御心得として往復書簡寫御廻し申候

一下ノ關償金の義に付蘭代任公使より別紙の通書簡差出候間寫差進候

一三十二號を以て申進置候琉球伊江王子其他附屬のもの別紙人名錄（事項七參照）の通り來　朝本月二日夜海路品川灣え來着西ノ久保毛利邸旅館に相成候

一本日上野景範當省三等出仕被命井田陸軍少將任領事候

一三十二號を以申進置候花房大丞其他隨行の者とも去月廿七日春日艦乘組朝鮮國へ出發いたし候

右件々可得御意如此候也

壬申九月四日

外務大丞　宮本小一
外務大丞　柳原前光

大使一行御中

尙々東京より京都迄電線掛渡の義寫差進申候

註　第三十三號ノ入記存スルニヨリ左ニ記ス

第三十三號

一大使へ正院より　貳封
一公信　壹通
一秘魯船米往復（七月卅日附第八月卅一日附八月十九日附九月三日附）　貳綴
　蘭公使往復　陳福勳一條　橫文公告書
一米國人電線陸揚　米往復（第八月十九日附第八月十八日附）　壹綴
一下ノ關償金　蘭公使書簡　壹通
一琉球人名錄　壹通

一池田政懋え石橋より　壹封
一田邊少丞へ廣澤より　貳封
一小松へ埜澤より　壹封
一山口へ平山より　壹封
一何へ太田より　壹封
一小松え山内より　臺封
一大使へ大原より　壹封
一御同人え三條公より　壹封
一東京より京都迄電線の義　壹通
一大使え岩倉三位より　壹括
外に新聞

五七　九月八日（十月十日）　大使隨行田邊一等書記官（英國ニテ）ヨリ宮本外務大丞等宛

清國雲南省獨立セル旨等報告ノ件

第廿五廿六兩號の公信前後到着披見いたし候先以海宇寧靜

聖上益御機嫌克被爲渉卿公御初御一同御無事御奉職の趣遙賀仕候此方大副使以下無異御休襟有之度候

聖上無滯御歸京相成候趣幷柳原吉岡君等御歸朝の條御申越

一々承知致候

大副使一同蘇格蘭各所巡覽の爲當政府案内に任せ去月廿八日當所發程卽今彼地に被留候小生留後被申付蘭墩府に滯留今便は別段可申進儀も無之よしに付正院幷卿公えの公信は差立不相成候

兼て御承知相成候哉不存候へ共清國雲南一省獨立いたし十七年前より中朝の號令を用ひ不申文秀と申ものを推して國王といたし此度隣國緬甸（ビルマ）に依賴し使節を西洋各國に差立候て旣に先頃迄當府にも罷在一の獨立國と被認候樣子卽今東國維也納に赴候よしに御座候柳原君御歸朝にては自然右委細の事情も承知に可相成とも存候

右に付支那龍動エキスプレス切拔入御覽候

自餘何も可申上義無御座候猶後羽萬可申上候也

壬申九月八日

田邊太一

宮本大丞樣
大原重實樣

尙以御同僚中宜布被仰通可被下候

五八　九月二十五日（十月三十七日）　柳原外務大丞ヨリ岩倉大使一行宛

「マリヤ、ルス」號事件其後ノ經過等報告ノ件

申九月廿五日出ス明日出帆佛ボルガ號へ托

第三十四號大使一行え御用狀案

以公信致啓上候以下例文

一澳地利公使歸國に付去る十八日內謁見有之廿一日米郵船にて出帆いたし候

一淸國理事官陳福勳秘魯國へ略買被致候淸民召連去る十三日橫濱港出帆相成候同人深く我仁義の所置を感し全國十八省へ可布告旨申居候右發足前謝狀さし出候則別紙の通に候此他は正院よりの送書に巨細を書し候得は今便餘に贅せす候

右得御意候也

壬申九月廿五日

柳原外務大丞

大使一行御中

註　「第三十四號入記」存スルニヨリ左ニ記ス

第三十四號入記

一特命全權大副使え正院より　貳封
一大使一行え　當省より　壹通
一大久保大藏卿へ松方租稅權頭より　壹封
一田中文部大丞へ文部省より　壹封
一田邊太一え山崎輝光より　壹封
一長野圭次郎へ山崎輝光より　壹封
一小松二等書記官へ埜澤鶴一より　壹封
一長野圭次郎へ同家族より　壹封
一富田命保へ石川巖より　貳封
一岩倉右大臣へ同正三位具慶より　壹封
一新聞紙　壹括
以上

五九　十月十日（十一月十日）　柳原外務大丞ヨリ岩倉大使一行宛
琉球使臣退京等報告ノ件

十月十日發ス佛フエス號
大使一行え御用狀案
第三十五號
以公信致啓上候以下例文
一琉球藩正使以下本月二日當地出發歸路伊勢大神宮參拜京都大坂見物の上歸國の筈に候且同藩へ當省より伊地知六等出仕堀江少錄等外二等杉山直達大藏省より根本七等出仕小林權大錄山崎中錄等出張被命來る十三日出發の筈に候

一琉球藩內附に付米國公使よりの書簡幷に我方よりの返簡寫爲御心得差進候委細は別紙（註 事項七參照）にて御承知可有之候

一魯國親王義已に長崎へ到着來十二三日頃には橫濱へ着港可相成旨兼て爲接遇出張いたし居候伊達從二位より報知有之候

一本月三日兵庫縣權參事櫻田親義當省六等出仕被命候
右得御意候也
壬申十月十日　柳原大丞
大使一行御中

註　右文書ト同便ニテ送致セラレタルモノノ「入記」存スルニヨリ左ニ記ス

入記
一正院より　壹封
一公信　壹封
一山口尙芳え平山又一より　壹封
一五辻式部助え宅より　壹封
一小松二等書記官え埜澤鶴一より　壹封
一新聞　壹括
以上

六〇　十月十四日（十二月十四日）　大使隨行田邊一等書記官（英國ニテ）ヨリ外務大丞等宛
書記官ヨリノ報告ハ唯職掌上ノ事ノミニテ緊要ノ件ニ亘ラサル次第諒解アリ度旨申出等ノ件

明治六年一月七日受取
廿六號已下卅號迄公信陸續到來披見致候先以
聖上益御機嫌克御巡幸被爲濟東京還幸の趣拜頌此事に御座候次に卿公御初各位愈御精勵御奉職遙祝の至存候此方大使初一行一同無異御休神被下度候

一先便迄の通大使初蘇格蘭巡覽の所當月九日倫敦着相成候到處款遇優待米邦に相違無之此所御安意被下度候

一當國政府引合向も近々下手可相成委曲は大使より卿公え被申進候

一渡邊少記歸朝米邦政府引合向の概略卿公より

朝廷え御建言相成候段承知仕候然る處同人持歸り候書類和文而已にて英文無之間寫可差進旨御申越には候得共最前華盛頓府引合の節は書記官陪席不致ブルックス引受對話筆記仕候に付英文筆記を本といたし候事にて右は兩副使歸朝の節既に被持歸卿公にも御承知本省えも御下け可相成事と存候爾後は談判の節書記陪席筆記致候樣相成候間ブルックスも筆記はいたし候へ共全く一時校正の資といたし候迄にて都て書記官筆記の方を正といたし候事故和文而已差進候筋に御座候右は渡邊少記にも其事情承知致居候筈に御座候且フルックス筆記の方は兎角粉飾多く其實に不適儀も有之旁此方にては專ら書記筆記の方を相用申候將又條約草案に至り候ては固より差上候憑書訓條の趣に基き談判御座候事なから談論の驅引臨機の應答により一時取捨出入の廉も有之其結局に至り不申ては畢竟定案とは難申間未た結果に至り不申內は其實一々申立候も却て御疑慮の種事と相成候迄故都て不申進候事にて今般渡邊少記歸朝の節右草案持參候も全く大凡の處申進すへき爲にて固定案と申譯には猶數次の議論を經可申の處兩副使再度來米議論中變大にて革面候上は夫迄の議論も草案も悉く一ケの反古に歸し候事に付最早

英文草案差進候にも及不申候儀と存候公便にも右等は都て差進不申候間可然卿公え御申立有之度存候

一此迄御用狀中中進候條兎角平々汎々の事而已使節引合筋聞繋の談判不申進遣外使臣の職掌に無之哉の趣御申越愕然の至存候右は前文にも申進候通條約談判の儀は結末に至り不申候ては難申進事情御座候は勿論其他の事共も多少は正院御用狀中にて御承知可被成儀私共より本省え申進候儀は全く書記官職掌上の事而已に御座候間固より平汎の事より外可申進儀無之且條約談判に不渉樣議論一變の後は猶以可申進樣の引合向は有之間敷被存候間左樣御承知卿公えも可然御申上被下度將又先達以來正院外務卿連名にて使節方より御用狀差立相成候上は重複の儀申進候も無益の至に御座候間別段各位は不得御意候事も有之候得共同般の儀に御座候間是又御含被下度候

一柳原少辨務使歸朝兼官被免候趣幷淸國政府談論の結果復命概略本省伺の件々吉岡少記免官朝鮮御處置振とも一々承知いたし候

一白露國船の儀に付云々別紙の趣是又承知使節方え委曲申述置候

一荷蘭公使歸國被命候趣卽同人先日中當府着大使巡行留守中に付待受居着府の翌日面話有之本國え巡聘の節心得方抔聊談話御座候樣にて卽夜本國え發足いたし候

一七月二日附公信は次便御返答可相成段承知いたし候

一第卅一號公信唯今到着此又次便に此より御返事可申上候

一第一號公信行違に相成一旦御國迄戻り候よし全く在佛公使館取扱不行屆候儀に被存候委曲使節方えも申立置候品物目錄夫々慥に落手仕候

右前數號公信御報旁可得貴意如此御座候也

壬申十月十四日　　田邊太一

外務大少丞御中

尙以折角時下御自愛奉願候

追て當表幷巴里ゼネワ亞米里加等に取立候バンク（南貞助等取扱也）潰れに相成金子相預け候もの使節一行を初め生徒等にも多分有之迷惑の至に御座候

六一

十月十五日（十一月十五日）　岩倉大使等（英國ニテ）ヨリ三條太政大臣等宛

文部省雇入外國人ハ目下人選中ナル旨等報告ノ件

附屬書一、各國在留辨務館入費定額ニ關スル調書

二、十月岩倉大使等ヨリ三條太政大臣等宛書翰寫

英國貴族三人訪問アルヘキニ付然ルヘク配慮アリ度旨ノ件

三、自三月二十四日　至四月二十八日　略日記

四、自八月十五日　至同月二十七日　略日記

第十六號

明治五年壬申十月十五日　　英郵船便

英京倫敦

第廿五號廿六號廿八號廿九號卅號公信拙者共英蘇各所巡歷中追々落手致披見候先以

聖上益御機嫌克御巡幸無御滯東京還幸鳳輦到處士庶欣迎頌聲越途の趣無彊太平の兆と一同奉抃頌候各位愈御精勵御奉職是又欣賀の至存候各號中御申越の件々逐一領承致し候由利公正免職被仰付候儀に付云々御申越右は先達て拙者共渡英の節米邦へ差殘し置新約克府市政取調の爲滯在候處引續當府到着いたし當府下取締向等調居概略相濟候に付既に歐洲大地に發足仕候佛普魯等迄も相越候積に就ては到處政府

へ辨務使より夫々懸合爲及置候事に付今更免職の儀表向申渡候ては聊不都合被存候間宣旨は一と先拙者方に差置不日同人歸來候筈候に付其節相渡し歸朝の義も可申渡存候左樣御承知被下度候岩見鑑造義は勿論同樣取計候事に候

文部省於て顧問の外國人御雇入の儀に付同省建議寫御廻し御申越の趣承知致候右は當三月中公信を以て御申越の趣に基き滯米中より夫是心懸け居既に米邦於て一人を得候へ共兼て同國人共御雇入給料過分に被存候間右に見合候節は莫太の事に可相成に付未た約定不致歐洲渡航の後猶其人を得候へは右約定を取極其上米人に及候心得を以現今搜索中に付自然延稽候事に有之候乍然卽今田中文部大丞日耳曼地方滯在粗人物の心當りも有之候趣に付不日決定可及尤田中文部大丞よりも委曲申上候事と存候

朝鮮國御處置振幷淸國政府御引合の云々柳原少辨務使建議外務省伺の趣とも委曲領承致候朝鮮の義にては種々の訛傳も有之新聞紙等に彼是申觸し候に付外人より時々詰問も不少申迄も無之候得共爾後御處置振に付衆議御一定の節は爲心得委曲御申越有之候樣致度候且又御國電標既に成功相成候分は何地より何地迄凡幾里間に有之候哉將未た成功不相

成分も何年頃には成功の御見込に御坐候哉是等に外人の應答に不都合無之樣一々御報知有之度鐵路も同樣の事に候間御含御申越有之度候

當國政府引合の儀は女皇巡幸中に付先差置各地巡歷の方より下手英蘇各府工場市場巡覽去八月廿七日より相始め當十月九日歸府致候到處何れも懇切の待遇を受候事米邦滯在中に相違無之全く御國威に依候事と一同感戴仕候事に候傳問(マヽ)の趣にては女皇も當十七日頃歸京可被致由左候はゝ謁見も不日相濟可申隨て引合向も追々取懸り可申心得に御坐候

新製禮服の儀利通博文再度渡洋の砌御布告相成候條御達し御坐候に付固より着用可致心得にて候得共先便より度々申進候通右等の儀は中外一致不申ては不都合不少候間猶寺島辨務使より爲念外務省まて問合爲及候處右答信の趣分明に無之事情通し兼候乍然此方にては最前御達面に基き表向禮式の節は新服着用可致心得候條御承知有之度候

各國在留辨務使館入用定額の義兼て森鮫島兩辨務使見込申立の趣も有之猶寺島辨務使にも及商議實際吟味の上幸吉田大藏少輔も當府滯在候間熟と商量致し別紙(附屬書一)の趣に議決候乍然創新の事聢と見据も付兼右にて永世不刊の典とは難申候へ共先暫時相試候樣致度存候可然廟議有之度候

當國貴族三人御國へ爲遊歷不日出帆可致に付當外務卿依賴の趣を以サパークスより示談有之具視より添書いたし呉候樣申出即別紙(附屬書二)寫の通相認め渡置申候同人共航到の節は右添書にて御了解可相成義には候へ共橫濱着港をはしめ所々遊覽の折も相當の御接遇有之度右の段外務省神奈川縣其筋へ預め御達置被下度候

大使隨行權少外史久米邦武儀萬事鞅掌に付當九月より月々洋五十元增給申渡候間其段大藏省え御達し有之度候

宮內理事官東久世通禧大使隨行式部助五辻安仲幷宮內省(原註)元ノマヽ隨行の心得申渡置候高辻修長香川廣安事務取調概略相濟當月八日佛國巴里發足天竺通り歸朝いたし候然る處宮內省理事官隨行同省大丞村田經滿義は免職の上自費を以佛國留學致度旨願出猶巴里滯在罷在右は拙者共限り承り屆候筋に無之候間廟議の上可然御指揮有之度候

各省理事官幷隨行の向取調事務も追々捗取候に付當年中取纏め歸朝可致樣申渡候是亦御承知有之度候

右前書數號の貴答旁可得御意如此御坐候以上

全權副使　山　口花押

全權副使　伊　藤花押
全權副使　大　久　保同
全權副使　木　戸同
全權大使　岩　倉同

三條太政大臣殿
參議
外務卿　御中

尙以略日記未た御落手不相成趣即今便差進申候且八月中略日記をも差進候蘇各蘭巡歷中の分は未た淨騰(謄カ)出來不致次便に讓り申候也

荷蘭公使歸國被申付候よしに付拙者共不在中當府にて歸着待受居即當月十日面會いたし候

(附屬書一)

各國在留辨務館入費定額左の通

官員給料

一大辨務使　一ヶ月　二千圓
一中辨務使　同　一千七百圓
一少辨務使　同　一千五百圓

右月給內を以飮食薪水汽燈婢僕給料及宴筵入費在留府內出行馬車料等一切相賄可申事

辨務館帮辨の爲外人雇入候節は右給料別に支派すへき事

但定雇の分は其人名品行所役の職掌給料の多寡を疏し外務省伺の上可取計尤臨時雇入の分は不在此限候事

辨務使公用を以在留國內及他國え旅行候節入費及不時費消の分は別に支派すへき事

辨務館內公用筆墨紙一切文房具及公信傳信機等の公費此亦別に支派すへき事

一辨務館一等書記　五等相當　一ヶ月四百五拾圓
一同　二等書記　七等相當　同　二百八拾圓
一同　三等書記　八等相當　同　二百貳拾圓

右の外家屋賃借料として一歲三百圓つゝ支給すへき事尤辨務館內に在任するものは不在此限候事

一書記試補　等外　一ヶ月百五拾圓

右は辨務館內に在任せしむるにより別に家屋料を不給事

右の給料を以自分飮食婢僕等諸費に充尤公用により府

內出行馬車代及旅行等の費は別に支派すへき事
一等書記一時權に少辨務使の職掌を代任する時は一ケ年三千圓の割を以支給すへし就ては右勤務中公用馬車代は辨務使同樣に心得別に支給せさる事
二等書記一時權に一等書記の代任を心得る時は別に給料を增すことなしといへとも更に少辨務使の任に代るにあたりては一等書記代任と其給料を同ふすへき事
旅費支度料（御國發程及歸朝）及別段賜金は都て此迄の通たるへき事
辨務使及辨務代任書記以下醫療藥代は總て官より支給すへき事
右の通一定相成辨務使已下在勤中御國おゐて官祿支給可相成候事
一辨務館借料家具（附）固より公費に屬すといへとも一歲三千圓に過へからさる事
一辨務館書記及試補等其所任の國々により事務の繁簡に從ひ增減可有之尤外務省の指揮を可奉事
一辨務使及附屬官員勤期滿三年たるへき事

（附屬書二）

大使添書の寫

聖上益御機嫌克恐悅至極奉存候各位愈御安全御奉職欣然に候然は我々一行英國商法幷製造所等見物として當政府より日本公使パークス及ゼネラルアレキサンドルを以て案內英蘇兩部有名の地大抵不殘巡歷致候萬事懇切の仕儀御座候段別信にて委曲可申入候然るに右旅行中外務宰相グランウヰル氏よりハークス迄書狀到來近々グロスウナルの亞爾スタフホドの馬爾斯及ひ勞爾德のシヤム氏の三貴族ドクトルグート氏同行にて支那日本邊巡航に付御國に於て可然官員え添書致呉候樣申來るに付右の一連日本え（原註本ノマヽ）御心副られ諸方誘引其他細大の應接共都合宜敷樣御賴談仕候我々一行當地巡歷に付きては貴族中族共商社工社の人により親切の接遇に預り候是も畢竟
天皇陛下の御聖德故と奉存候尙右貴族巡歷に付ては不都合無之樣遙に希望仕候此段申入候也

壬申十月　　特命全權大副使

三條太政大臣殿

副島外務卿殿

（附屬書三）

第十六號附屬

三月廿四日ヨリ廿七日迄記スル足ル事ナシ
三月廿八日立夏（西曆第五月五日）晴無記事
廿九日晴無記事
四月朔日晴午後正院及外務省へ公信第六號ヲ發ス（新聞略日記附ス）
此日炎熱計溫器八十六度ニ昇ル
三日晴熱甚シタ第六字大副使以下書記二人及森辨務使國務卿非西氏ノ招ニ應シテ其家ニ饗セラル
四日晴午後第一字細（ヤシ）約府私築女學校ノ生徒六十有餘人來リテ使節ニ謁ヲ乞フ生徒ハ齡十六歲ヨリ其尤モ長ナルハ三十許ニ至ルアリ此校ニ於テ每歲夏日休業ノ間教頭所養ノ生徒ヲ率ヒテ諸府城ヲ巡行シ深窓ノ少艾ヲシテ各地ノ風俗形勢ヲ知ラシメ兼テ旅行ノ辛苦ヲ嘗メシムルト云フ然レトモ聯邦中部ノミニシテ渡洋ノ長征ハナサヽル由ナリ生徒中間日佛等ノ外語ヲ善ク解スル者アリ須臾ニシテ散ズ
八日晴吉田淸成大鳥圭介ウイリヤムス由良本多及留學生徒數輩桑港ヨリ入府シ來リテ使節ヲ見ル
十一日晴府中優妓「ケイト」ナル者使節ヲ新劇場ニ招待セリ

十七日晴此日當府ノ市兵整列アルヲ以テ午後一字半大副使以下招ニ應シテ調兵場「マロンビヤ（マヽ）　アルモリー　グラケンド（マヽ）」ニ抵ル市兵步七百騎二百砲三座裝服ハ各種ニシテ其制一ナラズ運動一時間ニシテ畢リ騎步砲ノ三兵次ヲ以テ行進使節ノ前ヲ過キリテ出場大頭領（マヽ）自殿ニ趣ク時ニ總督齡凡五十有餘金裝肅々肥馬ニ跨リ衆ニ先チ來ルヲ見ル其近クニ及ンテ初メテ我輩平生所知ノ裁縫舖ノ主人タル事ヲ認メ衆相視テ愕然彼當ニ兵事ヲ說カズ又武風ヲ帶ビス純乎タル一小市人タルニ俄ニ華府市軍三兵ノ總帥タル事我輩ニ在ツテ一奇事ト謂ツベシ此翁「ヲーウコン」ト名ク南北戰爭之際在軍屢功アリ就中密河ノ夜擊ニ偉勳ヲ奏シ感狀數通ヲ得戰歿ンテ後戎兵ヲ解キ市人ニ齒シ裁縫師ヲ以テ業トナス然レトモ一日一事アレバ當ニ市兵ノ總督ニ任セラルト云歸途「ワシトンクラツブ」ト名クル會游場ニ趙フ此ノ屋ノ築造壯大ナラズト雖トモ極メテ淸潔樓三層ニ小房若干アリテ轉丸角棊奏樂踊舞讀書飮食ノ用ニ供ス市人會社ヲ結ビ之ヲ築キテ閑暇ノ日相集ツテ此ノ處ニ縱游スル乃自己ノ家屋ニ齊シキ者ナリ第四字半歸館ス
十八日晴夜兩副使木大公招ニ應シテ劇場ニ抵ル

廿日晴此夜三條公ヨリ傳信アリ森辨務使ニ全權委任ノ事不分明再報ヲ待ツト云々

廿二日晴午後四字半ヨリ大副使以下招ニ應シテ「セネラル」「マヨル」氏ト「ブリツクハウス」ト名クル一幽地ニ游ブ此地ハ府ヲ去ル六里許北東ニアリテ地勢高隆華府ヲ一望ノ中ニ望ム其他四面ノ遠山迤委往年南兵都ニ迫ルノ區地歷々指ス可シ府知事「クツク」氏同行我輩ノ爲ニ地經ヲ說ク詳ナリ八字半歸館

廿四日陰此日往年南北之亂ニ戰死セル者ノ祭魂日タルヲ以テ大副使以下モ招ニ應シテ此ニ會ス祭場ハ府ノ東南二里許ニアリテ「アルリングトン」岡ト名ク華府トポトマツク河ヲ隔テ斜メニ相對ス乃チ亡卒埋葬之墓土十一字過キ衆祭場ノ壇ニ登リ諸省ノ長官數輩祭文ノ演舌アリ議員「バンクス」氏ノ演文中ニ我國往歲ノ變ヲ引キテ辯論セルアリ（譯文別ニ記載ス）大頭領モ亦之ニ會ス祭儀二時間ニシテ畢リ驟雨急ニ來ル第四字頃歸館

廿五日ヨリ廿八日ニ至ル迄記載スベキ事ナシ

（附屬書四）

第十六號附屬

略日記

八月十五日晴第九月十九日（七カ）火値

午後アレキサンドル案內にて府中小童學校一覽あり在校の童子現に百五拾餘名ありといふ

當國學政監督ラーリー氏より書柬を添自著の書數部を呈す

八月十六日陰第九月十八日水値

午後アレキサンドル案內にてロントンタウル古城竝驛遞寮傳信局一覽あり大副使以外小松翟盛杉浦弘藏久米邦武陪之パークスは事あるを以て途中にて待受同道せり此古城は舊史中にも其名著しく古昔囚獄の跡なと嚴然猶存そのいにしへを追憶すへし宮園テームス河の源に沿て綠樹蔥然所設長馳道なるものあり此古宮結構の壯麗等は衆人の分る所なれはこゝに縷記せす

八月十七日晴九月十九日木値

第廿四號公信到着

午後三字は水精宮遊覽アレキサンドルパークス、アストン誘之杉浦弘藏久米邦武陪之同所にて晚餐あり夜に入烟火技を一覽歸館殆んと十時に至る此所は先年博覽會の舊趾にして今猶奇禽異獸海魚等の見せ物あり歌吹の場舞踏の堂奇技淫巧の賣物備らざる處なし皆以て人の耳目を樂しめ人の智識を博むるに足れり

八月十八日第九月廿日陰金値

午後一字より五使節ハークスの居宅に尋訪あり同所にて午飯の供あり夫より同人案內にて當國宮內卿某の村莊に至茶菓の設あり陪者杉浦弘藏

八月十九日陰第九月廿一日土値

無事

八月廿日九月廿二日陰日値

無事

八月廿一日九月廿三日晴月値

大久保山口兩副使造幣寮一覽あり

八月廿二日第九月廿四日微雨火値

午前木戶副使中學校及刑法局一覽あり

午後大久保伊東兩副使大藏省一覽吉田大藏少輔隨す書記數名陪之

第十五號公信を發す

第廿五號外務省よりの公信到着

八月廿三日朗晴九月廿五日水値

本府司法省より木戶副使招待あり以病辭之

八月廿四日陰九月廿六日（木カ）火値

此夕當府市尹より晚餐の宴有之五使外臨田福地何林陪之

八月廿五日雨九月廿七日（金カ）木値

木戶大久保伊藤三副使ブリツセミチエム一覽書記數名陪之

八月廿六日曉雨午晴九月廿八日土値

無事

八月廿七日晴九月廿九日日値

午後四字使節一同蘇格蘭巡歷として發程アレキサントルパークスアストン案內たり書記隨者何禮之林董杉浦弘藏以外久米邦武等なり大鳥圭介も願を以て隨從す但山口副使は微恙あるを以て明日發程の積書記田邊太一安藤太郎留後の命を奉し臨田三郎福地源一郎小松翟盛皆養病の故を以て不從

六二　十月二十四日（十一月二十四日）　柳原外務大丞ヨリ岩倉大使一行宛

書國親王參朝アリタル旨等報告ノ件

十月廿四日達但本野持參

第三十六號大使一行ヘ御用狀案

一今般大中少辨務使大少記被廢公使書記官等級被定候ニ付田邊殿外五名ゑの新宣旨七通野村殿鹽田殿舊宣旨三通都合拾通差進候間御配達可被成候其等級は別紙にて御覺可被成候

一魯國親王去る十三日橫濱來着卽日上陸有栖川宮其他接待掛官員一同前日より出濱十六日汽車にて延遼館ゑ着翌十七日第一字參朝翌十八日朝第十一字延遼館へ

臨幸被爲在廿一日魯親王參朝御同車にて櫻田外操練場へ

臨幸陸軍練兵式

天覽有之右終て魯親王幷各國公使參朝

皇后も御臨席被爲在親昵の御接待百事御都合よろしく候

一本野租稅助去る十四日一等書記官被任英國龍動府在留被命來廿六日佛郵船に乘組出發の筈に候

一中山租稅權頭義惣領事被任伊太利國ベニーズ在留被命候

一品川領事外二名ゑ今般別紙の通分轄被仰付候間寫差進候

右得御意候也

壬申十月　日

柳原大丞

大使一行御中

註　右文書ノ入記存スルニヨリ左ニ記ス

第三十六號

一公信　柳原大丞より　壹封

一田邊安藤ゑ　鹽坪より　壹封

一岩倉殿へ　三條殿より　壹封

一鹽田大記へ　村山德淳より　壹封

一小松書記官ゑ　埜澤鶴一より　貳封

一田邊太一ゑ　鹽坪より　壹封

一長野桂太郎ゑ　同人宅より　壹封

一小松へ　渡邊より　壹封

六三　十月三十日（十一月三十日）　柳原外務大丞ヨリ岩倉大使一行宛

近況報告ノ件

十月晦日附にて十一月二日神奈川ゑ達す英船サンダ

大使一行ゑ御用狀案

第三十七號

例文

一魯國親王幷附屬とも去る廿三日朝延遼館引拂橫濱表止宿

廿五日同所へ

臨幸親王と共に龍驤艦へ御召にて艦隊の行軍式

天覽有之廿六日親王箱館表へ出發相成候事

一去る廿日上野景範辨理公使に被任米國華盛頓在留被命候事

一廿八日矢野次郎二等書記官に被任上野ゑ隨行被命候事

一遣外派出の公使領事に隨行する判任官のもの別紙の通職制改置相成候間寫差進申候

右得御意候也

壬申十月晦日

柳原大丞

大使一行御中

註　「第卅七號入記」存スルニヨリ左ニ記ス

第卅七號入記

一山口氏ゑ　平山又一より　壹封

一公信　當省より　壹封

一小松氏ゑ　山內昇より　壹封

一ブルークスゑ　サンフランシスコより　壹封

一富田氏ゑ　石川巖より　壹封

一安藤氏ゑ　上柳久徵より　壹封

外に新聞　一括

以上

六四　十一月六日（十二月六日）　岩倉大使等（英國ニテ）ヨリ三條太政大臣等宛

英國女皇ニ謁見シタル次第等報告ノ件

附屬書一、十一月五日英國女皇謁見ノ際ノ口上及女皇ノ答辭

二、十月二十二日、同二十三日大久保大藏卿等ト倫敦東洋銀行間ノ金子借用ニ關スル往復書翰寫

三、英國留學學生ノ學費立替方ニ關スル書翰寫

四、自八月二十七日至十月九日　英蘇巡歷ノ略日記

第十七號

明治五年壬申十一月六日

法郵便

從英國倫敦

第三十號第三十三號公信去月廿二日及本月二日兩度に到着致披見候先以

聖上益御機嫌克臨御被爲在海寓平寧各位愈御精勵御奉職の趣遙頌此御事に御座候鄙職一同無事奉職罷在候間御放懐被下度候

米邦發程の砌撰斯東府より差立候第十一號公信御落手相成右書中申進候廉々御承知の旨領承いたし候

朝鮮國の義云々の事情委曲御申越承知致候此上にも適宜の御措置有之候樣奉祈候

玉乃權大判事負傷の次第驚入候乍然先療養も行屆可申段安心の至御座候

江藤司法卿疾發航の積候處御用多に付右隨行の官員而已先發相成候條承知致候右官員共本月朔日既に巴里府到着の趣同所辨務館より申越候へ共未た此許着不致候不日面會の節御國朝野の近況可承と存居候

横濱東京間鐵道落成に付右開業式被爲擧　臨幸も有之中外士庶縱觀空前絶後の御盛擧候條萬里外於ても其開明の氣象想見候程の儀來示の通り寔以御同慶御座候

去月十五日附第十六號公信中粗申進候通當國女皇も彌以歸

府相成外務卿より謁見の案內申越卽昨五日第一字ウインドソル宮城於て謁見國書呈上無滯相濟爾後於列席午餐の饗を被賜至極鄭重の事共且當九日には太子よりも夕宴の招待を蒙り罷越候積に御座候謁見の節口上幷女皇答諭は別詞(原註)第一の通有之候馬關償金及橫濱兵隊引上け方談判の儀は先達て女皇一同當外務卿歸府(註一)及候に付早速去月廿二日尋問及ひ粗端緖を開き引續き廿七日(註二)再次の接話に及ひ談判の末此方書取相渡し置候今日第三次の會話彼方より申越候間必然決答の次第も可有之と存候得共郵期相迫居候に付今便には難申上何れにも談判了局し後委悉次便可申上候就ては當國御用筋も先相片付可申に付當十一二日頃には法國へ向け發程候心得に御座候左樣御承知被下度候

當府開店の銀舖アメリカン、ジョイント、ナショナアルバンク方に是迄御國官員及留學生徒等多分金子相預け置候處鄙職來英の後理事隨行の官員等も往々預け金致置候豈圖ん近日資本不足終に閉店に至り追々吟味の末彌分散にも可至勢に付右預け金致候もの一同當惑におよひ候幸吉田大藏少輔當府滯在に付篤と示談の上利通兩人にて連名鈐印いたし大藏省名義を以當府東洋銀行社中より英金壹萬五千磅借用致

隨行官員の分は此方にて取扱生徒の分は辨務使にて爲取計夫々資給拜借爲致目下の急相救置候右は全く不慮の災にて難澁のもの不少且右借用金高而已にては猶普給及兼候得共無據次第に御坐候右の段大藏省へ御沙汰被下度及右借用に付往復寫別紙(原註)第二差進申候尤委曲は吉田大藏少輔より申上候事に可有之候

八月來御差立の公信追々來着一々披見致候所旣に撰斯東發程の砌差立候公信第十一號御落手相成却て華盛頓府發途の節差出候第十號公信は未た御落手不相成趣右は米邦於て條約談判結局の模樣現今將來の御都合相計り海外結約の方略を改め再ひ最前の御趣意に立戻り御國開帆の節御渡御坐候國書相用歐洲歷聘可及積一同商議の上決着仕候始末等委曲申上候ものに有之候間爲念今便右寫別紙(原註)第三(註三)奉差上候一體右公信相托候米邦船は多分西曆八月一日桑港出帆のものにて彼橫濱於て燒失及候アメリカ號と被存候間自然紛失候も難圖もし此公信到着の節迄右十號着不致候は丶別紙寫の分本書と御認成被下度奉存候

當國生徒學費立替方等入用に付別紙(原註)第四寫の通金子渡方の儀寺嶋大辨務使より申立無據事情と被存候間其段承屆吉田大藏少輔方より爲相渡申候是又大藏省へ御沙汰被下度候

右は三十號三十三號兩信の御報幷近況申進度如斯御座候也

特命全權副使　山　口
特命全權副使　伊　藤
特命全權副使　大　久　保
特命全權副使　木　戸
特命全權大使　岩　倉

三條太政大臣

參　議
外務卿　御中

猶以昨五日謁見の砌先般御定め相成候新禮服着用致候爲御心得申進候事

英蘇巡歷中日記別冊(原註)第五差進申候

豐原百太郎外六人大藏省出仕を以英國傳習被　仰付候所改て同省派出生徒の心得を以修業致候樣別紙(原註)第六(註四)寫の通申渡候此又大藏省へ御沙汰有之度候

註一、右文書ハ他ノ記錄ニヨレハ明治六年一月二十七日到着セルモノナリ

二、十月二十二日、二十七日、十一月六日ノ對話ニ關シテ

ハ夫々九四、九五、九六參照
三、別紙ハ三九ト同文ニツキ省略
四、別紙寫綴込ミナシ

（附屬書一）

第一

壬申十一月五日西曆千八百七十二年第十二月五日　午後第一字ウヰンザー城ニ於テ女皇謁見ノ節口上

我天皇大業ヲ中興シ國政ヲ修整セシヨリ外國ノ交際ヲシテ一層親密ナラシメン事ヲ欲シ特ニ我等ヲ特命全權使節ニ任シ陛下ノ朝廷ニ至ラシメ今日陛下ノ引接ヲ辱フシ面アタリ我天皇ノ手書ヲ拜呈スル事ヲ得ルハ我等ニ於テ無限ノ光榮ナリ仰キ願クハ兩后兩國ノ交際益厚ク益固ク天地ト俱ニ渝ル事ナカラン事ヲ我等在留ノ際親シク貴國文明強盛ノ實ヲ睹其利ヲ得ル事多ク又陛下ノ政府及國民ヨリ所受ノ懇遇亦渺カラス我等日アラスシテ此國ヲ去ルヘキヲ以テ幷ニ陛下ニ謁見スルノ期無キニ依リ此序ヲ以テ其謝詞ヲ述ヘ兼テ陛下ノ壽昌ヲ祝シ將タ貴國ノ安寧ヲ祈ル

女皇ノ答辭

天皇陛下ニ於テ兩國ノ間ニ存在スル友誼益厚ク益固ク渝ラサラン事ヲ欲シテ特ニ卿等ヲシテ之ヲ予ニ傳ヘシメ賜フ其誠意感悅スル處ナリ卿等歸國ノ上ハ君上ニ傳ヘラルヘシ予ニ於テモ極メテ陛下ノ希望シ玉フ處ニ同意ナリト切ニ願フハ陛下ノ善政ニテ貴國彌繁昌シ隨テ兩國ノ貿易彌擴張セン事ヲ將又將來日本ノ政務ハ其方向將ニ西教ヲ奉スル諸國民ノ親重ヲ得ルニ至ルヘキヲ信ス

（附屬書二）

第二

千八百七十二年第十一月廿二日於倫敦東洋銀行

玆に謹て一萬五千磅の手形を封入し差出候間御調印可被下就ては次條の取扱方兼て御承知有之候樣相願候

第一　此金子は日本政府の爲に御借受可相成貴君卽ち政府の御名代に候事

第二　此手形は何時にても差出次第可相拂と有之候得共十二ヶ月以內には日本政府へ御渡方の儀申立間敷但日本政府より此期限前に御拂方御望の節は格別の事

第三　右の御借入に相成たる金高丈けには利足相掛り可申其利足高は英國會社取極め割合より一分の百分の一上

に可致且決して五分より以下に無之候事

第四　右の金子は御入用次第田中君の印紙を以て御貸渡可仕御同人の御花押は此手形に御印鑑御加有之度事

右の箇條の約定に隨ひ此手形に御調印の上御返却被下候樣相願候也

頭取シー、ゼー、エフ、スチユアルド

大久保閣下
田中殿

千八百七十二年第十一月廿二日倫敦ト吉南寓館に於て

壹萬五千磅の手形に調印可致ため右御封入の貴翰只今落手御申越のヶ條逐一領承致候尤此手形へ田中調印可致段御申越有之候得共吉田清成義當府に滯留致し相當の職掌に候間同人の調印に取直し申候乍併右金子受取方は田中の印紙にて取計可申積に候也

大久保利通

東洋銀行頭取シー、ゼー、エフ、スチユアルド殿

千八百七十二年第十一月廿三日於倫敦

拜啓陳者貴君幷吉田大藏少輔御調印紙封入の貴翰慥に落手右壹萬五千磅の金子儀は田中戶籍頭殿の御印紙を以て取計可申樣別勘定に致し置可申候以上

東洋銀行社長　ヤンネン

大久保大藏卿殿

（附屬書三）

第四

覺

一墨銀八百三十三弗四十錢
　右廣島縣生五人當年二ヶ月分
一同　五百弗
　右小倉縣生當月後六ヶ月分
一同　六百六十六弗七十二錢
　右ハ官費生ノ內前田利嗣服部潛藏兩人學費不來ニ付右兩人四ヶ月分
一英貨千五百封度
　右ハ凡ソ六ヶ月間生徒ノ內歸　朝ノ者路費手當
一同　一千九百七十封度十三シルリンク七ペンス
　右ハ惣代ヨリ差出シタル負債ノ高

〆英貨三千四百七十封十三シルリンク七ペンス
墨貨二千弗十二セント
此英貨四百五十封度六ペンス
總シテ英金三千九百二十封度十四シルリンク一ペンス也

一英金三千九百二十磅十四シルリンク一ペンス
別紙寺島大辨務使より差出當國在留學生の爲卽今相渡候樣申出一同評議の上無餘儀事情に付可相渡決定致候間同人へ右金高御渡相成度此段御達申候也

十一月廿七日　　特命全權大使

吉田大藏少輔殿

別紙書面の通當國在留の書生等を致管轄候に付ては卽今御渡被下夫々處分仕度尤精細勘定書等は拙者より本邦大藏省へ直に差出可申返濟或は渡切等の處置は大藏省於て結局相着候樣可申越候事

壬申十一月廿七日（註　日附ハ太陽暦カ）

寺島大辨務使印

全權大副使殿

（附屬書四）

第五

第十七號附屬

略日記

英蘇巡歷の記

我八月廿七日日曜晴天夕に霧を起し雷雨頃刻にて霽る英政府の案內にて大副使四名書記官何林杉浦の三名及ひ理事官吉田清成田中光顯凡九人「パークス」「アレキサンドル」及ひ「アストン」の接伴にて別段の車に乘し倫敦の「ユーストン」汽車驛を發し「リバプール」に赴く距離二百一「マイル」四字に發し十字に達す

廿八日月曜雲陰濛々として小雨す十二字半より駕し府廳（クヮンシホール）に往き「スピーチ」を取代し商社會議所（エキスチヂヲフルーム）に至り歸て旅館前にて消防調練を觀る夕七字より府廳に赴き享宴あり會食百六十人樂を奏し歌を諷し「スピーチ」あり十二字に徹す當府は米州往來の要港にて人口五十萬三千の都會なり今夜山口副使久米邦武來着す

廿九日火曜陰り十一字より駕し船廠（ドック）に至る當船廠は港口六「マイル」に連り世界無雙の稱あり先つ水門開闔の仕掛を觀て夫より穀倉に入る米利堅の麥蜀黍を散粒にて六十七室の廣き蓄ふ運搬の器械に奇巧多し夫より修船槽を觀て砲臺に至る戌卒禮式をなす次て荷揚廳舍を見廻り米洲往來の郵船に上る船中にて午食を享す夫より車を返し煤炭積卸しの仕掛を見て烟草倉に至る亦廣場數十室の廣に桶を以て梱束し蓄ふ多く米洲の產なり日本の葉も亦輸入するもありと交易の微なるを徵とするに足る船廠を出て歸路水夫宿屋に立寄り六字に歸館す此時には五字二十分日沒し六字に昏す夜芝居に招かる

晦日水曜日晴天にて過雨ふる十字半より駕して博物觀を歷觀し浮波戶より河蒸氣船により「ミーシー」河口を下り港口の形勝をみる右岸の炮臺昨日歷見せし臺より砲十七發を祝し船を返し河南の船廠（ドック）に上陸す此は造船槽にて現に郵船二隻を打立たり是は當港に新に社を結ひ壓瀾洋（アクランテク）太平洋に浮へ米國の郵船より一倍の速力にて上海より當港へ三十日計りにて着せしむる企てなり來年の五六月に成就すへし又一槽には大鐵船を橫截し新に二丈餘を補へるをみる其他

船材を制する大制鐵器械の運轉數箇をして馬車に駕し諸船槽を巡り又二郵船に上り其內にて午食を享す夫より河蒸氣船に返り船學校四隻を見廻る一隻は良家の子弟に入れ操舟術を教ゆ一隻は水夫の子及ひ孤兒に水夫の業を教ゆ其二は生育の惡き兒童を父兄より賴み此に入れて水夫となし其變性を庶幾する設なり上岸の後に郵船新社に立寄り六字に歸る八字より商社より招宴あり會食のもの百餘名其儀は例の如し宴了り馬芝居に招かる婦人の力技あり

九月朔日木曜濕雨濛々たり十字五十分に旅館前の「セント、チョイチ」の講堂にて大樂器を調する二曲を聞き十一字五十分の汽車にて東發す府を出るころ天も亦霽る南走する三十マイル許にて「クルーウ」に着し制鐵場を回覽す此場は英國に一千五百「マイル」の鐵道を有し此地に制造場五六區を建て鐵軌鐵板汽鑵汽車及ひ鑛銅の器械を幷せ製す人を用ふる五千每年に價七百二十萬磅の軌及ひ車を造り出す現に治成せる汽車殆と一百あり捧鐵を積む薪に齊く煤炭を堆して丘を成せり會社の議堂にて晝食を享し晚に汽車に上り四字五十分に「リバプール」に歸る夜當地の

官員商豪を招饗す

二日金曜 終日雨ふりて休ます朝九字半の汽車にて「リバプール」を發す吉田清成は從はす途中に「セントヘーン」の板玻璢製造場に至る此は專ら板玻璢のみを制す傍事鑑み制す皆上品なり人を用ゆる千六百人一周日に煤炭を燒く一千三百噸にして六萬方尺の玻璢を制し出す當村の「ホテル」に於て社中より晝食を享す是より車に上り東走し五字に「メンチエストル」に着す今日走る所の鐵道は「ステフエンソン」か開きし處にて鐵道の鼻祖にかゝる知事驛に出迎ふ「メンチエストル」は人口五十萬四千英倫にて第二の都會にして布帛の名所なり夜芝居に招かる

三日土曜 濕雲黯々として終日雨ふらんとするか如し十字より知事案內して紡棉場に至る仕掛波士敦に同し夫よりフイットウオルフ」の鑄物場に至る此場は鋼砲を鎏し砲彈を製し鐵輪鐵床等のすへて鍛ひ要せさる器械を鑄成す人を用ふる九百人三十五六年前より始て之を起せりと晝後より「フシチコート」と云出張裁判所に至る室々を見廻り夫より牢獄に至る其結構「ヒラドルヒヤ」に同しくして更に備はれり男女の牢共に一千室つゝ此裁判所及ひ牢みな

一千八百五十九年に造營す其費三百三十五萬「ポント」を糜せり英國中に尤も完備のものなりとす七字半より知事の宅へ招かれ立食立談す

四日日曜 晴天にて風寒し禮拜日にて只近郊に車遊す

五日月曜日 陰雨日を竟ふ十字に知事案內にて花布を印する場に至る銅筒に花紋を雕し「ロール仕掛にて印す波士敦にて見しと大同小異なり銅筒一箇にて上雕は價六十「ポンド」花布は二十六「ヤールト」にて價十二「シルリンク」を上とす夫より紡棉場を回る人を用ふる九百人婦人夫半におる次に織棉場に至る絲を染め之を繰り之を整理し之を卷き機に上せて布となす皆仕掛あり只綜をとる事全く人工に付す織機六百箇を兩室にて織る疾風の響き室に滿つを聞く一機の力日に三十七「ヤールト」を織る晝後に「ゴム」制場に至る中亞米利加の「インヂヤンラバ」とて木液の凝結し木耳の樣なるを輸し來り「ロール」仕掛にて之を轉し塗炭硫礦も糝し之を練軋する數回の後に展へて布となし卷て管となし鉸して薄片となす其用甚廣し四字より府廳にて享筵を開く會食百二三十人式たる例の如し了りて芝居に誘引す使節の爲めに別莚の演戲あり

六日火曜日 薄陰時ありて日輝を洩す十字半より知事案內にて布帛其外仕入の店に至る全室六階あり中に原價二十五萬磅以上の品物を蓄ふ羅綾絨呢より頭帽手袋細は彩花の類まで皆備ふ次に市中取締所に至り盜賊の下究め兩次をきゝ「オウン」學校を回見し兩替會所に至る滿堂に商民群集して之を觀る寸隙の地を留す甚混雜なり夫より東洋輸出會社に至る屋宇新造にて甚廣し中に六十馬力の汽器を仕掛け以て水を引上け其力を以て器械を押て荷を細束す布帛を積みて處々に丘をなせり三字より府廳にて「スピーチ」を取代し夜社より饗宴を開く

七日水曜日 朝雨ふる十字半より「メンチエストル」を發す知事驛所まて送る鐵道に爆丸を設けて祝す夫より北走する一字間にて天快晴し初て一碧の青天をみる晝二字に海灣を走る是より崇山重嶽あり清流潺湲として縈行し蘇格蘭の境に連る略本邦の氣象あり夜九字半に「グラスゴー」の東鄙なる「ビショツプ」驛に達す勞德「ブランタイル」氏馬車にて迎へて其宅に延き親ら一行に部屋を與へ一家と會食せしむ此日北走する四百「マイル」

八日木曜日 陰り十字半より汽車にて「グラスゴー」に赴く知事

及び商社長等驛に迎へ市民群集し之を觀る當府は英海西灣の上流に控へ蘇格倫第一の大都會にて全英地にて第二の繁昌の地なり人口五十萬六千百五十人山に據り河を擁し屋甍山に連り街路粗高低あり皆車を輾るに支らす知事の案內にて「ヒツケンボーザン」社の紡織機械制造場に至り夫より「トプス」社の汽車制造場に至る此場は人を用ひる一千五百人夫より棒鐵の制造場に至るみな當府の大制作場なり夫より兩替會所に入り商民堂內に群集せる「ムエンチエストル」に同し次て商社出會所に至る商豪百餘人着席し「スピーチ」あり夫より町役所に至る午食の享あり畢て「ウエストエント」苑に至り車を留む此場は山を負ひ河に臨み虹橋兩條を隔て遙に大野を望み其眺め頗快なれとも英の都府は霧多く且制造場の黑烟にて常に眺望を妨く恨むへき耳苑前に大饗宮あり生徒一千三百人をいれ教ゆると云夫より市中を回りて五字より汽車に上り六字に「ブランタイル」氏に滯り一家と會食す

九日金曜日 晴天十字半より汽車にて「グリノツク」に赴く此地は人口四萬二千「グラスゴー」より二十マイルの下流にあり造船に高名なる地なり郡令評議官等驛に迎へ「ケヤー」

社の造船場を回る數區の制造場あり首に造船をみる人を用ふる三千五百人現に十二の鐵船を打立たり其價十萬より十二萬ポント次に眞鍮制作場に至り次に塗物場に至る此は多く婦人を用ゆ皆船に用ふる金物塗板を造る所なり次に新造の大郵船に上る長さ四百八十「フイート」此船成れは郵船中に第一の大船なりと屢瀾洋に用ふるの目的にして卽「リバプール」の郵船新會社の一割にかゝる是より「ウオーカス」社の白糖精製場に至る屋造尤も高し凡八階あり屋根に水を蓄ふ池の如し最上階より糖汁を流し毎階に遞に淋り遞に煉り第二階に至て粹白の糖となる一周日に製し出す白糖一千噸にて毎噸の價四十磅人を用ゆる四百五十人なり前後の制造場中に此屋造より高きものなし夫より「ケヤー」の私宅に延き午食を享し六字に「ブランタイン」氏に歸り一家と會食す

十日土曜日　も晴天主人ブランタイル氏親ら案內し其家車に駕して所有の田地を回り代作の農家に至る是は二百「エーカール」の田地を借受けて耕作する家なり此家より年々地代四百「ポント」を出す全所有地の收むる高は二萬「ポント」なりと夫より馬廐を回り次て牛圈より獸園花園を

十一日日曜日　みて瓦斯室に至りて歸て其邸宅の室々を見廻り臺所物置まて殘らず親ら導き示し晝食の後は近在私有の田地を乘回り四字に暇を告け汽車に上り西に走り五十餘マイル六字半に「エヂンボーク」に着す

十一日日曜日　も亦晴天此日は禮拜日にて休し近郊を散遊す「エヂンボーク」は元蘇格倫の都にて今は以て別宮とす其地山谷に據り崇山峻嶽前後に突起し市廛は其谷を墳む堂尖參差として山頂に聳へ石屋傾仄して崖谷に靠り殊に奇狀あり街路の高低一ならされとも之を開く閭恢にて屋造も亦美なり英人之を愛して世界の勝境と云と人口は十六萬八千あり文學殊に盛なり東久世通禧等英蘇を回り此に邂逅す

十二日月曜日　薄陰時々日をみる英地秋冬の際は雨ふらされは陰る日光をみるを異とす近頃連日の晴殊に異候なりと云

十字より歩て「パーレメント、コールト」に至る此は裁判所に書庫を兼書を蓄ふ十二萬冊の多きあり前に寺あり學校あり此に入る引電器を運して示す夫より車に駕し博物觀に至る此觀は物を聚める甚多しとせす然とも物の成立せる始末を次敍して示す殊に學知に益あり從來見し所の

諸觀中に第一と云へし觀より廊を架し「ユニワルシチー」に接連す此舍に入り試業の堂をみて出て市外なる山麓を回る山は石を負て立つ全面に軟艸芊々として甚清潔なり其最高の山頂に上りて眺望す英地例の深霧にて風景を妨く山を下り蘇格蘭の王宮に入る蘇王代々の繪像あり故王の寢床あり女王馬利（クインズーリー）の寢床針箱あり淫私の間道あり奸夫を刺し屍を棄し處あり血痕模糊として猶存す夫より宮內の古寺を觀て車を返し晝後より「ラクション、エンヂン」制造場に至る是は通常平路を輾る汽車にて三年前より始て製し印度オ、スタラリヤ」等の鐵道なき地に用ゆ一車の價一千六百磅二十噸の荷車をひくに足る高きは五に一の勾倍を上ると云

十三日火曜日　薄陰日を盡し夜に入て雨ふる十字に駕しロハーラレツト」社中の「コム」製場に至る此社は十六年前より勃起し雨衣及ひ履を作る殊に多し去年の製出せる履百二十五萬なりと人を用ふる男女一千四百人米人「バーテレツツ」之か長となる是より其向ひの同制造場に至る是は楴と鈕釦とを專らに作る故に其場も較々小なり夫より十「マイル」を走り「ワリフヒールド」村の「エコーワン」の宅に入る晝食を享し其兄弟導きて其私社の漉紙場に至る此家已に三世紙を製すと紙を漉くには精巧の大器械少し其料は木棉麻桑の布の破片斷屑を資とし其內より水に流れさる染料を加へしものを擇み去て苛勢曹達にて煮爛し之を水を洒（マヽ）し且ロールにて碎き數回の後に水にて之を漉き車輪に卷く幅五尺餘其長さは數十里にて盡きす之を膠水の底にくゞらせて六十六輪を傳へて羽車にて乾かす而後に之を切り之を展へ澤を生して包み出す我漉紙と大に異なり夫より車を返し「ロストン」氏の古寺を訪ひ溪山秋林の勝を覽し歸る事六字なり

十四日水曜日　朝なほ雨ふる八字半より汽車にて東方「グレントン」港に至る北地燈臺（ノーゼロンライト・コムミッショナル）官より河蒸氣船を艤して待つ之に上り九字十分に出船し四十「マイル」を走て「ベルロツク」の燈臺に至る是は一千八百十一年に「スチーガント」の建たる高名の建築なり此時雨暗けれども潮候あしく之に上るを得す船を回して「メイル」島の燈臺に至り之に上り夫より歸路に船中にて饗宴を開き「スピーチ」あり夜九字に歸館す

十五日木曜日　美晴八字半より蘇の「ハイランド」湖山の勝を觀

るか爲めに汽車にて北發す副使皆事故ありて大使及び杉浦久米福井の三名從ふのみ十二字半に「フェルチ」驛を出て初て山水の奇狀あり一字半に「アツソル」驛に屆き車を棄て歩て「アツソル」の丟克（チーク）英第一等爵の莊園に入る園内は平衍の艸原にて門より直道は町許を開く秋樹路を擁し落葉地に滿ち履に聲あり道窮て丟克の居あり小山を負て起す前は奇峯溪水を帶て重疊し其趣甚佳なり守園の老叟導きて園内の瀑を觀せしむ此處老樹森蔚として水聲を蔭す溪に沿て歩し園を出て車を僦ひ「キュリカンキー」の溪に至り車より下る此處は峻嶺前に聳へ溪水底に流れ兩崖みな秋樹中に松樹洛陽松を錯え丹青を以て米點の山を畫くが如し（凡蘇境の山々如此もの多し）夕日已に隱れ殘霧尙紫なり蒼然たる暮色の底に溪聲の咽ふをきく崖谷を下り水の奇狀を瞰し石橋に立て山の勝境を品し終に車に上り秋氣の蕪路を走り暝に「ヒトロツク」の驛に至り汽車に上り「ドンケル」驛に達し「バーナム」村に宿す

十六日　金曜　曉晴始て霜をみる朝暾朗かに上る久しくして夕陰る八字半に「バーナム」村の近方を回り「アツソル」丟克の別墅に至る此邊は平原にて岑巒豫拱して淸川縈回し別

墅は其一區を占め艸原の内に岡陵あり其一は圓基にして方丘上に小砲を豫備す此邊もと古戰場にて自ら悲慘の概あり奥に一字の古寺あり七百年前の搆建にて半廢し半完し「セバステボール」戰狀の石雕あり此を出て「ロンブリン」の瀑に赴く途上の山勢みな奇なり時に遠山の雪を戴くをしる「ロンブリン」の瀑は水勢甚大ならされとも石の怪險なる間を咽ひ流れて其虧缺より二丈餘の底に落て深潭をなし此に又亘岩壁立し殆ど流を塞くが如し亦數尺裂拆あり其間より流れ去る是より「バーナム」村を發し汽車にて「アホレテルデン」の驛に達し馬車を僦ひ「テイ」河の南を走る此路甚坦なり「セネラル」某の開きし路にて關門あり路錢を收む凡前後の山經多く豪姓の私有にかゝる路も亦私開（プライベートロード）の路にて路錢三ペンス六ペンスを收る所多し又新舊兩路の存せるは舊路は狹小險惡にて我山路に同し大低百年前後に改め開きし所多しとなん扨「テイ」河を下れは亞爾蘭（イアール）「カンメル」氏の莊園あり鬱茂なる深林數町を過て後に一の古砲臺あり谷に臨み谷底に其居宅あり前山の景致亦佳なり左に「テイ」湖を望む湖の兩岸みな「カンメル」氏の所有地にて歳に八萬磅を收むと是より「テイ」湖の北

灣なる山路を走る馬駭に車遲澁し四字に漸く「キリン」村に達す「テイ」湖の尾にして「ベンロールス」山麓にあり此山高き事四千二百尺「キリン」村は古戰場にて「カンメル」氏の古城あり城を回り黃昏に至る蕪地の日晷甚促し五字に沒す終日日光蒼茫として朝陽の如し其風景も亦慘淡にして我邦の氣象に異なり

十七日　土曜日　朝陰雨す六字半發駕し溪流に傍ひ荒山の間を車走する二マイル許にて汽車驛に至り乘車して「カアルアントル」に赴く途中に「エロン」湖「ロブナイ」湖を過く山閉ち山開け佳趣あり此邊の山野多く荒蕪し牛羊を放て山腰に至る鋤犂の跡少し「カアルアントル」より馬車に駕し「オコレイ」湖に赴く山厚盡荒蕪し雉飛び兎走り野薇狼藉にて一路肅條たり「オコレイ」湖尾に至り奇峯峻嶺の參差たるをみる湖盡て深林の内を走り「トロサキツ」湖に至る此邊の峯狀甚奇に畫人ありて畫幀を擔し其景を寫せり「トロサキツ」にて朝食す「ホテル」の主人使節を享し車を駕し兄弟同しく從ひ來り前に一車を立て「バーフパイプ」と云蘇格（スコツト）の樂器を吹て先行す其聲胡笛劉亮として笛の如く笙の如し夫より「キヤッツル」湖に至る「トロサキツ」の

主人此に河蒸氣船を艤して之に上らしめて湖中を駛す此湖口は奇峻の峯面々環立して湖光を拱し湖中に嶼あり秋葉の色兩岸の樹と互に掩映し時に天晴れ日色蒼茫宛として畫中を行か如し湖尾には「グラスゴー」の上水樋あり此に登視し遂に「ストロネチヤラチエル」の岸より馬車にて山路を越る此に燃る土を出す土人之を掘て處々に山堆せり夫より「インウエルスナイドル」の瀑を看る瀑は小湖より源をなして此に至りて數層遞に落て「ワクローモンド」湖に入る亦佳境なり「インウエルスナイドル」岸より湖中の郵船に登り全湖を回る兩岸の山みな奇姿あり最も高きは「ベンローモン」山とす夜に入て「ハロホ」の岸に達し直に汽車に上り十字に「スフエヂンボーク」に着す

十八日　日曜日　陰り十二字より英吉利宗（エピスコハール）の大寺に詣る禮拜男女六百人あり二字より蘇格蘭宗（プレスビテリヤンス）の大寺に詣る同七百人

十九日　月曜日　陰雨終日降りて已ます十字に汽車に上り「エヂンホーク」を發す木戸副使は後れて發し伊藤副使は「グラスゴー」に赴く大使一行五人なり知事驛まで送り爆彈の設けあり十一字半に「ガラシール」村に至る知事案内して羅紗織場に觀す此場は人を用ふる男女三百二十四人に

て機數百もありぬへし去年中に織る所の原價六萬四千四百八十「ポント」夫より府廳にて晝食を供し樂を奏す當時は人口一萬人夫より「ムエルロース」村に達し汽車より下りて「アベイカツソル」の古寺をみる是は三百年前の兵燹にて頽壞し今只四壁のみ存す遠近の豪姓なほ來り葬る五字半に上車し九字半に「ニューカッソル」に着す此日鐵軌の程一百六十四「マイル」「ニューカッソル」は人口十萬九千英の東海に控へる要港なり此に煤礦を出す

二十日火曜　薄陰九字半に名砲の發明者なる「アルムストロング」氏「ホテル」に來り駕して其製作場へ案内す當場は「タイル」河の岸に傍て起し水力を用ひる汽力より多し製する物件は鐵鑵鐵床及ひ諸器械みな之を製す大砲は其一大部分に屬す二百五十磅の後裝螺旋砲十二門小砲は四十餘門を成就し居たり夫より瓦斯を焚く巨鑪あり棒鐵を鎔成する所あり砲の身金を卷く所あり是は長き瓦斯を蓄へたる罐より十餘間の鋼條を次第に引出して卷く其仕掛人を驚す其後米國發明の「ガットリンゴント」と云旋轉連發の小銃車を示し二百五十の「パトロン」を五六秒字間に發して示せり場内の役室（オフヒス）にて晝食を供し夫より其別宅を過きて「コフヘツト」の石炭礦に至る炭の厚さ九尺より六尺に至る「アルムストロンク」と共に礦中に入る礦は地に入る四百「フイート」鈎瓶仕掛にて鈎下す下底は闇黒なり人毎に燈を執て奥に入る一マイル許にて炭を鑿る所に至れり此礦は三年前より開く之を掘る深きは三マイルの奥に至り地底に路を通する市街の如し皆鐵道を設く五字四十分に歸り衣を整へて「アルムストロンク」氏の招宴に赴く今夜伊藤副使も着す

二十一日水曜　晴天夕より又陰る此日「タイル」河を航し下りて河岸の制造場をみる十字より車に駕し町會所（エキステンヂ）に至り「スピーチ」を取代し夫より河蒸氣船に上り先つ「タイル」新橋の石基を築く仕掛をみる夫より河を下り「ヘツポンケイ」の制銅場に至る此は硫磺を採りし石を輸して銅を分析する所なり人を用ふる三百人夫より「ヘツポンステイション」の制鉱場に至る此は棹鉱を輸し來り銀を分拆し出し純鉛となし鉛板白鉱丹鉱を製す人を用ゆる三百人夫より上船し河岸にある掀泥船をみる汽力五十五馬力にて一晝夜に一萬七千噸の泥を掀ると此「タイル」河は元淺澁にて船出入し難かりしに此器械にて缺浚し遂に此盛な

る港をなせり今に終年泥を掀て絶るなし此邊に「レック」多し船内にて晝食を享し夫より下て曹達制場を略歷して船に上り海岬に下る岬に近き所に二三の小山あり高さ十二丈是は五十年前より入港の船より棄し砂を積て成せる山なりと凡輸出盛なる港には輸入の船沙石を積み來り物を買て歸る輸出の貧なる港は之に反し砂石を貴るもの也夫より海岬に波戸の築造をみる是は「コリローフ」と云海石を鋸截して築く其鋸屑は以て曹達を採る海角の波戸は海に斗出する殆と一マイル「タイウィンベル」と云入穴鐘を仕掛けて水底に工作をなせり夫より燈明臺下に至り難船救助の仕組を示す時に已に黄昏なり歩して驛に至り汽車に乘す村人前後を戀ひて觀る七字に歸館し八字に天文臺に至る世界第一と云大望遠鏡あり

二十二日木曜　雨ふる十字に汽車に上る伊藤副使は猶留る二字四十分に「ブラットホール」に着す路程七十九マイル「ブラットホール」は約克郡の一都會にて人口十二萬あり毛織物の名所なり當驛にて知事出迎へ市民路を狹み集觀せる堵牆に異ならす前後第一の群集なり知事より旅館を定め晝食を用意して待たり夜又「ホテル」にて小宴を開き饗應をなす

二十三日金曜　陰り十字より知事案内にて汽車に上り「ソルテヤ」村に至る此村は二十年前までは野にてありしを「サー、タイトル」氏之を開きて毛織場を建しより遊民麕至して今は五千口の大村をなせり此場は羊毛の繊維長きものを紡して布を織る所謂絹吳呂の類なり人を用ひる男女四千人機數一千挺を運し一機の力一周日に一百八十「ヤールド」を織る此場につきて寺あり食堂あり小學校あり病院あり養老院あり恤窮院あり「パーク」あり皆「タイトル」氏の建る所なり童幼は半日場に入て業を操り半日は學に入て稽古するを法則とす場内にて晝食の享あり夫より汽車を返し「ムィトランド」村の「リスター」社の織絹場に至る此場は當時造營中にて半成就なり現に人を用ふる二千五百人機數二百五十挺を運す全場に六ケ月の後に成る六千人にて一千挺の機を織る目論見なり此場屑繭屑絲を輸し來り之を煮て之を晒し之を弾し之を梳り之を紡し細絲となして天鵞絨を織る其器械は紡毛の器に似て更に精巧を盡せり「リスター」の長子は今横濱に出張中なり

二十四日土曜　陰り小雨す九字五十五分より汽車にて「ハリ

ハックス」に至る知事驛に迎へ市民堵牆をなして觀る夫より車に駕し「クロスリー」社の毛織場に至る此は「カーペット」「フランケット」を織る大場なり人を用ふる五千人にて四百機を運す又天鵞絨も織出す夫より「カー」製作場に至る（「カー」は毛布の面を擦して毛を掻起す器なり）人を用ひる二百五十人三四百の器械を運す夫より「クロスリー」氏の育孤學校に至る生徒男女二百五十人あり歌を諷し使節を祝す夫より「スピーチ」を取代し晝食を供す時促し倉卒に歸館す時に三字なり半字を經て「パークス」等山口副使を伴ひ「ボールトン」に赴く林久米從ふ汽車驛にて爆彈の祝あり「ボールトン」驛に至れは村民群集し待つ是より馬車にて三四「マイル」を走りて「ボールトンブリッチ」に至り泊す

二十五日 日曜 晴天大使はしめ「ブラットホール」にあり無事なり「パークス」等は山口副使を誘し朝十字より「ボールトン、アヘー」に詣る是は七百年前の古寺にて有名の靈場なり遠近の有姓汽車馬車にて來集し禮拜の男女百餘人あり畢て「ボールトン」川の上流に遡り風景を攬す此は「ダヘンシヤ」丟克 二十八日の條に詳なり の所有地にて沿流二「マイル」

許の間林幽に水落て佳景多し河上に古城あり又「ブラットホール」の上水を引し所あり歸路に「デイヤベーク」の瀑をみて四字に返る

二十六日 月曜 陰り一字に山口副使「ボールトン」より歸る一字半に「ブラットホール」驛を發し四字に「セッフィルト」の驛に達す伊藤副使は先たつて着せり當府の豪姓「ウィルソン」氏兄弟驛に迎へ其車に駕して其宅に招き宿せしむ當府は人口廿四萬あり鋼物の名所なり此夜「ウィルソン」氏にて會食す

二十七日 火曜 陰り十字より「ウィルソン」氏の車に駕し「カノロ」社の鋼材制造場に至る此は最初鑢（ヤスリ）を製する場なりしを二十五年に「カメロ」之を弘張せしに當時世みな以て狂とせり夫より鋼材甚た世に必資となりて竟に英國を傾ける大場となれり此は甲鐵艦の鋼材を鎚ひ展へ針金を展へ車輪車軸を鑄成す場内の廨舍恰も市の如く煤烟常に天を薫す此にて晝食の供あり其後同社の別一場に至る此は汽車大小の輪及ひ「スプリン」「ボハー」皆彈き金 を製する場なり五字半に歸り「ウィルソン」氏にて會食す

二十八日 土曜（永カ） 蔭天にて風凄し夜中より雨ふる十字より「ウィルソン」氏の車に駕し北走する七八マイル「ダベンシヤ」丟克の館に至る是は約克郡の古き名族にて英の華族中にて最も富貴なる家なり六ケ所に田地を占有し一歳に地代二十萬磅を收む此所は其一部なり當丟克名は「リヤールト」此館を「チャッウォースハウス」と云高宇の石雕屋にて内景は金銀を縷し綿繡を張り室々みな莊麗を極め其中に古器古畫名器名畫等珍奇を盡し之を飾り之を攤し其價みな不貲又書籍を蓄へし數室あり說法の堂もあり丟克親ら案内して室々を回り庖廚酒窖まで殘らず之を示し一家と大案を同くして晝食の供あり了て又浴室馬廐庭苑花窖を回る皆豪奢ならさるなし四字に館を辭し歸路に「カメロ」氏の宅に立寄る主人茶を享す暫時立談して後に「ウィルソン」氏に歸り會食なし夫より伊藤山口兩副使他凡五名舞踏會に招かれ一字に歸る

二十九日 木曜 陰り朝十字に「ウィルソン」氏の車に駕し「ロッチヤース」社の刃物製作場に至る此場は食刀懷刀剪刀鋏刀肉匕其外鋼及ひ象牙の細工をなす所なり夫より「ウィルカールス」社の制鋼場に至る此は砲身汽軸の巨鋼材より車輛鐵軌等までみな造る火爐を開く六百四十「ハコー」

「イルソン」氏の車に駕し北走する七八マイル「ダベンシヤ」丟克の館に至る是は約克郡の古き名族にて英の華族中にて最も富貴なる家なり六ケ所に田地を占有し一歳に地代二十萬磅を收む此所は其一部なり當丟克名は「リヤールト」此館を「チャッウォースハウス」と云高宇の石雕屋にて内景は金銀を縷し綿繡を張り室々みな莊麗を極め其中に古器古畫名器名畫等珍奇を盡し之を飾り之を攤し其價みな不貲又書籍を蓄へし數室あり說法の堂もあり丟克親ら案内して室々を回り庖廚酒窖まで殘らず之を示し一家と大案を同くして晝食の供あり了て又浴室馬廐庭苑花窖を回る皆豪奢ならさるなし四字に館を辭し歸路に「カメロ」氏の宅に立寄る主人茶を享す暫時立談して後に「ウィルソン」氏に歸り會食なし夫より伊藤山口兩副使他凡五名舞踏會に招かれ一字に歸る

二十九日 木曜 陰り朝十字に「ウィルソン」氏の車に駕し「ロッチヤース」社の刃物製作場に至る此場は食刀懷刀剪刀鋏刀肉匕其外鋼及ひ象牙の細工をなす所なり夫より「ウィルカールス」社の制鋼場に至る此は砲身汽軸の巨鋼材より車輛鐵軌等までみな造る火爐を開く六百四十「ハコー」鍛鐵の器 の槌大なるは重さ二十五噸に至る人を用ひる二十人なり夫より府廳に赴き「スピーチ」を取代し了て「リキソン」社の銀燒付細工場に至る此は「ブリタニヤメタール」錫鉛の和所謂英吉利銀 にて細工す蓋し廉價の器とす此より歸り衣を振へて五字半より「コツトラフ」社中の享筵に赴く會食のもの二百二十一人此行第一の盛宴なり

十月朔 金曜 陰り小雨ふる朝「セッフィルド」を發す「ウィルソン」氏兄弟驛まで送り來る十一字に汽車を發し「バーミンクハム」に赴く途中に「ボールトン」川の麥酒制造場に至る此場は五十「エーカー」の區域を占め場内の鐵道十二「マイル」の長あり制造の廨舍之を狹みて起る櫓を積むを處々に壘をなし麥を堆し丘をなせり都て人を用ゆる一千餘人年に六十五萬櫓を製し出す（一櫓は三十六カロン入）社長を「オールソッフ」と云場内にて晝食の享あり五字半に汽車に上り七字に「バーミンクハム」に着す本日の程百餘「マイル」「バーミンクハム」の人口三十七萬人倫敦の北百五十「マイル」にある都會にて諸細工の名所あり

二日 土曜 半陰半晴夕に過雨す九字半の汽車にて「コウィェントリー」に赴く當地の人口四萬千人知事驛に迎へ車に駕

して「ガセス」社中の織文場に至る是は木綿を以て織り婦人衣裳の飾り等に用ひる物なり織機の仕掛甚た巧なり夫より「スチープン」社の織文場に至る是は絹を以て織り婦人の帽帶襟領等の飾り及ひ紙折に用ひる物なり夫より「ロソム」社の時計細工場に至る人を用ゆる五百人有名の大製作場なるよし夫より市中の「セント、マックリス」の古寺に至り回覧し畢て府廳（ヤクウンホール）に入り晝食の享あり夫より汽車にて「ウォリッキ」村に至り「ウォリッキ」亞爾の古城を觀る城廓みな儼然として完存し中に其家の什物古器古甲を擺列す英地の古城にて此の如き完全なるもの罕なりと當地の知事其家に延きて略饌を享し一家と會食す八字に「バーミングハム」に歸る

三日　日曜　陰り

四日　月曜　陰り十字に貿易場に於て「スピーチ」を取代し車に駕して「チヤンセス」氏の燈明臺及ひ板玻瓈制造場に至る場内に學校あり童男女千餘人を入れ教ゆ此燈臺の玻瓈を製するは甚秘奥にて英の此場と佛に今一家あるのみ板玻瓈は薄き品にて「セントヘーレン」より下品にかゝる次に金銀の針を製する場に至る休業にて細工をみす夫より

「ヒンク」及ひ「ウェルス」社の鋼筆製造場に至る「セッフィルト」の鋼板を以て更に冶し四十器を傳へて成る男女五百人を用ふ毎日に六十萬箇を造ると云夫より「アストン」氏の紐釦細工場に至る金銀燒付あり布帛包みあり又一種は南米洲の木實にて作るあり其工は鋼筆と異曲同工なり人を用ゆる男女八百人此場にて酒を享し暮に歸り七字半知事より招宴を設け會食のもの五十餘人

五日　火曜　陰り時として日光を漏す九字半より駕して「コンフォル」氏の釘製造場に至る「セッフィルド」の鋼の針金を冶して器械にて之を截れは一分時間に百三十箇の釘を獲る夫より「オヽスラ」氏の玻瓈細工場に至る此場にては吹立る處をみす之を鞴し磨し金具を施すのみ人を用ふる百五十人夫より「エルキントン」氏の金銀燒付細工場に至る此場には獨逸銀を以て作る「セッフィルト」より上品にかゝる電氣法を以て金銀を燒付け鍛鋼の型に打込て諸品を作る人を用ふる八百人夫より歸て食を辨し再ひ駕して府廳に至る中堂に樂器を仕掛け寺堂に彷彿たり夫より「ミント」社の造幣をみる是は政府の賴みにて金銀銅三品の幣の地を打立る所なり夫より小銃製造場に至る此は府

の南鄙にありて廣大なり造營も亦美にて場舍甚多く盡く觀るを得す當時魯西亞國の賴みにて新發明の後裝銃（註第百）三萬挺を制作中なり毎挺の價三磅五字半に歸る夜「ホテル」に於て商社より饗宴を開く會食のもの八十餘人あり

六日　水曜　陰り九字半より汽車にて「ウスター」村に至る當村人口四萬千四百八十六人あり「ボールトン」河麥酒社の長「オールソップ」家車にて迎へ「コスイレッチコルト」に於て狐狩をみる騎馬六十人隊長一人にて五十餘頭の犬を驅りて狐を逐ふ是は驅逐奔跳して運動をなすの目的にて必す狐を獲るを要とせす此日一狐をみるのみ又平日は婦人も加はると云夫より陶器製造場に至る此場は人を用ふる五百人にて製する品は上品のもの少し此にて晝食を享あり五字に「ハーミングハム」に歸り卽行李を辨して「ビーストン、カッソル」に赴く車程三十三「マイル」八字に達し馬車に移り二「マイル」を走て「トルマセ」氏の宅に至る主人夫婦及ひ一家みな出て接伴なし部屋を與へて一家と會食す

七日　木曜　薄陰九字十五分より「トルスセ」氏の全家と共に其家車に駕し主人親ら鞭を執て汽車驛に屆き汽車にて「ストック」（マヽ）にの陶器製造場に至る此場は男女千五百人をいる〳〵英國最上の陶器を製し出す所なり水力汽力を用ひ人工にて細工をなす多し大抵土燒の品多く石燒を製する甚寡し染付繪は最廉價なり皿一つにて三四ペンスに至る燒付繪は稍尊し金入の繪なれは皿一つ一磅以上の價なり石燒きは極品にて三磅にも至る（勿論染付のみの品なし）此にて晝食し三字に「トルマセ」氏に歸り一家と會食す

八日　金曜　薄陰九字半に「トルマセ」氏の家車にて十八「マイル」を走り十一字に「ウェスト、ノースウィーキ」村に至る村中旗を揚け祝鐘を鳴して之を待て導きて其鹽礦に至る礦の深さ百二十「ヤールド」鹽石の厚さ二丈六尺に及ふ火藥にて之を爆裂する石炭を掘るに同し鹽石を掘る層に些の水氣なし此日礦中に七萬の蠟燭を點して使節を饗し會社の男女百餘人みな礦中に下り此にて晝食の饗あり「スピーチ」をなし盛なる會なり礦内は闇黒なれとも乾燥にして徹風常に渡り周年氣候五十六度なりと是此行の最一の奇觀とす三字に礦を出て八「マイル」を走て「チエスクー（マヽ）」の鄙なる製鹽場に至る此は地底六十「ヤールド」の下より鹽水を吸み揚て之を製す鹽石に比すれは上品なり

人を役する僅に七十人年に六十萬噸を製し出す毎噸を製するに石炭を燒く半噸最下の煤炭を用ふ鹽一噸の價十八「シルリン」に過きす七字に「トルマセ」氏に歸る

九日土曜日　晴天朝「トルマセ」氏の宅内を回覽し馬廐花園を回り其田園を巡る「トルマセ」氏は當郡の代議人に六回の撰を終るまでみな入札に中り三十年連綿として出勤せし古今罕なる人望の名士なり其宅は「ビーストン」の古城に對せる山上に城壘を模して之を營築す其費百萬磅を縻せりと田地六千町を占有し此は其一部分にて平日は別壘を住居とすると其妻娘も汽車驛まて送り夫より二十四五「マイル」を走り「チェスター」に至る「トルマセ」氏の案内にて市中を見廻り裁判所に至る祝鐘を鳴し之を待つ内に入り室々及ひ牢獄を回覽す其趣き略「ムェンチェストル」に同し夫より古寺を觀て汽車驛に至る當府は人口三萬一千人あり驛にて「トルマセ」氏に別を告け汽車にて北走(マヽ)する二百「マイル」六字半に倫敦の「ユーストン」驛に達し直に駕して王城前の舊旅館に歸る此夜は英の太子誕生日にして且倫敦の知事交代日なるを以て市中に瓦斯燈を點して甚賑かなり此回の一歷凡て六週日を費して英蘇兩部の都府大は八ヶ所小は十餘ヶ所制造所を回る殆と五十所に及ふは時秋冬の候にて全英雨陰多く且日景漸くに促し甚倉皇を走(マヽ)れす倫敦近日の日景は五字前に日沒す加ふるに多陰多霧にて四字に燈を點するを常とす

六五　十一月二十日（十二月二十日）　岩倉大使等（佛國ニテ）ヨリ三條太政大臣等宛

英國出發佛國到着ノ次第等報告ノ件

附屬書　英國女皇謁見手續書

二月十一日佛船にて着く

第十八號　法國郵便

明治五年壬申十一月廿日　從法國巴黎

第十八號　公信啓上致候先以

聖上益御機嫌克臨御被爲在海寓平寧各位愈御精勵御奉職候條恭頌此御事に候隨て鄙職一同無異奉職罷在御安懷有之度候先便第十七號公信を以申進置候通英女王謁見の後外務省(原註)本ノマヽ へ面會馬關償金兵隊引揚の儀猶及談判候處到底條約改正の上御國おゐて各國へ被爲對格別の御信誼御座候處實效相立

不申候ては即今口舌上の論而已にて承諾候事難叶趣に候畢竟談判行屆不申右も無據事情御座候間別紙口上書英文寫幷應接筆記篤と御熟覽委細の事情御諒察有之候樣致度候（註「應接筆記」ハ九六ト同文ニ付略ス）

由利公正儀は當地於て面會致候間即宣旨相渡し直樣歸朝申渡今郵便を以歸朝候積御座候左樣御承知被下度尤岩見鑑造儀も同樣御座候

江藤司法卿隨行諸官員も當地おゐて面會致候英國御用相濟候に付ては直樣法國出張の積兼て御國在留ミニストルウートレーに引合置候趣も御座候間預め安藤忠經差遣し鮫島中辨務使一同爲引合候處使節一行の爲政府おゐて一館貸渡し可申積に付右家什一切辨置候爲當十六日迄は渡法見合せ呉候樣申出候に付即十六日朝英國蘭墩府發軔仕候當日英國にて接待掛りセネラル、アレキサンドル、幷通辯官アストン、ドウル渡船場迄見送り同所砲臺にて祝礮の式有之カンー（「カレー」カ）法地着の節は法政府より被命候接待掛りセネラル、アベル及コムマンダジヤノワン、來迎地方兵隊整列迎接即夕本政府より取設有之候ルードプレスブール、第十番館中到着兩回共至極鄭重の取設に有之候當國大統領チアルも來廿五日クリストマスにて歸巴致し隨て數日滯留に相成可申其節謁見も可有之由に御座候爾來は可成取急各國巡聘可致見込に付右謁見も相濟候はゝ早速談判にも取掛り相濟次第外各國へ可相越存候尤當地おゐて在留公使共引合およひ謁見其外諸事捗取方宜方に趣可申積に付此後巡聘可致國の儀は未た治定難申上候左樣御承知有之度候右は英國引拂後渡法已來近況申進度如斯御座候也

特命全權副使　山口花押

特命全權副使　伊藤花押

不在　特命全權副使　大久保

特命全權副使　木戸花押

特命全權大使　岩倉花押

三條太政大臣殿

參議

外務卿　御中

猶以略日記は清書未た出來不致候間今便差進兼候女皇謁見の節手續は別紙の通御座候本文應接筆記は第一次のみ間に合候間差進候也

（附屬書）

西暦十二月五日午後第十二字二十分前ニ大副使及ヒ書記官

鹽田篤信林董三郎「ゼネラル、アレキサンドル」「アストン」等ボッキングハム、ハレース旅館ヲ發シ「パッティングトン」汽車會所ニ至ル外務宰相「ロールド、グランウィル」及ヒ「シル、ハルリー、パークス」等來會ス一同ニ女王ノ乘車ニ乘リ十二字十分ニ發輅シ一字四分「ウインソル」城下ニ達ス馬四疋引ノ馬車二輛外ニ三疋引ノ車一輛ヲ設ケ我來ルヲ待ツ暫時ニテ城門ニ達ス親衞兵隊伍ヲ整正シ銃ヲ捧ケテ禮ヲナス待客ノ間ニ至リ暫時休息ス宮內卿出迎ヒ次ノ間ニ誘引ス此ニ待ツ事凡二十分外務宰相來リ謁見ノ手續等ヲ「アストン」ヲ以テ大使ニ告ク是ヨリ謁見ノ席ニ進ム女王遙ニ奥隅ニ坐シ右ニ王子「デューク、オフ、エディンボルク」王女「ヒアトリス」侍座ス左ニハ外務宰相宮內卿其他近侍ノ武官等列座ス此時大使一步ヲ進メ左ノ口上ヲ述フ（以印ノ如シ）讀了リテ國書ヲ女王ニ手渡ス女王之ヲ外務宰相ニ渡シ又大使ヘ口上ノ答ヲ認メタル書面ヲ外務宰相ニ渡ス（此時女王ハ口上書ヲ讀マス惟書面ヲ外務宰相ニ渡セルノミ其文ハ呂印ノ如シ）女王曰貴國帝王ハ安全ナル哉大使曰健全ニ候女王曰當國ノ滯留ハ興アリシヤ否ヤ大使曰貴國政府及ヒ人民ノ懇遇ヲ蒙リ各處ヲ巡見シ裨益ヲ得ル事少カラス甚タ快暢ノ思ヒヲナセリ女王第二ノ皇子「デューク、デ、エディンボルク」ヲ指シテ曰彼前年貴國ニ遊歷セシ時貴國政府ヨリ格別ニ懇親叮嚀ナル待遇ヲ蒙リシ由我ニ於テモ深ク謝スル所ナリト話畢テ一同三度揖禮ヲナシ後步シ退席ス是ヨリ別席ニ於テ饗應アリ外務宰相ハ別ニ要務アリテ席ニ臨ミ難キ旨ヲ告ク此席ニ列シテ接遇セルモノハ多クハ女王近侍ノ武官ナリ

右畢テ第三字二十分前ニ發輅シ四字十五分前倫敦ニ歸館ス

以印呂印口上振ハ先便申進置候間御參覽有之度候也

六六　十一月二十三日（十月二十三日）　宮本外務大丞等ヨリ大使隨行田邊一等書記官宛

露國親王恙無ク露杭アリタル旨等報告ノ件

申十一月廿三日達

田邊少丞への書案

第三十八號

例文

一壬申九月八日附田邊殿よりの御來書落手披見致候大副使御一同蘇格蘭各所巡覽として御出發右御不在中に付正院

井外務卿への公信不被差越旨御申越承知其段正院へも申立置候

一清國雲南一省獨立の義別紙新聞切抜被添御申越早速翻譯爲致披見致候柳原大丞も右新聞丈の義は承知いたし居候へ共別に委しき事は承知無之候

一魯國親王義去十月廿八日橫濱出發後本月三日箱館へ着船同所一覽同八日歸帆諸事無滯相濟候旨開拓使より申越候

一本月六日花房大丞朝鮮より歸朝いたし委細の義は後便可申進候

一三輪大錄義一等書記生被任中山總領事に隨行被命候

一明年魯國於て紡車に用る物品幷器械博覽會有之候に付右へ品物差出方博覽會事務局於て可取扱旨被仰出候事

右條々申進候也

壬申十一月廿三日

大　原

宮　本

田邊少丞殿

一今月廿二日新嘗祭被行候事

一同來廿五日神武天皇御祭祀改曆を被告候事

一大隈參議澳國博覽會事務總裁佐野正五位同副總裁として

明年一月中澳國へ出發の積

一服制表圖正誤の義別紙御布告寫差進候

註「三十八號入記」存スルニヨリ左ニ記ス

三十八號入記

一田邊氏え　宮本大原兩氏より　一通

一田邊氏え　廣澤より　一封

一鹽田氏え　村山より　一封

以　上

事項三　條約改正ニ關スル件〔第四卷事項六、一六參照〕（事項二、八、一二、一七參照）

六七

二月三日（一八七三年三月十一日）　米國國務省ニ於テ岩倉大使等ト米國國務卿等トノ對話書

條約改正ニ對スル岩倉大使等ノ權限、條約中改正希望ノ條項等照會ノ件

西曆千八百七十二年第三月十一日　我明治五壬申年二月二十一日（三カ）月曜日

米國華盛頓府國務省ニ於テ日本使節米國聯邦國務卿ハミルトン。フイシュ談判筆記大副使五人森少辨務使臨田一等書記官幷ニ米國々務卿輔チヤレス、ヘール及ヒ我領事ブルークス同席

一使節　今日ノ談判ノ趣旨ヲ明亮ニセンカ爲メ既往及近時ノ事情形勢ヲ書面ニ認メ持參シタレハ當席ニ居合スル使節附屬タル「フルークス」ヲシテ讀誦セシムヘシトテ談判ノ端ヲ開ク

一國務卿フイシュ氏曰ク　其書ノ趣旨大ニ面白ク思ハルヽニ依リ大統領ニモ之ヲ告知センコト大慶ナレハ其寫書ヲ贈ラレ度大統領ニモ定メシ滿足ニ思フナルヘシ

二　又使節公ニハ定メシ我國ノ政體御承知ナルヘシ條約ハ我國上院三分ノ二之ヲ允准スルニ非サレハ之ヲ認メテ局結ノ條約ト認ムルコトナク是レ我國ノ仕來ナリ

二使　其事ハ予等兼テ承知スル處ナリ現今ノ條約ニ因リテハ千八百七十二年七月第一日ヲ以條約ヲ改正スヘキ筈ナリ故ニ我政府今此使節ヲ派出シ其條款ヲ熟議セシム然ルニ右期限前其使命ヲ完成スルコト能サルニ依リ使命ヲ終ル迄期限ヲ延サンコトヲ望ム

三卿　各國政府五ニ趣旨ヲ通達シ現今條約ハ千八百七十二年七月第一日至リ全ク廢止スヘシトノコトヲ既ニ了解ス今度ノ使節ニハ右條約ヲ取結フノ權ナシト見テ可然哉

三使　條約中改正スヘキ條件ヲ商議闘論スルノ權アリ余等只ニ之ヲ論スルノミニテ今度ノ談判ニテ互ニ陳述スル處ヲ日本ニ於テ取結フヘキ條約ノ基トナシ

天皇陛下自ラ允准セシ後其本書ヲ取替スル筈ナリ

四卿　使節公ニハ草案書ニ調印スルノ權ヲ帶有セラルヽ乎

四使　然リ談判ノ結末ヲ記載スヘキ書面ニ名印スルノ權アリ

五卿　貴國皇帝ヨリノ書翰中ニハ其權ヲ與ルコトナシ今貴君ノ陳述セラルル所ニ隨ハ別ニ其權ヲ與ラレシコトト見ユ

五使　然リ

六卿　此書簡ニテハ條約ノ條款ヲ取極ムルノ權ヲ與ルニ非ス只ニ之ヲ論スルノミナリ

六使　今度談判ノ結末ヲ記セルモノニ名印スルコトハ差支ナシ

七卿　日本政府ニテハ之カタメ何程ノ引受ヲナス乎

七使　談判ノ結末ハ多少政府ニテ承諾スヘシ此草案ハ追テ條約ノ基トナル者ナレハ多クハ我政府ニ於テモ許諾スヘキ積ナリ

八卿　條約改正ハ何頃ナル乎草案ノ功力限程及ヒ何頃本書ヲ取替スル哉ヲ知ルコト最緊要ナリ如何トナレハ條約ノ如キハ皆上院議員ノ內三分ノ一ハ二年每ニ變スルナレハ新選ノ議員等入來ル時ハ又其所見モ大ニ異ナルコトアルヘシ

八使　其期限ヲ預メ睚ト定ムルコトハ難シ此地ヨリ歐洲ニ赴キ各國政府ト談判ニ及フ積ナレハ多分當年々末ニハ日本ヘ歸國スルコト出來スヘシ歸國後ハ速ニ改正ニ取掛ルヘシ

九卿　草案ニ名ヲ記シタル上ハ政府ヲシテ其約ヲ履行セシムルコトニシテ則條約ナレハ既ニ改正ヲ爲スモ同樣ナリ

九使　余等ハ唯今度改ムヘキ條約ノ條款ヲ論センコトヲ望ム且我政府ノ允准ヲ經タル上ニ非サレハ之ヲ極定セサルヘシトノ約諾ナレハ談判ノ結末ヲ書載スル書面ニ調印スルコトヲ得ヘシ

十卿　此事爲シ難キニ非ス蓋シ夫レニハ我方ニ於テモ聯邦議事上院及ヒ大統領ノ允可ヲ經サレハ得ストノ約ナレハ差支ナシ然シ何頃其允准ヲ取リ何頃改正ニ取掛ルトノ時限ヲ知ルコトヲ望ム

十使　兩條ノ趣旨ヲ諾ス若シ日本ノタメ公然タル約諾トナ

ラサル時ハ日本帝合衆國大統領議事上院之ヲ互ニ允可スル迄ハ又合衆國ノタメニモ之ヲ約定トセサルヘシ此約束ヲ以テスル時ハ双方ノ趣意ヲ合シ談話ノ結局ヲ書記シテ後日ノ備忘トナストモ余等ニ於テ差支ナシ

十一　又可成ハ改正ノ期限ヲ千八百七十三年七月第一日迄延期センコトヲ望ム

十一卿　外各國トノ條約モ同時ニ改正セラルヽ乎

十二使　然リ

十二卿　使節ノ帶有セラルヽ外各國ヘノ委任狀ハ矢張調印ノ權ヲ與ヘス唯ニ論評スルトノ同文同意ナル乎

十三使　何レモ同樣ナリ

十三卿　他ノ國々トノ條約ハ皆一樣ナル乎貿易及ヒ其他ノ事ニ關係スル諸條款ハ何レノ條約ニ於テモ同樣ナル乎

十四使　然リ凡テ外國ト取結フ條約ハ皆同樣ナリ

十四卿　然ラハ一國ニ與フル特典ハ之ヲ他ノ國々ヘモ與ルノ趣意ナル乎

十五使　然リ

十五卿　條約改正延期ノ事ニ付既ニ他ノ國々ヨリ報ヲ得タル乎否

十六使　其事ハ既ニ書通シタレトモ其回答ヲ得ス

十六卿　左スル時ハ合衆國ノ報答ニハ少シク求ムル處アリ我等ニ於テハ素ヨリ日本皇帝及ヒ使節公ノ意ヲ樂シムルコトヲ望ムニヨリ他ノ政府ニテモ之ヲ承諾スル時ハ右改正ノ期ヲ一ケ年遲延スヘシ其間ハ是迄ノ條約ヲ取行ヒ若シ其內新條約ヲ以テ他國ニ別段ノ便利ヲ與フルコトアラハ現今條約ノケ條一ヲモ廢セスシテ其便利ヲ以テ我國ニモ及サレンコトヲ企望ス

十七使　然リ

十七卿　此取極メヲ以テ使節公ニハ條約改正ノ談判ニ取掛リ何ノ件何ノ條彼ヲ改メ之ヲ加フト云フコトヲ述ヘ給フ乎

十八使　陳述スルコトハ數多アリト雖トモ是皆細微ノコトニ涉レル者ナレハ今爰ニ其緊要ノ條件ヲ擧ケン

十八卿　但其概略ト總論ヲ聽キ後日其順序ヲ追テ其細目ヲ論スヘシ

十九使　海關稅ヲ定ムルコトハ自由ノ權ヲ得ルコト及ヒ局外中立ノ事

十九卿　第二ノ箇條ハ大ニ難アルヘシ然シ貌利多泥亞トノ條約ノ如ク總體兩國間交際ノコトヲ記載スヘシ

廿使　外國コンシユル裁判ノ權ヲ廢シ日本司法省ニ歸セシムヘキ事

廿卿　次官　此事ハ條約取極メノ日ヨリ直ニコンシユルノ權ヲ廢スルト云フ事ナル哉

廿一卿　夫レハ後日論定スヘシ

廿一使　通用貨幣ノ規則罪ヲ犯シ他國ニ遁匿スルモノ兵隊上陸ヲ禁スル事兩國間ニ難事差起ル時ハ公然絕交ノ擧或ハ戰爭ニ及ハサル前平和ニ事ヲ落着セシムル樣取計フ事是ハ緊要ノ事件ニシテ尙細事ニ至テハ他日又追々談判スヘシ

廿二卿　合衆國ヨリモ貿易ノ章程人民ノ保護及ヒ其他ノ事ヲ願フコトアルヘシ貴君今陳述セラルヽ處ニテハ現今條約中ノ總條款ニ涉ラス此數ケ條ヲ論スル順序ハ如何セラルヽ哉

廿二使　何レニモ都合ニ從ヒ之ヲ論スヘシ

又委詳書面ニ認ムル方可然ヤ貴君ノ所思ヲモ伺フ

廿三卿　之ハ次ノ談判ノ節熟考ノ上取極ムヘシ

又使節條約ヲ取極ムルノ權ナシト云フニ付難事アリ一ケ年遲延スル時ハ大統領撰擧ノ期ニ至リ大統領幷諸官員及ヒ議事上院ノ三分一ヲ變セン故ニ其已前ニ取極ルニ非サレハ終ニ取極メ難カルヘシ先ツ互ニ談論シテ雙方旨趣ノ符合スル乎ヲ見ル方可然双方異存ナキケ條ハ之ヲ書面ニ記載スヘシ去迚必ス調印セサルヲ得スト云フニモアラス是等之事ハ愈事ヲ論スルノ際ニ臨ミ取定ムルヲ好シトス

又曰諸件都合ニ從ヒ之ヲ論スヘシ此次ノ談判ニハ合衆國ノ改正セント願フ條件ヲ申通セン夫レニハ我等一同商議セサルヲ得ス且余モ今貴君ノ所望ヲ知ルヲ得タリ

廿三使　條約改正ノ期限ニ付テハ今決定シテ申入ル事能ハスナレトモ千八百七十三年三月前迄ニ時ヲ定ムル樣倘思考シ一兩日間ニ貴君へ報知スヘシ

廿四卿　然ラハ猶水曜日第十二字面晤ニ及フヘシ

註　右對話ノ行ハレタル日ニ關シテハ**一九**參照

六八

二月五日（三月十三日）　米國國務省ニ於テ岩倉大使等ト米國國務卿等トノ對話書

日米兩國ヨリ條約中改正希望條項開陳ノ件

第　二　號

千八百七十二年第三月十三日我明治三壬申二（五ノ誤カ）月五日水曜日

華盛頓府國務省ニ於テ國務卿ハミルトンフイシユ及ヒ日本使節談判手續筆記當日出席ノ面々

岩倉大使　木戸副使　伊藤副使　森少辨務使　鹽田一等書記官　隨行ブルークス　國務卿ハミルトンフイシユ　同輔チヤーレス、ヘール　譯官ライス

一卿　使節ニ於テ演述スヘキ事件アリ哉

一使曰　有リ先日約セシ處ノ廉ヲ談判致シ度候此前ノ談判ノ節ニ拙者持參致候國書ニ全權委任ノ文面無之トノ御話有之候故其後我輩ヨリ森少辨務使ヲ以テ相談ニ及ヒ候處早速同人ニ要用ト被思召候廉ヲ御傳有之依之當方ニ於テハ副使ノ內ヲ歸國爲致

天皇陛下ヨリ要用分明ノ國書ヲ願ヒ受ケ候積ニ決定致候

現時國書ニテ其權有之儀ト被存候ヘトモ尙不足ノ處有之候ト勘考致候

勅旨ノ趣意ハ至テ廣大ニシテ國書ニ載セ有之候ヨリ遠ク相及ヒ居候

二　又夫レ故ニ使節ニ於テハ　天皇ニ申奏シテ全權ノ分解ヲ乞受候義肝要ニ候事ト勘考致候

三　又中立次第遲々ナク全權ヲ委任セラレ候義相違有之間敷候就テハ右往返ノ間ハ其儘談判致シ居返事到着次第調印出來候樣ノ結末ヲ得置度候

二卿　其儀ニ付難事無之ト存候乍併使節ニ於テ全權ヲ御掌握被成候迄ハ唯談判致シ候ノミニシテ約定ニテハ無之候此前ノ會議ニ使節ヨリ談判可被致ケ條御示シ有之候ヘトモ未タ所存ヲ述ヘ熟談ニ及ヒ居不申候間今日ハ拙者ノ所存ニテ條約改正ノ節ニ相改可然ノケ條ヲ陳述致シ可申候

四使　承リ度候

三卿　右ケ條ノ內已ニ御用意ノ處モ可有之候ヘトモ先拙者ヨリ開口可致候

第一條　外國船ヲ當時未開ノ港ニ入進セシムルコトヲ許スヘキ事

第二條　燈明臺幷港運上ノ事

第三條　條約規程ノコト就中長崎ニテハ何處ヲ以テ內地ト致居候哉不相分面倒出來居候事故ニ取廣メ不申テハ不相叶候

第四條　旅行切手ノ法ヲ立テ外國人ヲ保護シ而シテ內地ヲ通行シ日本人ト貿易ヲ營ムベキ權利アラシムヘキ事

第五條　條約規程ノ內ニ於テ外國人財產ヲ賃貸シ實產家屋田土ヲ所持シ且其處ヨリ一定ノ距離內ニ在リテハ之ヲ他人ニ讓リ渡スヘキ權利アルヘキ事

第七條（註第六條缺）　何ノ役目ニ拘ラス日本人外國人ノ使役ニ供シ且又條約規程幷開市ノ地ニ於テ日本人外國人ヲ相雇候義勝手タルヘキ事

第八條　日本人ト外國人トノ貿易交際ノ間ニ直ニ又ハ直ナラストモ制限ヲ設ケ或ハ免狀或ハ格段ノ免許ヲ立テザル事

內地ノ運上ヲ設ケ又ハ開港場ニ持出ス所ノ物品ニ稅ヲ賦スマジキ事

從來開港場ニハ番所ヲ立テ販鬻スル處ノ物品ヨリ稅ヲ取立テ之カ爲メニシテ代價沸騰ニ及ヒ候義承知致シ居候

此ケ條ノ趣意ハ普通ノ國稅ヲ彼是申立候義ニハ無之唯其地方又ハ別段ノ稅ヲ貿易品ニノミ賦シテ不公平ニ陷ル事ヲ防キ候而已ニ候

第九條　何國ヨリ輸入シ又ハ何國ヨリ輸出スルニ拘ラス凡テ輸出入稅ハ一樣公平ナルヘキ事

但シ密商ハ禁止スベシ

第十條　地方規則ノ事

第十一條　言語出板幷信心ノ自由ヲ與ヘ宗旨幷禮拜ノ事ヲ寬恕シ之ヲ苛責シ侮辱セサル事

第十二條　他國ノ政府ニ與ヘタル貿易ノ利益又ハ殊典特例ハ之ヲ合衆國ノ人民ニ同等ニ及ホスヘキ事

四　右ハ御同樣ニ於テ熟考可致肝要ノケ條ニ候勿論御相談中ニハ他ノケ條モ相生シ可申候

五使　前日差出置候ケ條ノ辨明御入用ト存候

五卿　近來淸國ト條約御取結ニ相成候義ト承知致シ候

六使　然リ淸國ヘ差遣シ候使節ニ於テ假條約取結申候併日本ヨリノ近報迄ハ未タ政府ニ於テ本條約允准ニハ及ヒ不申候

六卿　御用意出來居候ハヽ前會御差出之條約ニ關係シタルケ條御辨明伺度候

七使　當方ニ於テハ未准備整不申候ニ付條約調印後直ニコンシュル裁判ノ權ヲ廢シ候義ハ所望ニ無之候歐米ノ良法ヲ基本トシテ立法ノ條例ヲ定メ候義ヲ布告致シ其日ヨリ諸ノ案件ヲ地方ノ裁判所ニ於テ取扱其准備出來候上ニテコンシュルノ權ヲ廢シ申度候
當方ニ於テ取扱フヘキ手順ヲ預シメ箇條中ニ書載致シ置度候

七卿　歐洲ノ各國ニ於ルカ如ク滿足スヘキ地方ノ裁判所御設立ノ上ハ何時ニテモコンシュルノ裁判所ヲ廢シ候儀我政府ニ於テハ大慶致シ候併之ヲ開クニ於テハ全其滿足スヘキ設立ニ關係致シ候故將來之ヲ備ルコト不容易ノ儀ト存候

八使　新約ノ爲メニ陳述致候ケ條ヲ談判シ且貴下ノ御存慮伺度候

八卿　此儀ニ付テ貴政府ノ御所望充分ニ了解致シ兼候

九使　外國ニ戰爭有之節ハ日本政府ニ於テ素ヨリ我國民ヲシテ局外中立ヲ破ラサラシメサル手段ハ何程モ有之候ヘトモ萬一日本在留ノ外國人ニ於テ公然ト鬪爭ノ擧ニ及ヒ管轄致シ難キ時ハ日本政府ハ其土地ニ於テ外國人

右樣ノ所業ニ及ヒ候カ爲メ局外中立ヲ破リ候責ニ任シ候儀ハ相免レ度候

九卿　新約ノケ條中右樣ノ所ニテハ使節ノ御所存御書入可然哉ト存候

十使　其外談判ノケ條御了解相成候哉

十卿　玆ニ所持致シ居候

第一　日本政府ノ都合ニ依リテ海關稅ヲ相定メ候義勝手タルヘキ事

第二　局外中立ノ事

第三　貨幣ノ事

是等ノ御趣意承知致度候ニ付少々御辨明被下度候

十一使　御承知ノ通リ造幣寮ヲ設立シテ新貨デシマル法ヲ通用致候ニ付左ノケ條ヲ立度候云ク

日本政府ハ全國ノ造幣寮ヲ立テデシマル通貨ノ普通ノ法幷同經ノ定量品位ヲ用ヒシニ依リ一切ノ租稅政府ノ收納等日本ノ圓貨ヲ以テ算用仕拂收納致シ此後ハ之ヲ以テ全國ノ貨幣トナシ一切ノ負債ニ於テ之ヲ以テ本位ト爲スベシ

舊約ニ從ヘハ我政府ニ於テハ量目比較ヲ以テ外國ノ貨

幣ヲ引換可遣責ニ任シ居候ヘトモ今日ニテハ造幣寮ニテ地金引換可申ニ付此ケ條ハ不要用ト相成候當今ニ於テハ貨幣引換ノ事ハ總テ爲換座幷相對ノ取引ニ任シ候積ニ候

十一卿　左樣ニ候ヘハ通貨ノ義ヲ全ク日本ノ貨幣ニ限定被成候御趣意ニ可有之候此仕法ニテハ自ラ日本ノ貨幣騰貴シテ商人ニハ非常高直ノ價ニ相當リ不申哉且此仕法ニテハ貴政府ニ於テ日本ノ貨幣ヲ貯藏シ日本一圓金ノ相場ヲ二弗トナシ候トモ所詮致シ方無之候
到底道理上ニ於テハ全國ハ之ヲ以テ本位トナシ且外國ノ貨幣モ御承認無之テハ不相叶義ニ候

十二使　舊約ニ依候時ハ三百十一纏ヲ以テメキシコ百弗ニ引換居候ヘトモ最早四角ノ舊貨相廢シ候手順ニ到リ其名ノ貨幣無之事故以後ハ佛國同樣ニ貨幣引換ハ造幣寮又ハ爲換座ニテ相對ニ致シ可申候

十二卿　貴國壹圓金ノ本價幷メキシコ洋銀ト比較ノ價承知致度候

十三使　我貨幣ハ其量目四百十六ケレーンニテ純銀九百分アリ銀貨ハメキシコドルラルト同樣ニシテ金貨トノ比例ハ一ト十六、一七三ナリ但シ本位以下ハ一ト十三、三分一ニ同シ

十三卿　貴政府ニ於テ當時貨幣ニ就テ損失ニテモ有之候哉無之候ハヽ何故ニ變換ノ義御所望ニ相成候ヤ

十四使　右ハ爲換座ノ職務ヲ以テ政府ヲ煩シ候義最早無用ノコトト存候故ニ候ナリ殊ニ舊貨ハ一切無用ニ屬シ候故此後ハ新貨ノ事而已記載致候

十四卿　然ラハ新約中ニ日本ノ圓貨幷メキシコ洋銀ヲ一樣ニ御受取ノ旨御記載被成候哉

十五使　左樣ト存候

十五卿　新約ニ日本貨幣竝ニメキシコ洋銀ヲ一樣ニ御請取可相成義御同意被成候哉

十六使　左樣ニ候

十六卿　然ハ面倒之義有之間敷勘考仕候此一條ノ決定ハ先是迄ニ致置可申候

十七　其次ノケ條ハ五ニ脫走人引渡ノ事ニ候此一條ハ當政府ト大抵諸國トノ條約ニ同樣ノ文面有之候事故少々取捨致シ重罪ニ限其通リニ致シ可申候

十七使　然リ

十八卿　日本ニ兵隊ノ上陸ヲ禁スルノ趣意ハ如何ノ譯ニ候哉

十八使　先年來我國歩艱難ニ就テ内亂ヲ生シ之レカ爲メニ外國人ニ多少之危害有之其時成立之政府ニテハ之ヲ保護スルコト能ハサルニヨリ竟ニ外國ヨリ兵隊ヲ送リ越シタリ一體此儀ハ他國ニ於テ許サル、事ニ候ヘハ以後ハ預シメ免許狀ヲ得スシテハ之ヲ爲シ克ワサル樣ニ致シ度候

十九　此一條ハ決シテ貴國從來之所業ニ就テ申述候義ニハ無之只此後歐洲之諸國ト取結フヘキ條約中ニ書載致シ度候

十九卿　當方ニ於テ彌差支有之哉ハ存シ不申候ヘ共只條約中ニ右樣ノ文面有之時ハ何カ嫌疑ヲ受ケ候樣ニ相見ヘ候而已ナリ他國ニテ承知致候ハヽ於當國ハ差支無之候此儀ハ當國ヨリモ先ツ篤ト他國ト御談判可然候

廿　又結末ノケ條ニ若シ兩國ノ間ニ一方ナラザル不和ヲ生スル時ハ兵力ニ依ラサル前ニ平穩ノ辯解ヲ爲スヘシト有之是ハ當時文明諸國ニ行ハルヽ處ノ法律ニ候故ニ今之ヲ條約中ニ書載致シ候時ハ全ク文明國中ヲ目シテ野蠻トナシ候事ヲ防キ候樣ニ相見ヘ申候然レ共之ヲ加入スル儀ニ就テハ格段ニ御趣意有之候乎

廿　使　是モ此後條約ヲ改正スヘキ他國ノ事ニ關係致候當方ニ於テ是迄日本ノ舊史ニ出來候事實ノ再生ヲ防キ度積ニ候

廿一卿　當方ニ於テハ此一條ニ付別段ノ御趣意無之候ハヽ差支無之候

廿二輔　之ヲ防ク事ハ出來間敷候ヘ共世界ノ耳目ヲシテ之ヲ破シ事ヲ顯然ト知ラシムル事ハ出來可申候

廿一使　尙勘考可致候

廿三卿　今日ノケ條ヲ御勘考被下度且此後ノ集會相願度候

廿二使　談判ノ事件ヲ總テ勘考致シ置可申且又副使兩人當月廿日ヨリ當府出程サンフランシスコ港ヘ相越此處ヨリ第四月一日郵船ヲ以テ日本エ渡航致シ候筈ニ付急速ニ談判ヲ遂ケ右副使當府出立前迄ニ可成ハ相應之結局ヲ得テ之ヲ我政府ニ充分ニ報告爲致度候

廿四卿　來ル土曜日一字半ヨリ一時半間談判致シ可申候間其節双方ノ存慮ヲ明カシケ條ノ辨明ヲ致シ可申候

條約ヲ調候義ハ第三月二十日迄ニハ間ニ合不申候

廿三使　辱ク存候來ル土曜日乃第三月十六日十二字半ニ罷出可申候

註　記錄中ニ存スル左ノ文書ハ其ノ性質詳ナラサルモ大久保、伊藤兩名ノ歸朝事情ヲ窺フニ足ルヲ以テ附記ス

天皇陛下ヨリ我使節ニ委任シタル全權内ニハ現今將來ノ都合ヲ謀リ各國政府ノ考案ヲ得而シテ新條約ノ草案ヲ商議其内ニ揭載スヘキ緊要ナル主旨ヲ討論シテ豫定シ其上ニテ此草案ニ調印シテ歸朝シ他日條約ヲ改正スルノ時ニ臨ミ之ヲ以テ基礎標目トセン爲ニ之ヲ施行スル事ヲ任セラレタリ故ニ各國ノ君主ヘ遣ハサレタル御國書モ此意ヲ存シテ書載アリ然ルニ今合衆國ノ國務卿ハミルトンフキシユニ面談シ新條約ニ揭載スヘキ箇條ノ草案ニ及ハン事ヲ云タルニフキシユノ所見ニテハ今般ノ使節ニ此草案ヲ議定調印スヘキ權アル事ハ御國書中ニ分明ナラス御國書ノ文意ヲ推シテ論ストキハ合衆國政府ニ於テハ使節ニ此般ノ權アリト看做シ難シ故ニ共ニ調印スル可ラス

合衆國ノ政體ニ據レハ大統領ノ交代ハ四年ヲ以テ期トシ上院ノ議員ハ隔年ニ其三分ノ一ヲ交代セシム又大統領ノ交代アル度ニ各省ノ卿或ハ主長共ニ進退交換スル事ナリ且ツ條約調印ノ棄ハ國務卿ヨリ上院ニ建議シ其許可ヲ得テ後ニ實施スルコトヲ體裁トセリ之ニ由テ考フル時ハ今國務卿ト談判ニ渉リ草案ノ箇條ヲ議定スルトモ之ニ調印セサル間ハ結局一場ノ談話ニ比シク他日ノ證據トスヘキモノナシ況ンヤ國務卿モ其人ヲ同フセス上院ノ議員モ亦當時ノ人ニ非サル時ハ又今日ノ談判ヲ親知スル人ナカルヘシ故ニ一度談判ニ渉ル時必ラス其草案或ハ書面ノ上ニ調印シ他日ノ證ニ保存セサル可ラス

右ノ狀實ニ付今使節ノ商議ニテ其内ノ一人カ或ハ二人特ニ當國ヨリ直ニ日本ニ歸朝シ　天皇陛下ニ奏聞シ別ニ此般ノ草案ニ調印スヘキ全權ノ命令ヲ奉シテ再ヒ海外ニ出ツヘシ

此全權書ハ別ニ日本政府ヨリ官員ヲ派出スル歟或ハ當國在留ノ森少辨務使ニ命スル歟兩樣ノ内ニ決スヘシ而シテ此命ヲ奉シタル官員右ノ草案ニ調印スヘシ然レトモ使節一行ハ當國ニアリテ空シク此全權書ノ來著スルヲ待コト能ハス於此國務卿ニ乞ヒ直樣談判ニ取掛リ之ヲ決議シ草案ヲ書シテ後ニ當國ヲ去ルヘシ然ル時ハ此草案ニ前文ノ全權ヲ得タル人國務卿ト共ニ之ニ調印スヘシ

日本政府ハ使節ノ特ニ歸リテ建言スル旨ヲ聽カハ此全權書ヲ下サンコト必然ナリ願クハ國務卿此情實ヲ諒察シテ使節ノ望ム所ヲ背セラレン事ヲ欲ス

六九

二月八日（三月十六日）　岩倉大使等ト来國國務卿等トノ對話書

彼我ノ改正希望條項ニ關聯シ意見交換ノ件

第三號

西曆千八百七十二年第三月十六日我明治五壬申二月八日土曜日　第三回談判手續出席　岩倉大使　木戸副使　大久保副使　伊藤副使　森少辨務使　臨田一等書記　隨行ブルックス　國務卿フイシユ　國務輔ヘイル　通譯ライス

一國務卿曰　此前御覽ニ入候廉書ニ付御見込之處書面ニ御認相成候哉

一使節曰　然卽チ貴君之御廉書之條ニ答候書面唯今ブルツクスエ爲讀可申候
　此時ブルツクス此方ノ廉書別紙（註「廉書別紙不錄」）ノ通朗讀イタス

二卿　貴國鑛山ノ法律ハ如何ニ有之候哉

二使　日本ノ國法ニテハ諸鑛山ハ盡ク政府ニ屬候

三卿　貴答ニ據候得ハ鑛山ハ盡ク政府ニテ所有スルトノ理ニ有之候哉

三使　是迄鑛山ヲ外國人ニ所有致候儀無之都テ政府ニテ管轄イタシ居候

四卿　若外國人一個ノ地面ヲ借貸シ其地面中ヨリ鑛山ヲ見出候節ハ其地面ヲ所有スル期限中ナラハ政府ニ於テ何等ノ御取扱被成候條理ニ有之候哉

四使　十分ノ御答難致候乍併右樣ノ節ニ至リ候ハヽ政府ニテ至當ノ法律ヲ相設ケ可申候

五卿　貴國政府ニテハ既ニ他人ニ爲占得候地面中ヨリ見出タル鑛山ヲ政府ノ所有トスルノ條理有之候譯ニ候哉

五使　現今實踐之法律ニ據レハ外國人ニ借渡候地面中ヨリ

若シ鑛山ヲ見出候節ハ此鑛山ハ卽チ政府ノ所有ニ屬候尤其節ハ其地面持主エ損失ヲ償候爲ノ手當イタシ候

六卿　若其地面持主其鑛山ニ手ヲ下サヽル時タリトモ政府ニテ之ニ立入ル條理有之候哉

六使　然尤政府ヨリ地面ノ償ハ致シ遣候

七卿　若地面中ノ鑛山ヲ起サヽル時ハ其地面ヲ其儘ニ差置候歟譬ヘハ地面持主ナルモノ田圃ヲ開キ其所ニテ未タ手ヲ下サヽル鑛山ヲ見出タル時ハ日本政府ニテ其者ヘ對シ何等ノ所置ヲ施候條理ニ有之候哉

七使　政府ニ於テ至當公平ノ處置ヲ施シ可申候

八卿　條約之規程ハ現時十里ヲ定ム貴君ノ廉書ニテハ何程ノ利益ヲ新ニ與候積ニ候哉

八使　十里ノ規程ハ只旅行ノ爲而已今度ノ案ニテハ此十里內ニ地ヲ借受居住スル事ヲモ設候積ニ候

九卿　十里ノ規程ハ全ク游歩ノ爲而已ニシテ居住ノ爲アラサル事ハ相分リ申候

九使　右之通ニ相改メ候ニ付テハ其地方之諸務ヲ取調候爲メ若干ノ時日ヲ要シ候

十卿　貴答ノ廉書中ノ文面ヲ左ノ通ニ改候方可然

條約規程內及ヒ外國人ノ爲ニ開キタル市內ニ於テ居留ノ爲ニ靜產ヲ借リ之ヲ所持ス云々

此件ハ我曹ノ曾テ考候處ト聊カ相違イタシ居候間猶勘考可仕候

十使　地面ハ各區ニ別チ入札ヲ以テ地ノ價ヲ相定メ候其故ハ地面ハ人々相對ニテ賣買候儀相成不申只政府ヨリ相渡候而已

十一卿　佛蘭西英吉利荷蘭トノ條約モ合衆國ト同樣ノ譯ニ候哉我國ノ條約ニ據レハ開キタル市街中ニ於テハ米利堅人ハ何レノ處ニ住居イタストモ差支無之ト有之候余ノ考ニテハ米利堅人ハ此地ニ於テ地ヲ借候事モ又其上ニ建タル家屋ヲ買求候事モ出來可申理アリト存候但此件ハ日本政府ト外國公使ト約定イタシタル所ニ從フヘキ事ナリトオモハレ候

十一使　我東京ニ於テハ外國居留地ハ凡五十ヱツクル許リ是ハ東京ノ一小部分ナリ併外國人ハ都府ノ外郭十里ノ以內ハ勝手ニ游歩スル事ヲ許シタリ

十二卿　貴答ノ第二條ニテハ貴國ニ於テ開クヘキ港ノ數ト其時限ヲ載セス

十二使　愚考ニテハ貴君ハ我等ノ答ノ趣意ヲ誤解ナサレ候ト思ハレ候開港ノ儀ニ付テハ此方ニ於テ聊モ云々反對スルノ意ナシ此方ニテハ專ラ開港ノ說ヲ主張致候ナリ尤何レノ港尤モ外國貿易ニ適當ナルヘキ歟ハ外國人ノ方ヨク之ヲ心得候此使節外國ト相談イタシ候得ハ其港ト時限トハ直ニ相決候事ニ有之候

十三卿　此方ニテモ此件ハ篤ト相考ヘ何ト致候テ可然カ熟慮可仕候但此外猶貴君ヨリ御說明ノ廉モ有之候乎

十三使　教宗ノ儀ニ付貴君ノ廉書ノ趣意ハ我曹ニ於テ十分了解イタシ兼候我國民ニ對シ別ニ教宗ヲ强ユル事難相成唯我國人ノ外國人ニ對シタル所業ヲ制スル事ヲ勤トスル而已教宗ニ付テノ論端ヲ生スル事ヲ許シカタク候

十四卿　此方ニテ要スル處ハ我國人民ノ意裏ヲ自由ニ述ヘ新聞ノ刊行ヲ許シ信仰ヲ自由ニシ併テ之ヲ貴國人民ヘモ施及セン事ヲ望ム事ニ候國律國法ニ反カサル以上ハ人々已レカ思フ處ヲ思ヒ言ント欲スル所ヲ言ハシムル事卽チ人生ノ權利ヲ與フル事ト云ヘシ人間ノ思考ニ付政府ヨリ關係スル事アリテハ其自由ノ公權ヲ害候事ニ候尤右等ノ事ニ付我カ言ヲ容ルヽ處ニアラサレトモ既

ニ貴國ノ朝廷ニ立タル人ニハ各自其思考スル處ヲ自由ニ思考スルナルベシ

十四使　然ラハ貴君ノ所考ニテハ此事ヲ貴國人民併セテ我國人民ノ差別ナク偏ク之ヲ施行セントノ事ナルヘシ只今卽チ貴考ノ趣旨ヲ了解致シ候間猶熟考ノ上御答可申候

十五卿　自由刊行ノ趣意ハ御了解被成候哉

十五使　然了解致シ候ト存候

我國政府ハ現時大ニ進歩ニ赴キ候間右樣ノ箇條ヲ條約ニ書載スルヲ要セスト存候我國人モ各自ノ公權ヲ守重スル事ヲ知ルニヨリ之ヲ書載スルヲ要セスト存候ナリ

十六卿　之ヲ條約ニ書載セハ猶政府ノ重キヲ助クルノ爲ニアラスヤ

十六使　此等ノ件ヲ條約ニテ約定スル事ハ大ニ人民ノ意ヲ害スル條ニハ無之哉

十七卿　將來政府ニ登庸セラルヽ人此自由演述自由信仰ノ事ニ反對ノ所說ヲ唱フモノ有之候時ニ至リテ今之ヲ條約ニ揭載シ置カハ之ヲ扞守スルノ助アルヘシ

十七使　左樣ノ變遷無之儀ヲ此使節ヨリ保證致シ可申候我國人ハ佛教ヲ信スルモノモ各自ノ公權ヲ重ンスヘキ事ハ之ヲ承知セリ恰モ貴國人ノ耶蘇教ヲ信スル者モ同樣ナリ故ニ此件ヲ條約ニ記載セハ大ニ人心ニ戻リ外國人ヲシテ我國內ノ事務ニ關涉セシムルノ端ヲ開キ可申

十八卿　篤ト勘考被成候ハヽ猶承知モ出來可申アナカチニ一宗ノ爲ヲ而已論スルニ無之候

十八使　現時政府ノ趣意ハ各自人民ノ公權ト信仰トヲ守重スル事ニ候此形勢ニ當リテ敎宗關係ノ條ヲ條約中揭載スルニ及ヒ申間敷候

十九卿　此件ニ付現時實踐ノ條約中ニ書載シタル條々有之事ニ候御承知ナルヘシ

此時國務卿條約中ノ箇條ヲ朗讀ス

十九使　此箇條ハ日本人ト米利堅人トノ交際ニ關リタル事ニテ日本人中ノ交際ヲ支配シタルニハアラス此箇條ハ日本人米利堅人ヲ凌辱セザル爲ノ趣意ナレハ日本人中親族內ノ事務ニシテ我國而已ノ事ニ屬シ申候

廿卿　此件ニ付キテ二條ノ論議アリ一ハ公然ト認タル敎宗ニ關係スル事一ハ之ヲ信仰スルノ人ニ關係スル事

廿使　日本人ヲ裁判スルノ權ハ全ク日本政府ニアリテ唯外國人ヲシテ不快ヲ懷カシメザル樣ニ所置スル事ニ候ナリ

廿一卿　此方ニテ需求スル處ヲ使節ニ於テ能ク了解被成候樣致度候

廿一使　此箇條ハ兩國ノ交際上ニ於テ唯外國人ノ威ヲ損セサル爲ニ書載セル事ニ候既ニ魯西亞ニ於テハ居留ノ外國人ニハ信仰ノ自由ヲ許ストモ自國ノ人民ニハ此自由ヲ與ヘスト聞及候

廿二卿　此自由ヲ與フルハ卽チ國ヲ進歩スル爲肝要ナル事ハ貴君モ被思候儀ト存候

廿二使　我國ノ人民ハ各自ノ公權ト云事ヲ能ク承知致居候

廿三卿　此外論議ノ件有之候哉

廿三使　過日貴君エ差出置候六ケ條ノ草案ニ付御見込ノ處承リ度候

廿四卿　此進歩ニ付貴國政府ニテ全ク獨立國ノ理ヲ以テ租稅ヲ貴國政府ノ獨權ニ相定候儀ニ付テハ合衆國ノ論ヨリモ他國ノ議論多カルヘシ併外國人等貴國內ヲ無差支旅行シ無差支商賣ヲナシ其日本國內ニ於ケル猶自國內ニ於ケルガ如ク同樣ノ便宜ヲ得候儀日本政府ニテ之ヲ保證スル迄ハ此獨權ヲ唱事ハ相成申間敷存候

廿四使　合衆國政府ニテ立案被成候稅法ノ制限如何ニ候哉

廿五卿　此件ニ付組森氏ニモ申述置候通リ先ツ品物之種類ニ分チ年限ヲ立テ其間ハ何程ヨリ以上ノ稅額ヲ命セスト相定メ申度尤只今之ヲ細論スルノ用意ハ無之候

廿五使　日本政府ニ於テ外國ノ貿易ヲ鼓舞センカ爲其自由ヲ與フルノ所置ヲナシ進歩ヲ妨ケズ大ニ之ヲ贊成スルノ意ナル事ヲ分明ナル上ハ右樣ノ取極ハ無用ニ屬候儀ニ可有之候重稅ヲ命スル事ハ日本人ヲシテ外國交際ニ付得ル處ノ利益ヲ減少セシメ頗ル日本政府ノ素願ニ無之候

廿六卿　貴國ニモ右樣ノ方略ハ近來ノ事ナレハ若シ退歩スル時ハ重稅ヲ命スルナシトモイヒガタシ

廿六使　永世右樣ノ退歩無之儀ヲ保證セハ如何

廿七卿　國帝幷ニ補弼ノ人タリトモ萬歲ノ生命ヲ保存スルニ非ス一君ノ善政ハ往々嗣君ノ手ニテ更革スル事アリ外國ノ貿易ハ此般ノ更革ニテ其輸入ニ當リ大ニ波及セラルヽ事可有之又輸入ヲ防ク爲ニ稅ヲ命スル事モ可有之候

廿七使　貴君ハ我國政府ヲ信用不被致候

廿八卿　是ハ人生ノ保存ヲ信用セザルヨリ起候ナリ

廿八使　我國ノ景況ニヨリテ考フルニ貴君ハ我政府ヲ信用被致可然ト存候

廿九卿　外ノ箇條ニ於テ外國人ヲ信用スルノ證ヲ露シ外國人ニ貿易ノ公理ヲ被與候ハヽ此方ニテモ此ケ條ヲ承諾可致候

廿九使　御同意可申候

三十卿　此方ニ於テハ他國政府ノ如ク猥ニ之ヲ拒ムニ非ズ其理ハ各國中ニハ此等ノ事ヲ許サヾル政府モアルヘシ到底貴國政府ニテ貴國ノ人民ヲ深ク信シ全ク國ヲ開キ外國人ヲシテ內國ノ人民同樣ニ往來混同ヲ許シ政府ノ威力アル事ノ證ヲ世界內ニ示ス時ニ當ラハ各國ニテ貴國獨斷ノ稅法ヲ創立スル事ヲ承知可致候

三十使　今既ニ日本ニ於テ長延ノ鐵道建築ニ取掛候故不遠成功可致ニ付我目的ヲ達スルノ期此時ニアルベシ

卅一卿　此方ニ於テハ可相成丈ケ貴需ニ應シ可申乍併他國政府ニテハ左樣ニ有之間敷ト存候

卅一使　日本政府ニテハ某ノ稅額ヲ減シ某ノ稅額ヲ增シ自

國ヲ防禦スヘキヲ要セリトオモハルモ緊要ナルヘキ時ハ自國ノ利益ヲ謀リ之ニ應シテ變革セサルヲ得ス

卅二卿　目今ノ處ニテハ品類ヲ分チテ方法ヲ設ル事ヲ御承諾不被成候テハ相成間敷ト存候尤モ後日ニ至リテ之ヲ改正スル事ハ可相成假令ハ日本全洲ヲ開クノ時ニ臨マヽ此權理ヲ許ス事アルヘシ

卅二使　此稅論ニ付テハ猶熟考イタシ可申入候

卅三卿　日本ニ於テ充分ニ整理シタル裁判所ヲ設ケタル上ハ何時ニテモコンシユル裁判ノ權ヲ廢止スルヲ承知スベシ併シ裁判所ヲ設ケタル後實ニ充分ナリトノ證ヲ得ル迄ニハ若干ノ時限ヲ要トイタシ可申候

卅三使　貨幣通用ノ儀ニ付テハ如何

卅四卿　貴君ノ目的確ト相分リ兼候現時ノ條約中ニハ量目ヲ以テ可引替トアリ然ルニ貴君ノ目的ニ據レハメキシコドルラルノ外都テ外國貨幣ヲ請取間敷旨ヲ書載被成度趣意ニ候哉

卅四使　舊條約取極ノ節ハ外國人イマダ日本貨幣ニ慣習セザルヲ以テ政府ニテ別ニ役所ヲ設ケ之ヲ引替ユル事ハ不得止ナリトセリ然ルニ現時之景況ニテハ此引替ハ無用ニ屬ス現ニ造幣寮アリテ恰モ外國ニ於ケル如ク無差支引替候事ニ相成居候

卅五卿　條約中政府ニテ引替候儀ハ時限アリテソノ時限ハ既ニ往事ニ屬候

卅五使　此時使節草案中貨幣ノ條ヲ朗讀シ畢リテ之ヲ納ム

卅六卿　貴國ノ金貨ハ銀貨ト相當イタシ候價位ニ候哉

卅六使　銀百圓ト同價ニ候

卅七卿　貴國ノ金貨其純質千分中ノ九百分ニ候哉

卅七使　此時日本新金ノ量目ヲ讀述シ其金貨ハ二十圓十圓五圓二圓一圓又銀貨ハ五十錢二十錢十錢五錢日本ニテ又メキシコ銀ト同價同品ノ新一圓銀ヲ鑄造セリ但シ此ハ合衆國ニテ一圓ノ鑄造ヲ廢シタルト同樣ノ理ニテ之ヲ鑄造スル事ヲ廢スベシ

猶此外定位助銀ト新一圓銀トノ比較ヲ辯セリ

卅八卿　貴國ノ本位貨幣ハ銀貨指タル事哉

卅八使　金貨ヲ以下ノ多數普通ノ本位貨幣トナシ銀ハ只十圓迄通用制限ニ候

卅九卿　貴國ノ十圓ハ我國ノ十圓ト同價ニ候哉

卅九使　殆ント同價ニ候但我國ノ方一ゲレイン弱輕ク有之候

四十卿　此個條ニ付別段異存無之候メキシコ銀ヲ日本ト同物ニシテ受取候得ハ夫ニテ宜敷候

四十一卿　罪人引渡ノ個條ニ付自國人民ノ外凡ソ外國人民ヲ其政府ニ引渡ス儀ハ同意致候

四十二卿　兵隊上陸ヲ禁シ幷ニ間違相起候時戰ヲ生スルノ前親睦ノ談ニ及候ノ兩條ハ他國政府ニテ承知致候節ハ此方ニテハ異存無之候

四十三卿　貿易章程ノ一二三四五六七條ニ就テハ更ニ御注意無之ト存候右ハ船積貿易ニ關スルノ條六ケ條稅目ニ關スル一ケ條ニテハ貴君ノ御趣意ハ是迄ノ通ニ履行被成度事ニ候哉

四十使　是迄ハ大事繁忙ニ付稅則貿易章程迄ニハ手ヲ施シ兼候ニ付猶熟考イタシ候上細密ノ事ニ付テ變革可致義可有之候

又使　使節ニハ盡力シテ貿易ノ利益ヲ助ケ度所存ニ有之候

四十四卿　斤量ニ付テハガラムト被申候ハ佛ノメトリツク法ヲ指シテノ事ニ候哉

四十一　使　副使ノ内日本發程致候以前今一回ノ御談判ヲ遂ケ度候

四十五　卿　來ル月曜日午後三字ヨリ四字迄ヲイタシ可申候

七〇

二月十日（三月十八日）　木戸副使等ト米國國務卿等トノ對話書

彼我ノ改正希望條項ニ關聯シ意見交換ノ件

第四號

千八百七十二年第三月十八日　我明治五壬申年二月十日月曜日　使節國務卿談判手續筆記當日連筵ノ名

木戸副使　大久保副使　伊藤副使　山口副使　森少辨務使　鹽田一等書記　隨行フルークス　國務卿フヰシ國務輔ヘール　合衆國駐劄日本公使テロング　譯者ライス

一使　大久保伊藤ノ兩副使歸　朝致候ニ付御同意ノ條々承度候

一卿　同意ノ條々ト申ハ此前ノ談判ノ節御差出ニ成候内第一條貿易ノ繁昌ニ隨テ前以テ差極メス時々開港可有ノ件乍併是迄モ適當ノ期限ニ至リ何ノ港ヲ發カルヽヤ承リ度候

二使　何ノ港ヲ開キ候ハヽ最モ外國ノ貿易ニ利益アルカヲ研究シ且幾多ノ時日ヲ經テ開クヘキ準備出來候ヤヲ決定致シ可申候

二卿　唯今右港名御示シ被下候儀出來候ヤ

三使　何ノ港ヲ開キ候ハヽ最モ貿易ノ爲利益トナルヤハ外國人ニ於テ決定スルヲ第一義ト存候其趣ハ森辨務使ヨリ已ニ貴下ヘ申入候

三卿　日本ニ於テハ外國ノ貿易ニ利益アル港ハ悉ク御開キノ積ナルヤ

四使　悉ク一時ニ開キ候事ハ出來兼候得トモ之ヲ開ク順序ヲ追々相定可申候

四卿　某年某月ノ何ノ港ヲ開クト申事御話無之候テハ五ノ約定難致候尤彌開港ニ御決着相成候ハ海關稅章程ハ御所分ニ御任セ可申候

第二條ハコンシュル裁判ノ事ニ候此儀ハ於當方モ廢止ノ儀切望スル所ニ候得共前日申述候通リ是非先ツ滿足スヘキ地方ノ裁判所御取建有之度候

五使　未タ全ク整備不致候乍併不遠内ニ出來候樣希望罷在候

五卿　噸稅ノ儀ニ付テハ如何樣ノ方策有之哉

「デロング（米使）ヘ傍談」

是迄ノ通ニ被成置候哉

「デロングヨリフイシエ（米使）」

條約ノ草案ヲ以テ之ヲ定ムルノ外策無之候

此時國務卿ト公使デロングト相談アリ併一切決定ノ事ナシ

六卿　幾數ノ港ニテモ御開キノ儀御同意ニ候哉

六使　若シ之ヲ開クヘキ期限ノ儀ヲ我政府ノ見込ニ任セラルヽ時ハ全ク御同意可致候

且港名ノ目錄ヲ作リ可申候

此方ニテハ開港ノ儀ニ付差支無之候間何地ニテモ貿易ニ肝要ノ所ハ開クヘシ

七卿　唯今右港名目錄御所持ニ候哉

七使　本條約取替ノ節差出スヘシ

八卿　先會ニ申述候條約ノ條款ハ草按御出來ニ候哉

八使　大略ノ草稿ハ相整候共先ツ要用ノ廉々決定候ハ緊要ト存候間未タ持出候迄テニハ用意不致候

九卿　之ヲ草案ニ載セスシテ談判出來候丈ケニハ已ニ御談判致候事ト存候

公使デロング　公務（國カ）卿ニ對シテ曰ク港規則ハ決定不致テハ不叶候

十卿　デロングニ答テ曰彼方ニテ一切之ヲ管轄被度（ママ）趣ナリ

公　右ハ決シテ出來サル事ナリ

十一卿　日本幷外國公使會同ノ管轄ニ不相成候テハ貴方而已ノ港規則ニ隨從難致候尤貴國ヲ殘リナク御開キ相成候時ニ至リ候ハヽ一切貴國ノ法則ニ任セ申候儀所好ニ候間夫迄ノ處ハ地方ノ規則モ港規則同樣日本幷外國公使會同ノ管轄ニ屬シ可申候租稅ヲ定メ候事ハ貴國ニテ勝手ニ之ヲ所分スル儀何分ニモ聞屆ケ難ク候若シ今日本人米國ニ來住シ甲ノ地ノ地租高價ナル事ヲ好マスシテ乙地ニ趣ク事自由ニシテ其害ヲ免ルヽ事出來可申トイヘトモ日本ニテ外國人居留ノ場所至テ少數ナルカ故ニ其所々ニテ重稅ヲ取ラレ候テモ外ニ致方無之候此方ニテ租稅ノ取立方干涉スル事ナクシテ我人民ノ重稅ニ

苦シムヲ坐視スル儀於當方能ハサル事ニ候

此時國務卿公使テロンクト話ス

公使曰當時取立有之候租稅ニテハ於コンシュル之ヲ管轄難旨ヲ話ス

十二卿　如何樣ノ難事有之レトモ此等ノ事ヲ取調候上ハ明亮ニ相分リ可申候

九使　當時日本政府ハ市政幷地方ノ事ヲ自ラ整成スルニ充分ナリト勘考致シ候

十三卿　外國人ヲシテ日本國內ヲ自由ニ起居往來スルノ權利ヲ許サルヽ迄ハ合衆國併外國政府ニ於テ此事ヲ承諾致ス間敷考ヘ候右等ノ規則ヲ是迄ノ通リニ据ヘ置今日議論ヲ起サヽルハ却テ日本利益ニハ無之哉

（朱書）「デロング」

傍ヨリ曰ク我役目ノ第一ノ所業ハ船ニ行キテ船將ヲ取ルニアリシ

十四卿　當時港長ノ事ニ付テ面倒相生シ居候他國ニテ之ヲ承諾セズ此等ハ總テ英人ニ有之我等ニ對シテ區別有之候儀承諾致兼候

十使　然ハ會同ノ上規則ヲ定メ又會同シテ之ヲ施行スルノ

御趣意ニテ候哉又日本ニテ港長ヲ黜陟セント欲スル節ハ必ス其時々外國公使ト相談スヘシトノ御論ニ候哉

十五卿　其人物ノ人撰幷其後其職ヲ命候時ニ於テモ發言ノ權ヲ所望致シ候

十一使　港規則ヲ設ケ候時ハ禮讓ヲ盡シテ外國公使ト相談致來候得共然シ人撰及ヒ命職等ニ至リテハ此方ニテ取極申候

十六卿　其通リニテハ一切ノ規則無用ノ者ニ屬シ可申貴國ニテ英人ヲ以テ港長ト爲スノ權理ヲ御主張有之候得共然シ其人物ハ每事自國ノ利益ニノミ歸シ候樣所置致候右等ノ儀ヲ此方ニテ相除度存候

十二使　此儀ハ一個ノ人物論ヨリモ一般ノ規則ニ關係致候一個ノ人物ナレハ之ヲ監督シ其所業ヲ糾正致事相叶可申候

十七卿　此儀ハ我人民ノ貨財ヲ保護致候事故貴國ト會同ノ上取極申度若シ故障有之節ハ右樣ノ人物ハ之ヲ命スヘカラスト申事ヲ可申述權利ヲ得度候

此方ニテ他所ニ趣キ候儀ハ不相成候故貴國ニ於テハ御定ノ港ニ必ス參リ可申ニ付右樣取極置申度候

（朱書）「デロング」

傍ヨリ總テペルリーノ條約通リ相成居申候

十三使　若シ會同ノ上ニテ能規則ヲ設立致上ハ日本ニ於テ勝手ニ其役人ヲ命スル事ヲ得ヘシ但此役人共職ヲ怠リタル事有之時ハ直ニ政府ニ對シ可訴訟原由トナリ候故果シテ不正有之時ハ之ヲ黜ケ可申候

十八卿　夫レ迄ノ間貿易ハ如何ニ爲スヘキヤ當時貴方ニテ船附場幷標木等ナシ右港長果シテ英人ナラハ米國ノ船ヲシテ標木モナキ外地ニ停泊致サセ候モ難計候

十九卿　當方ニ於テ港稅ヲ納メ其士官ヲ扶持致ス故其人ヲ撰ム時ニ發言致スハ當然ノ事ニ候

（朱書）「デロング」

當時港長請合ヲ出サズ候故譬ヘハ風波中一ノ船ヲシテ揚碇セシメ其船難波船ト相成候テモ其責ニ任シ候モノ無之候

廿　卿　當時ノ條約ヲ其儘ニ存シ當方ノ趣意ヲ容レ置規則幷之ヲ施行スル時ニ當方ノ發言ヲ許シ候儀却テ便利ト存候

卿　條約ノ此一部ヲ其通ニ致置候儀一般外國ノ利益ニ

相成候

十四使　役所ヲ設ケ其規則ヲ定ムル事ヨリ一切ノ瑣事幷收納ニ至ル迄總テ會同ニ歸シ候御趣意ニ候哉

廿一卿　條約ヲ見候時ハ貴政府ニ於テ此等ノ規則ヲ定ムルニ付御了解相成候通リニハ一致難相成候然シ當方ノ趣意ニテハ人撰幷其管轄ヲモ含ミ候儀ト存候

卿　會同ノ所置ヲ以テ規則ヲ立テ官吏ヲ撰ミ申度候右官吏ハ瑣末ノ事ヲ除ク外ハ會同シテ成果ヲ報告スヘシ若シ其人ヲ不當ト存候時ハ他人ヲ命シ可申候

廿二　現時ノ條約ニ付此方ニテ了解致居候樣御承知出來候ヘハ其趣意ハ人撰幷其施行ヲ會同ニテ取行ヒ候事ニ候

十五使　當方ノ地方規則ニ付テハ如何樣ノ御趣向ニ候哉

廿三卿　是レモ前ニ同シク日本政府幷外國人會同シテ費格ヲ取立又會同シテ之ヲ費シ可申權利ヲ望ミ候一體稅金ハ外國人ヨリモ差出候ニ付其費法ニモ發言致シ候權利有之候

（朱書）「外國品ヲ買テ之ヲ消費シタル日本人之ヲ實ニ拂ヒタリト云ヘシ外國人ノ之ヲ賣ルヤ其品代ノ內既ニ稅金口錢相場ノ差違市街及港內ノ諸費皆其賣德中ニ算入シタリ」

廿四卿　總テ牧稅法幷其遣拂方ハ外國官吏會同シテ之ヲ差圖シ又ハ外國官吏ノ名代タルヘキ人物ヲ撰ンテ之ニ管轄セシメ申度日本政府ハ外國公使相談ノ上何程ノ稅ヲ納メ可然哉ト一同承諾ノ上ニテ之ヲ收納シ之ヲ施行シ可然候

（原註朱書）「原文ニ「森云」ト記セリ」

十六使　我輩貴下ニ保證致此方ニ於テ信實ヨリ內外人民ノ爲メ雙方俱ニ滿足スヘキ稅法ヲ立ントス致候ニ右樣ノ論ニ至リ候テハ我輩於テハ貴下ノ說ヲ了解シ兼候儀モ可有之哉或ハ又我國ノ獨立スル權利ヲ削リ候ヲ望レ候事ニ候哉ト疑惑致シ何レモ決斷出來兼候貴下ニ於テ右樣ノ御說有之ハ當方ニ於テ了解難致候

廿五卿　此論ヲ立ル所以者貴國ノ諸部未タ外國人ニ全體同等ノ權利ヲ附與セズ是ハ一定ノ府邑中ニ限制ヲ立候故ニ候此等ノ府邑迄モ燈明陰溝番卒等ノ設置無之テハ不相叶之ヲ扶持センカ爲メ一定ノ金ヲ出シ不申テハ不相成就テハ此金ヲ支拂フニ付テ發言致ス權利ヲ得申度候尤當方ニ於テハ一體ノ特權ニ進步有ルヘキ樣扶助致シ申度候得共我人民ヲモ保護致シ不申テハ不相叶候

廿六　貴國ノ進步ハ甚迅速ニ相見ヘ候乍然未タ船附場無之故ニ米國ノ蒸氣船ニテ自分用ノ爲メ標（マヽ）本取立候得ハ英船ニテ之ヲ致所有候時ニ何ヲ以テ之ヲ相防キ候事出來可申乎此等ハ是非防止致申度候一體此方ニ於テ他國政府ニノミ信任致不申候故我人民ハ我自國ニテ保護致申度候貴國ニ對シ候テモ同樣ノ儀ニ候素ヨリ此方ニテ貴方ヲ扶助致不申譯ニハ無之候得共貴國開化未タ斯ノ如ク我利益ヲ其儘ニ差置候場合ニ至リ不申候

（朱書）「森」

十七使　日本ノ地圖ハ有之候哉

（朱書）「デロング」

京都ニ對シタル港ハ何ト申候哉

（朱書）「森」

十八使　敦賀ナリ

（朱書）「デロング」

鐵道ノ機關師之ヲ測量シテ甚良好ノ港ト申出候

（朱書）「伊藤」

十九使　鐵道發程起程ノ處ト致可申候

廿七卿　何事アリテ當時開港被成度港名ヲ御示シ無之候哉

此時別室ニ行キテ地圖ヲ研查シ

伊藤ヨリ左ノ港ヲ申述ス木戶其外之ヲ可トス

オタライ　蝦夷　（註）「記者ノ誤カゴシマハ公使テロングノ說ナリ此外紀ノ和歌山土ノ高知等ヲ同人ヨリ指シタリ」ト此ノ箇所欄外ニ朱書シアリ）

イシノマキ　仙臺

鹿兒島　薩摩

ツルガ　越前

廿八卿　當時議論兩立候ハ唯港幷地方ノ規則ニ候

使　此議ニ就テハ返答致候前ニ相談致置可申候

（朱書）「森」

又然ラハ貴方ニテハ我稅法デ設ケ候事ヲ承引成シタル事ト考ヘ可申候

廿九卿　輸出稅廢止ノ思召ニ候哉

二十使　唯今內地租稅法ヲ設ケ居候間右決定次第相廢可申候

三十卿　此方ニテハ肝要ノ事ニ候間幾時ニ右輸出稅廢サレ候哉唯今御示シ被下間敷哉稅法（タリフ）ト申儀ハ輸入稅ノ事ニテ貿易規則ニテハ無之了解致居候

廿一使　然リ僅ノ所ハ格別其餘當時ノ貿易規則ニテ能行ハレ居候ト考ヘ申候間少々變改可致候

三十一卿　我商船ニ於テ航海不致前ニ何程ノ外國港稅ヲ拂ヒ可申哉ヲ豫メ吃度承知致置候儀肝要ノ事ニ付貴國ニ於テハ物品ノ輸入ヲ禁制スヘキ租稅ヲ設ケス改正ノ節ハ譯明ナル布告有之度又途中ニ在ル積荷ニ不公平ノ難儀トナラサル樣改正ノ事ヲ充分ニ告知セン爲メニ新ニ改正有之節ハ之ヲ施行スル以前六ケ月ヨリ十二月迄ノ內ニ公告シ就中貿易ヲ束縛スヘキ稅法ハ無之樣有之度候

廿二使　譬ヘハ我國ニ於テ阿片ノ輸入幷之ヲ用ユルコトヲ禁止セルニ齊シク酒類其他ノ如キ品物ニテハ之ヲ制スル爲メニ重稅ヲ賦シテ阿片同樣ノ成果ヲ得可申候

廿二卿　健康ヲ害シ心術ヲ亂シ候品物ハ決シテ彼是故障申述間敷候貴方ニ於テ主張有之他ノ箇條ハ承引可致候ニ付五步ノ輸出稅ハ御除可被下候又合衆國ハ政體ニ依リテ輸出稅ヲ賦スル事ヲ禁シ有之候貴國ニ於テハ輸出セントスル處ノ品物ニ輸出稅ヲ課ル時ハ必ス其輸出ヲ抑制スルニ相當可申候

廿三使　當方ニテハ改正ノ儀ヲ甘ンシテ承引可致候乍併我全國ノ政理ニ反シタルト認ムル處ヲ守ル樣ニハ束縛サレ間敷候然ルニ矢張輸入稅ヲ取立候テハ我增サンヲ欲

スル者ヲ却テ減スル道理ニ當リ可申候

三十三　國務卿　我政體ヲ立テタル大人ニテ之ヲ說明スル事ヲ肝要ト勘考致シ候

廿四使　之ヲ我政體ニ記載可致候ヘトモ條約ニハ載セ間敷候

三十四　卿　我國內亂ノ節ニハ既ニ輸出稅ヲ取立ヘキ所置ニモ可及處政體ニ依リテ之ヲ免レ候

是ハ貴方ト貿易スルモノヲ保護スル爲ニ候

廿五使　是ハ當時追々開盛ニ赴キ候全國ノ政理ニ於テ肝要ノ次第ニハ無之哉

三十五　卿　我國ノ地位ヨリ考フル時ハ貴政府ノ御勘考ハ致了解候ヘトモ貴國ヘ貿易ノ經驗ハ信用難致候將來有無貿易ノ永續スルニ從ヒ漸々練熟セラレ候迄ハ貴君自ラ之ヲ保證シ能ハズ我人民百萬ノ財ヲ投シテ貴國ト貿易致候節ハ唯今御申述ノ趣意ニ相違無之樣ノ保證ヲ得度當政府ノ望ム所ニ候

廿六使　是ヲ條約ニ記載致シ候故障ハ日本議者ノ批評ヲ受ケ且大ニ國ノ獨立ヲ破リ候事ト考ヘ可申候

三十六　卿　承諾致シ互ニ御同樣ノ事ト致可申候

廿七使　其體ニテハ大ニ我人民ノ意ニ適シ決テ不平ハ無之候此方ニテモ御同意致シ候

三十七　卿　唯今貿易規則ノ論ニ及ヒ候運上所規則ハ是迄ノ通ニテ宜ク候哉

（朱書）「デロンク」

然リ是迄ノ通ニテ宜ク候

三十八　卿　是迄ノ通リノ規則ニテハ御差支モ有之候哉

廿八使　然リ吟味致候テハ隨分可相改ケ條有之候此方ニ於テハ商船入口手數ヲ爲ス時ニコンシユルノ受取貴國同樣ニ船切手爲預申度候

三十九　卿　當時英國其地ニ實行致候同規則ヲ採用致可申候

四十　其他ノ事件有之候哉

廿九使　規則中ニ數多改正スヘキ箇條無之候ヘトモ其外ニ少々改度處有之是ハ今日迄用意致候暇無之何レ次ノ談判ニ持參スヘシ

四十一　卿　此等ハ何レモ瑣事ナリ

又第六箇條ハ如何噸稅ニテモ改正被成候哉

三十　使　日本ノ圓金或ハメキシコ銀ニテ拂フヘシト云フ文言ヲ加ヘ度候

使　七弗半ト十五弗トノ外ハ噸稅ト申者相拂ヒ無之候

四十二　卿　如何樣ニテ噸數ヲ測量被成候哉此箇條ハ其儘ニ致置度候尤此儀ハ他ノ勘考モ有之候事故次ノ談判ニ御返答可申候

廿一使　局外中立ノ件ハ先當分其儘ニ殘シ置此條約外別段ニ取極メ申方宜シカルヘク存候貴下ノ存意モ未タ勘考中ニテ返答ニ難及候

四十三　卿　局外中立ノ法ハ至テ崇高ノ文言有之僅ノ紙上ニハ記載難致候元來局外中立ノ法ハ取極メタル箇條ノ外ニ如何樣之ヲ決定サレ候哉至テ難キ事ニ候

他國ト內密ノ條約ニテモ有之候哉

三十二　使　決シテ無之候

四十四　卿　何レノ國トモ內密ノ條約ヲ御取結無之御勘考ニ候哉

三十三　使　何故ニ右樣ノ疑問有之候哉

四十五　卿　歐洲ノ諸國中ニハ內密ノ條約有之候故ニ候合衆國從來決テ之ヲ結ハス一切ノ條約總テ世界ノ吟味ニ掛リ候樣公布致シ候一體內密ノ條約ト申モノハ其社中ヲ結ヒ其同意ヲ否ミ候邦國是アル時ハ則チ之ヲ困難ニ引入易ク候

三十四　使　右樣ノ事ハ決シテ意想スル處ニ無之候

四十六　卿　然ラハ互相ノ事ニ致置可申候乃チ互ニ內密ノ個條ヲ承知不致シテハ取結ヒ申間敷事ナリ斯ノ如クニ候モ最早內密ニテハ無之候

三十五　使　此事ニハ新奇ノ事ト存候何レ勘考可致候

四十七　卿　此上ニ又事件有之候哉

三十六　使　教法ノミナリ何故ニ條約中ニ此個條要用ニ候哉

承知致シ度煩ル迷惑致居候

四十八　卿　使節出國後長崎ニ於テ苛責有之候由承知致シ候

三十七　使　是ハ外國人ニハ關係致シ不申全ク教法ノ事トモ難申候思フニ教法ハ交際ト貿易トノ利益ヲ增進スルニ關係無之且教法ノ條約ヲ結フ事ハ不用ト存候

四十九　卿　教法ノ苛責ヲ防キタル上ニアラサレハ自由ノ交際ハ出來サルモノニ候一體外國ノ教法ヲ侮辱致候ハ乃チ外國人ヲ侮辱スルニ當リ候

三十八　使　此儀ハ直ニ相觸レ候事ニ無之候乃チ貴方ニ於テモ一宗ニ對シタル苛責總テノ宗門ニ及ヒ候依之條約ニ關係致シ候上ニテ之ヲ討論候テモ緊要有之間敷存候此

儀ハ日本政府ニ於テモ貴下ノ所存ヲ承リ候事ヲ希候

五十　卿　一宗ノ爲ニ申候ニハ無之惣テ寛恕有之度希望候

三十九　使　心想ノ權ハ自然ノ天賜ナリ若シ政府ニオヰテ其權理ヲ保護スル事ヲ怠リ候形勢ニ當リテハ此事迄條約ニ記載スルモ肝要タルヘシ乍然當時政府ニ於テハ之ヲ保護スヘキ事ヲ勘考致シ居候ニ付之ヲ條約ニ記載スルハ無用ト存候

五十一　卿　貴政府ハ苛責ノ御處置無之ト相認可申哉

四十　使　當時政府ニテハ左樣ノ處置ハ無之候其儀ハ佛英米其他ノ諸國トノ會議ニ於テ決定致シ候公使デロングモ日本政府ノ思想ノ權ヲ保護スルノ端ヲ開キ候事ハ承知ト存候

五十二　卿　其確證ヲ承知致シ度候

四十一　使　此方ニ於テ條約外ニ他ノ仕方ニ於テ之ヲ證シ可申候

五十三　輔　外國公使等モ貴國ノ法律且此條約ニ依リ其保護ヲ願フヘシ

卿　千八百六十九年其會議以來二年ノ間數々其事ニ反シタル處業有之候

四十二　使　此事ニ於テハ急ニ申進難ク候

五十四　卿　此方ニテハ信用ニ付褒賞ナラサル事件ハ寛恕有之度希望致候

四十三　使　此方ニオヰテハ所欲ニ非レハ現時日本ノ景況ニ於テハ我政府之ヲ救濟スル事ヲ勤候勢ニ候得ハ條約ニ書載候事ハ不要用ト存候

五十五　卿　土人ノ耶蘇信仰ノ者四千人ヲ日本全島ニ離散セシメシ事ハ近年ノ事ニ有之候

四十四　使　夫ニハ他ノ道理有之候殊ニ其節ト今日トハ大ニ變革致シ候

五十六　卿　實ニ變革ハ進歩致候併未タ緊要ノ地位ニ趣キ不申候貴方ニ於テ良法ヲ立テ裁判所設置有之候迄ハ條約ヲ以テ之ヲ保護可有之候

四十五　使　外國人ヲ保護可致候得トモ内政ノ事ニ就テ外國人立入リテロヲ出シ候事ヲ好ス候

五十七　卿　輸出税ニ於ル如ク之ヲ互相ノ事ニ致可申候

四十六　使　全キ相違ノ事ハ以前ハ國民ヨリ保護ヲ求メ候ヘトモ今日ハ日本政府ニテ開明ノ政治ヲ施シ候ニ付御忠告ハ承引可致候

五十八　卿　他國日本ノ外ニ在ルカ如ク我人民ヲシテ同樣ノ所分ニ任セ候程ノ大造ナル進歩ハ無之候

四十七　使　此國ニ於ルカ如ク左樣ノ寛政ニハ無之候

五十九　卿　當方ニ於テハ我國ニテ同樣ノ保證ヲ貴政府ニ對シテ相求メ候此論ヲ立ル所以ハ貴政府ニ於テハ其人民ヲ管束スル事出來不申故ニシテ貴方ノ不信ヨリ起リ候譯ニハ無之

四十八　使　當時日本ニテ寛政ニ趣キ候變革ハ甚迅速ニ候

（朱書）「デロング曰」

森氏ハ御親知有之間敷候ヘトモ日本ニテ諸ノ事作起リ近年ニ至リ四千ノ國民耶蘇教ヲ信スルモノ何處ニ放逐サレテ山林ニ臥シ鑛山ニ役セラレ實ニ奴隷ト爲レリ此事ニ付外國公使ト集會ノ上談判有之候節ニ右樣ノ事ハナキ樣約定アリタレトモ其後陸續トシテ絶ヘス九州ニ配流サレタル者ハ寒氣ニ斃レ飢餓ニ死シ又ハ囚籠ニ鎖シテ之ヲ路傍ニ晒セリ其時分岩倉大使ヨリモ此事相止メ候樣約定相成居候佛國ノ大教師ヨリ予ニ申入候ニハ近來七十人ヲ追放シ教師ノ說法ヲ聽聞候儀ヲ差止メ再ヒ出席不致其爲メニ日本ニテ内密ノ法律ヲ設ケテ寺院ヘ參詣ヲ禁制スト云フ

四十九　使　寛政ノ爲メニハ實ニ著シキ進歩致候事ハ御承知可有之候

（朱書）「デロング」

實ニ然リ

五十　使　當方ニテ力ノ及フ丈ケ善政ニ趣キ候時ニ當リテ何故ニ之ヲ抑制ナサレ候ヤ此事ハ貿易又ハ交際ニ關係不致事ニ候

六十　卿　日本ニ兵隊ノ上陸ヲ禁スル事ヲ所望有之候當方於テ曾テ之ヲ送リ候事無之又ハ此後モ之ヲ欲シ申間敷候然ルニ日本ノ邊境ニテハ大政府ノ免許ヲ得スシテ人民ヲ苛責致シ候官吏有之候故當方ニテハ此等ノ事ノ防禦ヲ所望ニ候

（朱書）「デロング」

何故ニ岩倉公ノ内々約定有之候保證ヲ政府ニテ公然ト布告不相成候哉

五十一　使　政府ノ趣意ハ嚴刑ヲ廢シ候譯ニテ只今ノ趣意ハ耶蘇教ニ對シ殘虐ヲ行ハサル事ト存シ候

（朱書）「デロング」
耶蘇教宗徒ノ家族ヲ離散セシ事ハ乃チ殘虐ノ事ニ候
五十二 使　是迄迚モ教法ノ議論ニ就テハ日本政府ニテ寛恕ノ政ヲ施シ可申儀保證致シ候ヘハ此後何ノ憂ヘキ模樣モ無之候
六十一 卿　何故ニ左樣告知不相成候哉使節出國ノ後六七十人ノ耶蘇宗徒苛責ヲ蒙リ候事有之故ニ之ヲ條約中ニ載セ置候時ハ政府於テ其人民ニ條約ノ規則ニ從ヒ可申旨ヲ布告相成且犬ニ貴國ノ開化ヲ進メ可申候
五十三 使　日本政府ニテハ之ヲ貿易ノ條約ニ致書載候儀難相成候若シ貴方ニテ我カ政府ノ爲サント欲スル趣向ヲ承知被成度候ハヽ此後可取行方向ヲ書面ニテ返答可致候
六十二 卿　現今ノ條約第八條ニ曰ク云々下略ス
第八條ニ全文ヲ朗讀ス
（朱書）「デロング」
條約中ノ此條ハ全ク其用ヲ爲サス夫レノミニテハ苛責ヲ差止メ候儀出來不申候

七一

二月十三日（三月二十一日）　大久保、伊藤兩副使ヨリ岩倉大使等宛

歸朝ニ際シ條約改正方ニ關シ意見開陳ノ件

合衆國國務卿フイシユヨリ指出タル條約改定個條書ニ答ヘタル書面ノ談判決定ニ至ル迄ノ討議概略

第一條不開港ニ外國船ノ出入ヲ許ス事ノ代リトシテ現今貿易ノ爲ニ開キタルト同樣ニ追々開港ノ數ヲ增加スル目的ヲ以テ先ツ改定條約ヲ雙方ニ於テ允准シ本書取替ノ後ヨリ直ニ越前敦賀奥州石ノ卷北海道ヲタルナイ三港ヲ開ク事ニ於テ妨ナキ旨ヲ承引スルノ目的トスヘシ尤現ニ之ヲ開ク爲ニ故障アルト諸君ニ於テ考察セハ之ヲ遷延スルノ談判ニ及ヒ其故障ノ趣旨ヲ述ヘテ可ナルヘシ僕等ノ勘考ニテハ現ニ故障トナルヘキ事ヲ考察セサルナリ

第二燈明稅幷ニ港規則ヲ創立シ緊要ナル稅額ヲ課スル等國內ノ事務タルヲ以テ日本政府ノ特權ニ任シ敢テ他ノ政府ヨリ干涉スル所ニ非ス之ヲ主要トシテ一步モ退サル事緊要ナリ

第五條外國貿易ノ爲ニ開キタル港ノ周圍五里ノ內ニ外國人ヲ居留セシムル事ハ條約調印後二ケ年ノ後ト記シタレトモ第十條ノ地方規則ヲ創立シ之ヲ實行スル事日本政府ノ特權ニ任スルニ非サレハ此個條ヲ承許スルニ及ハサルヘシ是尤モ此個條中ノ要目タルヲ以テ猶一層ノ注意ヲ乞フナリ

我方ヨリ合衆國國務卿ニ申述タル個條中コンシュル裁判ノ權ヲ除キ外國ノ法權ヲ我國內ニ及ボス事ヲ將來禁止セント欲スル談判ノ結末ニ日本ノ法律裁判ノ仕法相立チ之ヲ實際ニ施行シタル後外國政府及ヒ人民等滿足スルノ時ニ至レハ無論日本地內ニ居住スル外國人ハ日本ノ法ニ服スル事ヲ承諾シ且合衆國政府ニ於テモ之ヲ希望スルト云ヲ以テ條約個條ニ此事ヲ記載セント欲スルノ治定ナレトモ尙竊ニ之ヲ熟慮スルニ其滿足スルノ期ヲ定ムル事又難カルヘシ故ニ猶之ヲ詳明ニセン爲ニ左ノ說明ヲ彼ノ個條ニ加ヘン事ヲ望ム

日本政府現時ノ目的ヲ以テ歐米各國ノ法律中ヨリ日本ニ適當セル者ヲ撰ミ之ヲ國律ト爲シ之ヲ國中ニ公布シ此法ヲ採リテ裁判スヘキ裁判所ヲ創立シ之ヲ內地ノ人民ニ實施スル時ニ至レハ直ニ外國人ヲシテ之ニ服從セシムル事ト定ムヘシ決シテ滿足スルニ至リテ後之ヲ外國人ニ及ホスト云事ヲ記載セサル事肝要也

稅法ヲ我國ノ特權ニ任スヘキ事ニ就テハ大凡制限ヲ立ルト云事アレトモ制限ノ論頗ル自由ヲ束縛スルノ甚キナルヘシ故ニ是ハ承諾スヘカラサル事ト決定スヘシ然レトモ時ニ會計ノ都合或ハ貿易ノ都合等ニヨリ政府ニ於テ之ヲ改定シタル時ハ凡ソ六ケ月ノ前ニ國內一般ノ人民ニ公告スヘシ然レトモ之ヲ施設スル事ニ於テハ外國人ノ管與スル事ヲ拒ムヘシ

稅法ハ貿易稅及ヒ內地萬般ノ諸稅法ヲ施設スル事全ク一般ノ事ニシテ我國權內ニ於テ自由ヲ得タル者ト認メ之ヲ主張スル事肝要ニシテ且ツ後來外國ヲシテ內務ニ關係セシメザル樣力ヲ盡シテ防禦セサル可ラス

地所ノ價ハ現今廉ナルヨリ富豪ノ商人ハ一時ニ廣大ノ地面ヲ買求メ之ヲ占得スル者アルヘシ然ル時ハ將來ノ爲ニ不都合ナリト思ハル於此漸々政府ニ於テ靜產所有等ノ制限ヲ設ケ地方官之ヲ管轄シテ一般ノ規則トナス事ヲ要ス此時ニ至ラハ外國人ト雖トモ此規則中ニ服從セシメ敢テ之ニ反カシメサル事緊要ナリ

此諸件ハ話聖東發軔ノ前ニ博文ヨリ木戶森ノ兩君ニ演述シタル趣意ナリ猶之ヲ確實ニセン爲ニ僕等協同シテ之ヲ

筆スル如此談判ノ際ニ於テ希クハ之ニ注目シ賜ン事ヲ望ム　拜具謹言

明治五年二月十三日

伊藤博文花押
大久保利通花押

大使
副使　諸君各位

註　二四附屬書ニヨレハ大久保副使ハコノ前日伊藤副使ハ此ノ日華盛頓ヲ出發セリ

七二

二月十七日（三月二十五日）　英國臨時代理公使ヨリ副島外務卿宛

岩倉大使一行歡迎竝ニ條約改正期ニ同意セル旨ノ本國政府ノ意嚮傳達ノ件

Yedo,
March 25, 1872.

Sir,

I duly communicated to Her Majesty's Government a copy of the note of the 26th November last which I received from Terashima Munenori, informing me that the Udaijin Iwakura Tomomi had been appointed Chief Ambassador Extraordinary Plenipotentiary, and the Councillor of State Kido Takasuke, the Minister of Finance Okubo Toshimichi, the Vice Minister of Works Itô Hirobumi, and the Assistant Vice Minister for Foreign Affairs Yamaguchi Nawoyoshi, Vice Ambassadors Extraordinary Plenipotentiary, to be sent on a special mission to the States which are the Allies of Japan for the purpose of cementing more closely the existing relations between it and those States.

I have now the honour to state to Your Excellency, in accordance with instructions which I have received from Her Majesty's Principal Secretary of State for Foreign Affairs, that Her Majesty's Government are gratified to think that this Embassy will visit Great Britain, where a cordial reception will be assured to it, and that they will have great pleasure in showing every attention to its members.

I am also instructed to inform the Government of His Majesty the Tennô that in accordance with their desire Her Majesty's Government are quite willing to defer the Revision of the Treaty between Japan and Great Britain till after the return of the Embassy to its native country.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

F. O. ADAMS,
H. B. M.'s Chargé d'Affaires in Japan.

His Excellency
Soyéjima Tanéomi,
etc., etc., etc.

（右和譯文）

去歲十月十四日寺嶋宗則之書翰ヲ以右大臣岩倉具視ヲ特命全權大使トシ參議木戸孝允大藏卿大久保利保（マヽ）工部大輔伊藤博文外務少輔山口尙芳ヲ特命全權副使トシ訂盟之各國ヘ派出シ益兩國親好之情誼ヲ厚ク被致度趣其寫直樣本國政府エ相廻シ候處前書使節大貌利太尼亞ヘ立越候段本國政府ニ於テ喜悅之至厚ク應對致シ使節之銘々懇切ニ饗應可致旨外務執政之命ニ依リ申上候且貴國ト我國之條約改訂之儀使節歸國マテ延引被致度御請求ニ可任旨是亦可申上樣被命候右之趣可得貴意如此御座候　以上

二月十七日　英國代理公使
ヱフオアダムス

副嶋外務卿
寺島外務大輔　閣下

註　第四卷七六ニ對シテハ右ノ外横濱在勤瑞西國總領事（日附ハ二月二十九日、發信地ハ横濱ナリ）ヨリノ返翰アルモ右文書ト同文意ニ付省略ス尙前記以外ノ各國ヨリノ返翰見當ラス

七三

二月十九日（三月二十七日）　太政官正院ヨリ副島外務卿等宛

岩倉大使宛電信案ニ關シ意見問合竝ニ之ニ對スル回答ノ件

附屬書　二月三條太政大臣ヨリ岩倉大使宛電信案

條約改正ノ全權狀ニ關シ詳報アリ度旨ノ件

二月廿日達濟

華盛頓府より到來の電信何分意味相分兼候へ共定て緊要の

（註　本電信記錄中ニ見當ラス）

義に可有之尤頃日吉田大藏少輔米國え出帆の節森辨務使えは意味不分明にて處置いたし兼候趣申遣候へ共尚別紙の通彼地え電信申遣し可申と存候右は明後廿一日長崎えの船便有之候間御見込否共明朝迄に御回答有之度此段申進候也

二月十九日

正　院

副島外務卿殿
寺嶋外務大輔殿

附紙

朱を加へ候分相除報知致度候也

二月廿日

副島外務卿
寺嶋外務大輔

正院御中

（附屬書）

日本東京二月　日

華盛頓在留辨務使森ノ取次ヲ以テ
日本全權大使ヱ

華盛頓府ヨリ西暦第三月十四日ノ（註「西」ニ外務省ニテ附セシ朱ノ符號アリ以下同樣）電信「長崎縣令ノ取次ニテ第三月廿三日到着セリ書中」條約ノ意味ニ付森へ與フル全權狀ヲ「別便ニテ」可差立トノ趣文意解シ難ク候間「全權狀ハイカナルモノニヤ外務省スミスエモ承リ合候處更ニ相分不申」尚御一報有之度候

三條太政大臣

七四

二月十九日
（三月二十七日）

岩倉大使等ト米國國務卿等トノ對話書

開港問題等ニ關スル件

壬申二月十九日洋曆三月廿七日國務卿非士と對話之覺

岩倉大使
木戸副使
山口副使
米國國務卿非士
同　輔
公使テロング
通辨鹽田篤信

筆記　田邊太一
岡士　ブロック
譯士　ライス

非　今日は何々のケ條御談判相成候哉

岩　此より申陳候條も有之乍然其方にて御申聞の廉有之候はば可承候

非　先日談判の末御勘辨の上御返事可有之趣に有之右は大概御決着相成候事と存候如何に御坐候哉

岩　先開港の事より申述へく候右は先日申入置候四ケ所の外下の關一港を相加へ幷五港相開き可申候尤右之內二港は本條約爲取替後一ケ年內に相開き餘は追々貿易實際の都合に寄り相開き可申候

非　先日の談判にては四ケ所一時に開かれ候事の樣に覺へ候

木　全く開かざるには無之候得共是れを開く爲測量其外手數有之候間逐次に相開度候

非　港は何々に候哉

木　敦賀鹿兒島石ノ卷小樽內に候

非　右に下ノ關を加へ五港と被申候哉

木　さ樣に候

ロング　土佐の內は如何哉同所には樟腦銅等夥敷產出いたし候

此方答なし

此時ロング非士暫時談話あり

非　右港々何れを先に御開き被成候哉

岩　右は貴國而已ならす各國の所望も可有之候間外國公使の撰擇に任せ可申候

非　他の港は猶二年も過候はゝ御開き可相成哉

岩　實地の都合により候事に候

非　其都合は誰人これを鑑定いたし候哉

岩　我國にては成丈貿易の盛るを冀望候より開港の多を望候事には候得とも開港候爲には多少の手續も有之事故漸次に無之ては處置難及候其都合は各國公使とも相談可及候

非　さ候はゝ合衆公使より申立候はゝ直樣御開き可相成哉

岩　直樣開き候事は前にも申述候ことく六ケ布有之候

非　左候ては際限無之事に候一ケ年の內に御開き相成候樣御約束可致候

岩　左候へは如斯取極め可申候餘の三港は五ヶ年の內卽最初の二港を幷せ五年の內に五港を開候運に候

非　承知致し候開港場多數相成候は決て合衆國の利益而已に無之御國の利に有之候

岩　先日被遣候書取の內地方港規則等都て日本政府の獨權に歸し候樣有之右は此方冀望の第一に御座候如何

非　夫は思召違に存候御國にも此國同樣外國人何地に行何地に住候とも御保護行屆候譯に御座候へは無論思召通りにて可然候得共今日の姿にては外國人居留候丈け外國人と談判の上法制御建設可然事に候

岩　右は承り違に候哉其邊は扨置一體地方規則等我國政府にて設立改正可致權を有候義は我國政府卽今第一の目的に有之我國を以宇內獨立の一國と被認候上は右樣の權利は我國政府に被任候事當然と存候

非　右は此方にも望む所に有之候得とも御國於て萬國普通の御國體御國政相立不申候內は矢張外國人に就ては別段の法則無之ては不相叶候何程御冀望に候共承知仕兼候

山　規則は正不正を論し候筈國の開不開に掲り申間敷候

左樣にては國の進步は無之事に候

岩　一體は御談通りの理に有之乍然我國の開化に赴き候はデロング氏にも目擊被致候通にて一新已來我政府於て格別に盡力其民を文明に誘き其國を各國に比肩竝立せんと企望候竟には其地位に至り可申候左候は丶方今右權を我政府に被任候とも可然考候此義は今般我輩使命の最大のケ條にて候

非　御國政府御用意の格別に有之候事は能相分り申候乍然右政府相立候より未た三四歲の久しきを經候而已にて外國々の如く政府の威權全充分に無之隨て外人保護の道も不行屆卽港を限り住地を限り候樣の事に候卽無據右樣の所置に及ひ候決て獨立を見留不申杯と申筋には無之候

岩　又云方今の外國人居留地分界以內は是迄の通双方にて規則取立可申先日御決著御申聞御座候條約規程內五里十里云々の義御治定の節は地方規則御取立方は貴國政府に御任せ可申候

岩　五里十里期を以て相開き候は詰り居留地を擴充候と同理に有之左候へは其期に至り候は丶卽今居留地の規則

を也此方にて改正建設勝手にいたし申度候

非　御尤に候其通りにて宜候

岩　港規則も同樣に候哉

山　港規則は密商等相防き候爲に有之固より日本政府の建設する所に從ひ相當の事に候

非　左樣は致し兼候右は箱館兵庫等にて港長の義に付苦情有之御雇入の者は英人且酒を使ひ不宜行跡有之右樣にては我國民の爲不宜候間御相談に不加ては不相叶候

木　夫は人物の論に候港則は我政府にて取極め其人物は相談候とも可然歟

非　相談との仰に候得とも相談に付て規則無之ては不相成候且相談候とも御採用無之節は相談無之も同し事に候

岩　此迄不都合と被申候は詰り人物に關係候事にて規則の事には無之右にては談判の筋行違居候

非　貴國え相越候國々にも商船の多少有之港則に得失無之國も有之候へとも我國にては最關係有之候

岩　左候は丶如何可致との御見込に候哉

非　各國商船入港の噸數を通算し其多數の國を以て右人撰の列に加へられ候樣いたし度候先英佛白米及荷蘭位の事に候

山　己の國の規則を他國の人と相談候理無之港則も地方同樣日本政府の獨權に歸し候筋に可有之候

非　此義は此迄の條約通りにて宜敷候

岩　過刻より申入候通奉使最第一の要件此事に有之候

非　最早刻限に相成候

岩　左候は丶此事は未決に候得とも又後日を期し御談判可及候

非　（註コノ日ノ對話不詳）來る土曜日十二時より二時半迄御面會可仕候

七五

（三月十五日（假）（四月三十日））米國國務省ニ於テ岩倉大使等ト米國國務卿等トノ對話書

日本側提示ノ改正條約案討議ノ件

壬申三月　日卽洋曆第五月十五日於華盛頓府國務省談判之覺

岩倉大使
木戸副使
山口副使

森少辨務使陪席
筆記　田邊太一
通辨　鹽田篤信
筆記　フルツクス
ハミルトン　ヒキス
ヘール
デロング
ライス　陪席

彼一　今日の御談判は前日に異り候廉有之哉

此一　全く草稿に候得共條約案持參いたし候尤文體其外いまた整頓不致候廉々有之候得共其邊は後日に讓り先條約本文附錄兩通に取認め持參いたし候

彼一　何故兩通に被成候哉

此一　本文の方は兩國對等平行の文體に取認め可成丈け各國同樣の體裁にいたし候我國には進步未た充分に無之より我國限りの處置有之譽は岡士裁判所のごとき類は我國にて適當の裁判所出來候上は直樣相廢し可申ものに有之夫等は別に附錄といたし候事に候

彼一　右御書面一覽致し委曲御討論可及候間其御草案暫時御留置可被下候

此一　全く草稿に付今日は持歸り猶清書爲致差出可申候右の內には此迄御談決の廉も有之將未濟のものも有之御談決には候へとも猶勘辨候ものも有之一應夫にて爲讀上可申候間御聞取有之度候

彼一　可承候

此一　附錄より讀始め可申候

第一條を讀む

彼一　新潟港の事に候右は昨今の姿にては全く御鎖し有之候も同樣と存候

此一　さ樣に候全く有名無實の姿に有之候間鎖し申度候既に先日森少辨務使より御內談爲及候處粗御同意と承り及候

彼一　其後段を承り可申候開港場所は先達て御談決通に候哉

此一　同樣に候只一港を減し候

第二條を讀む

彼一　三年に候哉二年と存候

此一　二年とは申候へ共實地力の所及を計り候て三年に改め申候

彼一　何れ勘辨の上御答可申上候末條の處自分勘辨にては折角御擴充御座候とも其甲斐無之樣被存候

此一　此迄迚も居留地にては居留迄の事に有之右を廣め候事に候

彼一　さ候は丶十里の外に候哉

此一　否十里の內に候

彼一　其先を可承候

三四條を讀む

彼一　六ケ月にては短き樣存候

此一　承り置候

五條を讀む

彼一　宜候充分の裁判所取立て致度候

此一　其邊文段は未た整備不致候猶勘辨可致候

六條を讀む

彼一　本位は金貨而已にて銀貨は無之哉

此一　金貨而已に候

彼一　右本位圓金と墨銀との相場如何樣に被定候哉

此一　此間山口副使デロングと反覆辯論あり兎に角案文熟覽いたし候上此方趣意をも可申上候

猶時間も候は丶本文の方一讀爲致候樣可致候

彼一　宜布候

本文讀了る

彼一　第十四條中是迄の條約を廢すと有之右は何々の約定を被仰候哉

此一　六十六年江戶約書其外都て地方約書等をも廢し候事に候

彼一　承り候處にては遺漏も有之且改正可致廉も有之何れにも案文熟讀の上に無之ては可否共難申上候

註　本號文書對話ハ其ノ內容及前後關係ヨリ推シ三月十五日ニ行ハレタルモノト認メラルルニ依リ本號文書表題ノ日附ニ四ハルルコトナク假ニ此ノ所ニ收メタリ

七六　三月十五日（四月二十三日）

日本側ヨリ提出セル大日本合衆國新定條約幷附錄草案

（表題）「千八百七十二年第四月二十二日談判（註）ノ節我使節ヨリ米國國務尚書ヘ相渡タル草案

大日本合衆國新定條約幷附錄草案

「

皇國日本及亞米利加合衆國條約草案序文

日本天皇陛下及亞米利加合衆國從來兩國ノ政府人民ノ間ニ幸ニ存スル處ノ懇信ノ友誼ヲ保持シ之ヲ益厚ラシメ而シテ互相ノ貿易ヲ增進セン事ヲ均シク希望スルニ依リテ和親貿易及ヒ航海ノ條約ヲ取結フベキ商議ニ及フ事ヲ決定シ其爲メニ各其全權ヲ簡ミ日本天皇陛下ハ某(註第四)ニ命シ亞米利加合衆國ノ大統領ハ某(註第四)ニ命シ双方其全權ノ文書ヲ照准シ其確當ニシテ正シキヲ見テ決定調印スル處如左

第一條

日本天陛下及ヒ其臣民ト亞米利加合衆國政府及ヒ人民ハ兩國ノ間ニ最懇ノ友誼ヲ增進スルヲ以テ各其目的ト爲シ而シテ始終此方ニテ彼方ノ君權及ヒ位望ヲ敬スルヲ要ス

兩國ニ於テ互ニ外務辨理ノ官吏ヲ委出シ各其國ノ首府ニ駐劄セシムル事勝手タルヘシ

第二條

玆ニ約定シタル趣ハ此方ノ人民彼方ノ開港場ニ趣キ其處ニ住居シテ一切正路ノ商品ヲ賣買シ而シテ現今將來最モ優待サレタル國民ニ推シ及スヘキ航海貿易ノ自由殊典及ヒ免除ヲ受用スベシ若シ之ヲ他ニ付與スル事一定ノ約束ニ出ツル時ハ同樣ノ例ニ依ラサルヘカラス

然リト雖トモ彼此ノ人民ハ須ラク其土民ヲ治ムル處ノ法律諭示及ヒ故例ニ服從スヘキ旨ヲ協定ス

此條款ヲ以テ兩國中沿海貿易ノ事ニ用ユヘカラス其規則ハ雙方何レモ各自ノ法ヲ以テ之ヲ治ムヘシ他ノ國民ニ格別ノ恩典殊例ヲ付與スル事アルニ於テハ同樣ニ彼此人民ノ公有ト爲ルヘシ

第三條

此方ノ船舶彼方ノ海港ニ到ル者ハ凡テ噸稅燈費引水港稅及一切ノ諸稅官吏ノ手數料ニ就キテ其取扱ヲ受クル事最モ優待サレタル國民同樣タルヘシ

第四條

一切諸種ノ正路ナル商品ハ彼國所屬ノ船ヲ以テ此國ニ輸入シ或ハ之ヲ輸出シ而シテ政府或ハ地方官廳或ハ他ノ私社ノ名義又ハ利益ト爲ル偏頗ノ租稅ヲ加フヘカラス此國海軍ノ用品ハ彼國ノ開港場ニ陸揚ケシ之ヲ相當ノ稅吏ニ托シテ借庫ニ納メ或ハ又規定通リ其命ヲ得タル政府ノ藏船ニ容レテ之ヲ海上ニ貯ヘ置キ而シテ藏敷等ノ入費ヲ拂フヘシ其品ヲ賣却シ又ハ其他之ヲ所置スル時ニ非レハ租稅ヲ納ムル事ナカルヘシ

第五條

約定シタル兩國ニ於テ何レモ外國ノ貿易ニ開キタル一方ノ海港府縣ニ在留セシムル爲メニ總領事、領事、副領事、其代官タル者ヲ命スル事勝手タルヘシ此等ノ官吏ハ最モ優待サル、國民ノ官吏同樣ノ殊典權利ヲ受用スヘシ然レトモ若シ右官吏タル者貿易ヲ營ムニ於テハ其在留スル土地ノ平民ヲ治ムル處ノ法律故例ニ服從セサルヘカラス

右官吏ハ其役所ノ門前ニ政府ノ徽章ヲ表揭シ其上ニ官等ヲ記シ置クヘキ殊典ヲ得ヘシ

此表向ノ標記アルカ爲メニ決シテ罪人ヲ陰蔽スル權利ヲ附與スルニ非ラス其家屋住所ヲシテ地方裁判役ノ追究ヲ免レシムル名義アルニ非ラス又但玆ニ協定シテ以テ領事館ノ公用ニ屬シタル記錄文書ハ一切ノ搜尋ヲ蒙ラサル樣ニ保護シ且又如何ナル口實アルト雖トモ官府ニ於テ之ヲ檢視シ之ヲ取押ヘ又ハ其文書ヲ查驗スル權利ナカルヘシ

第六條

領事副領事及其代官タル者ハ其國ノ船ヨリ脫走シタル人物ヲ搜尋シ捕捉シ禁獄シ引留ル爲メニ地方官エノ須要ノ助力ヲ望ムベキ權利アルベシ右所望ヲ爲ス方ニテ相當ノ公文ヲ以テ其證據ヲ添ヘ之ヲ請求スルニ於テハ適當ナル權ヲ有スル官吏ニ之ヲ許容スベシ但シ之カ爲メニ生スル處ノ要用ノ入費ハ所望スル方ニ於テ之ヲ仕拂フヲ要ス

且又刑法ヲ犯シタル罪人ノ吟味ヲ決定スル爲メニ要用スルニ非レハ六ケ月以上引留メ置ク可ラス裁判落着ノ上ハ直ニ之ヲ施行スルヲ要ス

第七條

此國ノ臣民彼國ノ疆內ニ在リテ其政府ノ法律ヲ遵奉シテ土地ヲ賃借スベシ若シ此土地ヲ外國人ニシテ之ヲ所有シ能サル處ノ正路ノ承業者ニ讓リ渡ストキニハ相當ノ期限ニ之ヲ所分シ其代物ヲ以テ退クベシ但右手數料ハ其土地ノ人民ヨリ收納スル處ニ限ルヘシ

第八條

兩國玆ニ嚴約シテ以テ彼此ノ人民其封疆及管轄內ニ在ル者ノ身體家產ヲ專ラ保護センカ爲メニ裁判所洞開シテ以テ最モ優待サル、國民ト同樣ナル裁判ノ扶助ヲ得セシメントス

右人民其國ノ通法或ハ風俗ニ從ツテ證據ヲ立ル時ニハ兩國

一切ノ裁判所ニ於テ之ヲ眞正ノ憑詞ト看做シ而シテ兩國人民何レモ裁判所ニ出訴シテ須要ノ手段ヲ盡ス事勝手タルヘシ

第九條

玆ニ協定シテ以テ阿片同樣ノ物品ニテ現今將來政府ニ於テ勝手ニ輸入スル事ヲ許サヽル者ハ凡テ嚴ニ其國ノ法律規則ニ從フヘシ尤モ右禁制タル事ヲ諸ノ國民ニ推シ及シ差別ナキヲ要ス

直ニナリトモ或ハ陰ニナリトモ不當ノ制限ヲ設ケテ兩國人民ノ貿易或ハ人事ノ交際ヲ妨クル事無ク此國ノ人民ニ於テハ彼國ノ人民ヲ雇フテ法ニ戻サル使役ニ供スル事自由ナルヘシ

第十條

玆ニ復タ協定シテ以テ此國ノ民彼國ニ住居スル者ニ性情ヲ充分自在ニ伸達スル事ヲ得セシメ其信仰スル處ノ宗旨ニ就キテ妨碍損害ヲ與フル事ナク且又其國ノ法律及定例ニ觸レサル丈ケ私宅又ハ公然タル禮拜堂ニ於テ正シク其宗旨ノ法務ヲ執行シ妨碍障害セサルヘシ

彼此國民ノ遺骸ハ地方官ニ於テ所設ノ正當ノ規則ヲ照シ之ヲ其國ニ埋葬シ而シテ亂妨ノ事ナキ樣ニ之ヲ保護スヘシ

第十一條

若シ此國ノ人民或ハ船舶彼國ノ海岸ニ於テ破船シ又ハ風波ノ難ニ遇ヒ又ハ大造ノ損傷ヲ蒙ムリ又ハ他ノ止ムヘカラサル緣由ニ依リテ其港口海灣又ハ江口ニ入リテ避難ノ場ヲ求ムル時ハ仁惠ヲ以テ之ヲ接遇シ缺乏ノ品ヲ備足シ其船ヲ修覆シ其航海ヲ爲シ得ル程ニ要用ノ扶助ヲ加ヘテ之ヲ保護スヘシ

若シ止ムヲ得スシテ損傷ヲ受タル船ノ積荷ヲ卸放シ陸揚スル時ハ相當ノ規則ヲ照シテ之ヲ施行シ其物品ヲ賣却シ處分スルニ非レハ租稅運上等ヲ課スヘカラス但シ右入費ハ其船ノ手代、持主、引受方ニ於テ之ヲ仕拂ヒ此輩ハ其船ト一體ニ爲リテ其責ニ任スル者ナリ

第十二條

日本天皇及亞米利加合衆國各其名ヲ以テ外務辨理及領事官吏ノ手ヲ經テ請求ヲ爲スニ於テハ互ニ左ノ罪名ヲ犯シタルニ相違ナキ人物ヲ引渡シテ裁判ニ付スヘシ其罪名ハ諸種ノ殺害又ハ之ヲ謀リタル者强盜威迫又ハ住家ニ亂入シタル者海賊、放火、强姦、僞冒乃チ贋金贋札ヲ摸造シ發出シ通用シタル者及官吏又ハ給料ヲ取ル者其預ル處ノ金銀ヲ濫用シテ其罪嚴罰ヲ免レサル者ニシテ以上ノ罪ヲ請求スル處ノ管轄內ニ於テ之ヲ犯セシ事分明ニシテ右犯人彼國ノ疆內ニ隱匿シ又ハ其處ニ於テ露現ニ及フ者ナリ

右召捕幷ニ引渡ノ入費ハ請求ヲ爲シ逃犯ヲ受取方ニ於テ之ヲ償フヲ要ス

第十三條

若シ不幸ニシテ此條約中ニ揭載セル某ノ條款ヲ違犯シ或ハ其他ノ事故ニ依リテ大ニ兩國政府及ヒ人民ノ間ニ存在スル友誼ヲ損傷スル事アルニ於テハ此害ヲ蒙リタルト思惟セル方ニ於テ先特例ノ公使又ハ居留ノ公使ヲ以テ適當ノ證據ヲ添ヘ此ノ損傷ノ情實ヲ陳述シ至公充分ノ處置ヲ一方ノ政府ノアル首府ニ討索シ其政府之ニ應セサル歟又ハ故ナク之ヲ遲延スル事アルニ非レハ絕交ノ所業ニ及フベキ命令ヲ出スヲ許サス又兵端ヲ開ク事ヲ爲サヽルヘシ其度每ニ大政府ノ印章ヲ加ヘタル別段ノ免狀ヲ申請シ期限ヲ定ムルニ非レハ外國ノ兵隊又ハ武備ノ者ヲ兩國ノ陸上ニ登スヲ許サス

第十四條

從前日本皇國ト亞米利加合衆國一己又ハ他國ト協同シテ取結ヒタル和親貿易航海又ハ地方ノ事務ニ就キ約定シタル處ノ一切條約約定規則章程ハ凡テ玆ニ之ヲ廢止スヘシ此條約ハ本書交換ノ日ヨリ十年間之ヲ施行シ若シ右十年ノ期ニ滿ントスル一年前ニ此方ヨリ彼方ニ此條約ノ施行ヲ取消ス事ヲ公告セサル間ハ尙十二ケ月ノ間之ヲ遵守シ而シテ年々十二ケ月ノ終ニ於テ之ヲ續クル事ヲ公告スヘシ

第十五條

此條約ヲ此方ニ於テハ日本天皇ノ許可ニ供シ彼方ニ於テハ合衆國ノ大統領議院上局ノ忠告承諾ヲ得テ以テ之ヲ允准シ都合次第日本東京ニ於テ本書ヲ交換スヘシ

之ヲ保證センカ爲メニ雙方ノ全權英文和文ノ諸條款ニ記名シ英文ヲ以テ原書ト爲シ各玆ニ調印スル者ナリ

華盛頓府ニ於テ紀元千八百七十二年第　月　日乃日本明治五年　月　日

某　印

某　印

日本天皇ノ詔旨ニシテ條約ノ附錄ト爲スヘキ草案

此ノ附錄ハ本書條約交換ノ時ニ布告シ其時ヨリ一切所載ノ條款ヲ允准シタル者ト認メ條約ヲ履行ス

ル間ハ本書附錄俱ニ竝行シテ之ヲ遵守スヘシ

第一條

本書條約交換ノ日ヨリ一年ノ內ニ日本ニ於テ更ニ二港ヲ開キテ外國ノ貿易ヲ許容シ其場所及之ヲ開ク期限ハ六ケ月以前ニ之ヲ公告シ此ノ諸港ヲ開ク時ハ新潟港ヲ鎖スヘシ

日本ノ開港場及府縣ニ住居スル亞米利加合衆國ノ人民ハ其處ニ設立シタル規則ヲ遵奉スルヲ要ス

且又本書交換ノ日ヨリ五年ノ間ニ三港ヲ開クヘシ

左ニ假ニ揭載スル處ノ諸港ヲ以テ內外ノ貿易ニ於テ實ニ須要スル處ト看做ト雖トモ若シ他ニ之ヨリ便利ノ港アルニ於テハ日本政府ニテ最モ衆望ノ歸スル處ヲ撰ムヘシ

敦賀　小樽內　石ノ卷　鹿兒島

第二條

日本ノ開港場ニ於テ外國人ノ居留地ヲ擴充スル事如左

本書條約交換ノ日ヨリ三年ニシテ外國人ハ開キタル港ノ五里內ニ在リテ住居スルノ土地ヲ賃借シ得ルヘシ此五里ハ卽チ舊條約ニ於テ外國人ノ行步ヲ許ス處ノ半程ナリ

其後又三年ニシテ五里ヲ擴充シ卽チ行步規定ノ全程ヲ同樣ニ許容スヘシ

本書條約交換ノ日ヨリ長崎兵庫ノ行步規程ヲ擴充シ都テ各方ヱ十里ト爲スヘシ

此程內ニ居住スル外國人ハ日本政府ヨリ格別ノ允准ヲ得ルニ非レハ山林ヲ斬伐シ鑛山及ヒ田畝ヲ所有シ產業ノ資ト爲スヲ得ス

第三條

本書條約交換ノ日ヨリ一年ニシテ亞米利加ノ人民日本ノ內地ヲ旅行セント希望スル者ハ其地方官廳ノ免許ヲ以テ旅行切手ヲ得ルヘシ但其國ノ領事文書ヲ認メ其書中ニ公然ト當人ノ身柄正シキ事ヲ證シ其者決シテ日本ノ土民ト混雜ヲ生ス間敷旨ヲ領掌シ且右旅行ノ期限幷貿易或ハ遊覽ノ爲メナル事ヲ記シ之ヲ官廳ニ差出シタル上ニテ之ヲ付與スヘシ此ノ約束ヲ違犯スル者ニハ以後此條ノ免許ヲ與フ事勿ルヘシ

且又時々願主ヨリ相當ノ手數料ヲ拂フヘシ

若シ當人出先ニ於テ不法ノ所業ニ及フ時ハ之ヲ召捕ヘ其國ノ領事ニ引渡スヘシ且ツ此箇條ヲ違背シタル者ハ都テ將來ノ殊典ヲ得ル事ヲ得サルヘシ

第四條

本書條約交換ノ後若シ日本ノ稅則ニ於テ稅額ヲ增減スルトキハ公告スヘシ之ヲ公告セシヨリ六ケ月ヲ經ルニ非レハ合衆國人民ノ輸入輸出スル處ノ商品ニ新稅ヲ課セサルヘシ

第五條

日本政府ニ於テ互相ノ便宜ヲ計ルカ爲メニ各地ニ適當ノ裁判所ヲ設ケテ訴訟ヲ聽斷スル迄ハ皇曆（註 英曆）年　月　日卽チ千八百五十八年ニ取結タル條約ニ基キ開港場ニ於テ從前仕來ノ通リ政府ニテ承認シ其地ニ居住スル領事官ニ裁判ノ權竝ニ職掌ヲ執行セシムル事ヲ協定セリ

右時限ニ到リテ日本政府ヨリ其公告ヲ爲ス迄互ニ約定スル事左ノ如シ

亞米利加人日本人ニ對シテ法ヲ犯ス時ハ亞國ノ領事裁判所ニ於テ之ヲ吟味シ其上ニテ亞國ノ法律ヲ以テ之ヲ罰スヘシ

日本人亞米利加人ニ對シテ法ヲ犯ス時ハ日本ノ官吏ニ於テ之ヲ吟味シ其上ニテ日本ノ法律ヲ以テ之ヲ罰スヘシ

亞國領事ノ裁判所ハ日本債主亞米利加人ニ對シテ正當ノ催促ヲナス爲メニ開キ置キ日本官吏ノ裁判所ハ亞米利加ノ債主日本人ニ對シ正當ノ催促ヲナス爲メニ開キ置クヘシ

第六條

日本政府ニ納ムヘキ諸稅ハ日本ノ圓金ヲ以テ之ヲ拂フヘシ

但シ偶然ノ緣故ニ依リテ止ムヲ得サル場合ニ於テハ「メキシコ」銀ヲ以テ其代リトシテ受取ルヘシ乃チ其割合ハ「メキシコ」銀一弗ヲ以テ日本ノ一圓金ト同價ナリトス

尤日本政府金貨改鑄ノ際現今內外ノ貿易ヲ便ニスル爲メ何年ヨリ三ケ年間其筋ノ役所ニテ「メキシコ」銀ヲ以テ金圓ヲ賣渡スヘシ

尤其割合ハ造幣寮ニ於テ銀塊ヲ買取ヘキ時々ノ定價ニ從フヘシ

第七條

日本政府ハ亞米利加船ニ日本ノ諸港ノ間ニ於テ沿海ノ業ヲナス事ニ付別段ノ免許ヲ與フヘシ

註　右草案ハ**七五**ニヨレハ一應持チ歸リ更メテ米國側ニ提出セラレタルモノノ如シ「木戶孝允日記」ニヨレハ三月十六日ノ條ニ「今日條約草案書を國務卿フヒシユの方へ持せり」トアレト**八一**ニ於ケル「フイツシユ」ノ言ニ顯ミ「淸書」セラレタル草案ノ提出セラレタル月日詳ナラス

七七　（四月九日（五月十五日））　三條太政大臣ヨリ米國駐劄森少辨務使宛（電信）

米國政府へ條約改正ノ爲全權ヲ歐洲へ派遣アル樣依頼方指令ノ件

歐羅ノ内ニテ各國ノ條約ヲ改定セント欲ス其カ爲メ米國政府へ其全權ヲ差出ス事ヲ求ムヘシ
委シキ事ハ次ノ郵船ニテ報スベシ
副使兩人出帆ハ定リ次第電信ニテ報スベシ
四月九日

三條太政大臣

森少辨務使

七八

四月十八日（五月二十四日）　副島外務卿等ヨリ各國公使、横濱在勤瑞西國總領事宛

岩倉大使等ニ改正條約調印ノ全權附與方決定シタルニ付本國政府へ通達方依頼ノ件

四月十八日夜十字達ス

以手紙致啓上候然者條約改定之儀ニ付テハ明治四年十月米佛ハ九日魯ハ十三日其他ハ十四日　附書翰ヲ以テ申進置候通右大臣岩倉具視ヲ特命全權大使トシ參議木戸孝允大藏卿大久保利通工部大輔伊藤博文外務少輔山口尚芳ヲ特命全權副使トシテ貴國へ派出シ其改定スヘキ見込之廉々親ク商議ヲ遂ケ歸國之上改定之議ニ可渉積之處貴政府ト商議ノ都合ニ因テハ便宜ニ從ヒ何レノ地ニ於テ此議ニ渉リコレニ調印候共可然旨正副使節へ更ニ特權ヲ付與致サレ候間此段貴國政府へ御通達被下度致希望候右可得御意如此御座候以上

明治五年壬申四月十八日

外務大輔　寺島宗則
外務卿副島種臣

米利堅合衆國代理公使
シオセパルト貴下
荷蘭辨理公使
エフベーファントルフーフェン閣下
魯西亞國代理公使
ビュツヲフ閣下
大不列顛國代理公使
エフオアタムス閣下
佛蘭西國代理公使
コントデチュレン閣下
瑪港在留葡萄牙國全權公使
アントニヲセルジヲデソーサー閣下
白耳義國特派全權公使
オーコストフキントローテンベーキ閣下
伊太利國特派全權公使
コントアレサントロフエ閣下
丁抹國代任公使
エフベーファントルフーフェン閣下
西班牙國代理公使
ヘフレヲロトリケゼムノス閣下
瑞典那耳回國辨理公使
エフベーファンドルフーフェン閣下
獨逸國辨理公使
エム、フヲブラント閣下
澳地利國辨理公使
ヘンリーカリッセ閣下
瑞西合衆國總領事
シブレンワルト貴下

七九

四月十九日（五月二十五日）　英國臨時代理公使ヨリ副島外務卿等宛

岩倉大使等ニ改正條約調印ノ全權附與ニ關シ本國政府へ通達方了承セルモ其ノ經緯報知ナキハ遺憾ナル旨回答ノ件

British Legation,
Yokohama, May 25, 1872.

Sirs,

I have the honour to acknowledge the receipt of Your Excellencies' note of yesterday, informing me that in accordance with that addressed to me on the 26th November last, ambassadors have been sent to consult personally with my Government as to the points considered to require revision, and that it was intended that the revision should be proceeded with upon their return to Japan.

Your Excellencies, however, state that additional and special powers have now been given to the ambassadors to discuss and sign in this matter at any place which may be found convenient, as may be agreed upon with Her Majesty's Government.

I shall in compliance with Your Excellencies' wish communicate a copy of your note to Her Majesty's Government. At the same time, I must remind Your Excellencies that I have already informed you officially that Her Majesty's Government have in accordance with the desire of the Government of His Majesty the Tennô, agreed to postpone the revision of the Treaty until the return of the Embassy to Japan. I must therefore reserve to Her Majesty's Government full liberty of action in this matter, the more especially as Your Excellencies' present note does not mention any of the reasons which have induced the Japanese Government to alter their intention, and as I have not received from them any other official communication which would enable me to give to Her Majesty's Government such explanation as would place them in a position to understand the object of this change of intention.

I avail myself of this occasion to renew to Your Excellencies the assurance of my highest consideration,

F. O. ADAMS,
Her Britannic Majesty's
chargé d'affaires in Japan.

Their Excellencies
Soyéjima Tanéomi,
Terashima Munénori.

（右和譯文）

申四月廿一日差越す

昨日附の貴翰致落手候然は條約改定の儀に付ては客歲十月十四日附の書翰を以被申越候通本國政府え親く其可改定見込の廉を致商議候ため使節差遣右使節歸國の上改定の議に可及積りの處我政府と商議の都合に因ては便宜に隨ひ何れの地に於て此議に渉り是に致調印候共可然旨使節共え更に特權を附與被致候間此段本國政府え通達可致趣致承知候然る處貴意に任せ本國政府え可申達候得共先般我政府に於て天皇陛下政府の求に任せ使節歸國の時迄條約改定猶豫の儀致承知候段兼て拙者より申進置候儀にて今般の御懸合本國政府の心任せに致し候より外無之尤御來書中此度貴政府に於て斯る變意の仔細御申越無之其外右變意の目的本國政府え辯解の一助と可相成表立候御申聞曾て無之儀に御座候右の趣回答可得御意如斯御座候以上

四月十九日

英國代理公使
エフヲアダムス

副島外務卿
閣下
寺島外務大輔

註　右ノ外**七八**ニ對シ獨（日附ハ四月十九日、發信地ハ横濱）、蘭（日附ハ四月二十一日、發信地ハ横濱）、西（日附ハ四月二十二日、發信地ハ横濱）、佛（日附ハ四月二十二日、發信地ハ東京）、露（日附ハ四月二十二日、發信地ハ横濱）、米（日附ハ四月二十六日、發信地ハ記載ナシ）、伊（日附ハ四月二十七日、發信地ハ東京）、墺洪（日附ハ五月二十九日、發信地ハ上海）各公使及横濱在勤瑞西國總領事（日附ハ四月二十二日、發信地ハ横濱）ヨリ夫々副島外務卿等宛轉達方了承ノ旨回答アリタリ

八〇　四月二十五日（五月三十一日）　副島外務卿等ヨリ太政官正院宛

外務卿ノ權限及條約改正問題ニ關シ上申ノ件

一御國書に加印するは外務卿の任たるへし抑外務卿は政府の名を以て外國に接するものなれは政府に代りて外國の責に任する事其職分なり則加印の權外務卿を置て夫れ誰に在る哉各國の外務卿假令別官を兼る人たりとも其國書に加印する時は必す外務卿の名を署す今我制度に於ては或は少しく適せさるが如きも外國に對して其責に任する者は如此ならさるへからすと奉存候

一大使と政府との往復外國交際に關るものは外務卿必す先つ其議に渉り且之を取扱ふへき事と奉存候

一命を在外使臣に傳へ訓條を授け交際を保護するは外務卿の職なり然れは凡そ使臣を派遣し且其階級を進退するも先其議を經さるへからすと奉存候

一條約改定を外國にて決せられ候は前議に戻り內外不都合の廉不少旨建言致置候得共不得已次第も有之遂に商議の都合により便宜次第何れの地に於て其議に渉り之に調印致候とも可然旨被仰出候上は遂條精細取調嚴に出入增損の區畫を議定し彼れ若し之に協同いたさゝる時は其分調印に及はす歸國の上更に其議に渉り無遺憾上にて全備に至らせ候樣命せられ度奉存候

右之條々急速御決定相成度此段奉伺候也

四月　　寺　嶋
　　副　島
正院御中

註　日附ハ他ノ記錄ニ據リ決定セリ

八一

四月二十六日（六月一日）　華盛頓ニ於テ岩倉大使等ト米國國務卿等トノ對話書

岩倉大使等ノ改正條約調印ノ權限、日本側ノ提出セル新定條約竝ニ附錄草案ニ關スル件

第七次會議千八百七十二年第六月一日午十二時

出席
岩倉公閣下
木戸公閣下　使節
山口公閣下
森少辨務使
田邊一等書記官
鹽田一等書記官
ブルークス領事官

幷
國務卿フキシ
同輔ヘール
譯官ライス

千八百七十二年六月一日土曜日華盛頓に於て會議

フキシ曰　如此長く御待たせ候事甚御氣の毒に存候御草案を今十四日程早く御受取申候はゝ今頃は最早事濟に至り候はんと存候右草案を委細檢究仕候處兼々御同意と心得候條々に相違致し候廉も有之又夫れに載せて無之者も御座候

使曰　其條々は今日解明可仕候

國曰　使節方は既に條約取結ひの全權を被得候事に候哉

使曰　先達て本國より電信受取其旨にては我々に條約取結の權を與へ候樣被存候得共尙混雜いたし不解條も有之候に付再ひ此方より電信を遣し候

國曰　其權を被送候にては書物にても候や

使曰　否電信而已にて書物は不受取候其電信の旨趣にては我々に全權を可送申越候也

國曰　夫れにては矢張條約調印被成候の權は充分に無之候也

使曰　先達て森氏より足下に申入候事あり則ち今此處にて假りに草案を議決し我々共歐羅巴へ罷越候後森氏に托し調印いたし候積勿論森氏に全權を與へ候事は我政府へ申立置候也

國曰　我等解得致す處ては此時以前に右全權御受取に相成候事と存候

使曰　我等より全權を乞ふ爲に最早日本へ遣し候電信の返事有之候へ共語字混雜におよひ全く難解候乍去大久保伊藤も彼地着仕候上は右全權を得差送候事無疑存候

國曰　若も全權を御遣しに相成候書付日本を出て候由の電信にても有之候や

使曰　我等左の旨にて電信を得候

「日本政府にて我等に條約取結を救すべし」乍去全權一條に付ては何事も無之候

國曰　然らは閣下等は未た條約取結ひに御取掛難相成と被存候

使曰　乍去全權を受取候事は無疑義に候間其間に條約一條をはかとらせ度存候

國曰　是迄同樣唯議論而已可仕候（條約草案を手取り）之を議論仕候後他の條約より文言を引用て此草案に換可申勿論唯文言計換候て意味には少しも無差支候也譬へは我國以太利との條約の如く格別よき文言を用ゐ有之此草案を議し終て後我國よりも草案を作り出し御覽に可入候

使　不答

國曰　勅令の中に數ケ條を御入れ有之候は如何の御見込に御座候や何故矢張約條の中へ御入れ不成哉

使曰　條約本文の中に有るケ條は兩政府にて互ひに可守ケ條に候又勅令の中に在る者は我等本國内に關係する事而已にて我政府の權を以て可成事而已に候尤其中現今直ちに難行者も有之是等は逐次に成就するを期し候也

國曰　乍然此等の大切至要なる件々を不定して條約を取結候事不相成譬へは勅令第一條に曰く條約取替濟の後一ケ年に一港を開き五ケ年中に其他の港三ケを開くへしと我等御商議仕候趣にては貴國政府にて條約取替の後一ケ年の中に二港を開き米國公使所望致し候後一ケ年の中に他の一港を開き最初の二港開たる後四年の中に

他の二港を開き惣て五ケ年の中に五港を御開きに相成り候樣存候此等は前會議の節既に御同意被成候義にて天皇陛下御隨意に布令あるべき勅令に掲載したる而已にては滿足いたし兼候

森曰　我等條約取結調印いたし候上は勿論　天皇陛下も之を御守り不被成を不得候也

國曰　然らは其趣きを條約面に不掲け候ても可宜又第二條居留地を廣け候事に付先達御商議いたし候處にては二年の中に五里程を廣け五年の中に十里程を可廣積に候第三條葛藤を生するの語は如何意味に御座候や

使曰　我等經驗致す處には內外人民互に不解なるより屢難事を生る事あり之等を豫しめ防き候は我々の職掌可有之候

國曰　若誤過外國人の方に非すして日本人の方に有之節は使曰　若日本人誤過ある時は日本政府にて之を正し之を罰すへし但外國人銃を以て日本人に打掛け或は打殺し候件々不少大ひに葛藤を生せり我に慊なる外國人に便宜を與へ候は元より望む處に候得共乍然又日本國人を保護せさるを不得候也

國曰　外國人不屆ある時は卽此ケ條を用ゆへし第四ケ條稅則變改の時は布告すべし且又合衆國人民に屬する荷物に付ては此國より輸出する荷物を御指しあるならん然し六ケ月以前の布告にては不充分に御座候

使曰　我々考へにては六月にて充分と存候

國曰　大西洋海岸より積出す荷物には不充分に候公書の往復は大概六週間つゝ懸り候

使曰　布告を電信にて達ても可宜

國曰　是れは甚不宜我は日本人米人の荷物を不論惣て合衆國より來る處の賣買品に用ひ度候

森曰　然り則ち我々の所望に候只六ケ月にて不充分と被仰は合衆國にては決して布告無之や又は六ケ月より長く有之候や

國曰　時として六ケ月より少き中に布告する事あり方今議院にて直ちに布告する事を企候得共其代りに商人に損料を拂遣す事に候尤戰爭中にて早急に改革致し候事も有之

森曰　貴國政府にて必すしも布告すると極り候事無之と相見へ候我々の六ケ月を期し候は唯交際の禮儀を盡候而已若是を以て短とせらるれは此事は絕て條約に不掲時を定むるの權は我々の隨意に可仕候

國曰　交際上禮儀と被仰候はは我々に便宜なるの時限を御定めに相成たし

森曰　稅則は六ケ月內に不意に變改不致事は日本政府にて可請合

木戶曰　貴國稅則は如何して被變候や

國曰　布告致し候也然し時限に定りなし

評　稅則は議院の入札を以て大統領の赦可を受變改す議院集會每に多少の變改あり

森曰　貴國にては何時にても不時に規則變革有之候也

國曰　戰爭中は六週間前に布告して改革せり然し定まりたる規則なく唯通例六ケ月を定めとす第六條に凡て運上は日本の金錢を以てすべしと先頃吉田大藏少輔ウキリヤムスと共に被來此事を議するに吉田氏の說にては政府にて新金を廣く用ゐさせん爲也と而して貴國造幣寮甚不大又新規に出來たるもの故若し外國の大バンク新金を貯蓄する時は大ゐに其價に差響くべし尤貴國政府にて眞に金幣少き時は新金とメキシコドルと引換之を以て諸運上を拂ふの約束あれは此事可行

使曰　其ケ條は如何被考候や御異論有之候や

國曰　然り吉田氏被言に不時金錢乏しき時は政府にて金圓一千を以てメキシコドル九百九十に換へへしと

森曰　メキシコ銀相場は上り下りあり吉田は時の相場を以て可引換といひたるへし

國曰　夫れは不益の事也我々の所望は此相場の變するを防くを欲する也大ハンクにて日本の金錢を貯蓄し然して運上は金貨を以て納むへき時は右ハンク勝手の相場を付金一圓に付メキシコ銀五枚の價する事もあるべし合衆國にては法律を以て外國貨幣の定位を極む貴國に於ても又外國條約中に同樣の法を被設候て可ならん

森曰　我々の作り書せる草案にて此ケ條は適宜なりと推考せり

國曰　多少改革する事必要なり第七條外國船日本海岸にて商買するに付何の約束を以て之を免許せらるるや

山口曰　日本貨幣の價は常に同しく變する事なく變するは唯メキシコ銀の價而已なり鷲卵紙の輸出する頃日本貨幣の用多き時はメキシコドルに比して少く乏しき事あ